宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第229集

日向市所在

向原中尾第２遺跡（第３次調査）
（むこうばるなかお）

向原中尾第５遺跡
（むこうばるなかお）

向原中尾第６遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11

２０１４

宮崎県埋蔵文化財センター

向原中尾遺跡群立地状況（東より）

巻頭図版２

向原中尾第２遺跡ＳＡ１出土遺物

向原中尾第２遺跡基本層序

向原中尾第２遺跡ＳＡ１完掘状況（西より）

向原中尾第５遺跡Ｓ区炉穴検出状況（南より）

８号炉穴（ＳＰ８）検出状況（東より）

８号炉穴（ＳＰ８）半截状況（南西より）

12 号集石遺構（ＳＩ12）（南より）

７号集石遺構配石（ＳＩ７）（西より）

巻頭図版４

向原中尾第５遺跡出土縄文土器

向原中尾第５遺跡出土粗製剥片石器

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第229集

日向市所在

向原中尾第２遺跡（第３次調査）
向原中尾第５遺跡
向原中尾第６遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11

２０１４

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施してまいりました。本書は、平成24年度に実施した日向市東郷町に所在する向原中尾第２遺跡（第３次調査）、向原中尾第５遺跡、向原中尾第６遺跡の発掘調査報告書です。

主な成果としては、向原中尾第２遺跡において縄文時代早期の集石遺構１基、弥生時代終末期の竪穴建物跡１軒が検出され、竪穴建物跡からは炭化材や炭化種子が出土しました。向原中尾第５遺跡では、縄文時代早期の炉穴33基、集石遺構13基をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴建物跡が1軒確認され、向原中尾第６遺跡では後期旧石器時代の礫群が２基確認されました。

向原中尾遺跡群においては、先行して平成22年度に３か所で調査が行われ、重要な成果を得ており、今回の調査とあわせて後期旧石器時代から近・現代までの長きにわたる人々の生活の痕跡を確認しました。これらの成果は、寺迫地区の歴史を考えるうえで新たな知見を与えてくれるものと確信しています。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行に至るまで御協力いただいた関係諸機関ならびに地元の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　向井　大蔵

例　言

1　本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成24年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した、日向市東郷町に所在する向原中尾第２遺跡（第３次調査）、向原中尾第５遺跡、向原中尾第６遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。

基準点・グリッド杭等の設置

向原中尾第２遺跡……(株)アップス

4　現地での遺構掘削・実測図作成・写真撮影については、各遺跡の調査担当者が行い、菅付和樹・飯田博之・明石宏一・新谷清・松浦朋彦・竹下昭彦・中川みな子・大嶋昭海・久保田陽香・川俣唱子がこれを補助した。

5　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。

6　遺物の実測・トレースについては整理作業員の補助を得て各担当者が行い、石器実測・トレースについては一部を除き業務委託した。遺物写真撮影は沖野誠・橋本英俊が行い、松浦朋彦・二方和也・山元清春の協力を得た。また、石材同定については松田清孝の助言を得た。

7　自然科学分析のためのフローテーション作業ならびに種子などの選別作業は、埋蔵文化財センター職員の補助を得て向原中尾第２遺跡を沖野誠・山本光俊が、向原中尾第５遺跡を橋本英俊・谷口めぐみが行った。その委託成果については、第２遺跡を沖野誠が、第５遺跡を橋本英俊が編集して掲載した。事実報告分遺物については当センターで保管している。

8　整理作業のうち、以下のものについては業務委託した。

石器実測・トレース

向原中尾第５遺跡……(株)アーキジオ

自然科学分析

向原中尾第２遺跡（放射性炭素年代測定・種実樹種同定）……(株)古環境研究所

向原中尾第５遺跡（放射性炭素年代測定・種実樹種同定）……パリノ・サーヴェイ株式会社

9　本書の執筆・編集は、第Ⅰ・Ⅱ章は沖野誠・山本光俊、第Ⅲ章は橋本英俊、第Ⅳ章は谷口めぐみ・福田泰典、補遺は沖野誠、第Ⅴ章は橋本英俊・沖野誠が分担して行い、その文責名を各文末に示した。なお、複数の場合は五十音順に示した。

10　出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書で使用した周辺遺跡位置図は、国土地理院発行の1/25,000図（都農）をもとに作成した。また遺跡周辺地形図は、西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所提供の1/2,500図をもとに作成した。

凡　例

1　本書に使用した主な略記号は次のとおりである。

ＳＡ＝竪穴建物跡　ＳＣ＝土坑・陥し穴状遺構　ＳＩ＝礫群・集石遺構　　Ｋ－Ａｈ＝鬼界アカホヤ火山灰

ＡＴ＝姶良Ｔｎ火山灰　Ｇｒ.＝グリッド

2　本書で使用した標高は海抜高であり、方位は座標北（G.N.）を基本として一部の遺構実測図は磁北（M.N.）を用いた。

3　本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。

4　本書で「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩（ＷＴ１・ＷＴ２）を指す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には、他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記載した資料には、溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。

5　石器の節理面は１点鎖線で、敲打痕の認められる部分は破線の○で、ガジリ・二次的欠損は黒塗りで表現した。

6　石器実測図への使用痕の表現は以下のようにした。また、図面上で明示できない範囲については矢印で範囲を示した。

敲打痕＝コ　　磨痕＝ス　　磨滅＝マ　　潰れ＝ツ　　微細剥離＝ビ　※実測図中の網掛けは砥面・強い磨滅面を表す。

7　遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 ……1

第２節　調査の組織 ……1

第３節　地理的・歴史的環境 ……1

第Ⅱ章　向原中尾第２遺跡（第３次調査）

第１節　調査の概要と方法・経過

1　遺跡周辺の環境と調査区の設定 ……6

2　発掘調査の方法 ……6

3　調査の経過 ……7

4　整理作業の方法と経過 ……7

第２節　基本層序と石材分類 ……8

第３節　後期旧石器時代の遺物

1　分布状況 ……10

2　遺物 ……10

第４節　縄文時代の遺構と遺物

1　縄文時代早期の遺構と遺物 ……12

第５節　弥生時代以降の遺構と遺物

1　竪穴建物跡と出土遺物 ……14

第６節　自然科学分析の結果

1　放射性炭素年代測定 ……19

2　樹種同定 ……20

3　種実同定 ……20

第７節　小結

1　後期旧石器時代 ……23

2　縄文時代早期 ……23

3　弥生時代終末期以降 ……24

第Ⅲ章　向原中尾第５遺跡第１地点

第１節　発掘調査の概要と経過

1　遺跡周辺の環境と調査の経過 ……25

2　整理作業の経過 ……25

3　基本層序 ……25

第２節　後期旧石器時代の遺構

1　遺構 ……25

第３節　縄文時代早期の遺物

1　土器 ……26

2　石器 ……26

第４節　時期不明の遺構 ……27

第５節　小結 ……27

第Ⅳ章　向原中尾第５遺跡第２地点

第１節　発掘調査の概要と経過

1　調査の経過 ……28

2　整理作業の経過 ……28

3　基本層序 ……30

第２節　後期旧石器時代の遺物

1　石器 ……32

第３節　縄文時代の遺構と遺物

1　遺構 ……34

2　遺物 ……42

第４節　弥生～古墳時代の遺構と遺物

1　遺構 ……63

2　遺物 ……64

第５節　自然科学分析の結果

1　炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定 …65

2　種実同定 ……68

第６節　小結

1　後期旧石器時代 ……71

2　縄文時代早期 ……71

3　弥生時代～古墳時代 ……72

第Ⅴ章　向原中尾第６遺跡

第１節　発掘調査の概要と方法・経過 ……73

第２節　基本層序 ……73

第３節　後期旧石器時代の遺構と遺物 ……74

1　遺構 ……74

2　遺物 ……74

第４節　その他の時代の遺物 ……77

第５節　小結 ……77

第Ⅵ章　総括

第１節　後期旧石器時代 ……78

第２節　縄文時代 ……80

第３節　弥生時代以降 ……83

補遺

向原中尾第３遺跡 ……85

向原中尾第２遺跡（第２次調査）……88

経費削減による未調査箇所の報告……89

報告書抄録 ……巻末

挿図目次

第Ⅰ章　はじめに

第１図　向原第３遺跡群周辺地形図……3
第２図　向原第３遺跡群周辺表採石器実測図……3
第３図　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図……4
第４図　向原中尾遺跡群と周辺遺跡位置図……5
第５図　遺跡間地形断面模式図……5

第Ⅱ章　向原中尾第２遺跡（第３次調査）

第６図　遺跡位置と周辺地形……6
第７図　グリッド配置図……7
第８図　調査区土層断面図……9
第９図　後期旧石器時代礫・遺物分布図……10
第10図　後期旧石器時代出土遺物実測図……11
第11図　縄文時代早期礫・遺物分布図……12
第12図　ＳＩ1実測図……13
第13図　縄文時代早期出土遺物実測図……13
第14図　弥生時代遺構分布図……15
第15図　ＳＡ１実測図……16
第16図　ＳＡ１出土遺物実測図（１）……17
第17図　ＳＡ１出土遺物実測図（２）および その他の遺物実測図……18
第18図　暦年代較正曲線図……19
第19図　ＳＡ１出土の炭化材……20
第20図　ＳＡ１出土の炭化種子……22

第Ⅲ章　向原中尾第５遺跡第１地点

第21図　後期旧石器時代礫群実測図……26
第22図　縄文時代早期出土遺物実測図（１）……26
第23図　縄文時代早期出土遺物実測図（２）……26
第24図　土坑実測図……27

第Ⅳ章　向原中尾第５遺跡第２地点

第25図　グリッド配置図……28
第26図　調査区位置図……29
第27図　Ｓ区Ｃ11グリッド東壁土層断面図……30
第28図　Ｓ区トレンチ１土層断面図……31
第29図　後期旧石器時代石器実測図……33
第30図　Ｎ区縄文時代早期遺構分布図……34
第31図　Ｓ区縄文時代早期・弥生～古墳時代遺構分布図……35
第32図　Ｓ区縄文時代早期炉穴分布図……36
第33図　Ｓ区縄文時代早期炉穴土層断面図……37
第34図　Ｓ区縄文時代早期炉穴実測図……37
第35図　縄文時代早期集石遺構実測図（１）……39
第36図　縄文時代早期集石遺構実測図（２）……40
第37図　縄文時代早期集石遺構実測図（３）……41
第38図　縄文時代早期出土遺物実測図（１）……43
第39図　縄文時代早期出土遺物実測図（２）……44
第40図　縄文時代早期出土遺物実測図（３）……45
第41図　縄文時代早期出土遺物実測図（４）……49
第42図　縄文時代早期出土遺物実測図（５）……50
第43図　縄文時代早期出土遺物実測図（６）……51
第44図　縄文時代早期出土遺物実測図（７）……52
第45図　縄文時代早期出土遺物実測図（８）……53
第46図　縄文時代早期出土遺物実測図（９）……54
第47図　縄文時代早期出土遺物実測図（10）……56
第48図　縄文時代早期出土遺物実測図（11）……57
第49図　縄文時代早期出土遺物実測図（12）……58
第50図　縄文時代早期出土遺物実測図（13）……59
第51図　Ｓ区ＳＡ１実測図……63
第52図　出土土器実測図……64
第53図　出土石器実測図……64
第54図　暦年較正結果……67
第55図　炭化材・炭化種子……70

第Ⅴ章　向原中尾第６遺跡

第56図　遺跡の周辺地形図……73
第57図　トレンチ配置図……73
第58図　旧石器時代の遺構・遺物分布図……74
第59図　土層断面図……74
第60図　１号礫群実測図……75
第61図　出土遺物実測図（１）……75
第62図　２号礫群実測図……76
第63図　出土遺物実測図（２）……76
第64図　出土遺物実測図（３）……77

第Ⅵ章　総括

補遺　向原中尾第３遺跡

第65図　出土遺物実測図……86
第66図　遺跡位置図……87
第67図　調査区略図……87

向原中尾第２遺跡（追加報告）
第68図　追加報告石器実測図……88
経費削減による未調査箇所の報告
第69図　向原中尾遺跡群未調査箇所位置図……89

表目次

第Ⅰ章　はじめに
第１表　向原第３遺跡群周辺表採石器計測表……3
第Ⅱ章　向原中尾第２遺跡（第３次調査）
第２表　後期旧石器時代出土石器計測表……11
第３表　縄文時代早期集石遺構一覧表……13
第４表　縄文時代早期土器観察表……13
第５表　弥生時代遺構一覧表……16
第６表　ＳＡ１出土土器観察表……18
第７表　ＳＡ１出土石器計測表……18
第８表　弥生時代以降石器計測表……18
第９表　放射性炭素年代測定試料一覧表……19
第10表　放射性炭素年代測定結果……20
第11表　炭化材同定結果……20
第12表　種実同定結果……21
第Ⅲ章　向原中尾第５遺跡第１地点
第13表　縄文時代早期土器観察表……27
第14表　縄文時代早期石器計測表……27
第Ⅳ章　向原中尾第５遺跡第２地点
第15表　後期旧石器時代石器計測表……32
第16表　縄文時代早期集石遺構一覧表……41
第17表　縄文時代早期土器観察表（１）……46
第18表　縄文時代早期土器観察表（２）……47
第19表　縄文時代早期石器計測表（１）……60
第20表　縄文時代早期石器計測表（２）……61
第21表　縄文時代早期石器計測表（３）……62
第22表　出土土器観察表……64
第23表　出土石器計測表……64
第24表　放射性炭素年代測定結果……66
第25表　樹種同定結果……67
第26表　種実同定結果……68
第Ⅴ章　向原中尾第６遺跡
第27表　後期旧石器時代遺構一覧表……77
第28表　後期旧石器時代石器計測表……77
第29表　その他の時代の土器観察表……77
補遺　向原中尾第３遺跡
第30表　石器計測表……86
第31表　土器観察表……86
向原中尾第２遺跡（追加報告）
第32表　追加報告石器計測表……88

図版

巻頭図版１　向原中尾遺跡群立地状況
巻頭図版２　向原中尾第２遺跡ＳＡ１出土遺物
向原中尾第２遺跡ＳＡ１完掘状況
向原中尾第２遺跡基本層序
巻頭図版３　向原中尾第５遺跡炉穴検出状況
向原中尾第５遺跡炉穴・集石遺構
巻頭図版４　向原中尾第５遺跡出土縄文土器
向原中尾第５遺跡出土粗製剥片石器群
図版１　向原中尾第２遺跡……90
向原中尾２第遺跡より日向灘を望む／第３次調査区から第２次調査区を望む／調査前／ＡＴおよび礫出土状況／ＳＩ１検出状況／ＳＩ１配石検出状況／ＳＡ１遺物出土状況／ＳＡ１貼床検出状況

図版２　**向原中尾第２遺跡**……91
ＳＡ１焼土および炭化材出土状況／ＳＡ１完掘状況／Ａ－Ａ´土層堆積状況／Ｂ－Ｂ´土層堆積状況／Ｃ－Ｃ´土層堆積状況／Ｄ－Ｄ´土層堆積状況／調査風景（１）／記録風景（２）

図版３　**向原中尾第２遺跡**……92
向原第３遺跡群の石器／後期旧石器時代の石器／縄文時代早期の土器／弥生時代以降の石器／ＳＡ１出土遺物（１）

図版４　**向原中尾第２遺跡**……93
ＳＡ１出土遺物（２）／向原中尾第３遺跡の出土遺物／向原中尾第２遺跡（第２次調査）の追加報告遺物

図版５　**向原中尾第５遺跡**……94
Ｎ区集石遺構検出状況（南より）／Ｎ区2号集石遺構（ＳＩ２）（南東より）／Ｓ区炉穴検出状況（南西より）／Ｓ区炉穴完掘状況（西より）／Ｓ区炉穴完掘状況（北西より）／32号炉穴（ＳＰ32）半截状況（東より）／8号炉穴（ＳＰ8）検出状況（南西より）／8号炉穴（ＳＰ8）完掘状況（南西より）

図版６　**向原中尾第５遺跡**……95
5号炉穴（ＳＰ5）完掘状況（東より）／21号炉穴（ＳＰ21）完掘状況（東より）／Ｓ区集石遺構検出状況（東より）／13号集石遺構（ＳＩ13）（東より）／12号集石遺構（ＳＩ12）（南より）／12号集石遺構配石（南より）／1号竪穴建物跡（ＳＡ1）検出状況（西より）／1号竪穴建物跡（ＳＡ1）完掘状況（北西より）

図版７　**向原中尾第５遺跡**……96
向原中尾第５遺跡第１地点出土遺物／向原中尾第５遺跡第２地点出土後期旧石器／第２地点出土縄文時代早期土器（１）／第２地点出土縄文時代早期土器（２）／第２地点出土縄文時代早期土器（３）／第２地点出土縄文時代早期土器（４）／第２地点出土縄文時代早期石器（１）／第２地点出土縄文時代早期石器（２）

図版８　**向原中尾第５遺跡・向原中尾第６遺跡**……97
第２地点出土縄文時代早期石器（３）／第２地点出土縄文時代早期石器（４）／第２地点出土縄文時代早期石器（５）／第２地点出土縄文時代早期石器（６）／第２地点出土縄文時代早期石器（７）／第２地点出土弥生時代～古墳時代出土遺物／向原中尾第６遺跡礫群（ＳＩ２）検出状況／向原中尾第６遺跡出土遺物

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）19.7kmについて県文化財課は、平成17年度に32遺跡、306,700㎡の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は、平成17年度末までに関係市町との設計協議等が終了し、平成18年度末には用地買収に着手している。

この間、当該区間の平成26年度供用開始が公表され、用地取得およびそれに続く埋蔵文化財調査にとって時間的に厳しい状況となった。また、平成19年11月には発掘調査対象面積の見直しがなされ、暫定２車線261,400㎡と面積が減少している（第69図）。

平成20年７月１日、東九州自動車道関連としては初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と県知事との間で締結された。この協定書では、発掘調査の範囲や体制、全体の実施計画、費用の概算額等が提示された。その後、用地の取得状況が進展しないながらも、同年10月17日付で『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、着手が可能であった10遺跡、3,350㎡の発掘調査に着手した。平成21年１月には、用地取得や埋蔵文化財調査の進展を条件に平成25年度の供用開始が努力目標となった。関係者の努力により平成25年3月をもって、日向～都農間の32遺跡すべての調査を終了した（第３図）。

第２節　調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告の実施にあたり、以下の体制が組織された（平成24～25年度）。

調査主体　宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

所　長　北郷　泰道（平成24年度）
向井　大蔵（平成25年度）
副所長　佐々木　真司（平成24年度）
副所長兼調査第一課長
長津　宗重（平成25年度）
総務課長　坂上　恒俊（平成24・25年度）
副主幹兼総務担当リーダー
高園　寿恵（平成24・25年度）
調査第一課長　長津　宗重（平成24年度）
主幹兼調査第二担当リーダー
菅付　和樹（平成24年度）
副主幹兼調査第二担当リーダー
福田　泰典（平成25年度）

調査担当

向原中尾第２遺跡（第３次調査）
調査第一課調査第二担当
主　事　沖野　誠
主　事　山本　光俊
向原中尾第５遺跡
調査第一課調査第一担当
主　査　橋本　英俊
調査第一課調査第二担当
主　査　松本　茂
主　事　谷口めぐみ
向原中尾第６遺跡
調査第一課調査第二担当
主　査　松本　茂
主　事　谷口めぐみ

整理・報告書担当

調査第一課調査第一担当
主　査　橋本　英俊（平成24・25年度）
調査第一課調査第二担当
主　事　沖野　誠（平成24・25年度）
主　事　山本　光俊（平成24年度）
主　事　谷口めぐみ（平成24年度）

調査協力・助言

日向市教育委員会

第３節　地理的・歴史的環境

１　地理的環境

向原中尾第２遺跡は宮崎県日向市東郷町山陰字山ノ口、向原中尾第５遺跡・向原中尾第６遺跡は日向市東郷町山陰字向ヲ原に所在する。日向市東郷町は宮崎県の北部に位置し、山々に囲まれた自然豊かな町である。

町の地勢は、南方には標高1,405.2mの尾鈴山を主峰とする尾鈴連峰が連なり、また、600～800mの加子山・珍神山といった九州山地に属する山々が周囲を囲み急峻な渓谷や丘陵を形成している。その山々を縫って流れる耳川やその支流の坪谷川、また、児湯方面に流れる小丸川などは、その流域に河岸段丘や小規模な沖積地を形成している。日向市東郷町に存在する遺跡もこれらを中心に分布している。

遺跡が所在する寺迫地区は、日向市東郷町の中心部から東に飛び地のように離れている。地形的にみても異なり、尾鈴山地の東側に南北に長く連なる平坦な段丘地形に立地している。

寺迫地区には、猪渡（いのと）や落鹿（おとし）といった動物の名がつく地名がみられ、古くより狩猟文化との密接な関係を伺わせている。

2　歴史的環境

この項では本書で報告する遺跡周辺の歴史的変遷について時代ごとに述べる。

旧石器時代　寺迫地区ではナイフ形石器と畦原型細石刃核が採集され、向原第３遺跡群では細石刃・細石刃核・ナイフ形石器が出土している。上野原遺跡では礫群１基が検出され、細石刃が出土している。八ツ山遺跡・仲野原遺跡ではナイフ形石器・角錐状石器・スクレイパーなどが出土している。また、仲野原遺跡では礫群10基が検出されている。

縄文時代　八ツ山遺跡では早期の押型文土器・石斧・石鏃・磨石が、下水流遺跡・深谷遺跡では石斧・石鏃が出土している。田野原遺跡・切瀬遺跡では石錘が採集されている。広瀬田遺跡では早期の集石遺構２基が検出され、早期・晩期の土器・石器が出土している。樋田遺跡では後期の竪穴建物跡２軒と後期を中心とした土器群、少量の晩期の土器が出土している。赤松遺跡や下水流遺跡から晩期の黒色磨研土器・粗製深鉢土器・刻目突帯文土器などが出土している。また、赤松遺跡・下水流遺跡・広瀬田遺跡では石斧の多さが目をひく。

弥生時代　下水流遺跡では前期末から中期初頭の亀ノ甲タイプの甕と下城式甕が共伴して出土している。樋田遺跡・下三ケ八ツ山・日田尾・鵜戸木では石庖丁が、鶴ノ内地区上ノ原遺跡では有茎の銅鏃が採集されている。樋田遺跡では花弁状住居２軒を含む竪穴建物跡16軒が検出され、瀬戸内系の高坏が出土している。

古墳時代　山陰・鶴ノ内・日田尾地区に所在する３基の円墳が県指定史跡となっている。八ツ山遺跡・羽坂Ａ・Ｂ遺跡・蕨野遺跡のほか、勾玉が採集された老谷遺跡がある。

古代　古代律令制下では臼杵郡に属していたと考えられ、『和名抄』に見える氷上郷に比定されるという説がある。天平勝宝年間（749～757）頃、百済王が内乱のために日向に逃れた際に献納したものと伝えられる須恵器の甕が山陰神社に社宝として伝存する。

中世　小野田立山の中腹には伊東氏によって築城された山陰城跡がある。また、坪谷の小丘陵には坪谷城跡が位置している。赤松遺跡からは掘立柱建物跡が５棟検出されている。建久８年（1197）の「日向国図田帳写」に島津荘寄郡の内として見える。天正５年（1577）に伊東氏は島津氏に追われ、両城は島津氏の配下に入ったものと考えられる。各地区の丘陵には廃絶した五輪塔群や板碑が点在している。

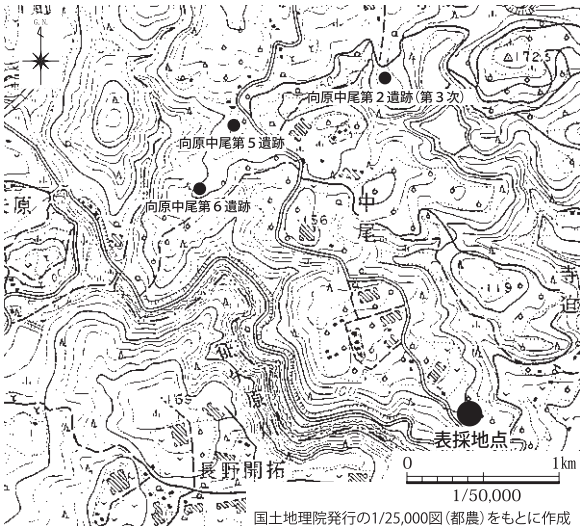
近世　天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州仕置以降は高橋氏の領地となり、以降、有馬氏→三浦氏→牧野氏を経て、内藤氏が廃藩置県まで支配した。なお元禄３年（1690）に農民の逃散が起こったため、翌年に坪谷・下三ケの両村は幕府領となった。

近現代　明治４年に延岡県となって以降、美々津県→宮崎県→鹿児島県→宮崎県となり、同17年には東臼杵郡に属することとなった。同22年の市制町村制施行により、４村が合併して東郷村となり、昭和44年の町制施行により東郷町が誕生した。平成18年２月25日に日向市に編入され、日向市東郷町となった。

3　寺迫地区の考古資料

向原中尾第２遺跡発掘作業員が表採した石器５点（図化４点）をここで報告したい（第２図）。

石器は、同氏所有の畑から表採されたものであり、詳細な場所は不明であるが、平成16年に日向市によって発掘された向原第３遺跡群の西側にあたる地点と考えられる（第１図）。



第１図　向原第３遺跡群周辺地形図

石斧（第２図１）

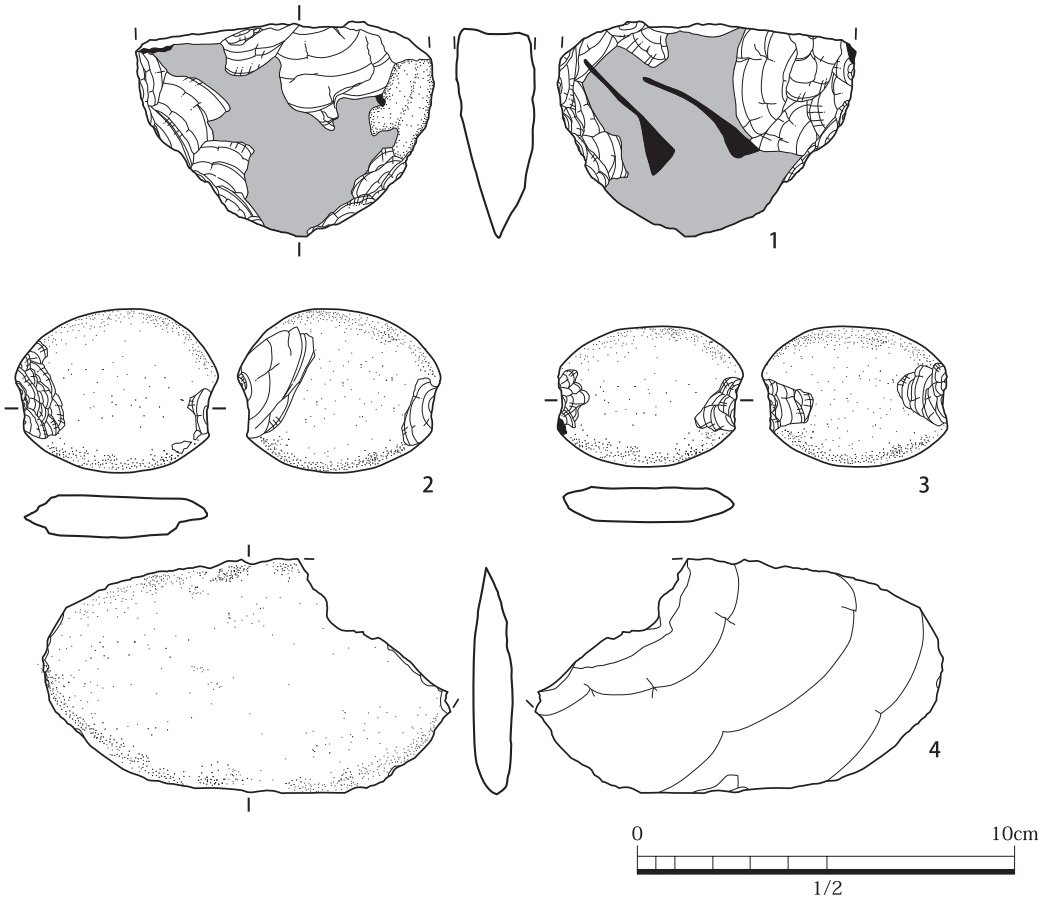
１は頁岩製の石斧である。刃部は粗雑な研磨により形成されている。上部が欠損する。

石錘（第２図２・３）

２・３は砂岩製の打欠石錘である。平面形は楕円形であり、長軸の両端を打ち欠いている。

粗製剥片石器（第２図４）

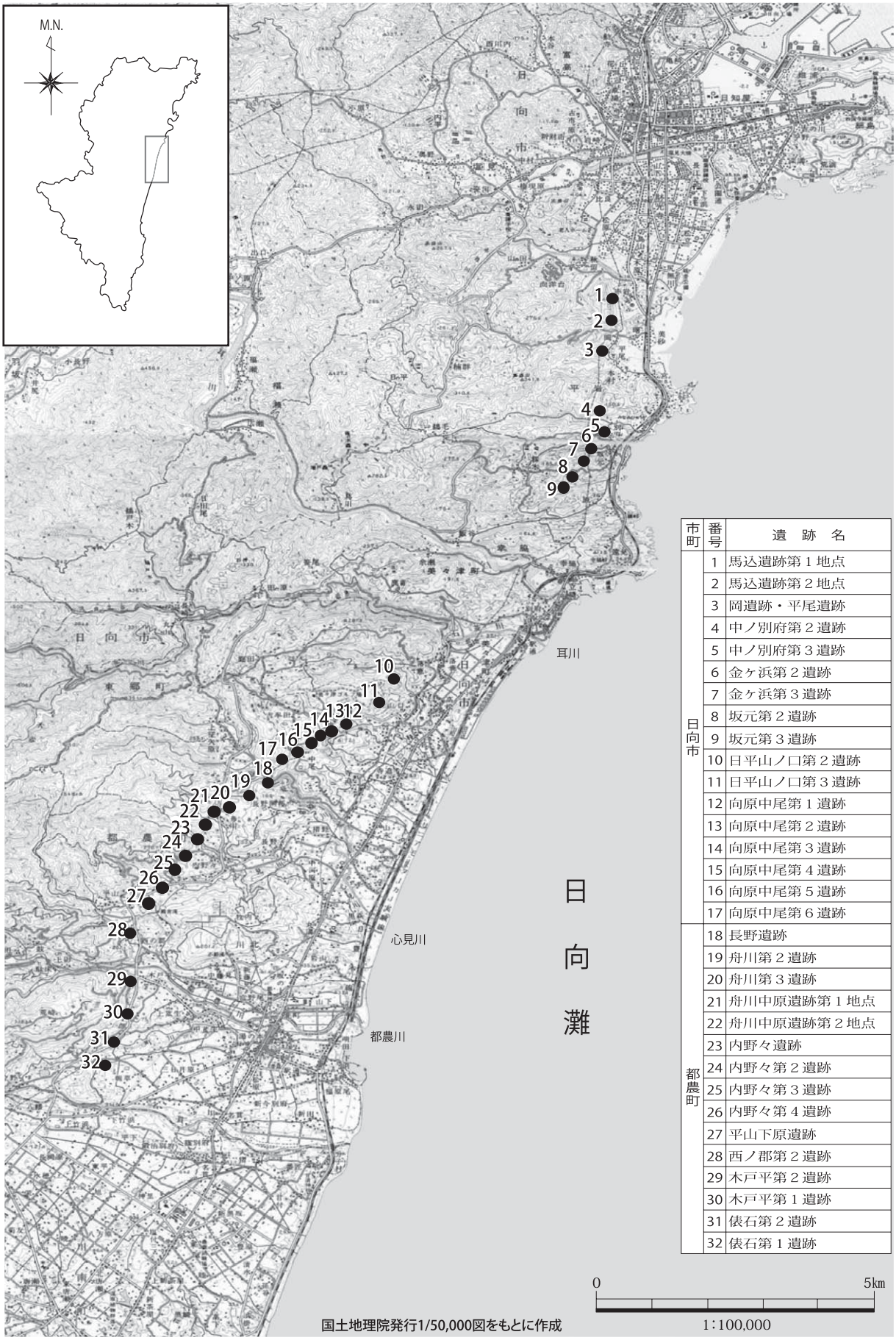
４は尾鈴山溶結凝灰岩製の粗製剥片石器である。平面形は楕円形を呈する。断面は打点から下縁に向けて鋭利になる剥片である。二次的な加工は施されておらず、表面に自然面が残る。



第２図　向原第３遺跡群周辺表採石器実測図

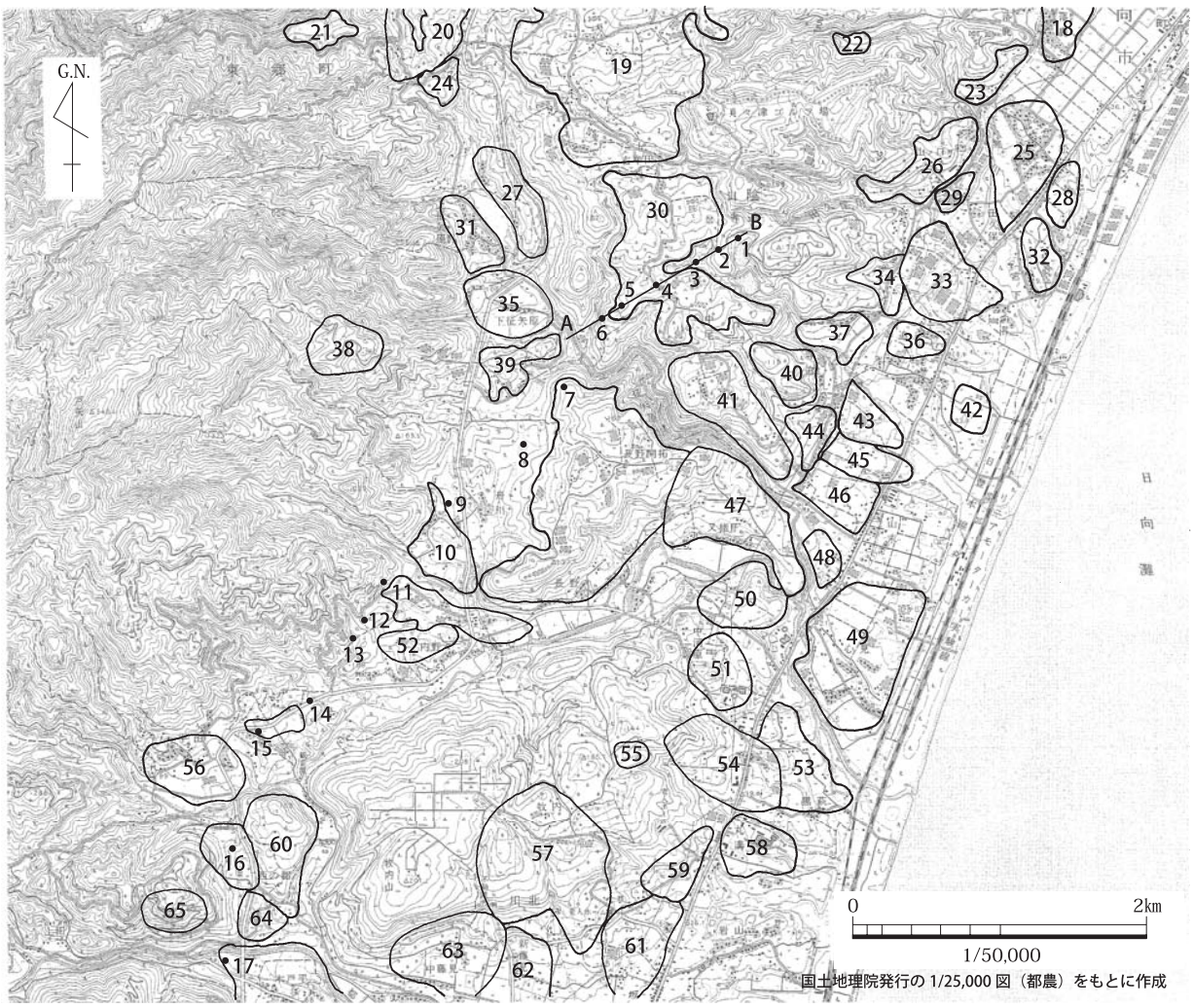
第１表　向原第３遺跡群周辺表採石器計測表

挿図番号	図版番号	出土層位	器種	石材	法量（cm、g）				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
1	図版１	表採	石斧	頁岩	6.2	8.6	2.3	146.0	上部欠損
2	図版１	表採	石錘	砂岩	4.8	5.8	1.3	50.0	
3	図版１	表採	石錘	砂岩	4.0	5.3	1.0	35.8	
4	図版１	表採	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	6.7	11.7	1.2	107.7	



市町	番号	遺　跡　名
日向市	1	馬込遺跡第１地点
	2	馬込遺跡第２地点
	3	岡遺跡・平尾遺跡
	4	中ノ別府第２遺跡
	5	中ノ別府第３遺跡
	6	金ケ浜第２遺跡
	7	金ケ浜第３遺跡
	8	坂元第２遺跡
	9	坂元第３遺跡
	10	日平山ノ口第２遺跡
	11	日平山ノ口第３遺跡
	12	向原中尾第１遺跡
	13	向原中尾第２遺跡
	14	向原中尾第３遺跡
	15	向原中尾第４遺跡
	16	向原中尾第５遺跡
	17	向原中尾第６遺跡
都農町	18	長野遺跡
	19	舟川第２遺跡
	20	舟川第３遺跡
	21	舟川中原遺跡第１地点
	22	舟川中原遺跡第２地点
	23	内野々遺跡
	24	内野々第２遺跡
	25	内野々第３遺跡
	26	内野々第４遺跡
	27	平山下原遺跡
	28	西ノ郡第２遺跡
	29	木戸平第２遺跡
	30	木戸平第１遺跡
	31	俵石第２遺跡
	32	俵石第１遺跡

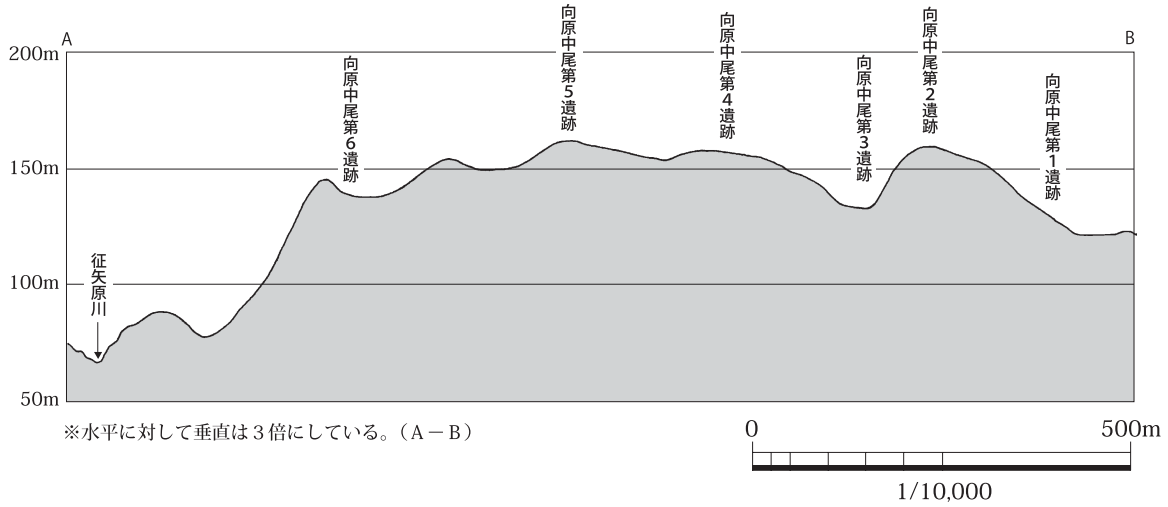
第３図　東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図



1 向原中尾第１遺跡	2 向原中尾第２遺跡	3 向原中尾第３遺跡	4 向原中尾第４遺跡	5 向原中尾第５遺跡	6 向原中尾第６遺跡	7 長野遺跡
8 舟川第２遺跡	9 舟川第３遺跡	10 舟川中原遺跡	11 内野々遺跡	12 内野々第２遺跡	13 内野々第３遺跡	14 内野々第４遺跡
15 平山下原遺跡	16 西ノ郡第２遺跡	17 木戸平第２遺跡	18 落鹿遺跡	19 庭田庭田遺跡群	20 庭田小浜遺跡群	21 庭田小浜遺跡
22 日平第２遺跡	23 日平第１遺跡	24 坂下遺跡	25 高松遺跡	26 日平山ノ口遺跡	27 東平遺跡	28 霧島原遺跡
29 田久保遺跡	30 向原遺跡群	31 上征矢原遺跡群	32 宮ノ下遺跡	33 前ノ原遺跡	34 山ノ口遺跡	35 下征矢原遺跡
36 中村遺跡	37 寺迫遺跡	38 舟川尾立遺跡	39 舟川遺跡	40 向原第１遺跡	41 向原第３遺跡	42 寺迫下原遺跡
43 宮川遺跡	44 向原第２遺跡	45 山末大原第２遺跡	46 山末大原第１遺跡	47 又猪野原遺跡	48 心見往還上遺跡	49 心見遺跡
50 旧牧跡第２遺跡	51 旧牧跡第１遺跡	52 内野遺跡	53 上黒萩遺跡	54 白石第１遺跡	55 白石第２遺跡	56 平山遺跡
57 白水遺跡	58 久次牟田遺跡	59 境ヶ谷第２遺跡	60 西ノ郡第１遺跡	61 境ヶ谷第１遺跡	62 黒石遺跡	63 京塚遺跡
64 川神田遺跡	65 井手ヶ平遺跡					

※1～17 は東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡

第４図　向原中尾遺跡群と周辺遺跡位置図



※水平に対して垂直は３倍にしている。（A－B）

第５図　遺跡間地形断面模式図

第Ⅱ章　向原中尾第２遺跡（第３次調査）

第１節　調査の概要と方法・経過

１　遺跡周辺の環境と調査区の設定

向原中尾第２遺跡は今回の調査を含めて３回発掘調査が行われている。平成22年度に第１次調査と第２次調査が行われ、平成23年度に報告書が刊行されている。

今回の第３次調査は第１・２次調査の調査区と市道を挟んで隣接しており、同じ丘陵尾根上に位置する。第２次調査の調査区と比べ、現地表面、遺構面共に標高が約2m高く、尾根の先端により近い平坦面の一部と西に下る斜面地に位置する（第６図）。

第２遺跡の立地する丘陵尾根は、南北に長く、東西は谷に挟まれている。西に尾鈴山系を配し、東に日向灘を望む（巻頭図版１）。また、第２遺跡西側の谷部に向原中尾第３遺跡、南西に向原中尾第４、第５、第６遺跡を見通すことができる。

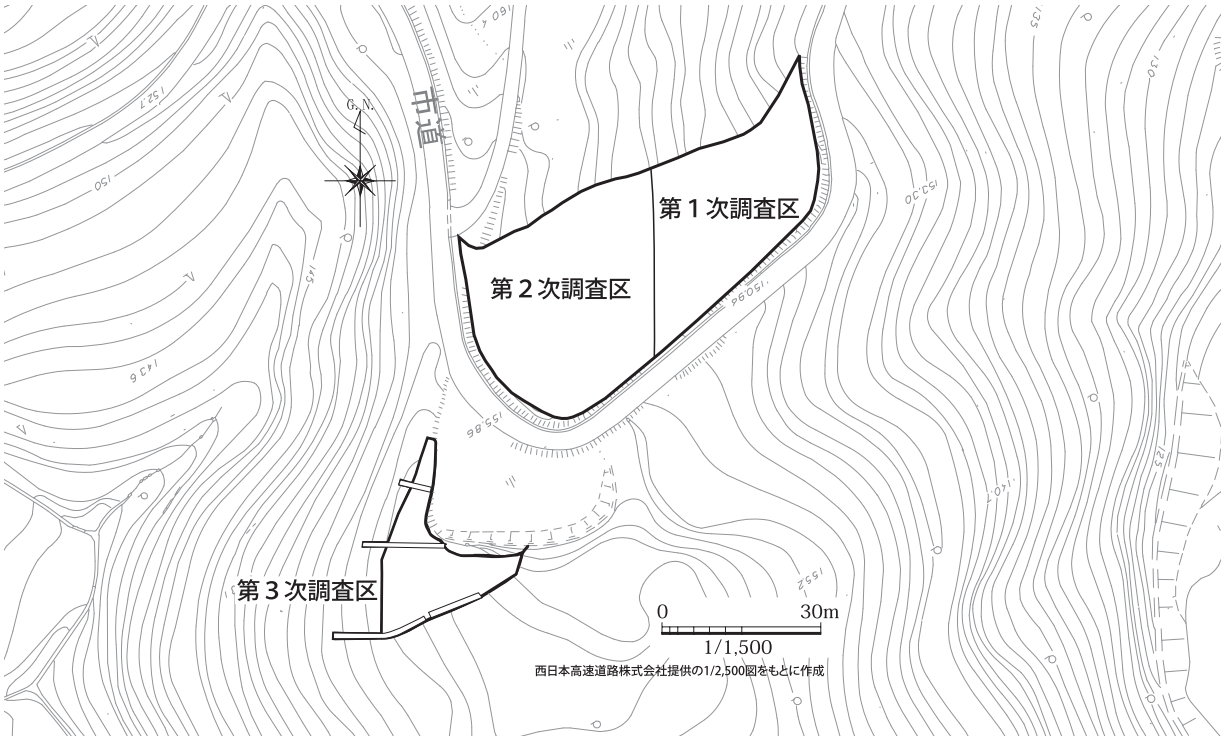
第３次調査の調査区は、工事の施工に際して削平される部分に対してのみ設定した。現状で調査対象地となるのは、第２次調査区の南側にはしる市道よりも南側である。対象地の東北部は、第１次・２次調査の着手以前にすでに削平されていた。なお、削平されている部分に関しては、基本層序Ⅷ層である地山が展開しているのみであった。

発掘調査にあたりグリッドは、世界測地系を基準に10m×10mのグリッドを設定した。東を基準として、東西軸をアルファベット、北を基準として、南北軸を算用数字で表した（第７図）。

２　発掘調査の方法

隣接する第１次・２次調査の発掘調査の成果をうけて、重機での掘削を表土のみとし、それ以下は人力で掘削した。表土剥ぎの結果、調査区東端において竪穴建物跡を検出した。竪穴建物跡の埋土上層の掘削段階から遺物の集中がみられため、埋土中の遺物は、遺構と考えられる範囲を各方位Ｎ、Ｅ、Ｗ、Ｓ区で大区分として四分割し、大区分内をさらにa、ｂ、ｃ、ｄの四分割し小区分として取り上げた。

掘削中に炭化物が検出されたことから、第１、２次調査での建築部材の検出例をふまえ、全ての炭化物の位置を記録した。貼床直上、埋土中の遺物においても、比較的残りの良いものを選定し、図化した。それ以外の遺物は埋土中の遺物同様、竪穴建物跡を大区分として四分割、その中を小区



第６図　遺跡位置と周辺地形

分としてさらに四分割して取り上げた。また、掘削は竪穴建物跡の掘方まで行った。このため、竪穴建物跡出土の遺物は掘削中に出土したもの（埋土出土遺物）、貼床面出土したもの、貼床面から掘方で出土したものに細分した。

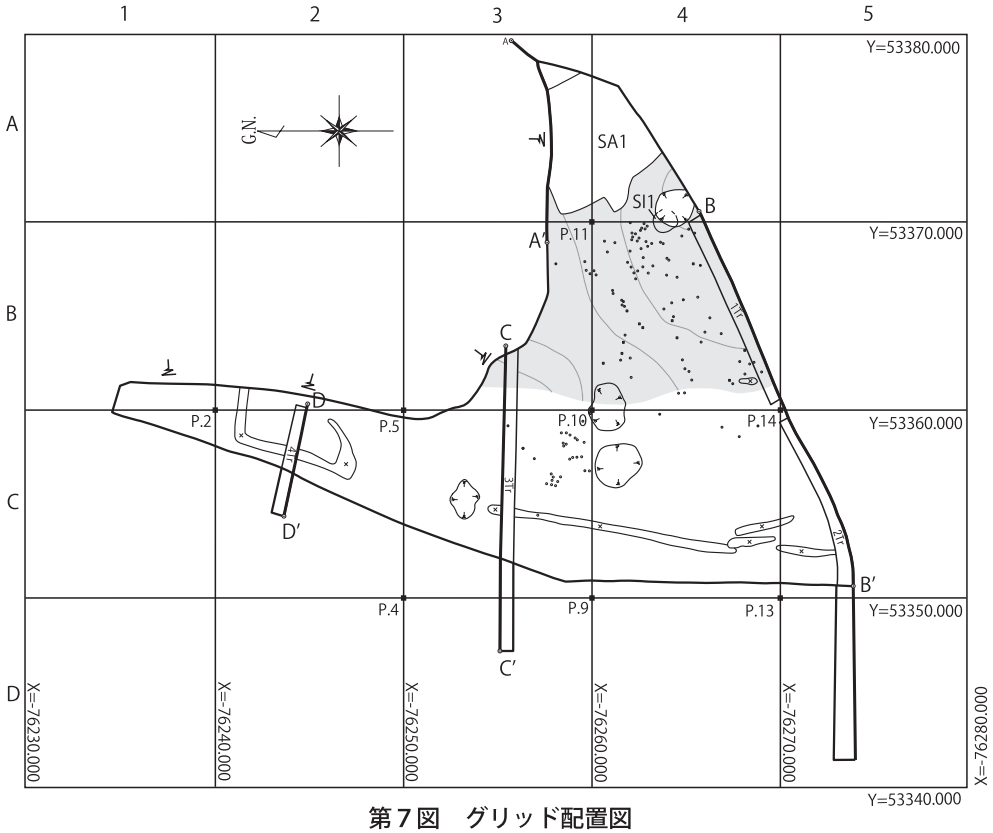
また、基本層序Ⅲ層の礫と遺物は図化し、遺物のみを持ち帰った。後期旧石器時代の礫や遺物については図化し、礫、遺物ともに持ち帰った。なおＳＡ１の床土、土坑埋土、主柱穴埋土、焼土、炭化物を含んだ埋土は持ち帰り、動植物遺存体の有無を確認するため、フローテーションを実施した。

３　調査の経過

第３次調査区は、第２次調査区に極めて隣接しており調査前の段階でアカホヤ層（Ⅱ層）の存在を確認していた。表土剥ぎ後、掘削前の段階から遺物が散見され、弥生時代以前の遺構や遺物が良好に残存していると考えられた。表土下の橙色土（Ⅱ層）の検出の際に、調査区東端部において弥生時代終末期と考えられる土器が出土し、Ⅲ層上面で竪穴建物跡が１軒確認された。アカホヤ層（Ⅱ層）下層の褐灰色土（Ⅲ層）では集石遺構が１基検出された。また、縄文時代早期の押型文土器の出土が確認できたことから、Ⅲ層は縄文時代早期に位置づけられる。また、ＡＴ層（Ｖ層）をはさみ上位、下位に遺物が出土している。明確なＡＴ層は、第１・２次調査では確認されていなかったが、第３次調査では比較的良好な状態で検出された。これらのことにより、向原中尾第２遺跡は後期旧石器時代から弥生時代終末期の間に生活空間として利用されていることが明らかとなった。

４　整理作業の方法と経過

遺物は発掘調査の段階でほぼ完形の土器や接合する遺物が確認されていたことから、水洗いや注記の段階で接合できる遺物をまとめていった。注記において竪穴建物跡出土遺物は検出前に竪穴建物跡の直上のⅡ層で出土したものを「埋上」、竪穴建物跡の埋土掘削中に出土したものを「埋」、床面で出土したものを「床」、床面から掘方までの間で出土したものを「床内」と注記した。竪穴建物跡出土の遺物は床面と埋土の土器の接合関係を確認した。包含層出土の土器や石器についても接合関係の確認を行い、向原中尾第２遺跡（第１・２次調査）の遺物との接合関係も確認した。遺物の実測、トレースは埋蔵文化財センターで行った。



第７図　グリッド配置図

第２節　基本層序と石材分類

基本層序

基本層序はⅠ～Ⅷ層に分かれる（第８図Ａ－Ａ'）。

Ⅰ層：黒色土（表土）

Ⅱ層：橙色土（Ｋ－Ａｈ二次堆積層）

Ⅲ層：褐灰色土（縄文時代早期）

Ⅳ層：にぶい黄橙色土

Ⅴ層：黄色土（ＡＴ層）

Ⅵ層：褐灰色土

Ⅶ層：明褐灰色土

Ⅷ層：橙色土

向原中尾第２遺跡では、表土直下に二次堆積のアカホヤ層であるⅡ層が確認されるが、堆積は比較的薄い。そのため、範囲も平坦な尾根頂部に限られており北端部および東端部にはみられない。アカホヤ自体はブロック状に堆積しており、特に谷に至るにつれて散漫な堆積状況が顕著となる。この状況は、縄文時代早期層であるⅢ層やＡＴ層であるⅤ層においても同様な状況がみうけられる。これらは、尾根頂部から谷へ至る急斜度な地形に起因する土の流出が原因であると考えられる。比較的安定した堆積をみせるのが、Ⅴ層を除くⅣ層下位の層位である。特にⅣ層は調査区の全面に堆積し、Ⅱ、Ⅲ層のような土の流出がみられない。これは、各層位に対比しうる時期に微地形の変化があったと考えられ、Ⅳ層下位の段階ではその上位層の段階と比較すると平坦な傾斜であったことが考えられる。Ⅵ、Ⅶ層は、色調は薄いが宮崎県下でみられるＭＢ２、３の特徴を有しており、いわゆるブラックバンドに比定できる。

石材分類の基準

石器石材は、共通認識を図る目的のため、前回報告した向原中尾第１・２遺跡、向原中尾第４遺跡の石材分類に則り分類した。分類は肉眼観察による色調、礫面、風化の状況や手触り等により行った。

流紋岩…白色に風化し、流離構造が観察されるものも含む。風化面はツヤがあるもの、粉状に風化するものとがある。新鮮面は黒色緻密。

ホルンフェルス…黒色でツヤがあるものと、灰白色斑が混ざるものとがある。風化面は灰色、白色ないし黄色であり、粉状の風化がみられる。砂岩系と頁岩系に区別できる。

頁岩…黒灰色を中心とし、薄い層状に剥落する。

珪質頁岩…黒色ないし、黒灰色を中心とし、白斑が混じる。剥離面は鋭く一部貝殻状断痕もみられる。

チャート…青、白、灰、赤等、色調にはバリエーションがみられる。一部無光沢のものも確認でき、節理が多い。

砂岩…黄褐色から黄土色であり、肉眼で砂粒が確認できるもの。一部青灰色のものもあり、礫面は滑らかである。

尾鈴山溶結凝灰岩…新鮮面は灰色ないし乳白色で、白色に風化する。不純物が多く介在する。

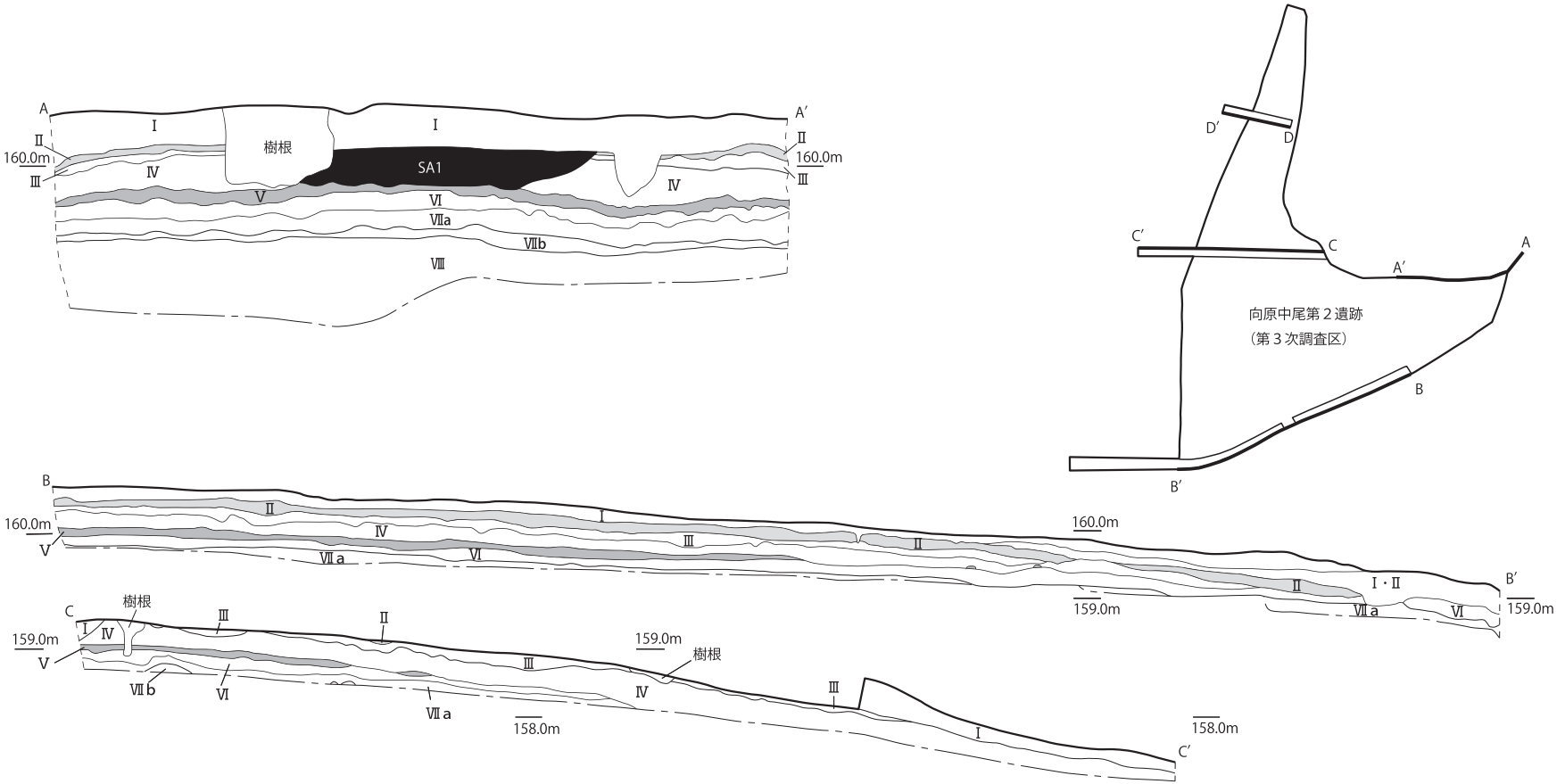
黒曜石①…乳白色および、黒灰色で線状の節理がみとめられる。１mm前後の赤い粒子を含む。（姫島産）

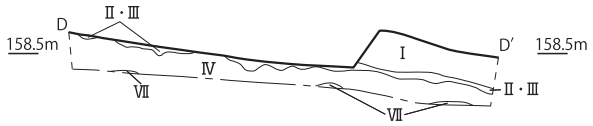
黒曜石②…透過性が高く、アメ色。白色の不純物や気泡を含む。（桑ノ木津留産）

黒曜石③…黒色で透過性が低い。黄白色の不純物を多く含む。（大口日東産）

黒曜石④…透過性が高く、僅かに茶色をおびた黒色。1mm以下の黄白色の不純物を含む。（三船産）

黒曜石⑤…青みがかる黒褐色。剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。礫面はクレーター状の凹凸をもつ。（尾立第２OX群）





Ⅰ	黒色土	（10YR2/1）	粘性・しまり弱い。きめ細かい粒子によって構成。樹根によって撹乱されている。表土
Ⅱ	橙色土	（5YR6/6）	粘性・しまり弱い。きめ細かく、1 ～ 5mm の K-Ah ブロックを含む。2 次堆積の K-Ah 層。
Ⅲ	褐灰色土	（7.5YR4/1）	粘性・しまり無し。きめ細かい。縄文時代早期の遺物包含層。
Ⅳ	にぶい黄橙色土	（10YR7/3）	粘性・しまる。降雨後グライ化し易い。
Ⅴ	黄色土	（2.5YR8/8）	粘性無し・しまる。Ⅳ層ベースで 5 ～ 10cm の AT ブロックを含む。AT は固くしまり粗細粒子が混在。
Ⅵ	褐灰色土	（5YR5/1）	粘性強く・しまる。調査区の南側～北側にかけて黒味をおびる。
Ⅶa	明褐灰色土	（5YR7/1）	粘性・しまる。風化した尾鈴系バイラン土を少量含む。
Ⅶb	明褐灰色土	（5YR7/1）	粘性・しまる。Ⅶa 層ベースで下部に 3cm ～ 1m のバイラン土を多く含む。茶色の珪質岩を含む。
Ⅷ	橙色土	（2.5YR6/8）	粘性・しまる。3cm ～ 1m のバイラン土を非常に多く含む。地山

0　5m
1/100

第８図　調査区土層断面図

第３節　後期旧石器時代の遺物

１　分布状況

後期旧石器時代の遺物は、概ね基本層序によるⅣ層からⅥ層にかけて出土している（第９図）。出土遺物は、基本層序Ⅴ層（以下ＡＴ）直下で検出された７を除き全てＡＴ上位層からの出土となっている（第９図）。ＡＴは、調査区内において堆積状況に差があり、比較的平坦な部分にのみその広がりをみせるが、遺物の出土もその範囲内におおよそ収まるといえる。遺物はスクレイパーや二次加工剥片などの剥片石器が出土しており、石核や敲石も含まれる。利用石材は、ホルンフェルス、頁岩、尾鈴山溶結凝灰岩、流紋岩を素材として利用しており、流紋岩を除き当遺跡から近隣の比較的採取しやすい石材を利用しているといえる。礫は調査区北側と、弥生時代の竪穴建物跡が検出された東側を除き確認されるが、出土状況は遺物と同じくして、調査区内の平坦部にその出土をみいだせる。しかし、礫、遺物ともに出土数が少なく、散漫な出土状況となっている。

雨天時の調査では、傾斜地のため、谷に向かってかなりの土の流出があった。そのことを考慮すると、これらは本調査区の南側にやや広く展開する平坦部から流出した状況であることが考えられる。

調査はⅧ層まで全掘した。

２　遺物（第10図、第２表、図版３）

後期旧石器時代の遺物は、スクレイパー、剥片、二次加工剥片、石核、敲石が出土した。一部、弥生時代の竪穴建物跡より出土したものを含むが、石材、形態等を考慮して、後期旧石器時代の遺物と考えられるものをここに掲載している。

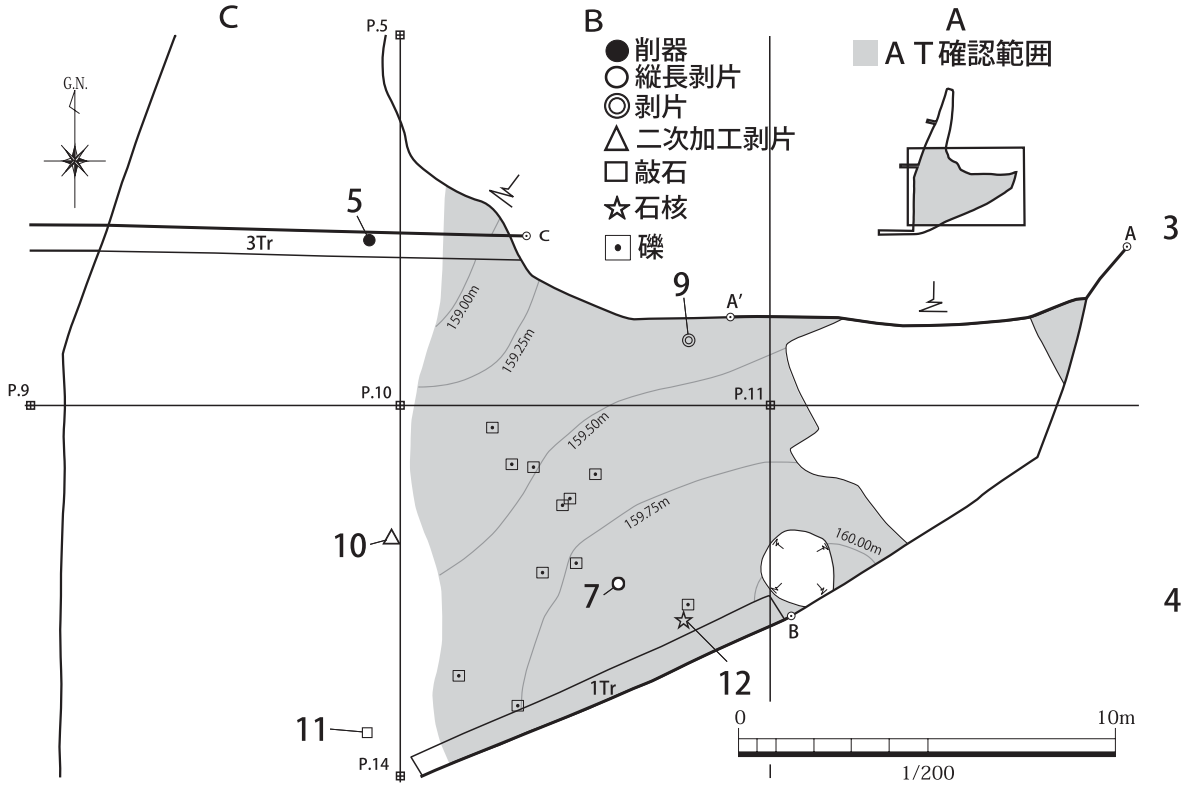
スクレイパー（第10図５・６）

５はホルンフェルス製の削器である。右側縁部に粗雑な剥離調整をおこなう。先端部及び左側縁部を欠損している。

６は比較的良質の尾鈴山溶結凝灰岩製の削器である。背面に石核から剥離される前段階の剥離面を複数枚残す。左側縁及び下端部に微細剥離痕を有することから削器とした。

縦長剥片（第10図７・８）

７はホルンフェルス製の縦長剥片である。背面



第９図　後期旧石器時代礫・遺物分布図

に自然面を残し連続した縦長剥片剥離作業を伺わせる。８は白色の流紋岩製の縦長剥片である。右側縁
に微細剥離痕を有する。末端部欠損。

剥片（第10図９）

９はホルンフェルス製の剥片である。打点部に自然面を残す。風化が著しい。

二次加工剥片（第10図10）

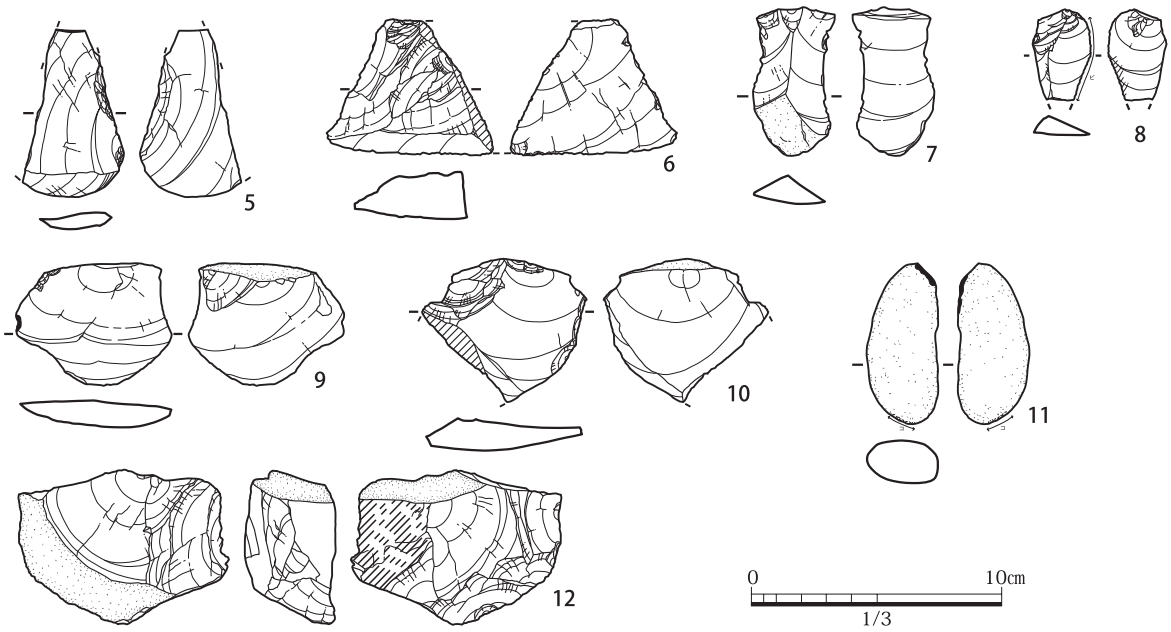
10はホルンフェルス製の二次加工剥片である。厚手の剥片を素材とし、右側縁部に粗雑な調整剥離を施す。背面左側縁には節理面が残る。

敲石（第10図11）

11は尾鈴山溶結凝灰岩製の敲石である。礫の端部に数度の敲打痕が残っている。

石核（第10図12）

12はホルンフェルス製の石核である。表裏にみられる自然面の残存状況から、拳よりやや小さい転礫を利用していることがわかる。剥離方向は一定でなく、打点を展開しながら剥片剥離をおこなっている。



第 10 図　後期旧石器時代出土遺物実測図

第２表　後期旧石器時代出土石器計測表

挿図番号	図版番号	出土位置取り上げ番号	出土層位	器種	石材	法量（cm、g）				備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量	
5	図版３	C-C'	Ⅳ	スクレイパー	ホルンフェルス	6.6	4.0	0.9	20.9	上部欠損
6	図版３	T1-w 一括	Ⅳ	スクレイパー	尾鈴山溶結凝灰岩	5.4	6.5	2.2	66.3	
7	図版３	B4-d 36	Ⅵ	縦長剥片	ホルンフェルス	5.9	3.2	1.1	17.8	AT 直下
8	図版３	SA-1 N	Ⅰ	縦長剥片	流紋岩	3.6	2.3	0.8	5.6	
9	図版３	B3-d	Ⅳ	剥片	ホルンフェルス	4.9	6.1	1.6	39.5	
10	図版３	C4-b 14	Ⅳ	二次加工剥片	ホルンフェルス	5.7	6.5	1.7	50.0	
11	図版３	C4-b 1	Ⅳ	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	6.3	2.8	1.7	37.8	
12	図版３	B4-d 16	Ⅳ	石核	ホルンフェルス	6.1	8.3	3.6	197.4	AT 直上

第４節　縄文時代の遺構と遺物

１　縄文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構は、Ａ４グリッドからに Ｂ４グリッドにかけて集石遺構１基が確認された（第11図）。この集石遺構は、縄文時代早期の遺構検出面において最も標高の高い位置で検出された。また、散礫はあるものの、調査区内の比較的平坦な面でのみ散在しており、一定の集まりに欠ける。これらの散礫は、集石遺構と同様の石材であり、赤化が顕著にみられることから、元来は集石遺構の構成礫あることが想定される。

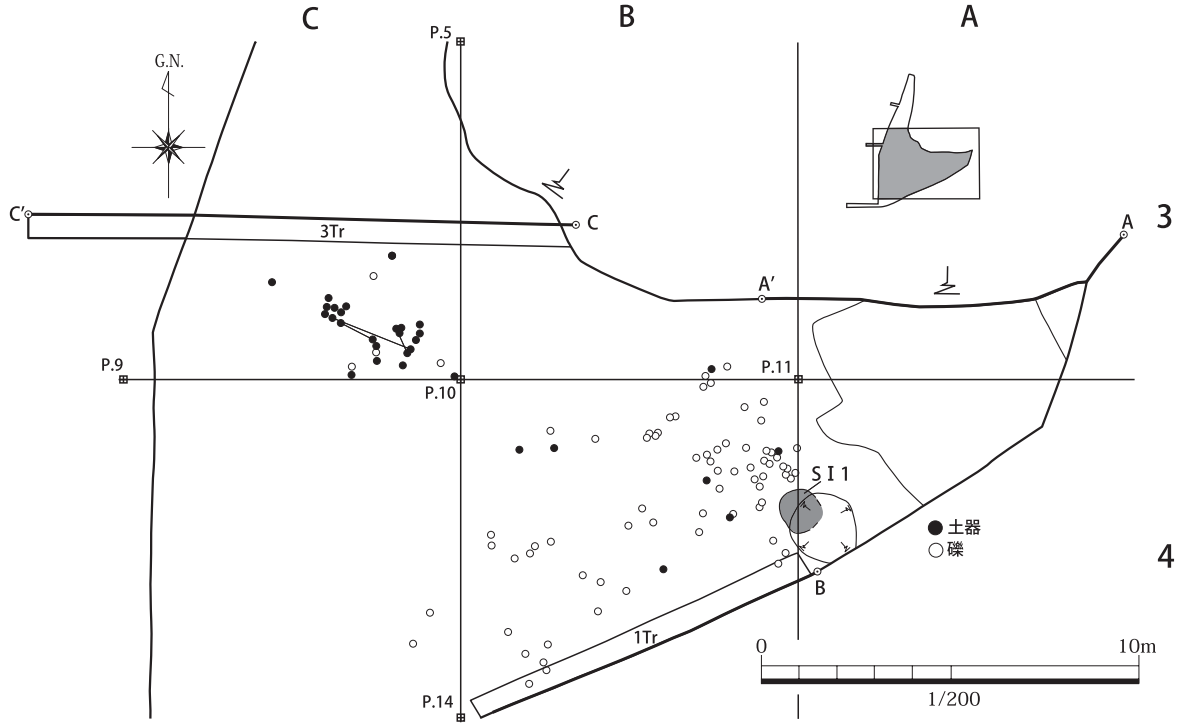
遺物は、土器のみで縄文時代のものと判断できる石器はみられなかった。出土状況としては、概ね散礫と同様な状況で出土しているものと、Ｃ３グリッドに一定の集まりをもって出土しているものに分けられる。前者の特徴としては、摩滅が著しく小片であり、実測、認定に耐えうる個体は無かった。後者は、多少の摩滅はしているが、一部接合関係がみてとれ、比較的残りもよく、文様も顕著であった（第13図）。

ＳＩ１（第12図、第３表、図版１）

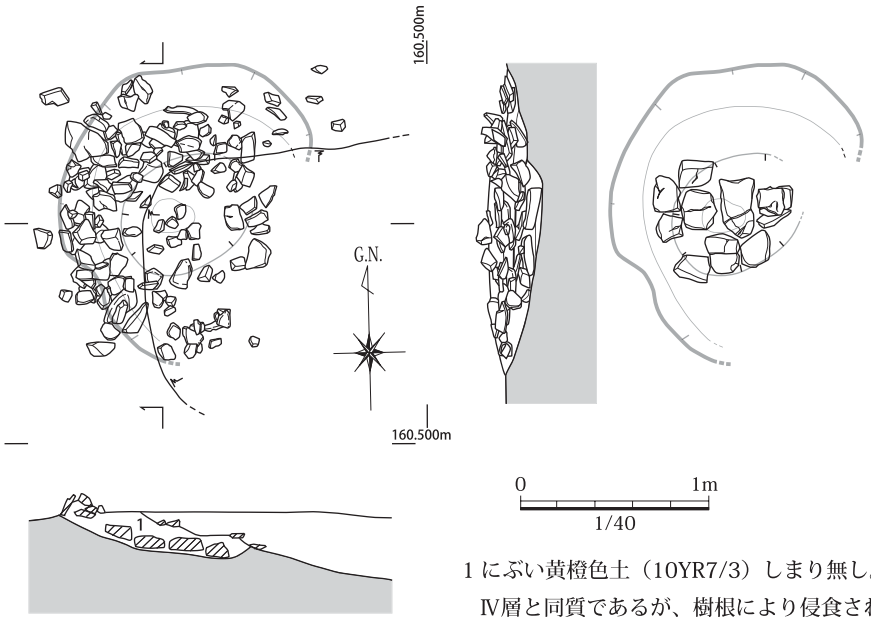
Ⅲ層よりＡ４グリッドからＢ４グリッドにかけて検出した。遺構の上部は、風倒木の横転による攪乱を受けていたが、攪乱の深度が下部構造にまで至っていなかったため、配石は残存していた。やや不定形であるが楕円形のプランであり、明確な掘り込みと配石を有する。構成礫は全てが尾鈴山溶結凝灰岩であり、赤化していた。

土器（第13図13～19、第４表、図版３）

13～16は外面に楕円押型文を施文し、内面は丁寧なナデ調整を施している。これらは接合しないものの、胎土、焼成、調整の諸要素により同一固体の可能性がある。16～19は口縁部である。16～18は内面に長大化した斜位の原体条痕を施している。



第 11 図　縄文時代早期礫・遺物分布図

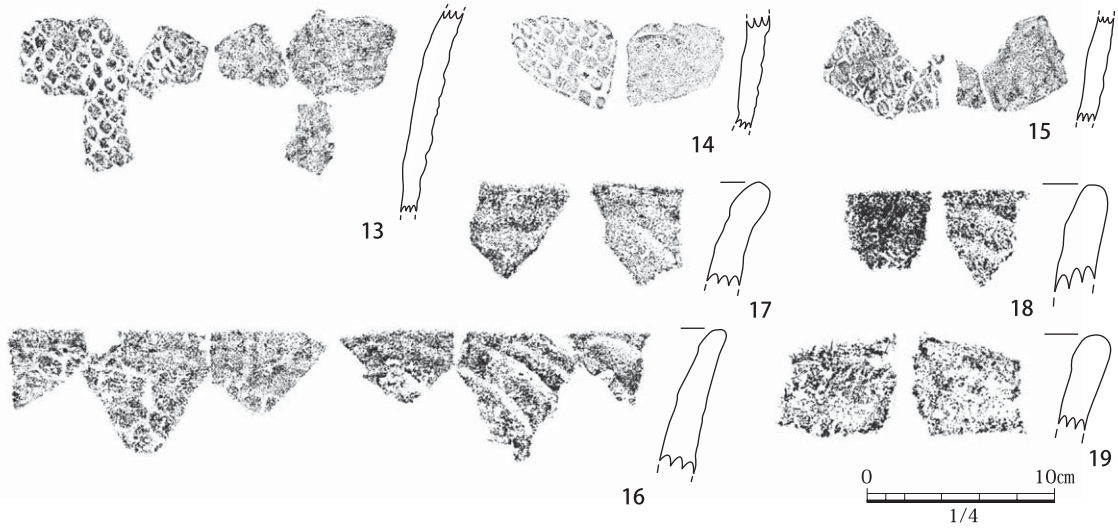


1 にぶい黄橙色土（10YR7/3）しまり無し。基本層序Ⅳ層と同質であるが、樹根により侵食されている。

第 12 図　ＳＩ１実測図

第３表　縄文時代早期集石遺構一覧表

遺構名	検出位置	図版番号	礫範囲(m)		掘り込み(m)			配石	備考
			長軸	短軸	長軸	短軸	深さ		
ＳＩ１	A4 ～ B4	図版 1	1.30＋α	1.35＋α	1.35＋α	1.10＋α	0.25	複数	遺構上部は風倒木によって削平。



第 13 図　縄文時代早期出土遺物実測図

第４表　縄文時代早期土器観察表

挿図番号	図版番号	出土位置取り上げ番号	出土層位	器種	法量(cm)	文様・調整等				胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
13	図版 3	C3-d 20＋31	Ⅱ＋Ⅲ	深鉢	—	楕円押型文	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	3mm以下の灰白、褐色、黒色粒を含む 黒色、透明の光沢粒を含む	田村式
14	図版 3	C3-d 2	Ⅲ	深鉢	—	楕円押型文	ナデ	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	5mm以下の灰白、黒、褐色粒を含む 2mm以下の透明、黒色粒を含む	田村式
15	図版 3	C3-d 32＋25	Ⅲ	深鉢	—	楕円押型文	ナデ	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	3mm以下の灰白、褐色、黒色粒を含む 微細な透明の光沢粒を含む	田村式
16	図版 3	C3-d 24＋28	Ⅲ	深鉢	—	楕円押型文	縦方向の沈線	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	2mm以下の灰白色、褐色粒を含む 2mm程度の透明、黒色の光沢粒を含む	田村式
17	図版 3	C3-d	Ⅱ	深鉢	—	ナデ	斜方向の沈線	にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6	2mm以下の黒色粒を含む	田村式
18	図版 3	C3-d 19	Ⅲ	深鉢	—	ナデ	ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	2mm以下の灰白、褐色粒、黒色の光沢粒を多く含む	田村式
19	図版 3	C3-d 23	Ⅲ	深鉢	—	縦方向の貝殻腹縁文か	ナデ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR5/6	2mm以下の灰白、褐色粒を含む 微細な黒色、透明の光沢粒を含む	田村式

第５節　弥生時代以降の遺構と遺物

１　竪穴建物跡と出土遺物

弥生時代以降の遺構は、Ａ３グリッドからＡ４グリッドにかけて、竪穴建物跡を1軒検出した（第14図）。竪穴建物跡は、第２次調査においてⅡ層上面より大小合わせて７軒ほど確認されており、同丘陵尾根上に設定された本調査においてもその存在を容易に想定できた。本調査で確認できた竪穴建物跡（ＳＡ１）は、弥生時代以降の遺構検出面であるⅡ層上面において最も標高の高い位置で検出した。遺構からは南北に第２次調査区を含む丘陵尾根を望み、東に日向灘及びその沿岸部、西に谷を挟み向原中尾遺跡群の立地する丘陵を一望することができる。

ＳＡ１（第15図、第５表、図版１・２）

位置　調査区東端であるＡ３からＡ４グリッドにまたがり検出した。他遺構との切り合い関係はない。

規模　ＳＡ１北側は、第２次調査区と本調査区を南北に分かつ市道建設時に削平を受けていた。また南側は調査区外となっているので全容は確認できないものの、その大部分を精査することができた。長軸5.8m×短軸5.6m＋αを測る方形プランを呈し主軸を北東に位置する。確認できた総床面積は、32.48㎡である。

床面　遺構検出面から床面までの深度は約20cmを測る。掘り方は地形の傾斜に沿ってやや斜位になっているが、床面はほぼ平坦に貼床が施され床上部はしまっている。掘り方がⅤ層下位まで掘り込まれているため、貼床土には検出面であるⅡ層（Ｋ－Ａｈ）と、Ⅴ層（ＡＴ）のブロックを非常に多く含んでいた。やや南よりではあるが、中央部には長楕円形の浅い落ち込みが確認できた。壁帯溝は確認できなかった。

柱穴　主柱穴は８本確認された。四方に２本ずつ柱穴が確認されているが、住居の規模に比して１本の直径は約15～20cm程度と小さい。柱穴の深さにはそれぞれ浅いものと深いものとが認められるが、検出面の高さや埋土状況などから時期差は見出せず、２本１組で計４本の主柱穴であるといえる。

屋内土坑　屋内土坑は２基確認できた。いずれも遺構の中央より若干東側に位置しており、主柱穴と同程度の間隔で向かい合っている。屋内土坑１（Ｐ１）周辺では、検出以前から焼土が確認できており、炭化物を多量に含む黒色土によってパックされていた。また、焼土はＰ１東側に特に良好な状況で確認されており、赤く、非常に硬くしまっていた。まるで焼土を掻き出したかのような状況であった。Ｐ１の形状は長軸約0.5m×短軸約0.4mの不定形なプランをしており、約0.15mの掘り込みであった。後述するが、Ｐ１東側からはモモの炭化核が出土しており、放射性炭素年代測定の結果1770±20年BPという年代値があたえられている。その他にもアワの炭化種実、マタタビ属等の種実なども出土しているため、食性に関わる遺構である可能性が高い。

屋内土坑２（以後Ｐ２）は長軸約0.6m×短軸約0.58mの円形プランを呈する。深さは約0.2mの掘り込みで、Ⅵ層まで掘り込んでいるためⅥ層に包含されている礫が露出している。形状、位置関係、掘り込みの程度を考慮するとＰ１と同様に考えられるが、焼土、炭化物などは確認できず、露出している礫に赤化等の変化は認められなかった。

炭化材　遺構の西側及び東側で炭化材を検出した。遺構西側の炭化材（Ｃ１）は、床面直上にて検出した。長軸30㎝程度の固体ながら残存状況が良かったため、放射性炭素年代測定及び樹種同定をおこなったところ、1740±20年BPという年代があたえられている。樹種はシイ属である。Ｃ１北側には焼土がみられ、細かな炭化物も多く確認できた。

遺構東側の炭化材（Ｃ２）は、Ｐ１上部にみられる焼土の上部より出土した。小片ながら残存状況が良く放射性炭素年代測定及び樹種同定をおこなったところ、1705±20年BPという年代があたえられている。樹種はシイ属である。

【ＳＡ1出土遺物】（第16、17図20～38、41、42第６、７表、図版１・２）

甕（第16図20～27、29）

20は口縁部～底部にあたる。外面は口縁部に横

方向のナデを施し、頸部には工具痕がみられる。胴部～底部にかけて工具痕がみられ、底部にいくにつれて丁寧な調整となる。内面は口縁部に横方向のナデを施している。外面口縁部～胴部中央付近および内面胴部～底部にかけて煤が付着している。21は口縁部～胴部にあたる。内外面とも、口縁部には横方向のナデと縦方向の工具痕が残る。胴部外面にはミガキを施し、頸部付近～胴部中央には縦方向、胴部中央以下は横方向のミガキを施している。22～24は口縁部にあたる。いずれも外反し直線的に立ち上がり、横方向のナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。25は胴部にあたる。外面には不定方向のタタキを施し、ところどころに指頭圧痕がのこる。26～27は底部にあたる。いずれも縦方向のナデ調整を施している。外面には煤が付着している。

壺（第16図28、30、31）

28は複合口縁壺である。口縁部に櫛描波状文を施しており、内面の整形が不均一である。28は胴部外面に縦方向のハケ調整を施している。30は胴部にあたる。底部外面付近に指頭圧痕がみられるが、それ以外の調整は摩滅しているため判断できない。31は頸部にあたる。外面には、ハの字を横位に刻んだ貼付突帯を施している。

鉢（第16図32～36）

32はほぼ完形の鉢である。外面は縦もしくは斜方向の工具ナデ調整を施し、内面は不定方向のナデ調整によって整形されている。底部には一部煤が付着している。33は口縁部～底部付近にあたる。32、33ともに内外面ともナデ調整は粗雑で、粘土のつなぎ目が多く見られる。34は口縁部～底部にあたる。手づくねにより整形されているが、風化しているため、細かな調整は不明瞭である。35は胴部、36は口縁部にあたる。いずれも外面は斜め方向の粗いナデ調整を施している。

高坏（第17図37～38）

37は坏部にあたる。内外面とも摩滅が著しく調整は不明瞭である。38は裾部にあたる。内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。

石器（第17図41、42）

41は尾鈴山溶結凝灰岩製の磨石である。表裏に広く磨面が残存し、中央、端部に敲打痕が確認できる。

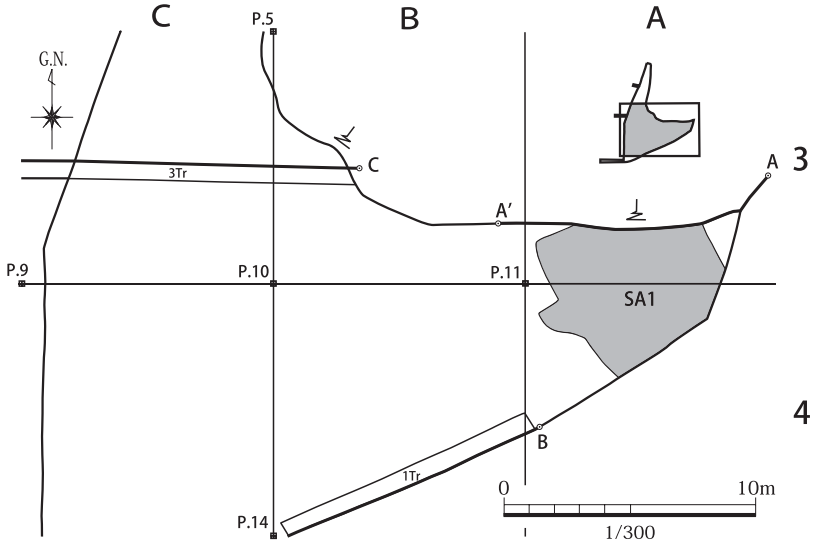
42は尾鈴山溶結凝灰岩製の台石である。

【その他の遺物】（第17図39、40、第８表、図版１）

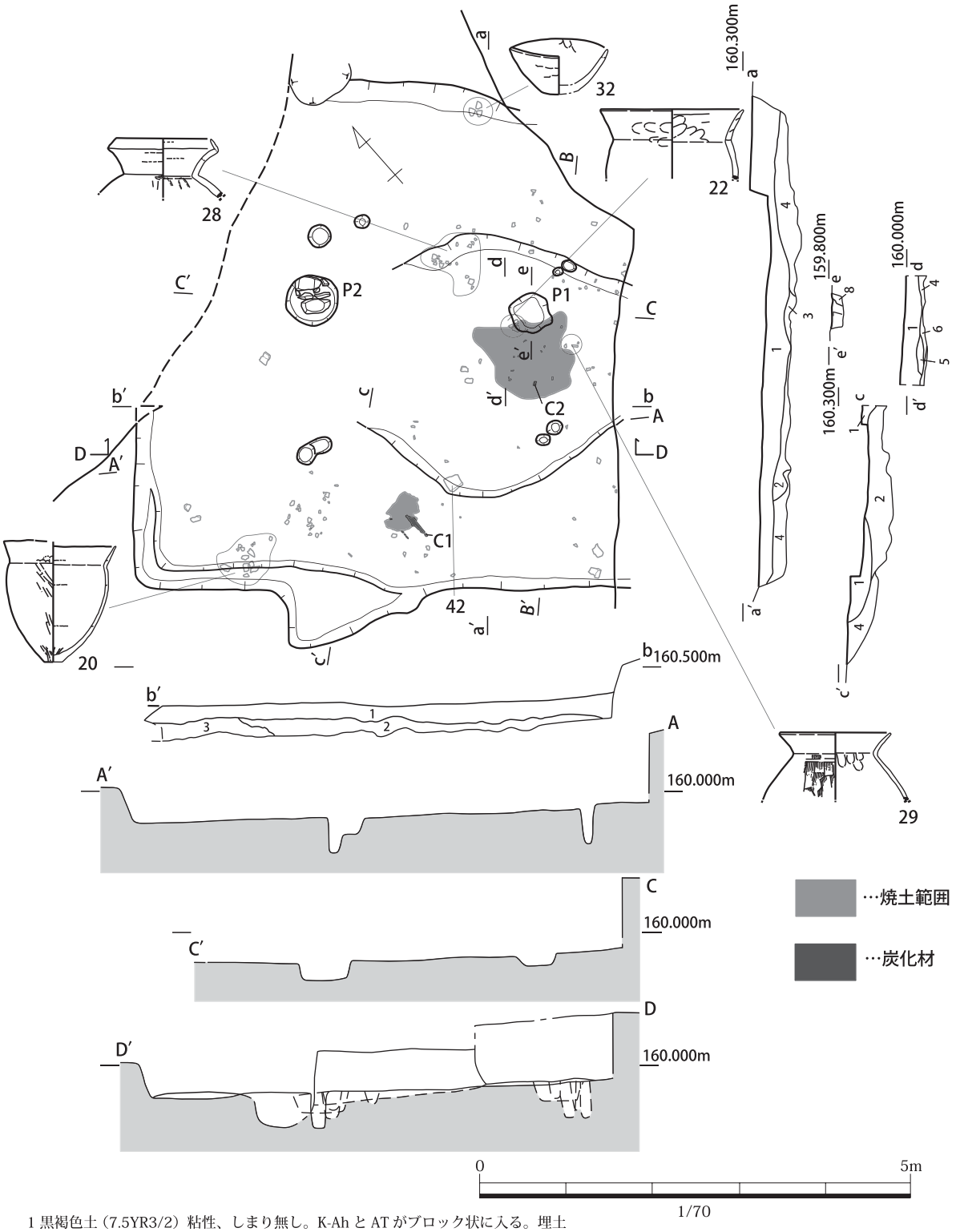
向原中尾第２遺跡では、表土および攪乱より石器が出土している。

石器（第17図39、40）

39は桑ノ木津留産黒曜石製の剥片である。打点部を欠損している。40は尾鈴山溶結凝灰岩製の剥片である。



第 14 図　弥生時代遺構分布図



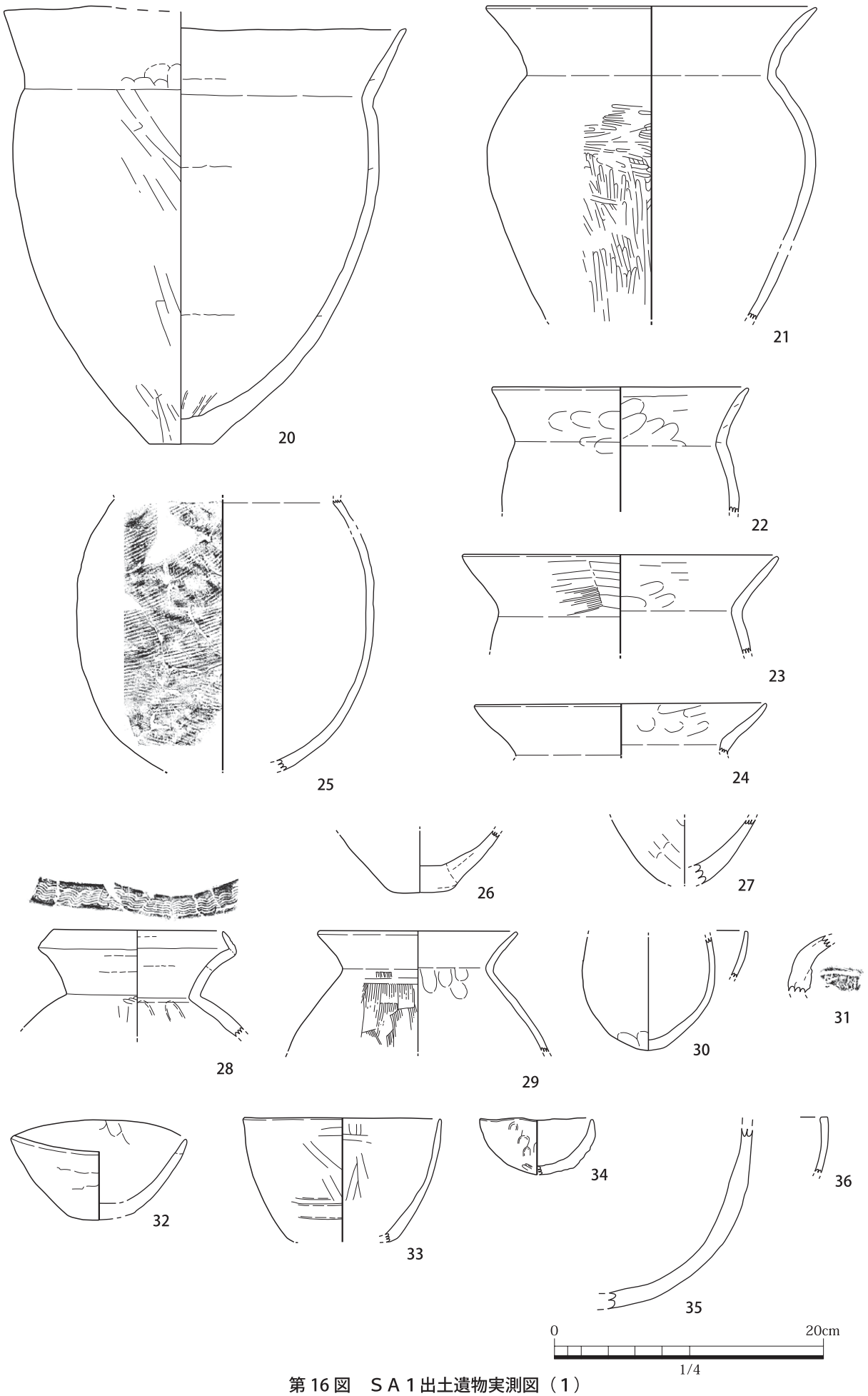
1 黒褐色土（7.5YR3/2）粘性、しまり無し。K-Ah と AT がブロック状に入る。埋土
2 褐色土（10YR4/6）粘性弱い。1 より K-Ah と AT のブロックが多い。貼床
3 黒褐色土（7.5YR2/2）明褐色土のブロックが少量混じる。5・6 の混ざったものか。
4 褐色粘質土（10YR4/6）2 ～ 4cm 大の AT ブロックと 5cm 大の K-Ah ブロックが混ざる。貼床
5 明赤褐色土（2.5YR5/8）粘性あり固くしまる。焼土層
6 黒色土（7.5YR2/1）粘性弱い、ややしまる。
7 黒色土（7.5YR2/1）粘性無し、しまり弱い。明褐色土ブロックが少量混じる。3 層と同一か。
8 黒色土（7.5YR2/1）粘性無し、しまり弱い。褐色粘質土が混じる。4・6 層が混じったものか。

第 15 図　ＳＡ１実測図

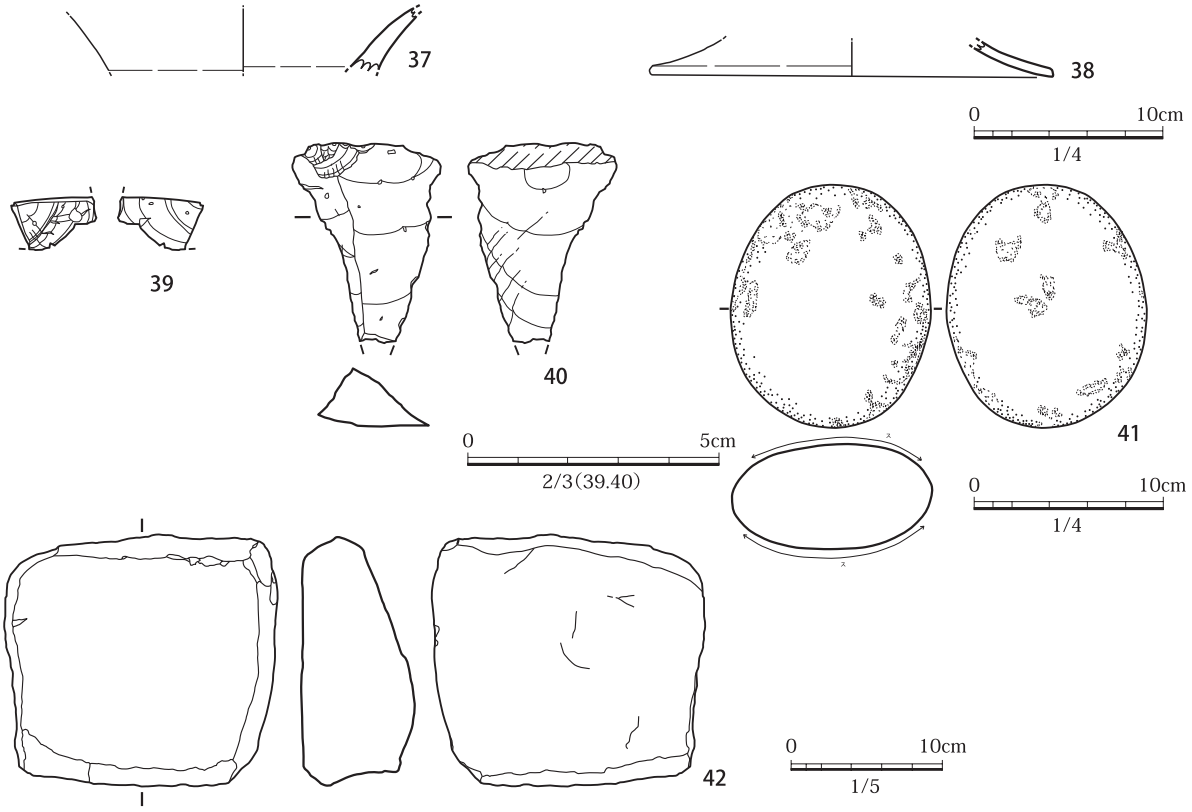
第５表　弥生時代遺構一覧表

遺構名	検出位置	図版番号	竪穴部				炭化材	貼床	年代測定	備考
			プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)				
ＳＡ１	A3 ～ A4	図版 1・2	方形	5.70	5.50	0.3	○	○	1770 ～ 1705 ±20 年ＢＰ	遺構北側は削平。南側は調査区外。

※年代測定の結果は 1950 年を基点として何年前かを示す（詳細は第Ⅱ章第６節１に記載）



第16図　ＳＡ１出土遺物実測図（１）



第 17 図　ＳＡ１出土遺物実測図（２）およびその他の遺物実測図

第６表　ＳＡ１出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	器種	部位	法量(cm)	文様・調整等 外面	文様・調整等 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
20	図版3	ＳＡ１	埋＋床内＋床上	甕	口～底	口:(24.6)	口縁・胴部:横方向のナデ 底部:ミガキ	口縁部:横方向のナデ 胴部:不定方向のナデ	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	2㎜以下の黒、白、灰、褐色粒を含む	内:炭化物付着
21	図版3	ＳＡ１	床内＋床上	甕	口～胴	口:(24.4)	口縁部:横方向の工具ナデ、縦方向の工具ナデ 胴部:横方向のナデ、横・縦方向のミガキ	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	2㎜以下の灰色粒を含む 2㎜以下の黒色粒を多く含む	外:煤付着
22	図版4	ＳＡ１	焼土	甕	口～胴	口:(19.0)	口縁部:横方向の工具ナデ、指頭圧痕 胴部:横方向の工具ナデ	口縁部:横方向のナデ、指頭圧痕 胴部:ナデ	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい黄橙 (10ＹR7/3)	4㎜以下の灰色、褐色粒を含む 2㎜以下の透明、黒色粒を含む	外:煤付着
23	図版4	ＳＡ１	埋	甕	口～胴	口:(23.4)	口縁部:横方向の工具ナデ 胴部:ナデ	口縁部:横方向のナデ後指頭圧痕 胴部:横方向のナデ	にぶい橙 (7.5ＹR7/4)	にぶい橙 (7.5ＹR7/4)	2㎜以下の灰色粒を含む	外:煤付着
24	図版4		1層	甕	口	口:(21.6)	横方向の工具ナデ	横方向のナデ後指頭圧痕 胴部:横方向のナデ	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	浅黄 (2.5Y7/3)	3㎜以下の灰色粒を含む 微細な透明、黒色粒を含む	外:煤付着
25	図版3	ＳＡ１	埋＋床上	甕	頸～胴	―	胴部:不定方向のタタキ、指頭圧	胴部:横方向のナデ	橙 (5ＹR7/6)	浅黄橙 (2.5Y8/6)	5㎜以下の灰色粒を多く含む	外:煤付着 内:炭化物付着
26	図版4	ＳＡ１	埋＋床内	甕	底	底:(4.9)	縦方向のナデ	ナデ	橙 (7.5ＹR6/6)	橙 (7.5ＹR6/6)	4㎜以下の灰色、灰白色粒を多く含む	外:煤付着
27	図版4	ＳＡ１	埋	甕	胴	―	ナデ	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5ＹR6/4)	にぶい黄橙 (10ＹR6/4)	2㎜以下の灰白、褐色粒を含む	外:煤付着
28	図版4	ＳＡ１	埋＋床上	壷	口～頸	口:(12.7)	口縁部:櫛描波状文、縦方向のナデ	口縁部:横方向のナデ 胴部:指頭圧痕	橙 (7.5ＹR6/6)	橙 (7.5ＹR6/6)	1㎜以下の黒色、褐色、白色、灰色粒を多く含む	複合口縁壷
29	図版4	ＳＡ１	埋	甕	口～胴	口:(14.8)	口縁部:横方向のナデ 胴部:縦方向のハケ目後横方向のナデ	口縁部:横方向のナデ 胴部:指頭圧後丁寧なナデ	にぶい橙 (7.5ＹR7/4)	橙 (7.5ＹR7/6)	2㎜以下の灰色、灰白色、褐色粒を含む	外:煤付着
30	図版4	ＳＡ１	埋＋床上	壷	胴～底	―	底部:指頭圧痕	胴部:ナデ	浅黄橙 (7.5ＹR8/4)	にぶい橙 (7.5ＹR7/4)	3㎜以下の灰白色、灰色粒を多く含む	
31	図版4		2層	壷	頸	―	貼付突帯、横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5ＹR7/4)	橙 (5ＹR6/6)	4㎜以下の灰色、灰白色粒を多く含む	
32	図版4	ＳＡ１	床上	鉢	口～底	口:(13.0)	口縁部:横方向のナデ 胴部:斜め方向の工具ナデ	口縁部:横方向のナデ 胴部:不定方向のナデ	にぶい黄橙 (10ＹR6/4)	明黄褐 (10ＹR6/6)	5㎜以下の灰白、赤褐色、黒色粒を多く含む	ほぼ完形
33	図版4	ＳＡ１	埋＋床上	鉢	口～胴	口:(14.6)	胴部:横方向のナデ	胴部:工具ナデ	橙 (5ＹR6/6)	明赤褐 (5ＹR4/1)	2㎜以下の褐色、黒色、灰色、白色粒を含む	外:黒斑
34	図版4	ＳＡ１	埋	鉢	口～底	口:(8.4)	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10ＹR8/4)	浅黄橙 (10ＹR8/4)	2㎜以下の褐色、灰色、黒色、白色粒を含む	手づくね
35	図版4	ＳＡ１	埋	鉢	胴	―	ナデ	不定方向のナデ	明赤褐 (5ＹR5/6)	明赤褐 (5ＹR5/6)	1㎜以下の白色、黒色粒を含む	
36	図版4	ＳＡ１	床上	鉢	口	―	斜め方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	にぶい黄橙 (10ＹR7/4)	1㎜以下の白色、褐色、黒色粒を含む	内:黒斑
37	図版4	ＳＡ１	埋＋床内	高坏	坏	―	調整不明	調整不明	橙 (5ＹR6/8)	橙 (5ＹR6/8)	2㎜以下の白色、黒色、灰色、褐色、 橙色粒を多く含む	内外面摩滅
38	図版4	ＳＡ１	埋	高坏	裾	裾:(23.6)	横方向のナデ	横方向のナデ	橙 (7.5ＹR6/6)	橙 (7.5ＹR6/6)	2㎜以下の灰色粒を含む 微細な透明、黒色粒を多く含む	

第７表　ＳＡ１出土石器計測表

挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	器種	石材	法量（cm、g） 最大長	最大幅	最大厚	重量
41	図版3	SA1	I	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	14.1	11.7	6.2	14.8
42	図版3	SA1 W-b 中央 5	―	台石	尾鈴山溶結凝灰岩	18.4	19.9	8.3	4800.0

第８表　弥生時代以降の石器計測表

挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	器種	石材	法量（cm、g） 最大長	最大幅	最大厚	重量
39	図版3	カクラン	―	剥片	黒曜石②	1.2	1.8	0.5	0.7
40	図版3	カクラン	―	剥片	尾鈴山溶結凝灰岩	4.4	3.2	1.9	12.9

第６節　自然科学分析の結果

向原中尾第２遺跡（第３次調査）では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定を実施した。

放射性炭素年代測定は、竪穴建物跡（ＳＡ１）の床面から出土した炭化材、床面直上の焼土から出土した炭化核（モモ）を試料とし、炭化材・炭化種実の年代及び、遺構の時期決定の参考にする目的で実施した。樹種同定は、放射性炭素年代測定に使用した炭化材を試料とし、建物構造材や木材利用状況を明らかにし、近隣森林の植生を推定するという目的で実施した。種実同定は、竪穴建物跡（ＳＡ１）の床土・焼土のフローテーション作業を実施し、得られた種実を試料とし、当時の遺跡周辺の植生を復元すると共に、当時の植物利用の実態を推察する目的で実施した。

放射性炭素年代測定、樹種・種実同定は㈱古環境研究所に委託した。各分析の方法や結果の詳細については下記に掲載した。

１　放射性炭素年代測定

（１）試料

放射性炭素年代測定の試料は、竪穴建物跡（ＳＡ１）の床面から出土した炭化材２点と、床面直上の焼土内から出土した炭化核（モモ）１点の計３点である（第９表）。

試料No.	地点・層準
No.1	ＳＡ１　焼土出土の炭化核（モモ）
No.2	ＳＡ１　床面出土の炭化材（C1）
No.3	ＳＡ１　床面出土の炭化材（C2）

第９表　放射性炭素年代測定試料一覧表

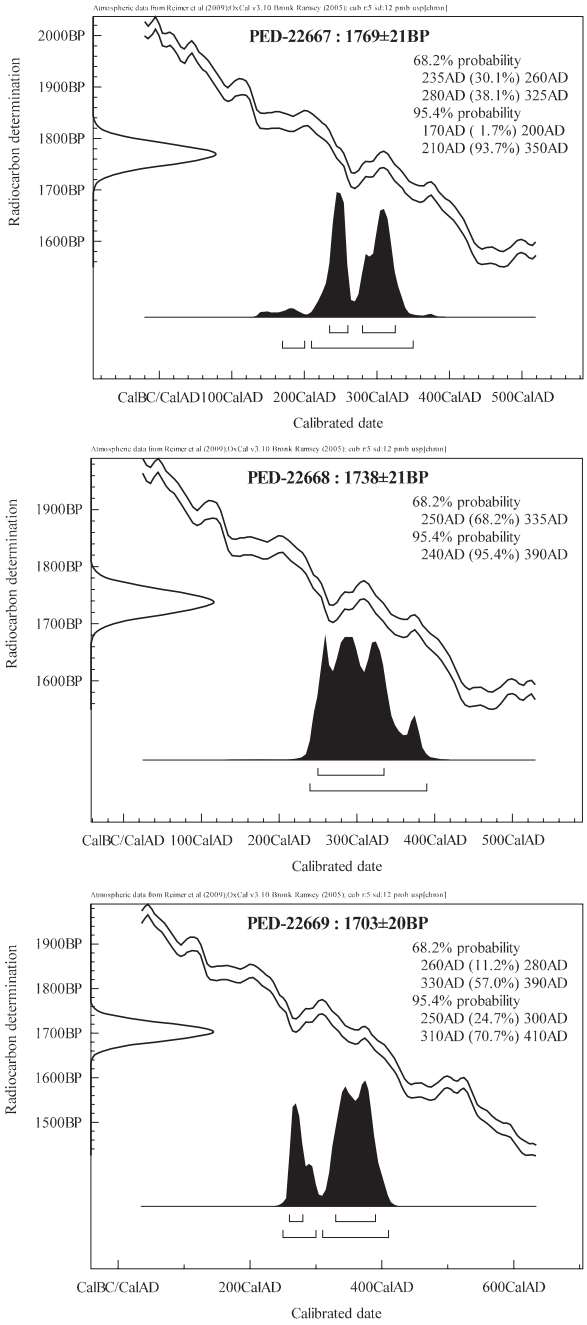
（２）方法

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法で、樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前まで年代測定が可能である。各試料を超音波洗浄後に、酸－アルカリ－酸処理の後、ＡＭＳ(Accelerator Mass Spectrometry)加速器質量分析法により年代を測定し、暦年較正した。

（３）測定結果

加速器質量分析法（AMS）によって得られた放射性炭素濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（^{14}C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第10表にこれらの結果を示す。

なお、暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な14Ｃ測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 09、較正プログラムはOxCal 3.1である。



第 18 図　暦年代較正曲線図

第 10 表　放射性炭素年代測定結果

試料No.	測定番号 PED-	δ13C (‰)※	暦年較正用年代(年BP)	^{14}C年代 (年BP)	暦年代(較正年代)※	
					1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
1	22667	-27.24±0.23	1769±21	1770±20	AD235-260(30.1%) AD280-325(38.1%)	AD170-200(1.7%) AD210-350(93.7%)
2	22668	-29.08±0.24	1738±21	1740±20	AD250-335(68.2%)	AD240-390(95.4%)
3	22669	-26.20±0.25	1703±20	1705±20	AD260-280(11.2%) AD330-390(57.0%)	AD250-300(24.7%) AD310-410(70.7%)

※デルタδ13C測定値とは、試料の測定 14C/12C比を補正するための炭素安定同位体比（13C/12C）のことである。
※^{14}Cの半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差（±）は 1σ(68.2%確率）である。なお、下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。
※暦年代（較正年代）は、14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1 シグマσ(68.2%確率）と 2σ(95.4%確率）で示した。

（4）所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№.1の炭化核（モモ）では1770±20年BP（2σの暦年代でAD　170～200，210～350年）、№.2の炭化材では1740±20年BP（AD　240～390）、№.3の炭化材では1705±20年BP（AD 250～300, 310～410）の年代値が得られた。

2　樹種同定

（1）試料

試料は、竪穴建物跡（ＳＡ１）の床面から出土した炭化材２点である（第11表）。

（2）方法

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。同定方法は、試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本的三断面を作製し、落射顕微鏡（40～1000倍）で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（3）結果

同定結果を第11表と第19図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第 11 表　炭化材同定結果

分析番号	遺構番号	出土位置	結果（学名／和名）
19	SA 1	W C1	*Castanopsis*　シイ属
20	SA 1	E C2	*Castanopsis*　シイ属

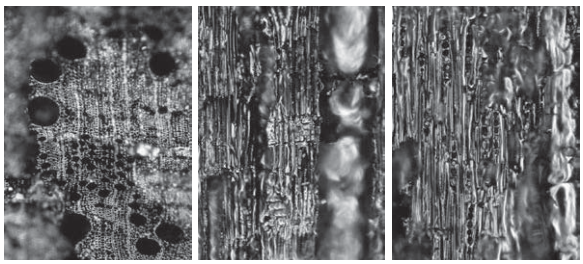
シイ属（Castanopsis）ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

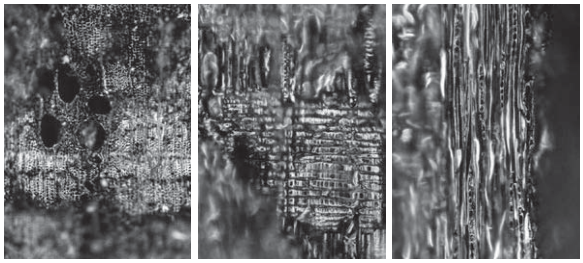
以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性がやや低く、建築、器具などに用いられる。

（4）所見

樹種同定の結果、シイ属２点が同定された。シイ属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素であり、二次林も形成する。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。



横断面 ―――：0.4 ㎜　横断面 ―――：0.2 ㎜　接線断面 ―――：0.2 ㎜
1．分析番号 19　SA1 WC2 シイ属



横断面 ―――：0.4 ㎜　放射断面 ―――：0.2 ㎜　接線断面 ―――：0.2 ㎜
1．分析番号 19　SA1 EC2 シイ属

第 19 図　ＳＡ１出土の炭化材

3　種実同定

（1）試料

試料は、竪穴建物跡（ＳＡ１）の床土・焼土のフローテーション作業を実施し、得られた炭化種実である。

（2）方法

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。遺構埋土や堆積物などから種実を検出し、その種類や

構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。同定方法は、種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した（第12表）。

（3）測定結果

種実同定の結果、樹木４、草本１の計５分類群が同定された。同定結果を第20図に示し、以下に同定根拠となる形態的特徴およびサイズを記載する。

〔樹木〕

モモ（*Prunus persica Batsch*） 炭化核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

アカメガシワ（*Mallotus japonicas Muell. Et Arg.*）炭化種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

マタタビ属（*Actinidia*） 炭化種子 マタタビ科

長さ×幅：1.61×1.01㎜

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、楕円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

ヒサカキ（*Eurya japonica Thunb.*） 炭化種子 ツバキ科

長さ×幅：3.19㎜×2.60㎜

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が楕円形のへそがある。

〔草本〕

アワ（*Setaria italic Beauv.*） 炭化果実 イネ科

長さ×幅：1.45×1.48㎜、1.61×1.62㎜

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。胚の部分がくぼむ。

その他　炭化材片、不明炭化物

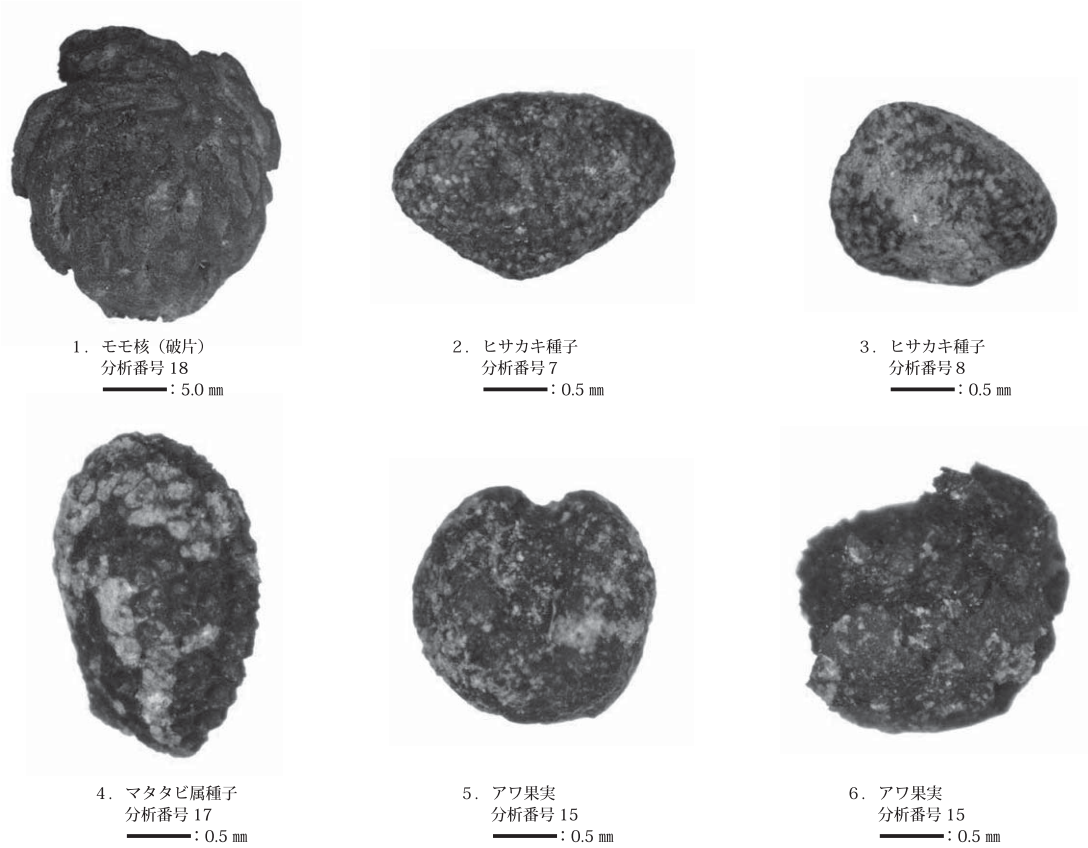
第 12 表　種実同定結果

分析番号	出土位置	分類群		部位	備考
		学名	和名		
1	N-c	*Eurya japonika* Thunb. Charcoal fragment	ヒサカキ 炭化物片	炭化種子	1 67
2	N-c	Charcoal fragment	炭化物片		10
3	N-d	Charcoal fragment	炭化物片		20
4	W-a	*Mallotus japonicus* Muell. et Arg. Charcoal fragment	アカメガシワ 炭化物片	炭化種子（破片）	1 32
5	S-b	Charcoal fragment	炭化物片		20
6	S-b	*Eurya japonika* Thunb. Charcoal fragment	ヒサカキ 炭化物片	炭化種子	1 94
7	S-b	*Eurya japonika* Thunb.	ヒサカキ	炭化種子 （破片）	4 2
8	S-d	*Eurya japonika* Thunb. Charcoal fragment	ヒサカキ 炭化物片	炭化種子	5 20
9	S-d	Charcoal fragment	炭化物片		4
10	E-c	Charcoal fragment	炭化物片		138
11	E-c	Charcoal fragment	炭化物片		23
12	E-c	Charcoal fragment	炭化物片		5
13	N 焼土中	Charcoal fragment	炭化物片		3
14	W 焼土中	Charcoal fragments	炭化物片		11
15	E 焼土中	*Setaria italica* Beauv. Charcoal fragment	アワ 炭化物片	炭化果実	2 14
16	E 焼土中	Charcoal fragment	炭化物片		10
17	E 焼土中	*Actinidia* Unknown seed	マタタビ属 不明種実	炭化種子 炭化種実（破片）	1 1
18	E 焼土中	*Prunus persica* Batsch	モモ	炭化核（破片）	2

（4）所見

種実同定の結果、ＳＡ１の床土からヒサカキ、アカメガシワが同定された。また、ＳＡ１の東側焼土からアワ、マタタビ属、モモが同定された。

栽培植物としてはアワとモモがあり、マタタビ属は果実が食用になる。ヒサカキは照葉樹林の中低木ないし二次林要素、アカメガシワは二次林要素であり、マタタビ属は林縁に多い。なお、多く認められた炭化物片（種実以外）については、人の活動よる遺存物の可能性が考えられる。



第 20 図　ＳＡ１出土の炭化種子

参考文献

１　放射性炭素年代測定

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon,37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫（2003）放射性炭素年代測定法と暦年代較正．環境考古学マニュアル．同成社，p.301-322.

２　樹種同定

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史．植生史研究特別１号．植生史研究会，242p.

３　種実同定

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類．弥生文化の研究第２巻生業，雄山閣出版，p.131-139.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種．月刊考古学ジャーナル No.409，ニューサイエンス社，p.15－19.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル№355，ニューサイエンス社，p.2-14.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編 第四紀試料分析法，東京大学出版会，p.276-283.

第７節　小結

向原中尾第２遺跡における第３次調査（以下第３次調査）では、後期旧石器時代から弥生時代終末期以降の遺構・遺物が確認された。本節では、第３次調査における各時代の様相について述べていきたい。

１　後期旧石器時代

遺物の分布　第３次調査区では、ＡＴ直下およびＡＴ上位において石器や礫が散漫な状態で出土した（第９図）。ＡＴの堆積は、平坦部では比較的良好な状態で確認され、今後の調査に層位的指標をもたらすものであった。出土礫は、調査区の頂部付近での出土がみられるが礫群等の遺構は確認できず、石器の分布にはまとまりが欠ける。このような状況は、第２次調査でも認められ、遺構ではないものの礫の集中分布域は標高の高い平坦面であったとしている。また、傾斜地に調査区が設定されているため、遺物包含層の形成がままならない状況であったことから、これらは遺跡の所在する丘陵尾根の頂部付近、或いは比較的平坦な部分より流出したものと考えられる。以上のことから、分布の中心は、第２次調査区を含む丘陵尾根上でも北側、および南側に展開していることが想定され、第２・第３次調査では遺跡の一端を見出したに過ぎない状況であったといえる。

石器について　第３次調査において確認された器種は、スクレイパー、縦長剥片、石核、敲石が挙げられるが、接合関係は無く、それぞれが独立した状況での出土となった。石核は自然面を有しており、遺跡に持ち込まれた礫は拳大程度の転礫だと考えられる。剥片は比較的良好なものだといえるが、砕片や石器製作に伴って作出される剥片などは無く、当遺跡で石器製作が行われた痕跡は見出せなかった。

石材は頁岩やホルンフェルスなどの近隣で採取可能な石材が主体であり、一点のみ、県北で産出する白色の流紋岩製の剥片が確認できた。遺物の出土数が極めて少量であるにもかかわらず、第２次調査と石材組成は変わらない状況であった。加えて後期旧石器時代に比定し得る層位（基本層序Ⅳ～Ⅵ層）より出土した礫は、全て尾鈴山溶結凝灰岩であった。

２　縄文時代早期

遺構と遺物の分布　第３次調査では調査区の頂部付近で集石遺構１基（以後ＳＩ１）が確認できた。礫の出土も概ね調査区の頂部付近にかけて散見され、標高の低下とともに減少する（第11図）。出土した礫は被熱を受けて赤化したと思われる礫も多く、元来は集石遺構を構築した礫であったことが考えられるが、明確なまとまりはなく、地形の傾斜によって流出した礫であるといえる。地形の傾斜はＡＴ上位の堆積層とほぼ変わらないため、同様な傾斜を保持していたことが想定されるが、Ⅱ層以降の堆積は二次堆積ないしはそれに近く、現状地形のみでしか想定することができない状況であった。遺物の分布状況は、遺構、礫とは多少異なった状況であるといえる。遺構や礫の分布に伴って出土している土器は、状況を同じくして散漫で、実測図に耐え得らない程摩滅しているが、一部そこから離れ、接合関係をもつ土器の出土がみられた。これらは、摩滅しているものの、上述した土器程ではなく、明瞭な調整が認められる。これらの周辺には礫、遺物とも殆ど出土しておらず、遺物の単独性が際立つ。また、胎土も非常に似通っており、同一固体、或いは同様の土でもって製作された土器であることが考えられる。そのため、発掘調査中、その出土状況から遺構の存在を想定したが、明確なプランや掘り込みはなく、加えて土器自体が摩滅していることもあり、遺構としては考えにくいといえる。

土器と遺構の時期　ＳＩ１は、風倒木痕により上部構造の南東部を大きく攪乱されているものの、明確な掘り込みと配石を有していた。プランの平面形は不定形ではあるが円形で、遺構上部にみられる集石の範囲は掘り込みよりも狭小である。埋土は単一層になっており、礫の隙間に土が入り込むかたちで堆積していた。また、配石は人頭大の比較的扁平な礫を用い、掘り込みのプランに沿うかたちで配置されていた。集石の位置や単一の堆積層であること、配石の改変がみられないこと

から、作り変えは行わず、使用後はそのまま廃棄されたものであるといえる。集石、配石ともに石材は尾鈴山溶結凝灰岩で構成されており、近隣において採取しやすい石材に傾倒する。近隣の河川等にみられる転礫には、砂岩やホルンフェルスもみられるが、これらは剥片或いは礫石器素材としての利用傾向が強く、集石には構成地盤等から容易に調達できる石材を選択している。なお、集石遺構に伴う礫は全て尾鈴山溶結凝灰岩であり赤化していた。しかし、遺物や炭化物の確認はできなかったため、帰属時期は層位によっての位置づけとなる。検出はⅢ層上部において上部集石を検出し、掘り込みがⅣ層まで及んでいることから少なくとも縄文早期段階の遺構であると考えられる。

土器はいわゆる田村式土器に比定され、縄文時代早期前葉に位置づけられることから、第３次調査にみられる縄文早期段階の遺物、遺構は当段階に帰属させることにする。

３　弥生時代終末期以降

弥生時代終末期以降の遺構と分布　第３次調査では調査区の南東端付近において竪穴建物跡を１軒確認した（第14図）。竪穴建物跡は第２次調査において７軒確認されていたため、本調査においても検出されることは以前より想定していた。これまで確認された竪穴建物跡は一辺３～４ｍ程度で明確な主柱穴をもたない焼失建物であるのに対し、本調査において確認された竪穴建物跡は長、短軸ともに５ｍを超え、明確な主柱穴を有する。また屋内土坑も確認されており、埋土からはモモの炭化核が検出され、放射性炭素年代測定の結果1770±20年BPという年代値があたえられている。これらの竪穴建物跡は、第２・３次調査の成果をふまえると、遺跡の所在する丘陵尾根の頂部付近に建てられており、傾斜に伴って減少していくことが想定される。

遺物　当該期の遺物は全てＳＡ１より出土しており、台石、磨石のほかに甕、壷、鉢、高坏類があげられる。

甕は、20の様に「く」の字形に緩く屈曲する口縁部に平底の底部がつく形態が主体であり、底部の設置面はやや小さくなりつつある。また、25の１点のみ、外面にタタキ調整を施すものがある。前述したいずれも、周辺遺跡にみられる在地系の胎土により製作されているが、29のみ胎土が異なる。29は内面にケズリがみられないものの、器形や、ハケ調整、内面には非常に丁寧なナデ調整を施し、器壁もやや薄手であることから、いわゆる布留系の土器であることが考えられる。

壷は複合口縁タイプが出土している。28はいわゆる安国寺式系譜の壷だが、1次口縁部と２次口縁部の接合部は突出しておらず、滑らかに内反し短く立ち上がる。31の頸部に刻み目突帯を貼り付けるものもこれに含まれる。

鉢は４点ないし５点確認されている。35・36を除き、いずれも小型で底部から口縁部にむかい緩やかに外反しながら立ち上がる。内、外面に粗雑な工具調整を施している。36は若干口縁部が内湾している。これらの鉢は第２次調査や木戸平第２遺跡でも確認されているが、当該期にみられるような小型丸底壷は確認できなかった。

以上のことをふまえ、第３次調査における竪穴建物跡は、日向市所在板平遺跡の土器編年（松田・今塩屋2011）でいうところのⅠ期ｂ段階～Ⅱ期ａ段階ないしⅡ期ａ段階あたりに位置づけられようか。

【参考・引用参考文献】

宮崎県埋蔵文化財センター2011〔第Ⅶ章総括〕「板平遺跡（第３・４次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集

宮崎県埋蔵文化財センター2011「俵石第１遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集

宮崎県埋蔵文化財センター2012「向原中尾第１・２遺跡向原中尾第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集

宮崎県埋蔵文化財センター2012「木戸平第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第215集

宮崎県埋蔵文化財センター2012「俵石第１遺跡　俵石第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第216集

第Ⅲ章　向原中尾第５遺跡第１地点

第１節　発掘調査の概要と経過

１　遺跡周辺の環境と調査の経過

向原中尾第５遺跡は、平成20～22年年度にかけて調査を行った向原中尾第４遺跡の南東側（第１地点）および西側（第２地点）に位置し、心見川支流の征矢原川を挟む対岸には弥生時代後期の集落跡が確認された長野遺跡が立地している。（第３・26図）

向原中尾第５遺跡第１地点と第２地点の調査区の比高差は約170ｍを測り、北東から南西に延びる尾根上に位置する第１地点（本線部分）と尾根の頂部付近に立地する第２地点（迂回路部分）とでは、遺跡の立地環境や性格が異なっている。また、第２地点については、市道付け替え部分（NEXCO西日本との協議の結果向原中尾第４遺跡の飛び地扱いとした）をＮ区、本線部分をＳ区として調査を行うこととなった。調査は平成24年６月27日～10月５日までの期間で２遺跡を併行して実施した。第１地点については、対象面積1,500㎡に対し、工事用道路敷設の関係などから樹木伐採後、人力掘削によりトレンチ掘削を行い、土層堆積および文化層の残存状況を把握し、調査区の絞り込みを行った。

その結果、対象地北東側を中心に後期旧石器時代から縄文時代早期の包含層の残存が確認されたため、調査範囲を北東側に絞って重機による表土除去を行った。現地形は、東から征矢原川の流れる西側に向かって緩やかな傾斜地である。果樹植栽や倉庫建設のため東側部分が削平され、Ⅱ層（縄文時代早期包含層）の残存状況が一定ではない。

調査に際して基準とした座標は、NEXCO西日本が工事用道路建設の際に設置した杭の座標を利用した。

２　整理作業の経過

向原中尾第５遺跡第１地点および向原中尾第６遺跡は遺物出土量が少なかったことから接合までを同時併行で整理作業を行った。その後、実測まで行った。整理作業期間は平成24年10月から平成25年３月まで宮崎県埋蔵文化財センター本館にて行った。

３　基本層序

基本層序を設定するにあたり、第１地点は同じ尾根上に位置する第６遺跡と共通化を図ることとし、Ａ区北東壁面を利用した。第６遺跡の調査区は山林及びミカン畑であり、それらを造成する際に削られたため、Ａ区とＢ区の大半のトレンチにおいて、表土以下全て尾鈴山溶結凝灰岩を中心とした礫層が堆積していた。

向原中尾第５遺跡第１地点の土層

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：黒褐色土層（Hue5YR2/1）
縄文時代早期遺物包含層
粘性は弱く1mm以下の黄橙色粒をまばらに含む。しまりは弱い。

Ⅲ層：明褐色土（Hue7.5YR5/6 ）
後期旧石器時代遺物包含層
粘性は弱くややしまりが強い。１～２mm程度の黄橙色粒を少量含む。

Ⅳ層：明黄褐色土層（Hue10YR7/6 ）
Ⅲ層よりやや粘性が強く、淡い色調を呈する１～２mm程度の黄橙色粒をまんべんなく含む。

Ⅴ層：褐色土層（Hue7.5YR4/6　基盤層 ）
粘性が強く、しまりも強い。拳大の礫をまんべんなく含む。

第２節　後期旧石器時代の遺構

後期旧石器時代に関しては、調査区北東端で礫群１基が確認された。先述のように、Ⅱ層上部の削平の影響もあり、検出面は表土下、約15cmのⅡ層中部から下部にかけての確認となった。

１　遺構

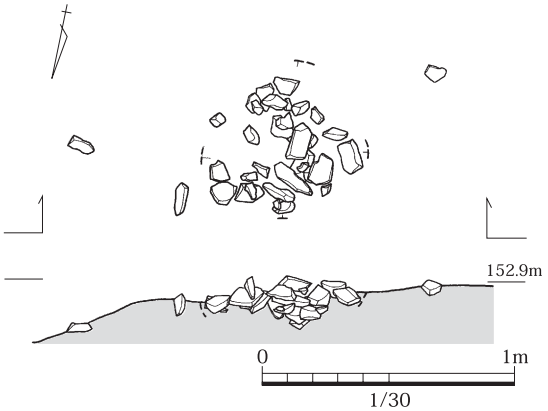
礫群（第21図）

ＳＩ１

第１地点北東端のⅡ層下部で確認された。ＳＩ１はⅡ層中部からその広がりが見られはじめ、Ⅱ層下部からⅢ層の礫を主体とするものであった。

構成礫のすべてが尾鈴山溶結凝灰岩であり、周囲に広がる礫がほとんど赤化していないのに比して、明瞭に赤化が認められた。遺構内から炭化物

の出土は確認されなかった。第２地点の縄文時代早期の集石遺構が円礫主体で構成されているのに対して、第１地点のＳＩ１は扁平な角礫によって構成されているのが特徴である。礫群の周辺にわずかに掘り込みと推定される色調の異なった箇所が認められたものの確定するには至らなかったため、推定線により図示した。当該時期の遺物は確認されなかった。



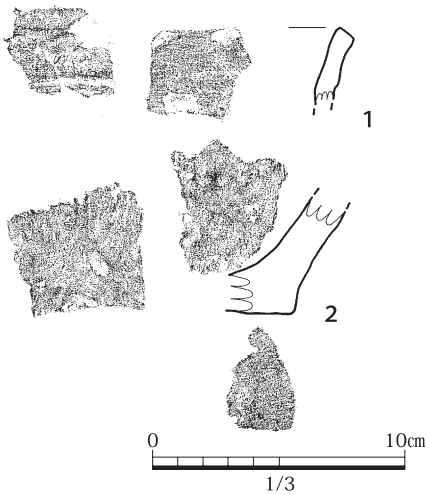
第 21 図　後期旧石器時代礫群実測図

第３節　縄文時代早期の遺物

遺物の出土点数は少ないが、Ⅱ層上部から中部にかけて縄文時代早期の土器、石器が出土している。そのうち、５点を図化した。

１　土器（第22図１）

１は深鉢の口縁である。外面はナデ調整が施され内面には横方向の貝殻条痕文が認められる。口縁端部は平坦面をつくり出している。２の底部は平底であり、やや直線的にひらきながら立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整である。



第 22 図　縄文時代早期出土遺物実測図（１）

２　石器

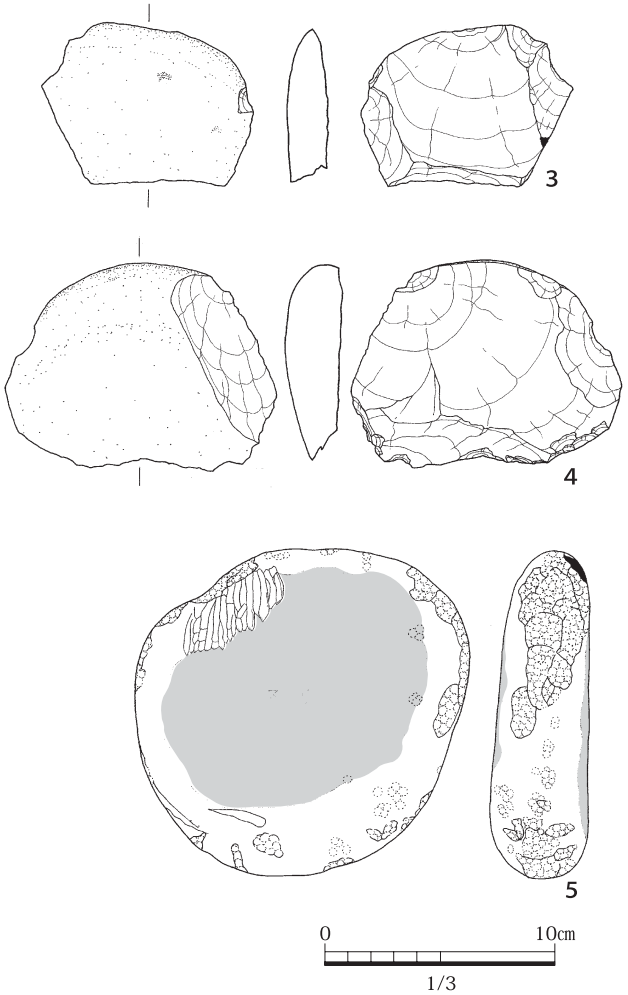
粗製剥片石器（第23　図３・４）

３・４は砂岩製の粗製剥片石器である。共に背面に礫面を残し、腹面は上部からの剥離が認められる。礫面の形状は扁平な円礫状であり蛤形を呈する。

３は、刃部は粗雑な剥離により作り出されている。元来の欠損した刃部を再加工した可能性も考えられる。やや扁平な形状を呈する。４は側縁部にも剥離がみられ、下端には連続した二次加工が認められる。

磨石（第23図５）

５は砂岩製の磨石である。表裏ともに中央部を中心に磨面が残る。両側縁および外周に敲打によると推定されるつぶれ痕が認められることから敲石としての使用も考えられる。また、外周から中央にかけて断面Ｕ字状の研磨痕跡がみられる。



第 23 図　縄文時代早期出土遺物実測図（２）

第 13 表　縄文時代早期土器観察表

挿図番号	調査区	出土層位	器種	部位	文様・調整等		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
1	5－1	Ⅱ	深鉢	口縁	ナデ、横方向のナデ一部スス付着	横方向のナデ	浅黄（2.5Y7/3）	灰黄（2.5Y7/2）	3mm 以下の灰白色粒、2mm 以下の明褐色粒・灰色粒をごくわずかに、1mm 以下の透明光沢粒をわずかに含む	外面の一部にスス付着
2	5－1	Ⅱ	深鉢	底部	横、斜方向のナデ	ナデ、指頭痕	明黄褐（10YR7/6）	浅黄（2.5Y7/4）	4mm 以下の灰白色粒・浅黄橙色粒、3mm 以下の灰色粒・明褐色粒・灰褐色粒、1mm 以下の透明光沢粒をわずかに含む	内面に黒斑あり

第 14 表　縄文時代早期石器計測表

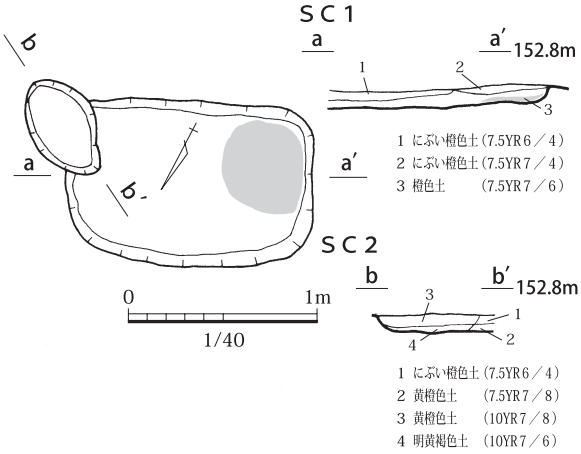
挿図番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm、g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
3	5－1	Ⅱ	粗製剥片石器	砂岩	7.1	9.2	1.8	168.9	
4	5－1	Ⅱ	粗製剥片石器	砂岩	9.1	11.8	2.5	318.7	
5	5－1	Ⅱ	磨石	砂岩	14.3	14.5	4.3	1249.8	

第４節　時期不明の遺構

向原中尾第５遺跡１地点の調査区北東端で、焼土を伴った土坑が２基切り合った状況で確認された（第24図）。

検出は縄文時代早期の包含層であるⅡ層の上面であるが、埋土の一部が表土に近い土質でもあり、遺物の出土も確認されなかったため、ここに記載した。

１号土坑（ＳＣ１）は不整な円形で、規模は長軸約1.3m、短軸約0.9m、深さ約0.1mを測る。１～２mm大の焼土が炭化物を伴って遺構の西側に集中し、１mm以下の焼土粒が極めて薄く全体に広がっている。東側に位置する２号土坑（ＳＣ２）は平面プランが楕円形で長軸約0.6m、短軸約0.4m、深さ約0.1mを測る。断面観察の結果、ＳＣ１の埋没後ＳＣ２が構築されていることが確認された。



第 24 図　土坑実測図

第５節　小結

向原中尾第５遺跡第１地点では、後期旧石器時代に属すると考えられる礫群（ＳＩ１）１基と時期不明の焼土を伴った土坑２基（ＳＣ１・２）が確認された。礫群に関しては連続する丘陵の南西部に位置する向原中尾第６遺跡、焼土を伴った土坑については谷を隔てた長野遺跡との間に関連性を見い出すことができる。

確認された焼土を伴った土坑は、向原中尾第５遺跡第１地点谷を隔てて南西に立地する長野遺跡（第３図）の縄文時代早期焼土面１～７と規模および焼土の入り方等に共通性がみられる。

今回の調査範囲内では、包含層の残存状況から遺構の検出はさほど多くなかったものの、当初工事計画範囲である遺跡北側の南向き斜面地では、トレンチ調査時に縄文土器や敲石等の石器の出土が確認されており、遺跡の広がりが推定される。

第Ⅳ章　向原中尾第５遺跡第２地点

第１節　発掘調査の概要と経過

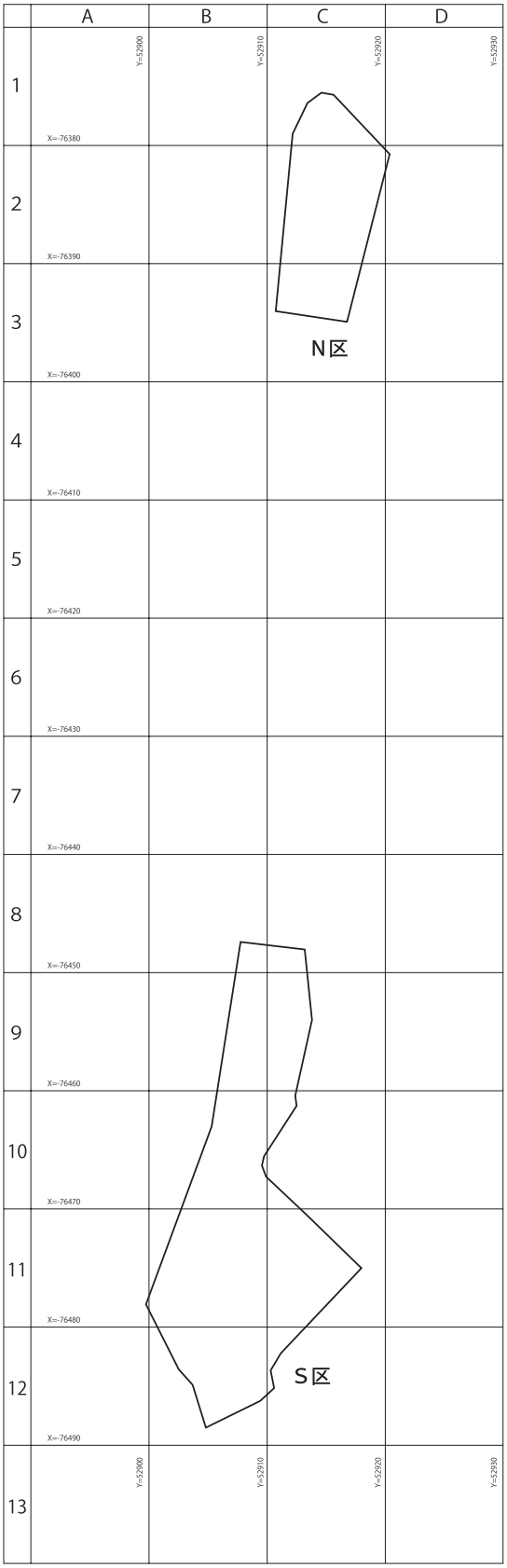
１　調査の経過

向原中尾第５遺跡第２地点の調査は、併行して行った第１地点の調査終了後から継続し実施した。調査区は第１地点の東に位置し標高約170m、第１地点との比高差は約20mを測る。調査対象面積840㎡に対し、先行して掘削したトレンチより、縄文時代早期の集石遺構、下部に焼土の残存が良好な炉穴群が確認されていた。調査区は南北に長く、中央部では遺構および遺物が確認されなかったことから、縄文時代早期の遺物が確認された現市道に接続する調査区北側をN区、集石遺構および炉穴が確認された向原中尾第４遺跡隣接部分をS区と設定し調査を行った。工事用道路建設および土地借用との関係からN区、S区を同時併行して調査を行うこととなった。重機による表土剥ぎはN区より開始し、引き続きS区について行った。表土剥ぎ終了後、N区からS区の中軸線上に南北５m間隔の基準杭を設定し、そこから東西方向に５m×５mのグリッドの設定を行った。その後、先行調査で確認されていた炉穴群保護のため、埋め戻していたS区トレンチ１の再掘削を行い基本層序の確認を行った。

なお、基準とした座標は、東九州自動車道本線建設の際、NEXCO西日本が設置した杭の座標をもとにトラバース測量を行ったものである。

２　整理作業の経過

整理作業は、平成24年11月より第１地点・第２地点をあわせて宮崎県埋蔵文化財センター本館にて実施した。水洗、注記、計測、接合、実測、製図のほか炉穴および竪穴建物跡の埋土のフローテーション作業、回収した種実・遺物等の選別作業も整理作業の一環として行った。石器の計測は法量のほか石材の記録を行うとともに、平成22年度に調査を行った向原中尾第５遺跡第２地点に隣接する向原中尾第４遺跡および、向原中尾第５遺跡第１地点の西側裾部に立地する第６遺跡との石器の接合検討も行った。石材分類は、向原中尾遺跡群内で統一をはかり、分類を行った。



（S＝1/600）

第 25 図　向原中尾第５遺跡第２地点グリッド配置図

第26図　向原中尾第5遺跡第1・第2地点調査区位置図（S＝1/1,000）

3　基本層序

第１地点と第２地点では遺跡の立地状況に相違があるため、堆積状況が大きく異なっている。そのため、基本層序は第１地点とは別に設定した。

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：黒色土層（Hue5YR2/1）

弥生～古墳時代遺物包含層

弱い粘性をもち、しまりが強い。一部S区東壁において下部にわずかにK－Ahの堆積が確認できる箇所がある。

Ⅲ層：黒褐色土層（Hue10YR3/2）

縄文時代早期遺物包含層

弱い粘性を帯び強くしまる。

Ⅳ層：褐色土層（Hue10YR4/4）

後期旧石器時代遺物包含層

わずかに粘性を帯び、やや強くしまる。

１～２mm程度の黄橙色の粒子をまばらに含む。

Ⅴ層：褐色土層（Hue7.5YR4/4）

粘性はなく、砂質。１～２mm程度の白色粒子を含む。姶良Tn火山灰

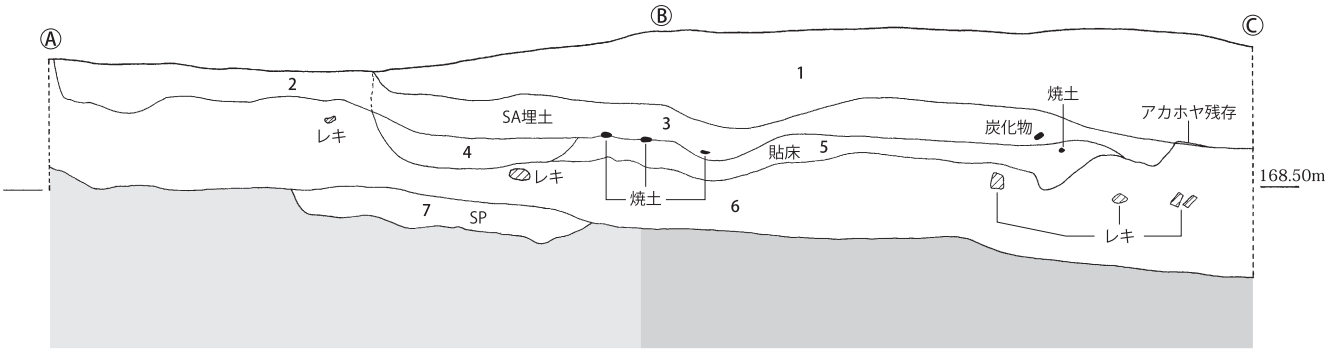
Ⅵ層：明褐色土層（Hue7.5YR5/8）

強い粘性を帯び、強くしまる。２～10ｃｍ程度の礫を多く含む

Ⅶ層：褐色土層（Hue7.5YR4/6）

非常に強い粘性をもち、強くしまる。拳大の礫をまんべんなく含む。基盤層

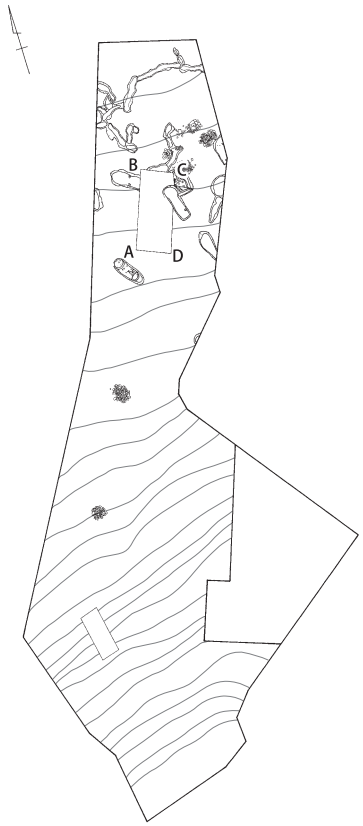
表土下、Ⅱ層の黒色土（Hue5YR2/1）が弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層である。Ⅲ層の黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）が炉穴や集石遺構が確認された縄文時代早期の包含層となる。第Ⅳ層の褐色粘質土（Hue10YR4/4）より、後期旧石器時代の遺物が出土している。Ⅴ層に姶良Ｔｎ火山灰が確認されたことから、第２地点北側で縄文時代早期の調査終了後、トレンチを設定し調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

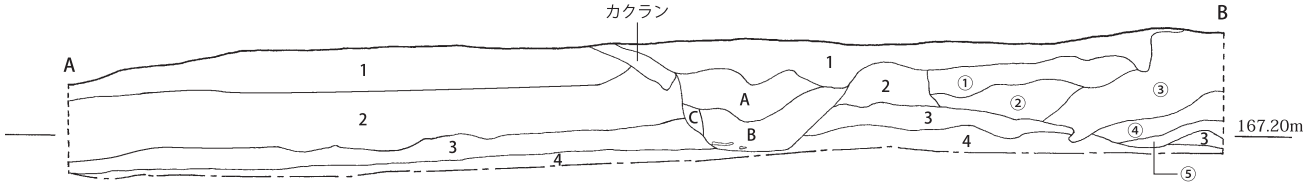


1　表土
2　黒色土　7.5YR1.7/1　弱い粘性を帯び、しまりが強い。
3　黒色土　7.5YR2/1　粘性が弱く、しまりが強い。3～5cm大の炭化物塊を含む（SA2の埋土）
4　黒色土　5YR2/1　粘性が弱く、しまりが弱い。焼土を多く含む（SA2の埋土）
5　黒色土　5YR2/1　粘性がほとんどなく、しまりは弱い。1cm大のアカホヤ火山灰粒や焼土を含む（SA2の貼床）
6　黒褐色土　10YR3/2　弱い粘性を帯び、しまりが強い。（基本土層Ⅲ層）
7　褐色土　10YR4/6　粘性が弱く、しまりが弱い。焼土粒を含む（炉穴か）

0　1m
1/30

第 27 図　S 区 C11 グリッド東壁土層断面図

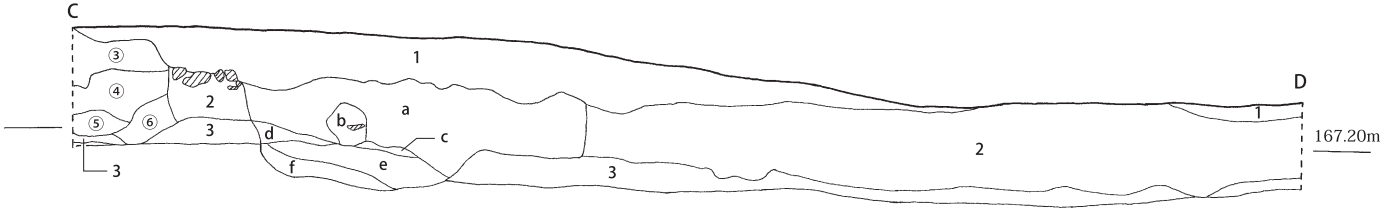




1　表土
2　黒褐色土　10YR3/2　弱い粘性を帯び強くしまる。（基本土層Ⅲ）
3　褐色土　10YR4/4　わずかに粘性を帯び、やや強くしまる。（基本土層Ⅳ）
4　褐色土　7.5YR4/6　非常に強い粘性を帯び、強くしまる。
　　２～10cm程度の礫を多く含む。（基本土層Ⅶ）

A　黒褐色土　10YR3/2　粘性は弱く、しまり強い。1～3mm程度の焼土粒・炭化物粒を少量含む。
B　褐色土　10YR4/4　粘性は弱く、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒・3～5cm大の炭化物粒を多量に含む。
C　にぶい褐色土　7.5YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒を多量に含む。

①　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。
②　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。①より色調が淡い。
③　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒・炭化物粒を多量に含む。
④　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒・炭化物粒を少量含む。
⑤　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。④より色調が明るく1mm程度の焼土粒・炭化物粒をまんべんなく含む。
⑥　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。3層のブロックを含む。



a　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。
b　褐色土　7.5YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。
c　黒褐色土　10YR3/2　粘性はなく、しまりがない。礫を含む。1mm程度の焼土粒をわずかに含む。樹根による攪乱か
d　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。3層のブロックを含む。
e　黒褐色土　10YR3/2　粘性はなく、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒・炭化物粒を多量に含む。
f　褐色土　10YR4/6　粘性が強く、しまりが強い。1～3mm程度の焼土粒を多量に含む。3層のブロックを含む。

0　1m
1/30

第 28 図　S 区トレンチ 1 土層断面図

第２節　後期旧石器時代の遺物

後期旧石器時代の遺構は、向原中尾第５遺跡第１地点で礫群が１基確認されたものの、第２地点では遺物のみの出土で、該期の遺構は検出されなかった。

１　石器（第29図・第15表）

後期旧石器時代の石器は全て第２地点S区で出土がみられた。S区の旧地形は南に向けた斜面地であり（第31図）、当該時期の石器が出土した地点は特に、Ⅲ層（縄文時代早期遺物包含層）とⅣ層の境界が不明瞭な部分にあたるため、厳密には旧石器とは判じがたい遺物もあるが、形態的特徴や調整剥離などから抽出したものもここに掲載している。石器は27点出土し、そのうち17点を図化した。確認された器種はナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、台形石器、などのほか剥片、石核、接合資料がある。

ナイフ形石器（第29図６．７）

ナイフ形石器は２点出土し、全て図化した。

６は珪質頁岩製のナイフ形石器である。やや幅広の剥片を素材とし主要剥離面の左側縁および基部に二次加工が施されている。刃部に微細剥離が認められる。７はホルンフェルス製の縦長剥片を素材として利用したナイフ形石器である。刃部および右側縁は折損している。

剥片尖頭器（第29図８）

剥片尖頭器は１点出土している。８は木葉形を呈する剥片尖頭器で、石材はホルンフェルス製である。幅広の縦長剥片を利用している。風化が著しいが基部は両側縁の背面よりやや丸みをもたせるように調整されている。

角錐状石器（第29図９）

９はチャート製の角錐状石器である。素材の側縁部から連続した調整剥離を用いて先端部が形成されている。基部は欠損している。

台形様石器（第29図10）

10は頁岩製の台形様石器である。ほぼ平行する両側縁に粗雑な調整剥離が認められる。

剥片（第29図11～18）

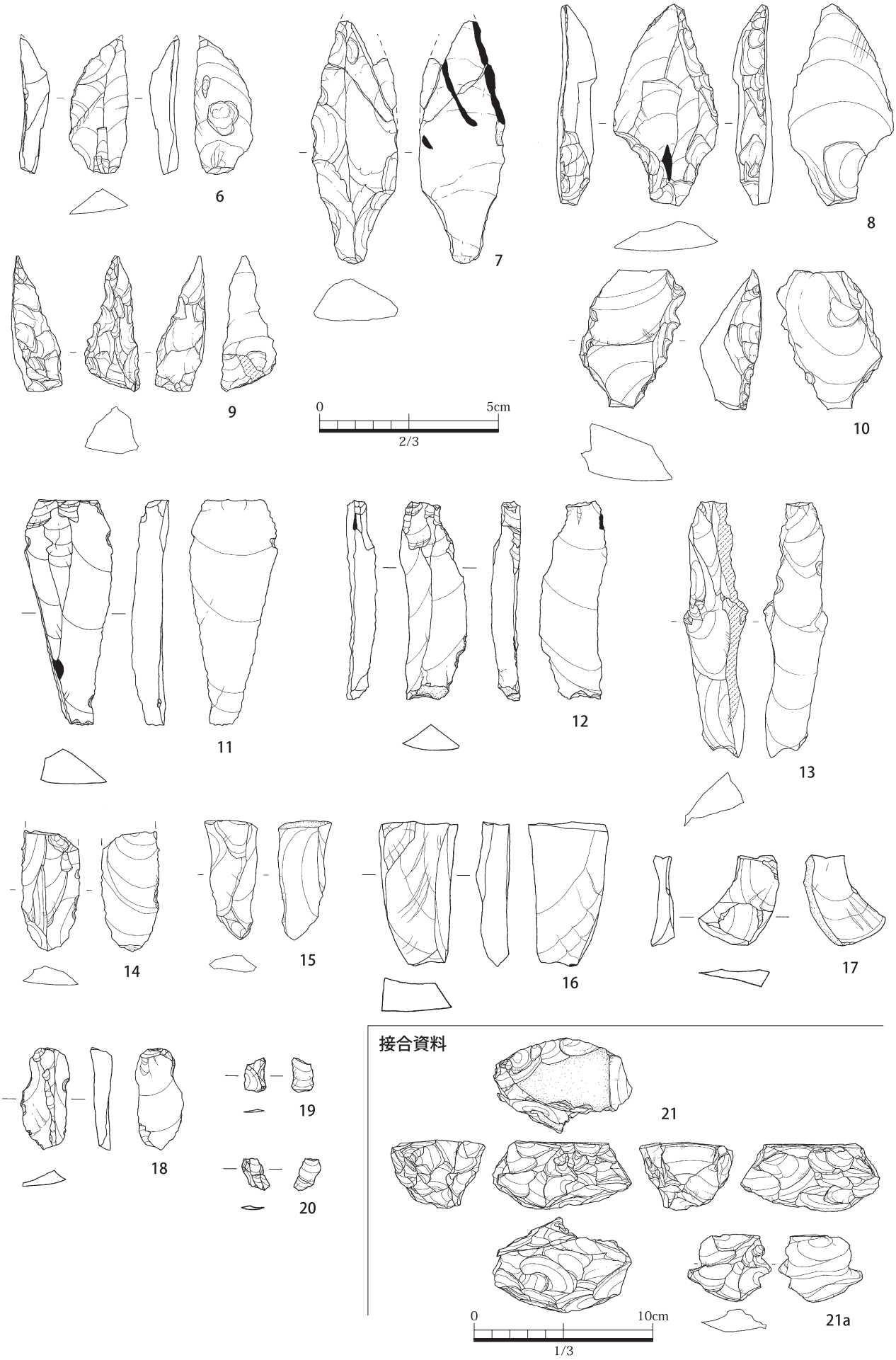
剥片は19点出土し、そのうち８点を図化した。11・12は腹面に平坦な打面とバルブを残す縦長剥片である。ともに石材は流紋岩である。13は頁岩製の石刃である。両側縁に微細剥離痕が認められる。14は頁岩製の縦長剥片である。腹面下縁に微細剥離痕が認められる。15はホルンフェルス製で頭部に自然面を残す両側縁に微細剥離痕がある。16は流紋岩製。17は頁岩製の不定形剥片である。18は頁岩製の剥片である。腹面に平坦な打面とバルブを残す。19・20はチャート製である。

接合資料（第29図21）

21は頁岩製の接合資料で、向原中尾第５遺跡内では唯一の出土である。母岩の側面調整剥片21aが接合したものである。

第 15 表　後期旧石器時代石器計測表

挿図番号	調査区	出土層位	器　種	石　材	法量(cm、g)				備　　考
					最大値	最大幅	最大厚	重　量	
6	5−2S	Ⅲ～Ⅳ	ナイフ形石器	頁岩	3.8	1.6	0.6	3.6	裏面中央付近に被熱剥離によるハゼ、若干の被熱による赤化が認められる
7	5−2S	Ⅲ	ナイフ形石器	ホルンフェルス	6.8	2.4	1.2	19.9	全体の風化が著しく稜線も磨滅している
8	5−2S	Ⅲ	剥片尖頭器	ホルンフェルス	5.6	3.0	1.0	13.0	
9	5−2S	Ⅳ上	角錐状石器	チャート	3.8	1.5	1.3	5.8	
10	5−2S	Ⅳ	台形様石器	頁岩	3.9	2.6	1.3	13.9	
11	5−2S	Ⅲ	剥片	流紋岩	6.4	2.5	1.0	13.4	
12	5−2S	Ⅲ	剥片	流紋岩	5.6	1.9	0.7	6.7	
13	5−2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	7.2	1.8	1.2	13.1	
14	5−2S	Ⅲ	剥片	頁岩	3.4	1.6	0.5	3.9	
15	5−2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.3	1.4	0.8	29.0	
16	5−2S	Ⅲ	剥片	流紋岩	4.1	2.2	9.5	11.2	
17	5−2S	Ⅲ	剥片	頁岩	2.6	2.3	0.5	2.2	
18	5−2S	Ⅳ上	剥片	頁岩	2.9	1.4	0.5	1.7	
19	5−2S	Ⅳ	細片	チャート	1.0	0.7	0.1	0.1	
20	5−2S	Ⅲ	細片	チャート	0.9	0.8	0.1	0.1	
21	5−2S	Ⅲ	接合資料	ホルンフェルス	3.8	7.8	5.35 (3.45)	162.0 (145.6)	21aと接合、(　)内の数値は21aを剥離したもの
21a	5−2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.8	4.6	1.3	16.4	21と接合



第 29 図　後期旧石器時代石器実測図

第３節　縄文時代の遺構と遺物

１　遺構（第30～37図・第16表）

縄文時代早期では、Ｎ区、Ｓ区あわせて、集石遺構13基、炉穴33基が確認されている。検出層位はⅢ層上位からⅢ層の下位にかけてである。Ｎ区ではＣ－２グリッドを中心に集石遺構６基が分布している。

Ｓ区では事前調査の段階でトレンチ壁面に焼土が良好に残存する炉穴のほか、上部に集石遺構の構成礫と考えられる礫が検出されていた。表土剥ぎ後、炉穴の埋土状況と土層の堆積状況を確認するためトレンチの再掘削と壁面精査を行った結果、断面に４基の炉穴と１基の集石遺構が確認された。最終的にＳ区では集石遺構６基、炉穴33基の検出をみた。

炉穴（ＳＰ）（第31～34図）

炉穴は33基確認されている。すべてＳ区に位置し、調査区の最高所（標高169m）付近のＢ９・Ｃ９グリッドに分布している。

そのうち、単独に存在するもの、切り合ってアメーバー状の平面形となるものとに大別される。

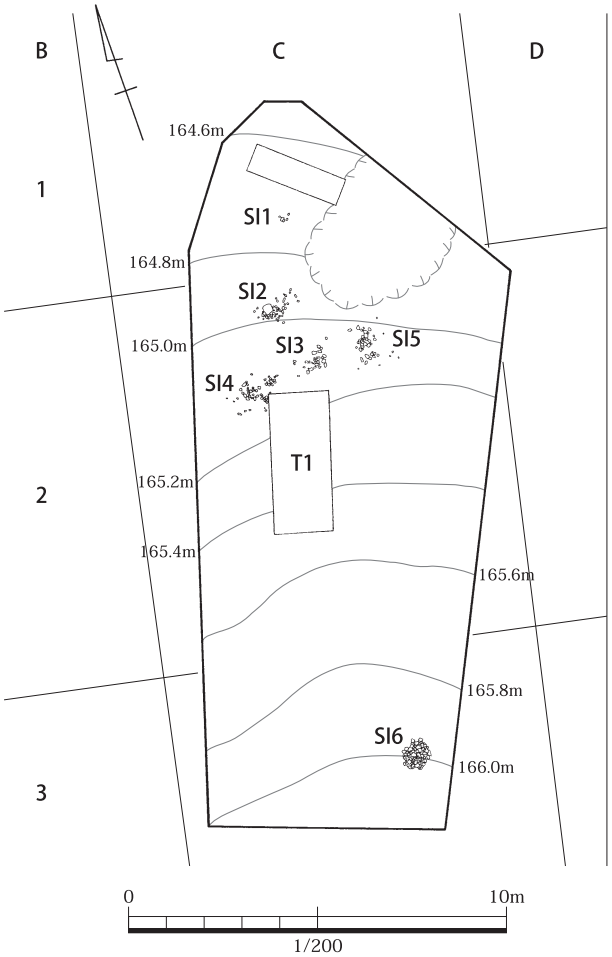
単独のものは検出面からの深さが深く、埋土が固くしまる傾向にある。また、炉部と考えられる位置に焼土や炭化物が良好に残存していることが確認された。そのうち３基の炉穴（ＳＰ５・８・32）について炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を行った（第５節参照）。

Ｓ区北端の炉穴とＢ９～Ｃ９グリッド周辺の炉穴では形態及び規模の点で相違が認められる。

炉穴の検出にあたっては、地山と埋土の色調の差の判別が困難な箇所も多く、数箇所に範囲確認のためのサブトレンチを設定したが、時間的な制約などから、Ⅳ層の上面まで掘り下げて検出しているものもある。そのため、床面だけの検出となった炉穴や切り合い関係が不明瞭なものもある。

切り合い関係が確認できたものについては、矢印で先後関係を示した。切り合いは、埋土の色調や焼土粒の入り方、密度の違いをもとに現地で判断した。

Ｓ区北端では焼土粒がⅢ層上面に散在した状態で遺構の輪郭が不明瞭なため、焼土部分を断ち割るかたちで掘削し精査を行った。検出面からの深さも浅く、切り合い関係は断面および底面のレベル差で確認されたものもある。平面形態は細長く、焼土粒が埋土に混じる程度であり、明瞭な炭化物も認められなかった。一方、Ｂ９～Ｃ９グリッド周辺では等高線に対し直交ぎみの炉穴の分布がみられ、大半は単独で存在している。炉穴に関して、基本的に検出順に番号を付しているが、埋土状況による切り合い関係ではなく、焼土の有無や底面のレベル差による認定もみられるため、掲載していない炉穴もある。そのため、切り合い関係が断面で把握できた炉穴と単独で確認された４基について図示した。なお、自然科学分析の成果と整合性を保つため、調査時の遺構番号をそのまま使用している。



第 30 図　N 区縄文時代早期遺構分布図

ＳＰ５（第31･32･34図）

ＳＰ５はＢ９グリッドに位置している。検出面はⅢ層下位である。先行トレンチ掘削の際、焼土面が削平されている。主軸は東西方向で、現存長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さ約0.25mを測る。平面形は不整形な楕円形である。内側にくびれる箇所がわずかに認められブリッジ位置であった可能性も考えられる。

埋土は固くしまり、焼土とともに15cm程の炭化物が出土している。放射性炭素年代測定値は9,210±30年BP、樹種はクリと同定されている。埋土中からⅨ類の記述の縄文土器（59）の出土がみられた。

ＳＰ８（第31･32･34図）

ＳＰ８はＢ９～Ｃ９グリッドに位置する。等高線にほぼ直交し、南北方向に主軸をもつ。トレンチをはさんでＳＰ５の東にあり、掘り込みの西側を削平されている。平面は隅丸長方形を呈し、長軸約2.0m、短軸約0.7m、深さ約0.3mを測る。北側に焼土面がみられ、東側のＳＰ18と切り合う。検出面はⅢ層中部である。埋土中より貝殻条痕文土器（33）とチャート製でⅡ類の石鏃（88）が出土している。出土した炭化材の放射性炭素年代測定値は9,180±40年BP、樹種はクリである。

ＳＰ21（第31･32･34図）

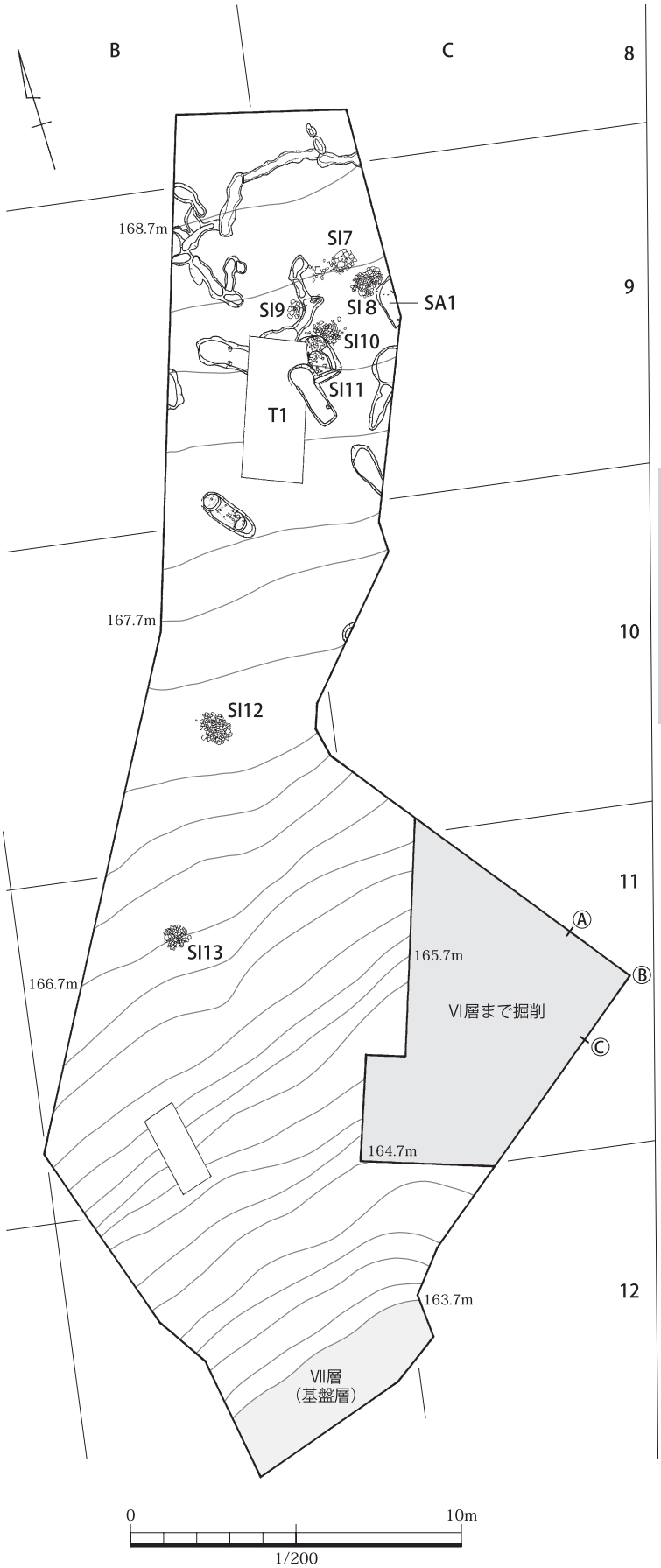
Ｂ10グリッド、調査区内でもっとも南に位置し、単独の炉穴である。ゆるやかな等高線に平行している。平面形は長楕円で、長軸約2.0m、短軸約0.7m、深さ約0.3mを測る。東側、西側の２箇所に、周囲より一段低いテラス状の平坦面があり焼土面が確認された。中央部の床面付近には炭化物粒とともに扁平な礫が確認された。検出面はⅢ層中部である。

ＳＰ24（第31～33図）

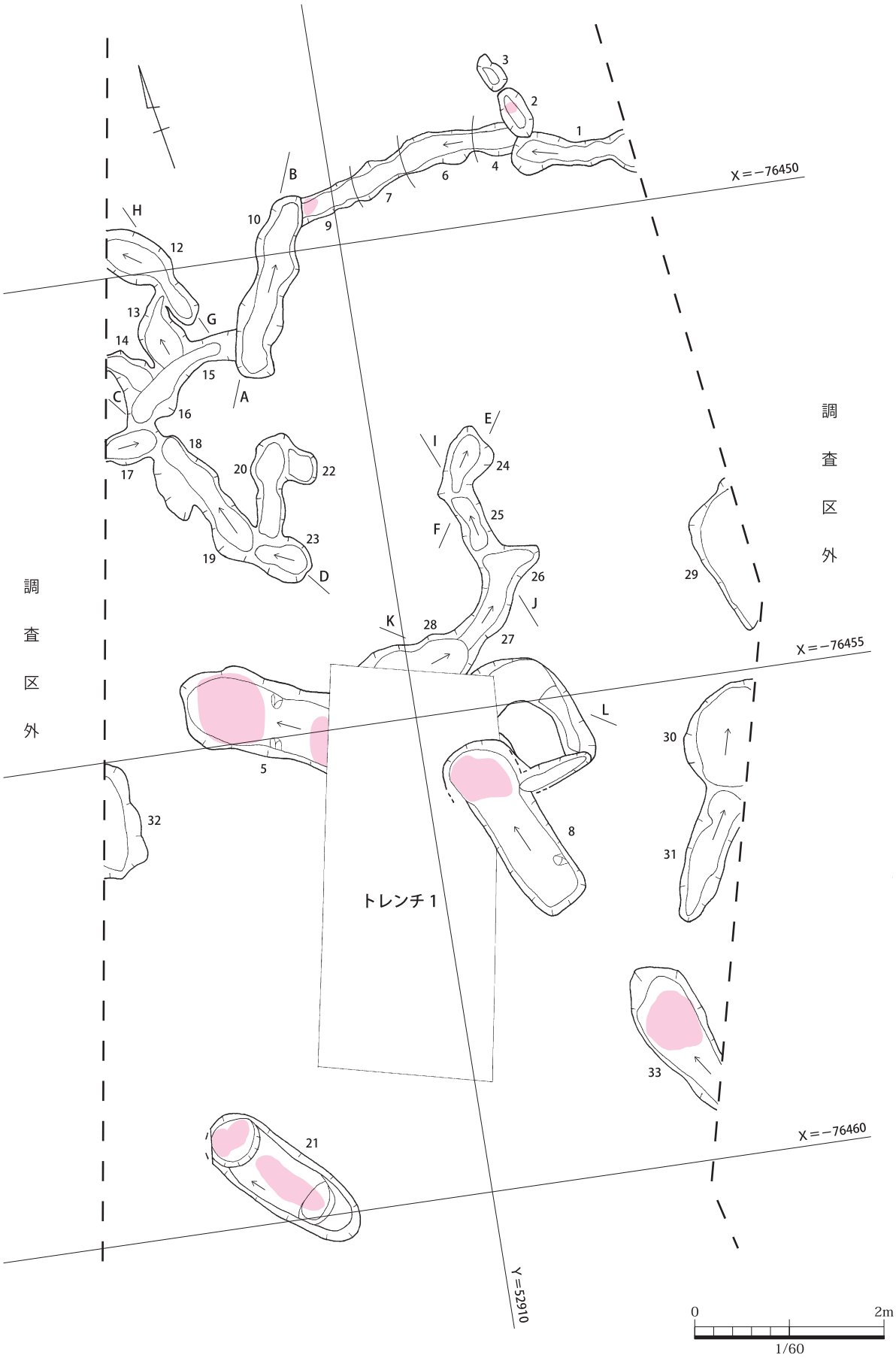
ＳＰ24はＢ10グリッドに位置し、東は調査区外へ延びている。東端の土層確認のサブトレンチを掘削中に検出された。主軸は等高線に平行し、東西方向である。現存長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。Ⅲ層中部からⅢ層下部にかけて検出された。

ＳＰ32（第31～33図）

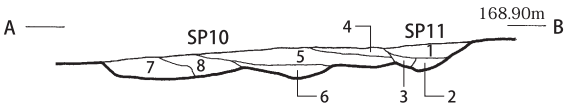
ＳＰ８の東側、Ｃ９グリッドに位置する。ＳＰ27を利用して南側に構築されている。埋土中から出土した炭化材について放射性炭素年代測定および樹種同定を行った。放射性炭素年代測定値は、測定年代：8,050±20BPで、炭化材の樹種はコナラ節である。



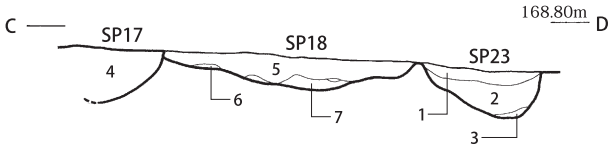
第 31 図　S 区縄文時代早期・弥生～古墳時代遺構分布図



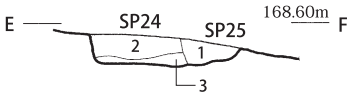
第 32 図　S 区縄文時代早期炉穴分布図



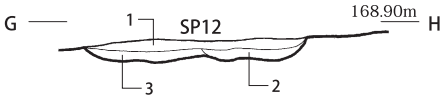
1　暗褐色土　10YR3/3　粘性があり、しまっている。
2　暗褐色土　10YR3/4　粘性は弱く、しまりがない。1mm程度の焼土粒をわずかに含む。
3　黒褐色土　10YR2/3　粘性は弱く、しまりがない。1～5mm程度の焼土粒を少量含む。
4　黒褐色土　7.5YR2/3　粘性はなく、しまっている。1mm程度の焼土粒をわずかに含む。
5　暗褐色土　10YR3/3　粘性があり、しまっている。1mm程度の焼土粒・炭化物粒をわずかに含む。
6　暗褐色土　10YR3/4　粘性があり、しまっている。2～3mm程度の焼土粒・1mm程度の炭化物粒を多量に含む。
7　暗褐色土　10YR3/3　粘性があり、しまっている。1～3mm程度の焼土粒を少量含む。
8　暗褐色土　10YR3/4　粘性があり、しまっている。1mm程度の焼土粒をわずかに含む。



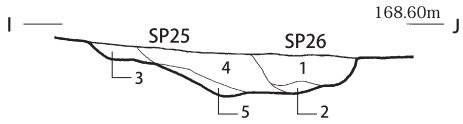
1　褐灰色土　5YR5/1　粘性があり、しまっている。
2　褐灰色土　7.5YR5/1　粘性は弱く、しまりがない。黄色、黒色、褐色ブロックをまんべんなく含む。
3　にぶい赤褐色土　2.5YR5/4　粘性は弱く、しまりがない。下面に赤化がみられる。
4　赤黒色土　2.5YR2/1　粘性は弱く、しまりは強い。1～3cmの焼土粒を含む。
5　褐灰色土　5YR4/1　粘性は弱い。1～2mm程度の焼土を含む。
6　にぶい赤褐色土　2.5YR4/3　わずかに粘性を帯びる。3cm程度の焼土と1mm程度の炭化物粒を含む。
7　明赤褐色土　5YR5/6　粘性は弱く、しまりはない。



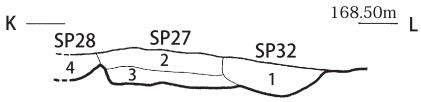
1　黒褐色土　10YR2/3　粘性は弱く、しまりがない。1cm程度の褐色（10YR4/4）ブロックを含む
2　黒褐色土　10YR2/3　粘性は弱く、しまりがない。1mm程度の白色粒を含み、焼土粒をわずかに含む。
3　暗褐色土　10YR3/3　粘性を帯び、しまりが強い。1cm程度のATブロックを含む。



1　黒褐色土　5YR3/1　粘性を帯び、しまりが強い。1mm程度の焼土粒、炭化物粒を含む。
2　褐灰色土　5YR4/1　粘性を帯び、しまりが強い。黄色・橙色ブロックを含む。
3　にぶい橙色土　5YR6/4　粘性を帯び、しまりが強い。黄色・暗褐色・黒色ブロック、少量の炭化物を含む。



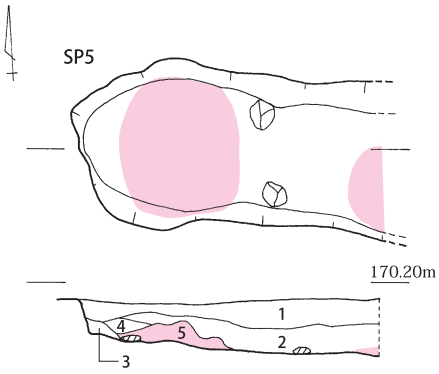
1　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2　褐色土　10YR4/6　1層より粘性は弱い。焼土粒・炭化物粒を含む。
3　黒褐色土　10YR2/3　粘性は弱く、しまりがない。褐色ブロックを含む。
4　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性は弱く、しまりはない。黒色・褐色ブロックをまばらに含み、焼土粒を含む。
5　褐色土　7.5YR4/4　粘性は弱い。1～2mm程度の焼土を多量に含む。



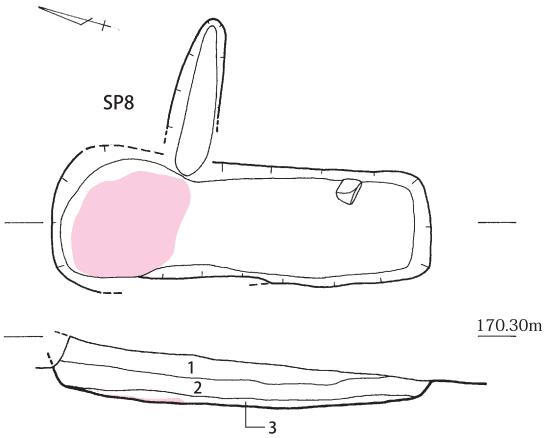
1　黒褐色土　10YR3/2　粘性は弱く、しまりがない。0.5～3cm大の炭化物を含む。
2　黒褐色土　10YR2/3　粘性は弱く、しまりがない。
3　黒褐色土　7.5YR2/2　粘性は弱く、しまりがない。褐色ブロックをわずかに含む。
4　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。焼土粒・炭化物粒を少量含む。

0　1m
1/40

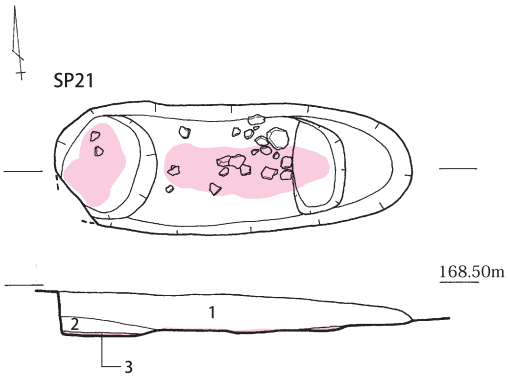
第 32 図　S 区縄文時代早期炉穴土層断面図



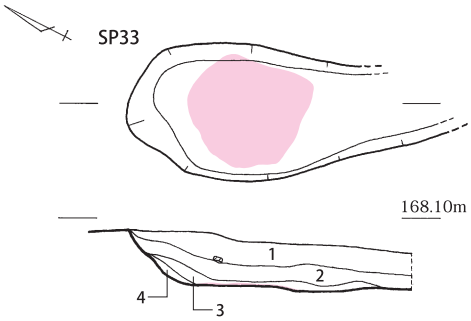
1　黒褐色土　10YR3/2　粘性を帯び、しまりが強い。
2　褐色土　7.5YR4/4　粘性は弱く、しまりは強い。1～3mm程度の焼土粒を少量含む。
3　にぶい赤褐色土　5YR5/4　粘性を帯び、しまりは強い。1～3mm程度の焼土粒をわずかに含む。
4　暗赤褐色土　5YR3/4　粘性を帯び、しまりが強い。
5　にぶい赤褐色土　5YR4/4　粘性を帯び、しまりが強い。赤化した焼土（5YR5/4）を多量に含む。



1　褐色土　10YR4/6　粘性は弱く、しまりがない。
2　黒褐色土　10YR3/2　粘性は弱く、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒・1cm程度の炭化物を多量に含む。
3　黒褐色土　10YR3/2　粘性を帯び、しまりが強い。1～3mm程度の焼土粒・炭化物粒をまんべんなく含む。



1　褐色土　7.5YR4/4　粘性は弱く、しまりがない。
2　黒褐色土　10YR3/2　粘性は弱く、しまりがない。1mm程度の焼土粒をわずかに含む。
3　黒褐色土　10YR3/2　粘性は弱く、しまりがない。1～3mm程度の焼土粒を少量含む。



1　赤灰色土　2.5YR4/1　粘性を帯び、しまりが強い。1mm程度の焼土粒・1mm～1cm程度の炭化物粒を含む。
2　褐灰色土　5YR4/1　粘性は弱く、しまりが強い。3cm程度の黄色ブロック、1mm程度の焼土粒・炭化物粒を少量含む。
3　橙色土　2.5YR6/8　粘性を帯び、しまりが強い。1mm程度の焼土粒を多量に含む。
4　にぶい橙色土　5YR6/4　粘性は弱く、しまりがない。

0　1m
1/40

第 33 図　S 区縄文時代早期炉穴実測図

集石遺構（ＳＩ）（第30･31･35～37図）

第２地点のＮ区・Ｓ区あわせ13基が検出された。

集石遺構の上部には散礫が分布しており、その散礫を点上げした後、礫のまとまりが認められたものを集石遺構とした。検出層位はⅢ層上部からⅢ層中部である。集石遺構を構成する礫のほとんどは尾鈴山溶結凝灰岩である。

Ｎ区に位置する集石遺構（ＳＩ１～ＳＩ６）は被熱のためか、ほとんどの構成礫に赤化が認められる。また、ＳＩ１～ＳＩ５は近接して構築され、礫も粗な分布を示し、小さく破砕した礫や配石と考えられる大型の石が混じる。調査区内でＳＩ６は他の５基より標高の高い地点に単独で存在する。拳大で大きさの整った円礫により構成され、上下の礫間の重なりが密であった。配石の上面に炭化物片が多数確認された。

Ｓ区では、ＳＩ10・11は炉穴との切り合いがみられ炉穴が埋没後、その上部で構築されたことが確認された。Ｓ区の集石遺構は傾斜が急な地点に位置するＳＩ13を除き、その大半は炉穴の分布域と重なり傾斜の緩やかな南向き平坦面に構築されている。また、炉穴の分布域から南に離れたＳＩ12・13に２基のみ明確な配石を有している。

ＳＩ８の広がりを確認中、東側に構成礫が不自然になくなっている箇所が認められたため、調査区を東側境界付近まで拡張し精査を行ったところ、弥生時代から古墳時代にかけての１号竪穴建物跡（ＳＡ１）に切られている。

集石遺構は掘り込みの有無により大別され、礫の密集度、状態により以下のように４分類した。（詳細は第16表のとおり）

Ⅰ類の集石遺構はすべてN区に分布し、Ⅱ～Ⅳ類はＳ区にて検出されている。Ｓ区で確認されたⅡ類・Ⅲ類の集石遺構は炉穴の分布域と重なりが認められる。

Ⅰ類（ＳＩ１～５）（第35図）

掘り込みをもたず、構成礫が散在するもの。

Ⅰ類に属するのはＳＩ１からＳＩ５の５基で、そのすべてはＮ区に分布している特にＳＩ１・３は礫の範囲が小さく、密度も低い。小円礫で構成されている。ＳＩ１からは砂岩製の粗製剥片石器（130）が出土している。ＳＩ２は構成礫に配石の一部と考えられる大型の尾鈴山溶結凝灰岩が含まれる。使用後の廃棄と考えられる。ＳＩ４はやや礫の分布範囲が広く、小円礫のほか破砕礫を含んでいる。いずれの集石遺構の構成礫も被熱のためか赤化している。

Ⅱ類（ＳＩ８）（第35図）

掘り込みをもたず、礫が密集するもの。

ＳＩ８が該当する。構成礫は尾鈴山溶結凝灰岩である。構成礫の大半には赤化が認められなかった。１号竪穴建物跡（第51図）に東側を切られている。

現存長軸約1.1ｍ、短軸約0.8ｍを測る。構成礫の中からホルンフェルス製のスクレイパー（89）と、砂岩製粗製剥片石器（121）が出土している。炭化物の出土はみられなかった。

Ⅲ類（ＳＩ７・９・11）（第36図）

掘り込みを有し、礫の密度が低いもの。

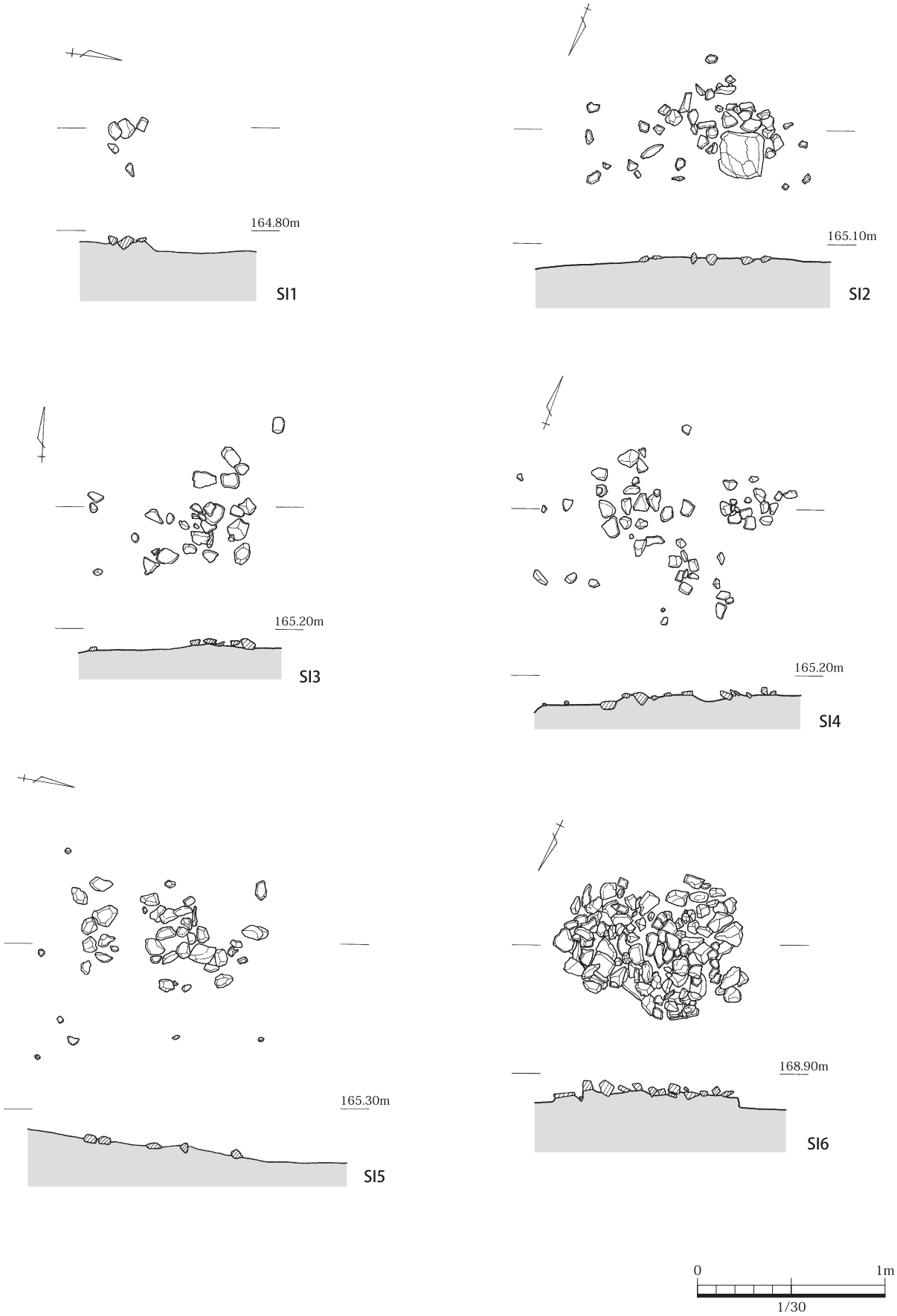
ＳＩ７・９･11が該当する。ＳＩ７は大型で扁平な角礫（配石）によって構成される。バラの花弁状に広がる平面形を呈し外側の配石が立石する。埋土中から尾鈴山溶結凝灰岩製の磨石（183）が出土している。

ＳＩ11はトレンチ１を掘削する際、確認されていたものである。ＳＰ27の埋没後に構築されている。

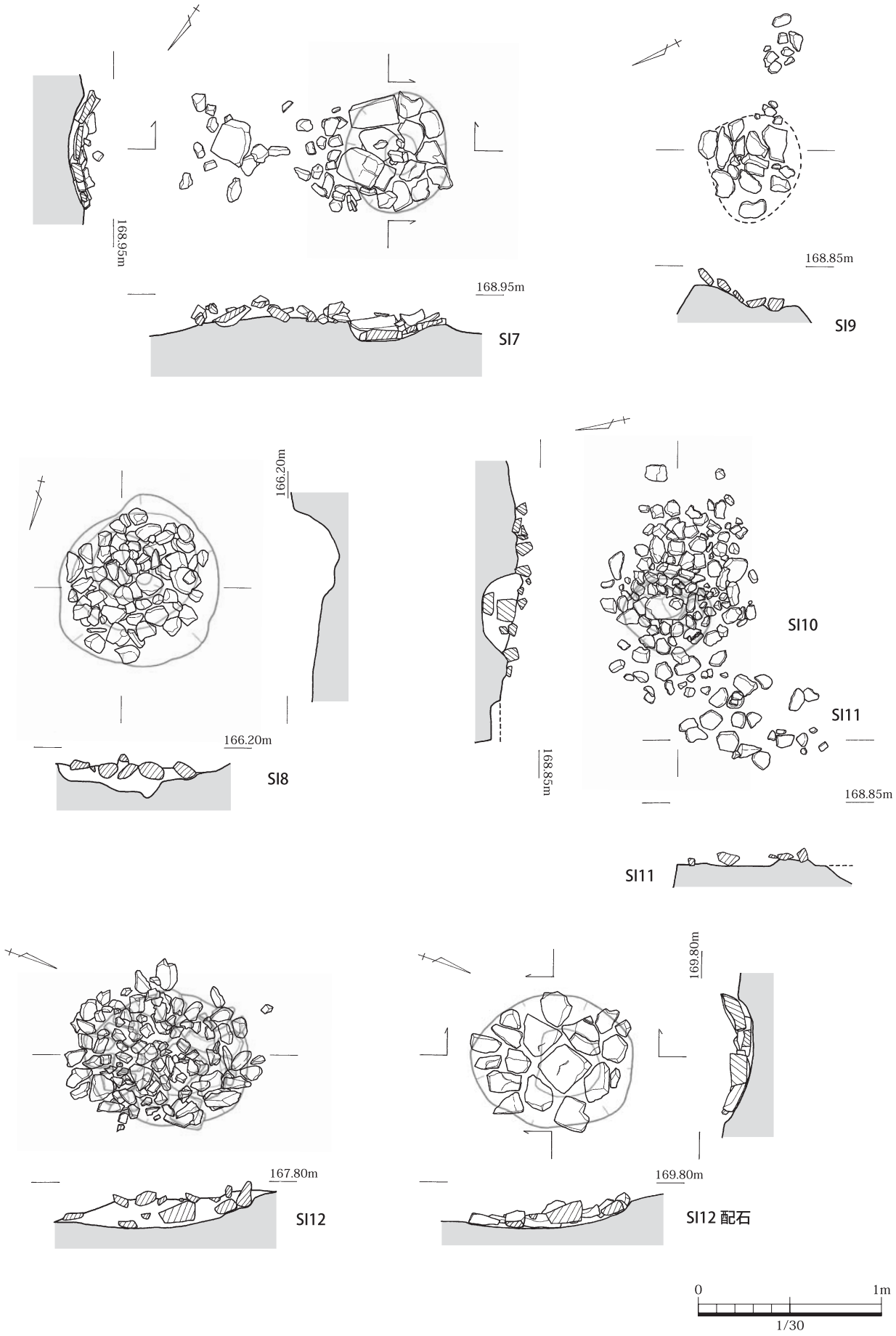
Ⅳ類（ＳＩ６･10・12・13）（第36･37図）

掘り込みを有し、礫の密度が高いもの。

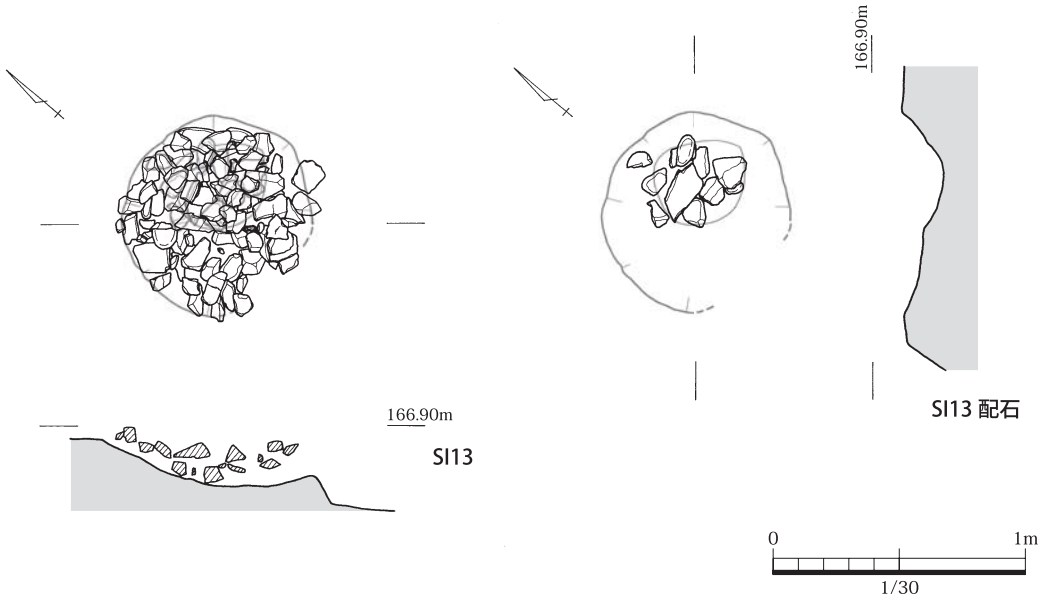
Ⅳ類にあたるのはＳＩ６・11・12・13の４基である。ＳＩ６のみがＮ区で検出され、配石上面で確認された炭化物の放射性炭素年代測定および樹種同定を行った。測定年代は9,480±40年BP、炭化材の樹種はクリである。ＳＩ12・13は炉穴の分布からやや離れた地点にあり、周辺には当該時期の他の遺構は確認されなかった。２基ともに、埋土中から少量の炭化物が確認された。ＳＩ12は等高線に平行する側の掘込みに沿うかたちで東西方向にしっかりと配石が敷設されている。



第 35 図　縄文時代早期集石遺構実測図（1）



第 36 図　縄文時代早期集石遺構実測図（2）



第 37 図　縄文時代早期集石遺構実測図（３）

第 16 表　縄文時代早期集石遺構計測表

遺構名	検出位置	礫範囲(m)		掘り込み(m)			配石	堀込	形状	分類	備　　考
		長軸	短軸	長軸	短軸	深さ					
ＳＩ1	Ｎ区	0.30	0.25	－	－	－	－	×	－	Ⅰ	構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩の焼礫
ＳＩ2	Ｎ区	1.57	1.00	－	－	－	－	×	－	Ⅰ	構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩の焼礫
ＳＩ3	Ｎ区	1.10	0.70	－	－	－	－	×	－	Ⅰ	構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩の焼礫
ＳＩ4	Ｎ区	1.40	1.30	－	－	－	－	×	－	Ⅰ	構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩の焼礫
ＳＩ5	Ｎ区	1.70	1.00	－	－	－	－	×	－	Ⅰ	構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩の焼礫
ＳＩ6	Ｎ区	0.95	0.90	0.94	0.85	0.2	○	○	Ⅲ形	Ⅳ	放射性炭素年代測定：1,820±20年BP 炭化材の樹種：クリ
ＳＩ7	Ｓ区	0.70	0.58	0.65	0.54	0.14	○	○	Ｕ字	Ⅲ	
ＳＩ8	Ｓ区	1.10	0.80＋α	－	－	－	－	×	－	Ⅱ	ＳＡ１に切られる
ＳＩ9	Ｓ区	0.65	0.56	0.59	0.51	0.2	－	○	Ⅲ形	Ⅲ	
ＳＩ10	Ｓ区	0.50	0.40	0.48	0.43	0.2	○	○	Ｕ字	Ⅳ	ＳＰ27を切る
ＳＩ11	Ｓ区	0.40＋α	0.40＋α	－	－	－	－	×	Ⅲ形	Ⅰ	ＳＩ10と切り合う ＳＰ27を切る トレンチで削平
ＳＩ12	Ｓ区	0.90	0.72	0.88	0.72	0.19	○	○	Ⅲ形	Ⅳ	
ＳＩ13	Ｓ区	0.80	0.77	0.8	0.75	0.28	○	○	Ⅲ形	Ⅳ	

2　遺物

土器（第38～40図22～75）

縄文土器はⅢ層からⅣ層上部にかけて出土しており、Ⅲ層が中心となっている。集石遺構が６基検出されたN区での出土はごく少量であり、大半は第２地点Ｓ区の南向き緩斜面より出土している。

Ⅲ層の残存がよい箇所では上層および下層でも縄文土器の出土が認められ、縄文時代早期前葉から早期後葉までの時期が確認された。

向原中尾第４遺跡に続く調査区南端、Ｂ11・12・Ｃ11グリッドでは旧地形の強い傾斜と攪乱のため、土層堆積状況はあまり良好ではなく、遺構・遺物はほとんど認められなかった。

文様や調整等の特徴により、Ⅰ～Ⅷ類に分類した。

Ⅰ類（22・23）口縁部に縦位の貝殻刺突を施すもので、その下位に斜位に貝殻条痕をもつ。器形はバケツ状の単純な深鉢形を呈すると考えられる。口縁は直口し、端部は平坦である。前平式系土器。

Ⅱ類（24・25）口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文を施し、三角形の楔状貼付け突帯をもつ一群である。25は口縁下位に縦方向の貝殻腹縁文が認められる。器形は口縁がレモン状を呈する角筒土器である。知覧式系土器。

Ⅲ類（26～35）貝殻条痕文系土器

口縁が直口するもの（26～30）、やや内湾するもの（31・34）、やや外反するもの（32・33・35）に分けられる。26は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、器壁は厚手である。口縁は丸く収められる。28は内面に口縁部付近は横方向、下位には斜方向の貝殻条痕文がみられる。Ⅲ類では最も薄い器壁をもつ。29・30の外面は口縁部に横方向、下位に斜方向の条痕文がみられる。内面は器面調整のための浅い条痕文がのこる。31・32・35は外面に口縁上部から斜方向の貝殻条痕文がみられる。器壁は厚手である。

Ⅳ類（36）貝殻腹縁により連続刺突文を数段施すもの。器壁は厚く、口縁端部は丸みを帯びる。器面調整は文様下位に横ナデ、口唇部および内面上部には横方向のミガキが認められる。口縁端部と口縁部は２種類の施文具を用いたのか刺突の仕方が変えられる。中原式土器。

Ⅴ類（37）器壁に撚糸文を施すもの。37は口縁やや外反し、上面はやや細く仕上げられる。厚手の器壁をもつ。内面は風化著しいが、上部にわずかに横方向の撚糸文が認められる。

Ⅵ類（38～40）無文土器である。内外面ともにナデ調整される。内外面の色調が赤褐色をおびている。

Ⅶ類（41～45）回転施文系の土器を一括した。

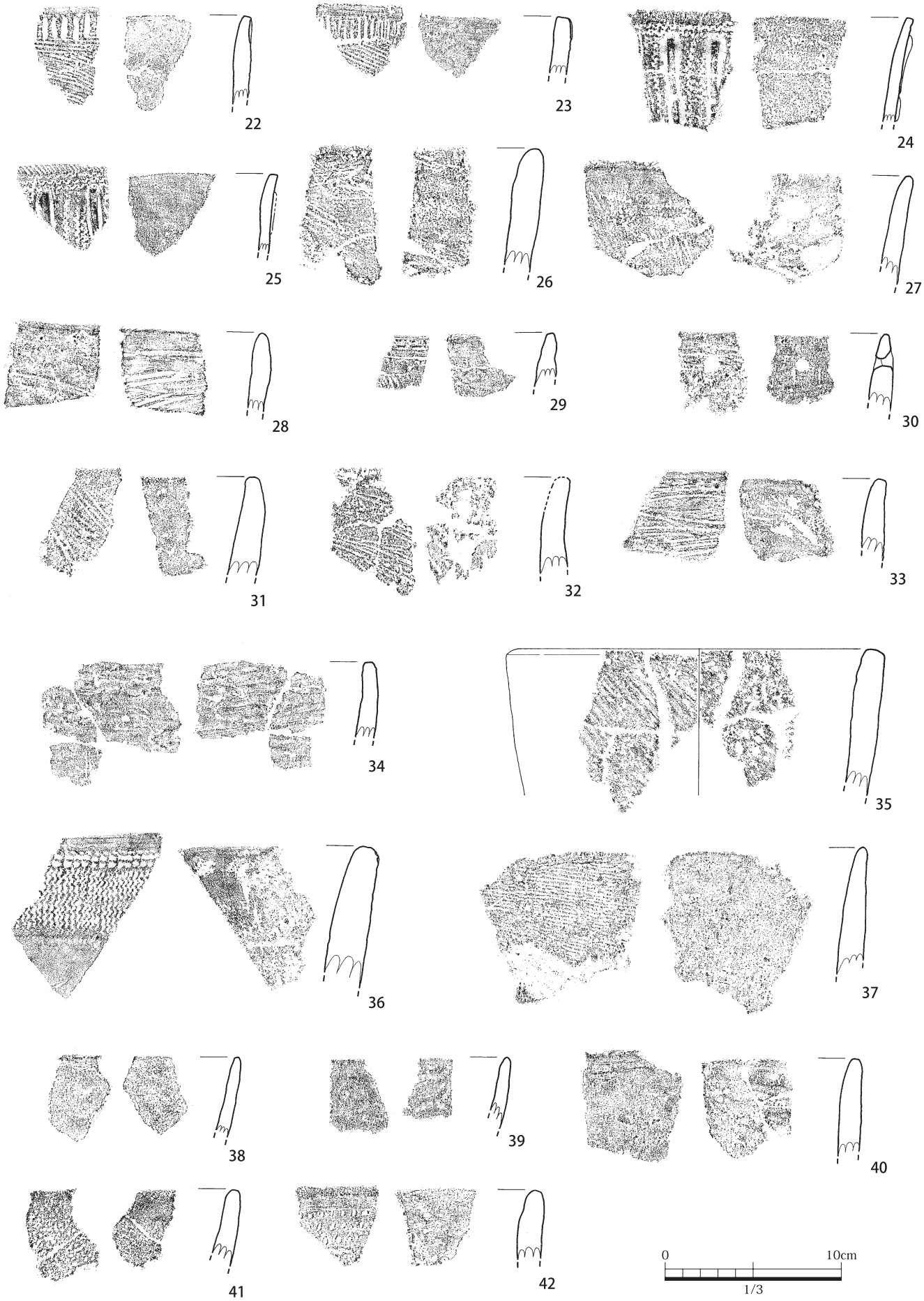
41～43は短枝回転文土器、いわゆる「イチゴ」と呼ばれる土器である。器壁は厚く、内面は丁寧なナデ調整が施される。43の口縁内面には横方向に強めのナデ調整のため、小さな平坦面が形成される。44は口縁上部に横位の、下位に縦.および斜位の変形撚糸文がみられる。45は内外面に横位の小さな山形押型文が施されている。内面は口縁部付近のみに施文され、下位には横方向のナデ調整である。

Ⅷ類（46）Ⅰ～Ⅶ類に分類できないものである。46はやや厚手の器壁をもち口縁端部は丸い。外面にナデの後、右上がりのやや深い沈線を施し、口縁部付近でやや浅めの右下がり沈線と切り合いが認められる。形状から深鉢と考えられる。

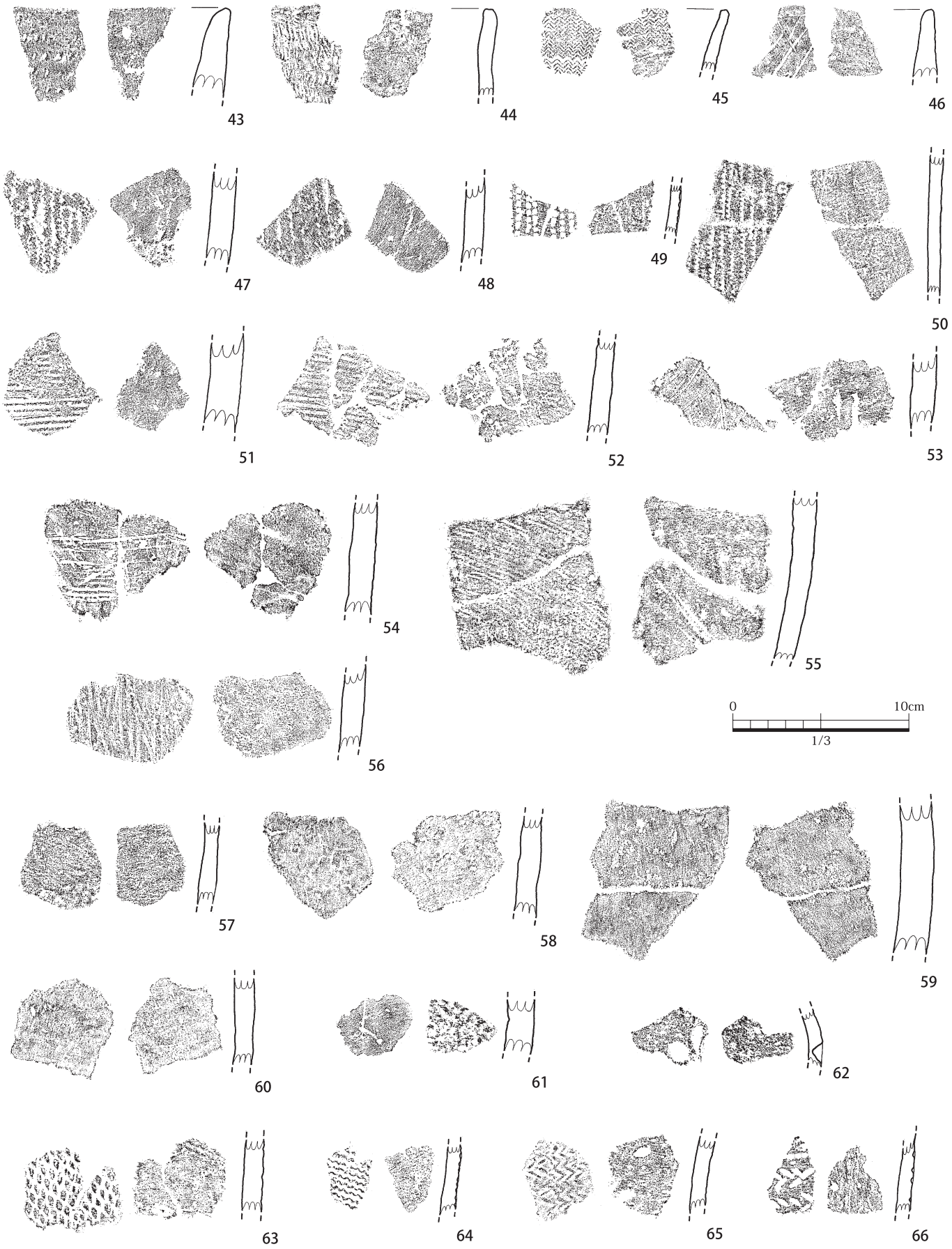
Ⅸ類（47～70）Ⅰ類からⅧ類に属する胴部である。47～50は連続した縦位の貝殻刺突文がみられる。47・48・50はⅡ類の胴部と考えられる。49は下剥峯式土器か。51～56はⅢ類の貝殻条痕文系土器の胴部とみられる。56は不規則な縦方向の条痕文が観察される。

57～62はⅥ類の胴部と考えられる。61の内面は風化著しく調整が観察できないが、外面には丁寧なナデやミガキ調整が確認される。小破片のため、断定はできないが、Ⅳ類の胴部の可能性がある。63～70はⅧ類とした回転施文系の土器の胴部である。63は外面に縦位の楕円押型文がみられ、内面は丁寧なナデ調整である。64・65は山形押型文土器である。64には横方向に小さく密な山形押型文が、65は縦方向にやや大きめな幅の広い山形押型文がみられる。ともに内面はナデ調整である。66は横位羽状の短沈線が施される辻タイプの範疇に含まれる土器である。内面にはミガキ調整が加えられる。

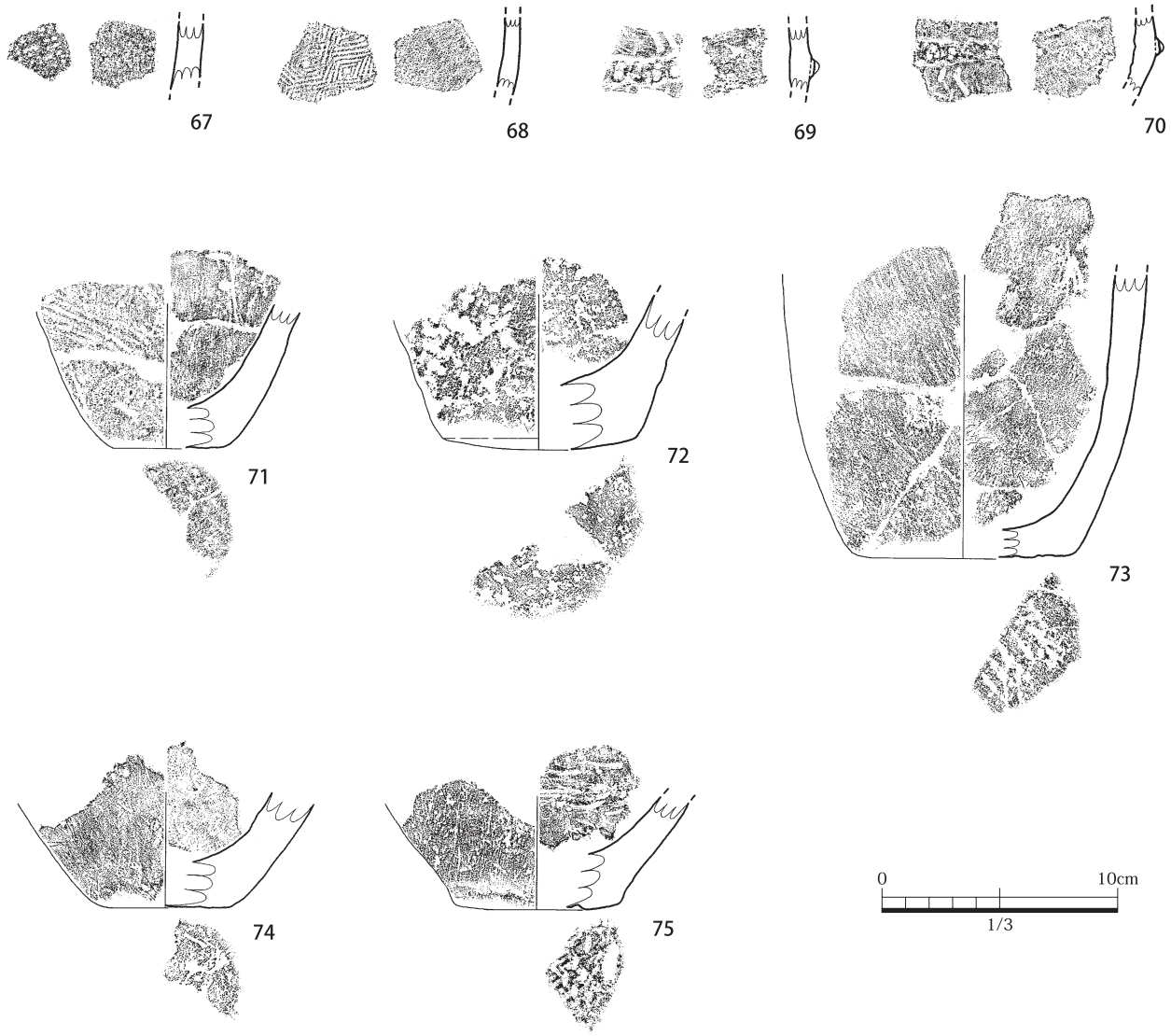
67は風化のため文様が判然としないが、イチゴの粒状を呈する短枝回転文が施されているとみられる。68は外面に菱形の押型文をもつ。69・70は



第 38 図　縄文時代早期出土遺物実測図（1）



第 39 図　縄文時代早期出土遺物実測図（2）



第 40 図　縄文時代早期出土遺物実測図（3）

内傾する胴部に刻目貼付突帯をもち、下部に長大な山形押型文が認められる。手向山式系土器と考えられる。

X類（71～75）底部を一括した。

71・73・74内湾しながら立ち上がる。71・74の下端は丸みを帯びる。

73は薄く平らな底部である。網代痕と考えられる圧痕がみられる。72・75はやや外方に開きながら立ち上がる。75は底面に深い網代状の圧痕が認められる。

第 17 表　縄文時代早期土器観察表（1）

挿図番号	調査区	出土層位	器種	部位	法量(cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
22	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 貝殻刺突文 斜方向の貝殻条痕文	指ナデ後、斜方向のナデ 横方向のナデ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	4mm以下の灰白色粒・3mm以下の灰褐色粒・1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	
23	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ、貝殻腹縁文、貝殻条痕文	横方向のナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	1mm以下の透明光沢粒をわずかに、1mm以下の灰白色粒・角閃石をごくわずかに含む	
24	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、貝殻腹縁刺突文、楔形貼付突帯	ナデ(風化著しい)	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	3mm以下の灰白色粒を多く含む	
25	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		貝殻腹縁刺突文、楔形貼付突帯	横方向の丁寧なナデ	褐 (10YR4/4)	褐 (7.5YR4/3)	4mm以下の赤橙色粒をごくわずかに、3mm以下の灰白色粒をわずかに、2mm以下の透明光沢粒を多く含む	
26	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 貝殻条痕文？(風化著しい)	横、斜方向のナデ(風化著しい)	橙 (5YR6/8)	灰黄褐 (10YR6/2)	8mm以下の灰白色粒を少し、6mm以下の褐灰色粒・5mm以下の黒色粒をごくわずかに、2mm以下の角閃石をわずかに、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	
27	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、横、斜方向のナデ	横ナデ、ナデ(風化著しい)	灰黄 (2.5Y6/2)	浅黄 (2.5Y7/4)	1mm以下の灰白色粒をわずかに含む	外面にスス付着
28	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ	横方向の貝殻条痕文	明褐 (7.5YR5/8)	明褐 (7.5YR5/8)	1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	
29	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 横・斜方向の貝殻条痕文	横方向のナデ	浅黄 (2.5Y8/4)	橙 (7.5YR7/6)	2mm以下の灰白色粒・1mm以下の透明光沢粒をごくわずかに含む	
30	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ、横方向の貝殻条痕文	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	4mm以下の灰褐色粒・3mm以下の灰白色粒をわずかに、2mm以下の角閃石をごくわずかに含む	穿孔(貫通)あり
31	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 貝殻条痕文	ナデ(風化著しい)	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の灰白色粒・黒色光沢粒をごくわずかに含む	
32	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		貝殻条痕文(風化著しい)	風化が著しく不明	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい橙 (5YR7/4)	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	
33	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 横方向の貝殻条痕文	横ナデ 斜方向のナデ　黒斑あり	にぶい黄橙 (10YR6/3)	橙 (7.5YR7/6)	3mm以下の灰白色粒をわずかに含む	
34	5−2S	Ⅲ下	深鉢	口縁		ナデ 横方向のナデ	斜方向のナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR7/8)	3mm以下の灰白色粒・2mm以下の灰褐色粒をわずかに、1mm以下の透明光沢粒をごくわずかに含む	
35	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁	口径 (19.3)	ナデ 斜方向の貝殻条痕文	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下の灰白色粒をわずかに、1mm以下の半透明光沢粒を少し、1mm以下の黒色光沢粒をごくわずかに含む	
36	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ、貝殻腹縁文横方向の強めのナデ	ナデ(風化著しい)	黄褐 (2.5Y5/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の灰オリーブ色粒をごくわずかに、2mm以下の灰白色粒をわずかに、2mm以下の角閃石・透明光沢粒を多く含む	
37	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、変形撚糸文	ナデ(風化著しい)	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	6mm以下の灰黄色粒、5mm以下の灰白色粒、3mm以下の角閃石を多く含む	
38	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ	ナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	灰褐 (7.5YR4/2)	1mm以下の灰色粒をごくわずかに、1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む(内面に多い)	
39	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ	斜方向のナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	2mm以下の灰白色粒・透明光沢粒をわずかに、2mm以下の角閃石をごくわずかに含む	
40	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁	口径 (15.4)	ナデ 横方向のていねいなナデ	横方向のナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	橙 (2.5YR6/8)	5mm以下の灰白色粒・褐色粒をわずかに、3mm以下の透明光沢粒を少し、1mm以下の灰色粒・角閃石をごくわずかに含む	
41	5−2S	Ⅱ～Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 格子目押型文	斜方向のナデ後、横方向のナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の灰白色粒・透明光沢粒をごくわずかに含む	SP30より出土
42	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、短枝回転文	横方向のナデ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	明黄褐 (10YR7/6)	4mm以下の灰色粒をわずかに、2mm以下の灰白色粒・透明光沢粒・角閃石を少し含む	
43	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、短枝回転文	横方向の丁寧なナデ	暗灰黄 (2.5Y4/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	4mm以下の灰白色粒・2mm以下の角閃石・1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	
44	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 撚糸文	横方向のナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	6mm以下の黄褐色粒、3mm以下の灰オリーブ色粒、1mm以下の黒色光沢粒・半透明光沢粒をわずかに含む	
45	5−2N	Ⅲ	深鉢	口縁		山形押型文、ナデ	山形押型文後ナデ 横方向のナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	2mm以下の半透明光沢粒・黒褐色粒をごくわずかに含む	
46	5−2S	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 斜方向の沈線文	斜方向のナデ?	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/8)	3mm以下の灰白色粒をわずかに、1mm以下の透明光沢粒をごくわずかに含む	
47	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		縦方向の貝殻腹縁刺突文	斜方向のナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	明黄褐 (10YR7/6)	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	
48	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		貝殻腹縁刺突文	縦方向の丁寧なナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	

第 18 表　縄文時代早期土器観察表（2）

挿図番号	調査区	出土層位	器種	部位	法量(cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
						外面	内面	外面	内面		
49	5−2S	Ⅳ	深鉢	胴部		貝殻腹縁による押圧か？	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の透明光沢粒をわずかに、1mm以下の黒色光沢粒・灰白色粒をごくわずかに含む	
50	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		貝殻腹縁刺突文	縦方向のナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	1mm以下の灰白色粒・透明光沢粒をごくわずかに含む	
51	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻条痕文	縦方向の丁寧なナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	
52	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻条痕文	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	褐(7.5YR4/4)	4mm以下の灰白色粒・3mm以下の褐色粒をごくわずかに、2mm以下の透明光沢粒を少し、1mm以下の角閃石をごくわずかに含む	
53	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		斜方向の条痕	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	2mm以下の透明光沢粒を多く、2mm以下の灰白色粒・黒色粒・褐色粒をわずかに、2mm以下の灰色のにぶい光沢粒をごくわずかに含む	
54	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻条痕文、横・斜方向のナデ	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	橙(2.5YR6/8)	3mm以下の灰色粒・灰白色のにぶい光沢粒、2mm以下の褐色粒・灰白色粒をごくわずかに、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	
55	5−2S	Tr12Ⅲ	深鉢	胴部		斜方向の条痕か？土器面に風化が見られる	ナデか？風化が著しいため調整不明	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	3mm以下の褐灰色粒をわずかに、1.5mm以下の灰白色粒を多く、1mm以下の黒色光沢粒をごくわずかに、微細な透明光沢粒を多く含む	
56	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		縦・斜方向の条痕	縦方向のナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	灰黄褐(10YR6/2)	5mm以下の灰白色粒をわずかに、2mm以下の透明光沢粒を少し含む	
57	5−2S		深鉢	胴部		斜方向のナデ（風化が著しい）	横方向のナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	橙(7.5YR7/6)	3mm以下の灰白色粒を少し、3mm以下の黒色粒・透明光沢粒・黒色光沢粒をごくわずかに含む	
58	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		斜方向のナデ後縦方向のナデ	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	にぶい黄橙(10YR6/3)	6mm以下の灰白色粒をわずかに、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	
59	5−2S		深鉢	胴部		縦方向のミガキ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	5mm以下の灰白色粒・3mm以下の角閃石を少し、3mm以下の明褐色粒・褐灰色粒・1mm以下の透明なにぶい光沢粒をわずかに、2mm以下の黒色粒をごくわずかに含む	SP5より出土
60	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向のナデ	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	2mm以下の灰白色粒・褐灰色粒・白色半透明流をごくわずかに、1mm以下の透明光沢粒を少し、1mm以下の白色光沢粒・黒色光沢粒をごくわずかに含む	
61	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の丁寧なナデ、ミガキ	風化著しく調整不明	灰白(2.5Y8/2)	灰黄(2.5Y7/2)	2mm以下の灰白色粒を少し、1mm以下の透明光沢粒をごくわずかに含む	
62	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向のナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	2mm以下の灰色粒・灰白色粒、1mm以下の角閃石をごくわずかに、1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	穿孔（未貫通）あり
63	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		楕円押型文	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	赤褐(2.5YR4/8)	4mm以下の明褐色粒をわずかに、4mm以下の灰色粒・2mm以下の灰白色粒・1mm以下の灰色光沢粒をごくわずかに、1mm以下の透明光沢粒を少し含む	
64	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		山形押型文	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	黒褐(10YR3/2)	3mm以下の灰白色粒・2mm以下の灰色のにぶい光沢粒・透明なにぶい光沢粒・褐色粒をごくわずかに含む	
65	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		山形押型文	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	にぶい黄橙10YR7/3	4mm以下の褐色粒をごくわずかに、3mm以下の灰白色粒・2mm以下の角閃石・1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	
66	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		ナデ後、横方向の羽状短沈線文	縦方向のミガキ	橙(5YR6/6)	にぶい黄褐(10YR4/3)	2mm以下の金色光沢粒（雲母）を多く、2mm以下の灰白色粒・1mm以下の透明光沢粒を少し、4mm以下の黒色粒・2mm以下の褐色粒をごくわずかに含む	
67	5−2S	Ⅰ	深鉢	胴部		ナデ、短枝回転文	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰黄褐(10YR6/2)	2mm以下の灰白色のにぶい光沢粒・灰白色粒をごくわずかに、1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	SP30より出土
68	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		菱形押型文	横方向のナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	3mm以下の灰白色粒・2mm以下の金色光沢粒を多く、2mm以下の白色半透明粒・灰色粒・褐色粒をごくわずかに含む	
69	5−2S	Ⅲ	深鉢	胴部		山形押型文 刻目突帯 ナデ	斜方向のナデ	明赤褐(5YR5/6)	灰黄褐(10YR5/2)	4mm以下の褐色粒・3mm以下の灰色粒・2mm以下の半透明のにぶい光沢粒・灰白色粒をごくわずかに含む	
70	5−2S		深鉢	胴部		横方向のナデ 刻目突帯文 山形押型文	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	灰褐(7.5YR6/2)	3mm以下の灰色粒・褐色粒、2mm以下の半透明のにぶい光沢粒・灰白色流、1mm以下の透明光沢粒・黒色光沢粒をごくわずかに含む	
71	5−2S	Ⅲ	深鉢	底部	口径(4.6)	貝殻条痕文、ナデ	ナデ	淡黄(2.5Y8/3)	灰黄(2.5Y7/2)	3mm以下の灰色粒・黒色粒をわずかに、2mm以下の灰白色粒をわずかに含む	
72	5−2S	Ⅲ	深鉢	底部	口径(8.2)	丁寧なナデ	風化著しく調整不明	浅黄橙(10YR8/3)	褐灰(10YR6/1)	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	
73	5−2S	Ⅲ	深鉢	底部	口径(9.0)	貝殻条痕文、網代底	ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	1mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	
74	5−2S	Ⅲ	深鉢	底部	口径(4.8)	縦方向のナデ 網代痕か？	ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)	4mm以下の灰白色粒を多く、1mm以下の透明光沢粒をごくわずかに含む	
75	5−2S	Ⅲ	深鉢	底部	口径(7.0)	縦方向のナデ 縦方向のナデ後、横方向のナデ　網代底	横方向の貝殻条痕？ 横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	3mm以下の灰色粒・黒色粒をわずかに、2mm以下の灰白色粒をわずかに含む	

石器（第41～50図・第19～21表）

縄文時代早期の石器は第２地点Ｎ区・Ｓ区あわせ、約800点が出土している。そのうち、33点を図化した。出土層位はⅢ層上面からⅢ層中の下部にかけてであるが、一部Ⅳ層中上面で出土したもの含まれている。分布の中心はＳ区中央、Ｂ10～11・Ｃ11グリッドで、確認された器種は、石鏃・楔形石器・スクレイパー・石核・石斧・粗製剥片石器・剥片・磨石・敲石・台石である。以下、器種ごとに報告する。

石鏃（第41図76～84）

石鏃は14点出土し、９点を図化した。平面形態からほぼ正三角形を呈するもの（Ⅰ類）と二等辺三角形を呈するもの(Ⅱ類)に大別できる。使用石材は黒曜石１点、チャート８点である。

76・77・83はⅠ類に相当する。基部はほぼ直線的である。76は正面右脚側に節理がみられる。石材は黒曜石。77は正面に多く調整を施し裏面の調整は最小限である。ややずんぐりした形状である。チャート製。83は基部がやや外に膨らみ丸みがある。81・82はチャート製、片脚を欠損している。

78～80・84はⅡ類である。78は基部に浅い抉りを有する。中央部に斜め方向に節理がみられる。79・80・84はＵ字状の抉りをもつ。79は両側縁が外に膨らむ。84は先端部を欠損しているが、現存最大長3.35ｃｍの大型品である。石材はチャート製、正面・裏面とも節理のためか不規則な剥離が多い。

楔形石器（第41図85）

楔形石器は１点のみ出土している。チャートのやや厚手の剥片を素材としている。左側縁にはつぶれ状の交互剥離が認められる。

スクレイパー（第41図86～93）

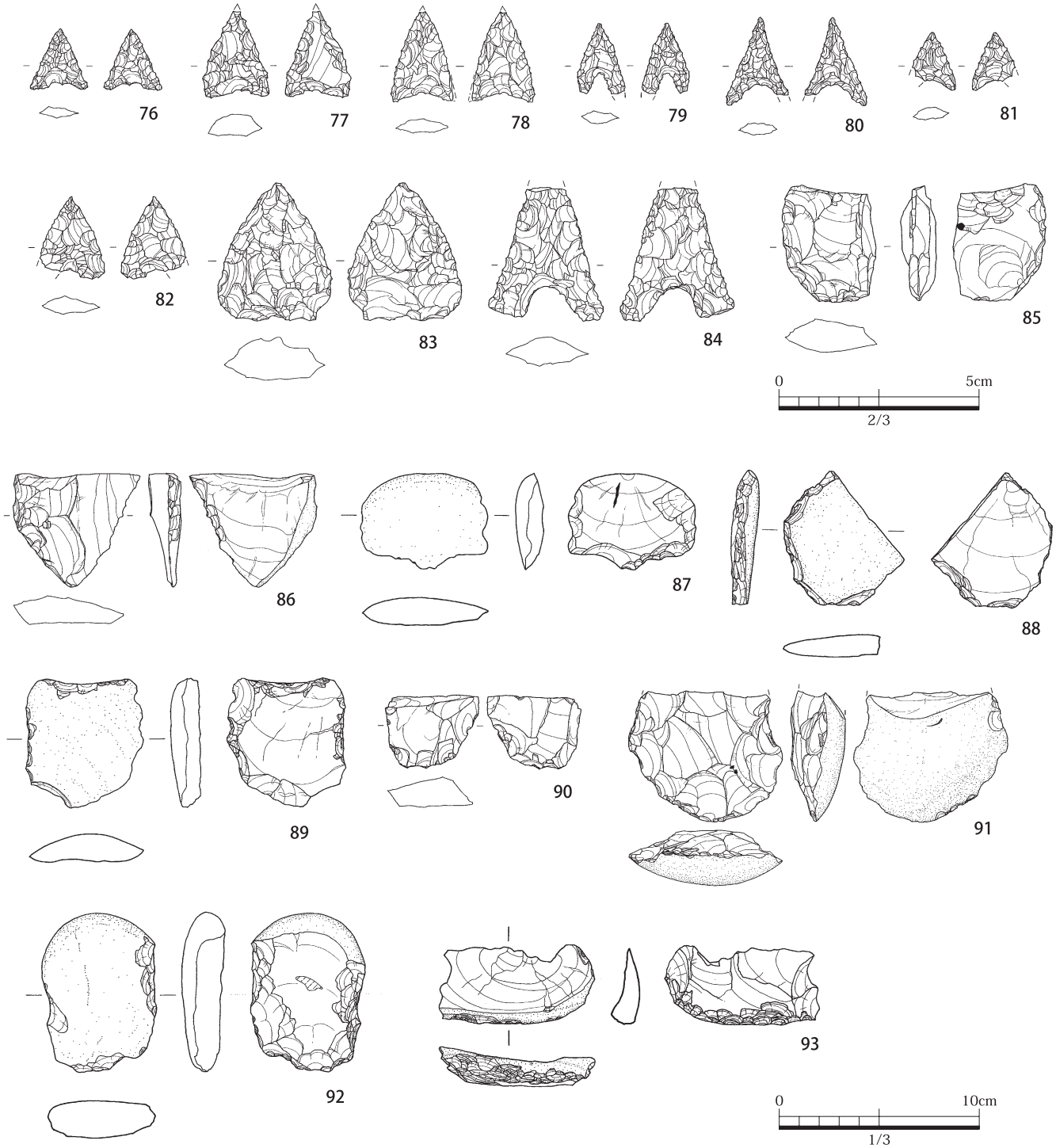
86は珪質頁岩製である。円礫から作出した剥片を利用し、左右両側縁を加工し鋸歯状の刃部を形成している。87・89は両側縁および下縁に粗い剥離を施している。ともに自然面を残す。断面形は打点から下縁に向かいやや鋭利になる。形態上は粗製剥片石器とも分類できるが、刃部の付き方からスクレイパーとした。90はチャート製で、刃部は両面から調整される。91は全周にわたり粗い剥離を施し、下縁はさらに礫面側から細かな剥離が施されている。石材はホルンフェルス。92は砂岩製である。両側縁に粗い剥離が施され刃部を形成している。上縁には自然面が残る。石斧の未製品の可能性もある。93は背面が円礫面から剥離されたまま調整が施されていない。意図した形状ではなかった可能性があるが、横長に薄い剥片となったホルンフェルスの下縁を細かく剥離し刃部を作り出している。

石核（第42･43図94～106）

石核は13点図化した。本遺跡内の石核は主として粗製剥片石器の素材を獲得するため使用された可能性がある。特に94～100までは円礫を素材とし、粗製剥片石器を削出した残核と考えられる。一方、剥片を削出後、本体も核上面に残る鋭角な剥離を刃部としスクレイパーとしての機能を有していた可能性もある。いずれも自然面を残し、連続した剥離作業を行っていたとみられる。95は下位に向かって階段状に剥離がみられる。99の石材はホルンフェルスである。下位の刃部になるにつれ剥離が小さくなる。100は大きく粗い剥離を行った後、側縁に細かな剥離を連続して施している。101の上部は大きな剥離、下縁には小さな剥離がみられる。102は小型の頁岩の円礫を素材としている。上面には両側縁から剥離を施し刃部を形成している。103の側縁には階段状の剥離が多く認められる。104はホルンフェルス製の石核である。打面を変えながら連続して剥片を削出している。105は拳大の円礫を素材としている。106は頁岩製である。105・106ともに大ぶりな剥片剥離が認められる。

石斧（第44図107～115）

９点確認され、すべてＳ区より出土した打製石斧である。107は砂岩を素材とした扁平な石斧である。粗い剥離の後、両側面から細かな剥離により刃部が形成されている。108～112は裏面に大きく自然面を残す。礫面側から粗い加工を行い、両側縁が直線的になるよう調整される。109～115は断面形が台形状となる。108は裏面中央部の両側縁に明瞭な抉りが認められる。109・110は厚みのある礫を分割し、両側縁に急角度での剥離がみられる。また、縦方向の断面形状が舟底形を呈する。

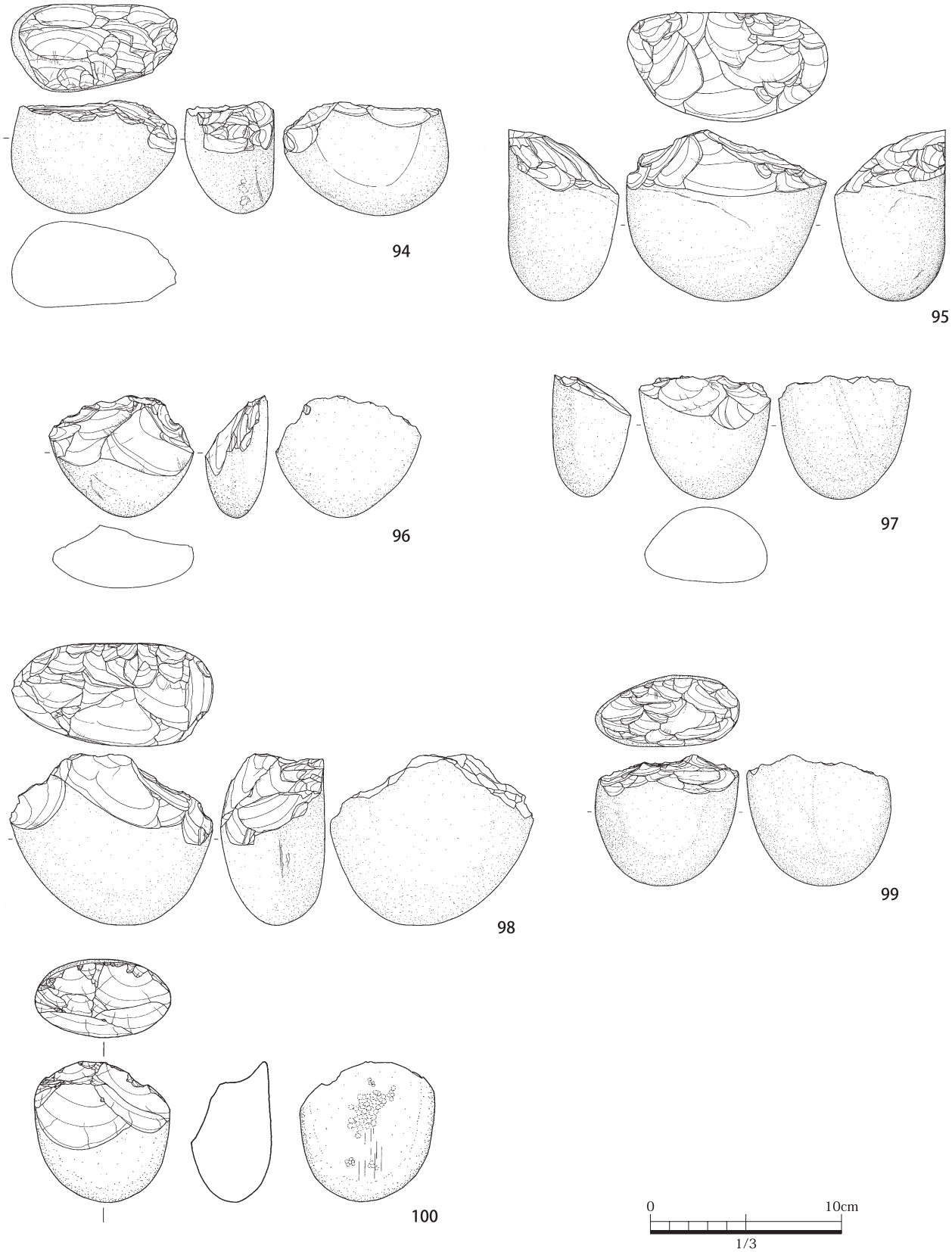


第 41 図　縄文時代早期出土遺物実測図（4）

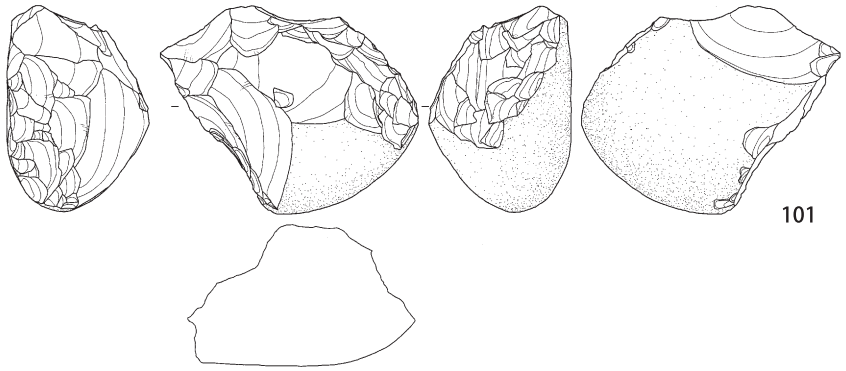
日向市の岡遺跡（第15次調査）で類似の資料（第72図115）が出土している。111はリダクションされている。石材はホルンフェルス。113・114は砂岩製の石斧未製品である。112・115は刃部を欠損している。ともに石材はホルンフェルスである。

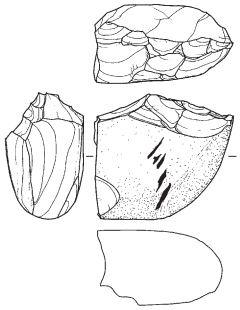
粗製剥片石器（第45･46図116～145）

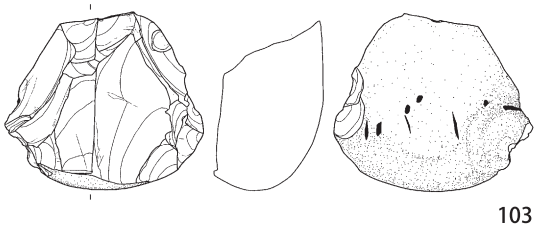
粗製剥片石器は29点を図化した。本遺跡で最も主体となる器種と考えられる。出土した粗製剥片石器はすべて、何らかの二次的な加工が施されている。断面形は打点から下縁に向かい鋭利になるものと半月状になるものがある。形態と刃部の剥離によりⅠ～Ⅴ類の５類に細分した。

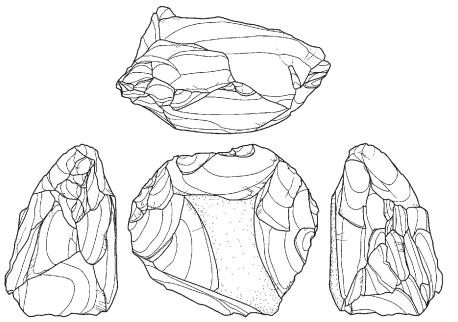


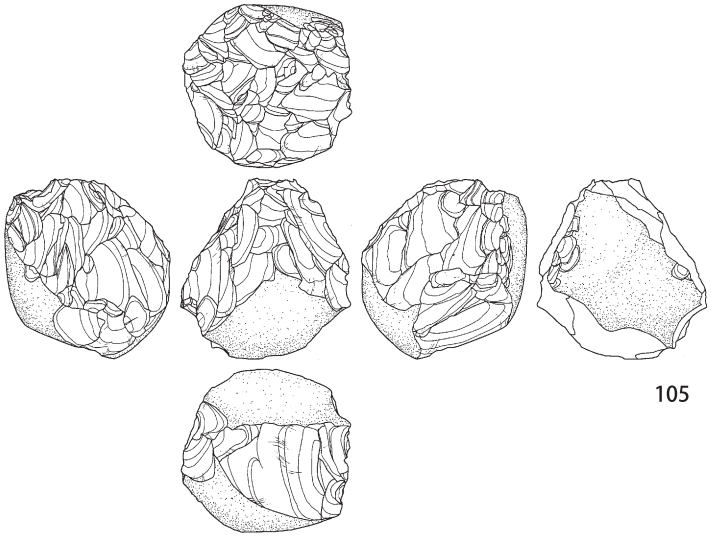
第 42 図　縄文時代早期出土遺物実測図（5）

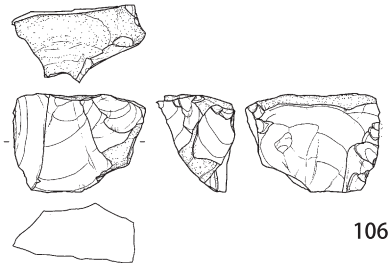


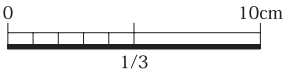




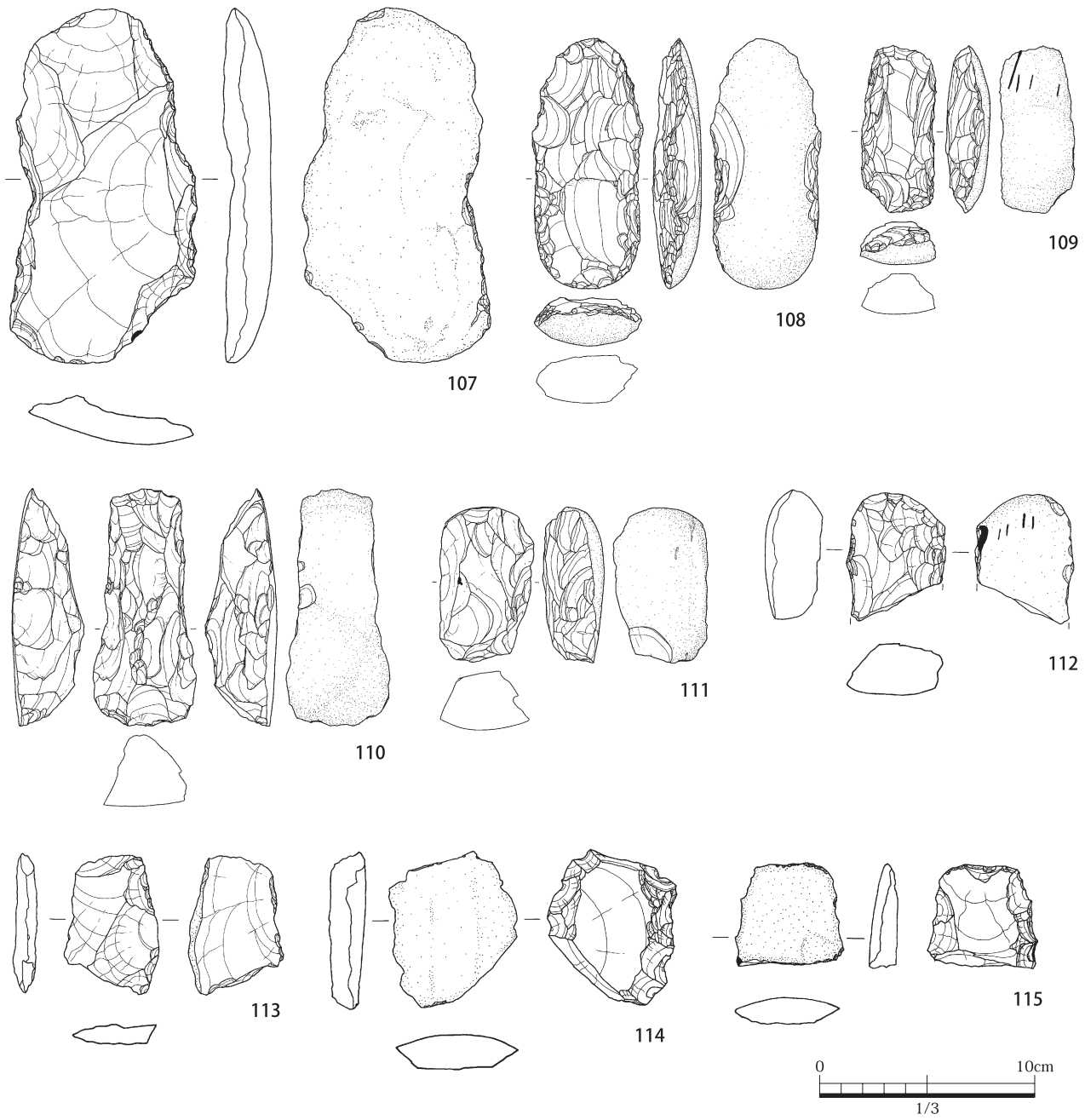








第 43 図　縄文時代早期出土遺物実測図（6）



第 44 図　縄文時代早期出土遺物実測図（7）

Ⅰ類（第 45 図 116 ～ 124）

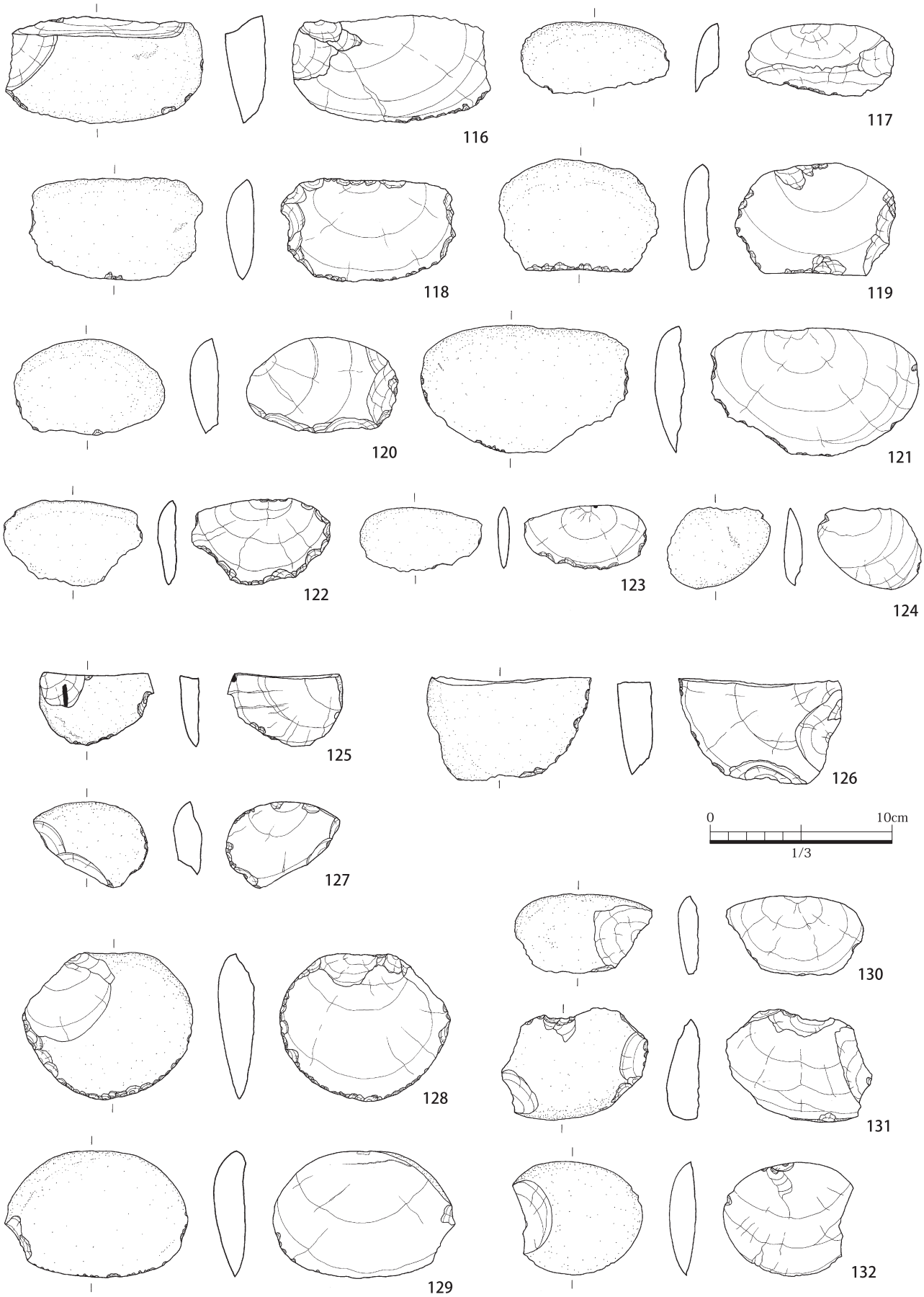
背面に自然面を残す横長の剥片を素材とし下縁や側縁に二次的な粗い加工がみられる。断面形は打点側と下縁の厚みにあまり差がみられない。116 ～ 122 は砂岩、123・124 はホルンフェルス製である。

Ⅱ類（第 45 図 125・126）

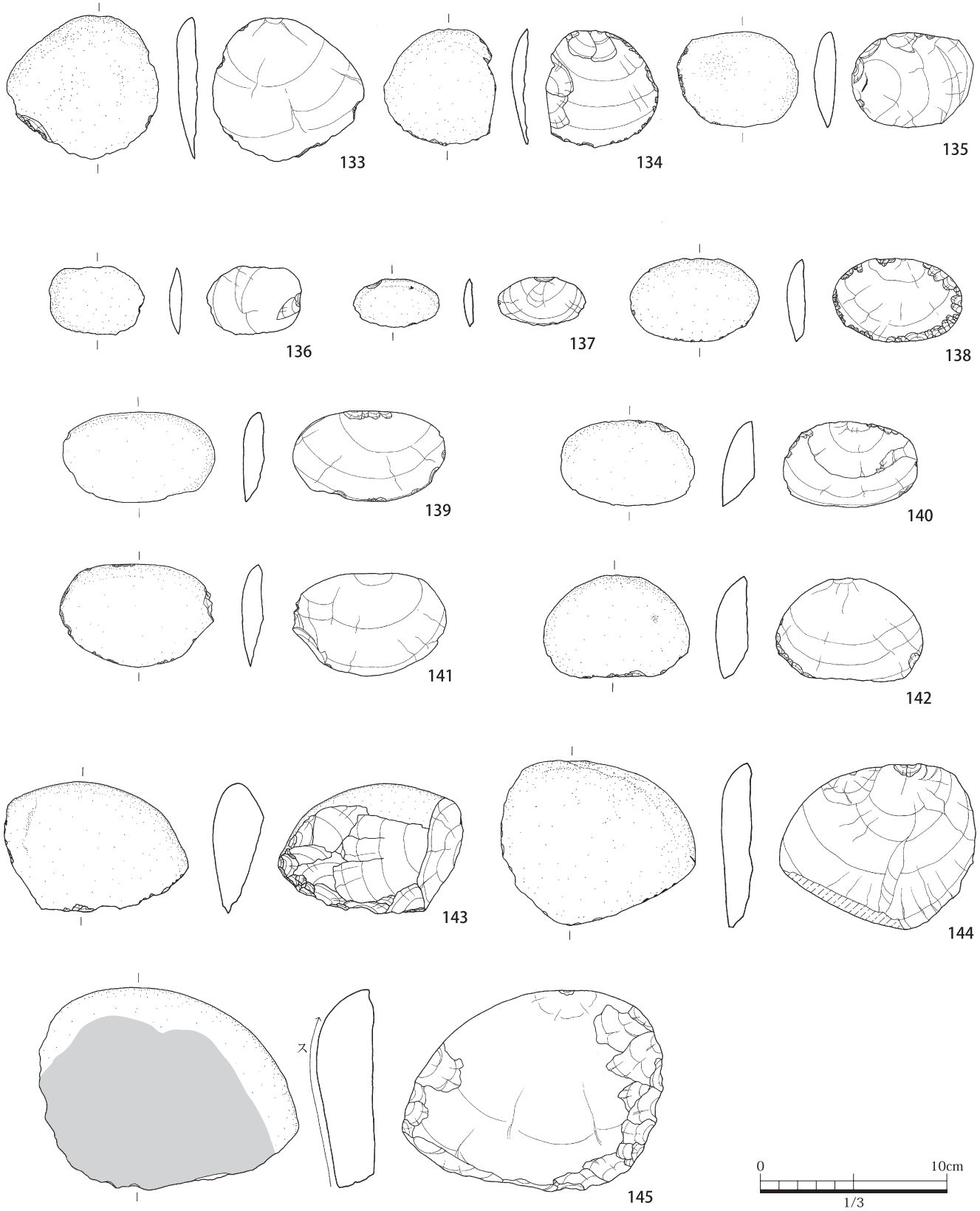
背面に自然面を残し平面形が半月状を呈する。125・126 ともにホルンフェルス製であり、右側縁と下縁に細かな剥離が認められる。

Ⅲ類（第 45･46 図 128・129・131 ～ 135）

背面に自然面を残し平面形が円形を呈する。下縁に微細な剥離痕跡が認められる。スクレイパー的な機能をもっていたと考えられる。131・132 は側縁に粗い剥離がみられる。128・129・131・132 の断面形は打点側と下縁の厚みにあまり差がないレンズ状であり、133 ～ 135 は下縁に向かい鋭利な形状である。128・131・133 は砂岩製、129・132・134・135 はホルンフェルス製である。



第 45 図　縄文時代早期出土遺物実測図（8）



第 46 図　縄文時代早期出土遺物実測図（9）

Ⅳ類（第46図136～142）

背面に自然面を残し、楕円形を基本とする。下縁部に向かい鋭利な断面形状である。136～137は小型で下縁に微細な剥離がみられる。ともにホルンフェルス製。138の外周には連続する剥離が認められる。石材は砂岩である。139は裏面の上端には連続した、右側縁から下縁にかけては不連続な剥離がみられる。

140の腹面は１回の打撃で大きな剥離面を形成し、その後、側面を調整している。141の腹面には左側縁から下縁にかけて連続する微細な剥離が認められる。139～141はホルンフェルス製である。142は砂岩製の粗製剥片石器である。

Ⅴ類（第45・46図127・130・143～145）

Ⅰ～Ⅳ類以外のものを一括した。127・144はホルンフェルス製、130・143は砂岩製である。143の腹面には粗い剥離がみられる。144の下面には節理がみられる。145は重量623ｇと遺跡内最大の粗製剥片石器である。腹面に大きな連続した剥離が認められる。向原中尾第５遺跡で出土した粗製剥片石器の中でこの１点のみ石材が尾鈴山溶結凝灰岩である。

剥片（第47～49図146～180）

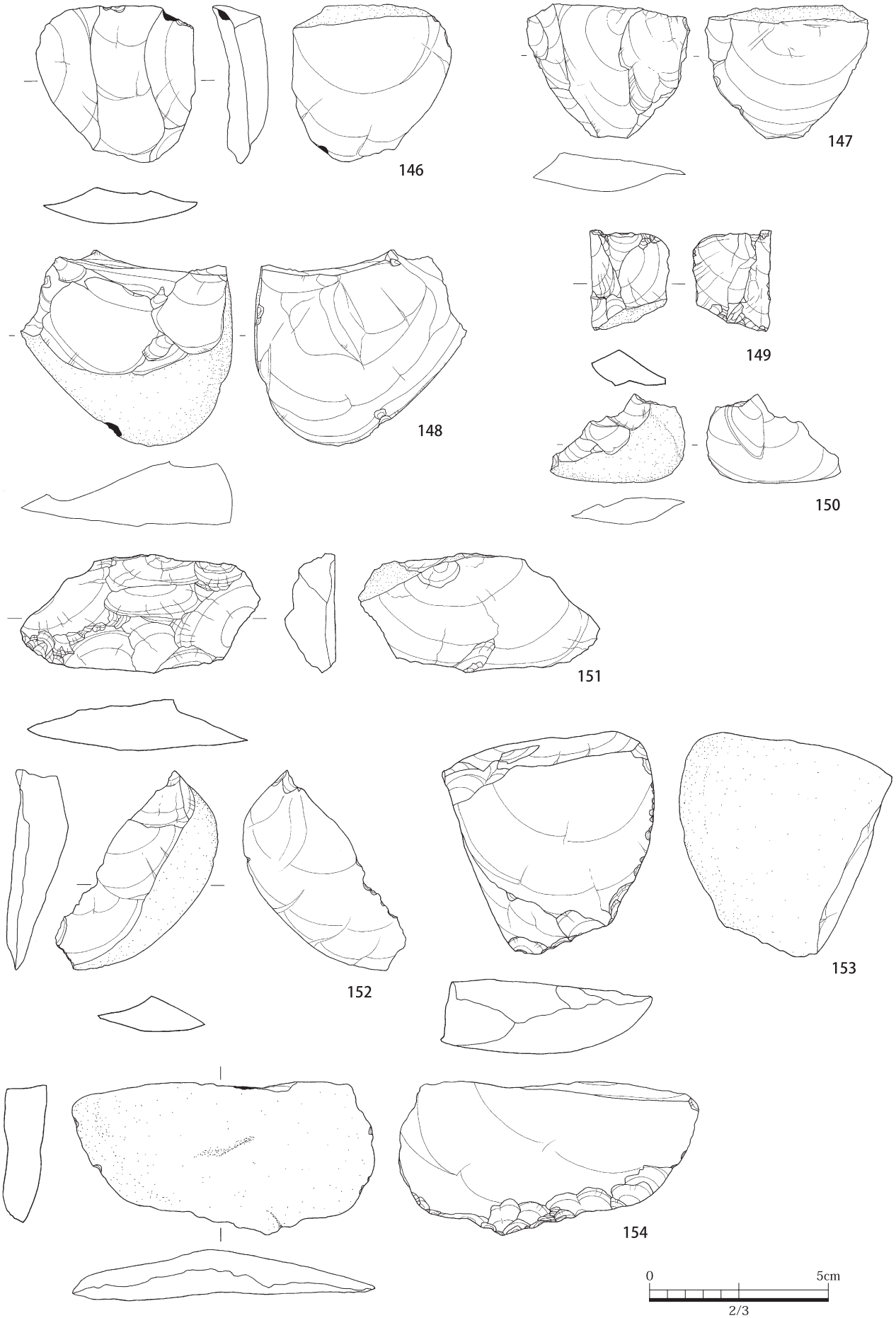
剥片はⅢ層上部からⅣ層上面にかけて出土がみられる。Ⅳ層上面から出土した剥片の中には縄文時代早期以前のものが含まれている可能性もある。146～148・150～161は円礫を素材とする剥片であり、一部に礫面が残されている。すべてホルンフェルス製である。146・147・155・156は幅広の剥片である。148は石核の剥片である。150は95と同一個体の可能性もある。154は下縁に礫面側から粗い連続した剥離がみられる。157は石斧の未製品の可能性もある。158は裏面の大部分に節理が観察される。161は左右両側縁に連続する粗い剥離が施されている。打製石斧を再利用した剥片か。149・162・163はチャート製の剥片である。149は赤色を呈する。164～166は黒曜石製である。164・165はＮ区から出土し、桑ノ木津留産である。透明度が高く、一部気泡を含んでいる。166の正面には古い段階と考えられる剥離が認められる。細石刃を削出するためのブランクの可能性もある。167・171・173はホルンフェルス製である。167は幅広の剥片である。裏面に自然面を残す。169は左側縁および下縁に微細な二次加工が施されている。168・172は頁岩製である。168は上縁側縁および下縁に微細な剥離痕跡が認められる。右側縁には粗い剥離が認められる。172は不定形な薄い剥片である。表面に粗い剥離がみられる。170は白色の流紋岩製である。174～176・179は二次加工ある剥片である。174～176はチャート製、179は赤色の頁岩製である。175は左右両側縁に微細な剥離が認められる。176は乳白色を呈する無光沢のチャート製である。上面には節理がみられる。177・178・180の上面には自然面が残る。石材はホルンフェルスである。178の下縁には微細な剥離が認められる。

磨石（第50図181～184）

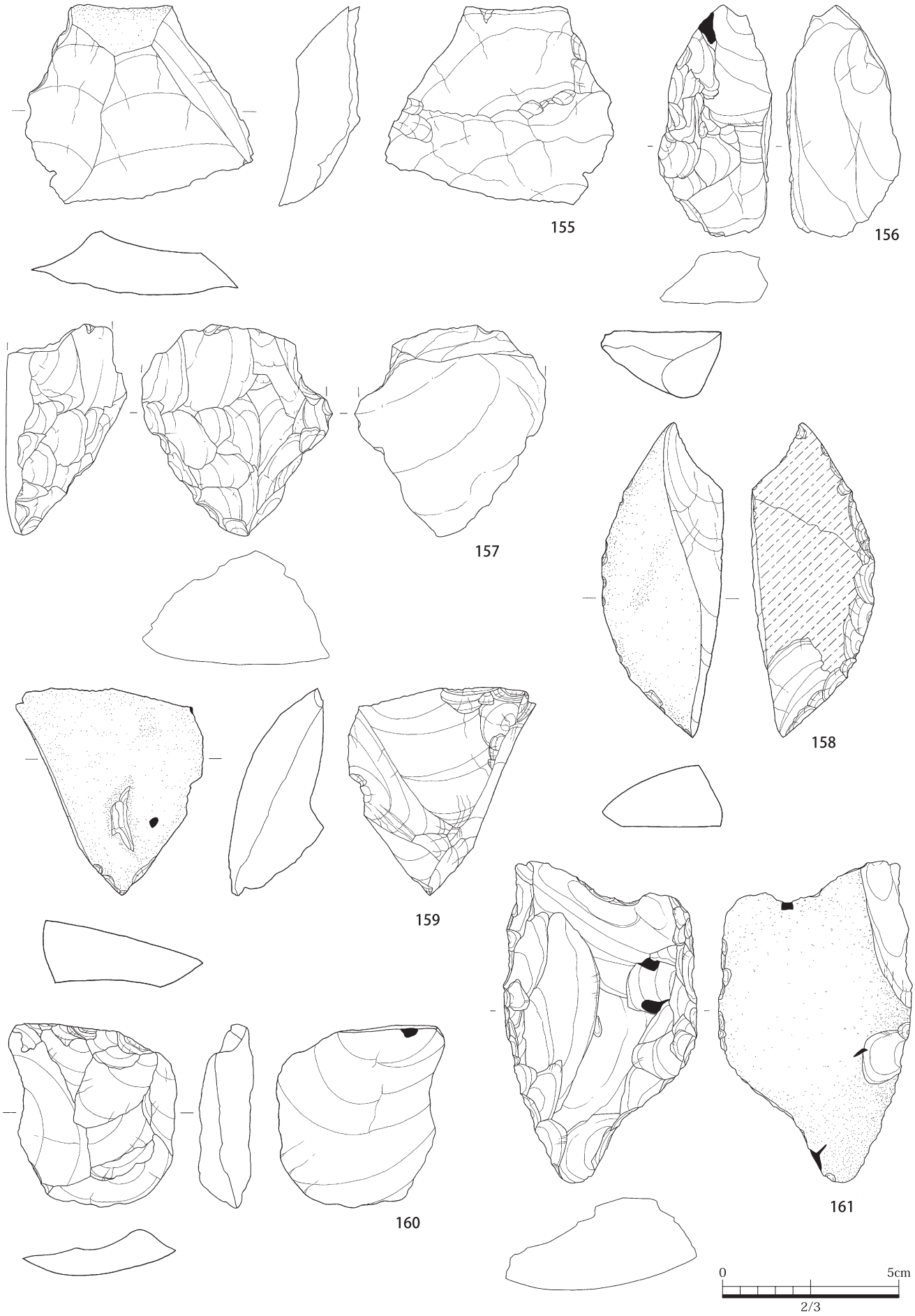
４点すべてが尾鈴山溶結凝灰岩の円礫を素材としている。181は表裏両面に顕著な磨面がみられる。182は表裏両側面の４面に磨痕が認められる。183･184は大型の磨石である。183はＳ区の７号集石遺構（ＳＩ７）から出土している。被熱のためか全面に赤化が認められる。上部を欠損するが、最大長12.1ｃｍ、重量約700ｇを計る。184の右側縁には敲打痕が残る。重量は1,423ｇ。

敲石（第50図185～188）

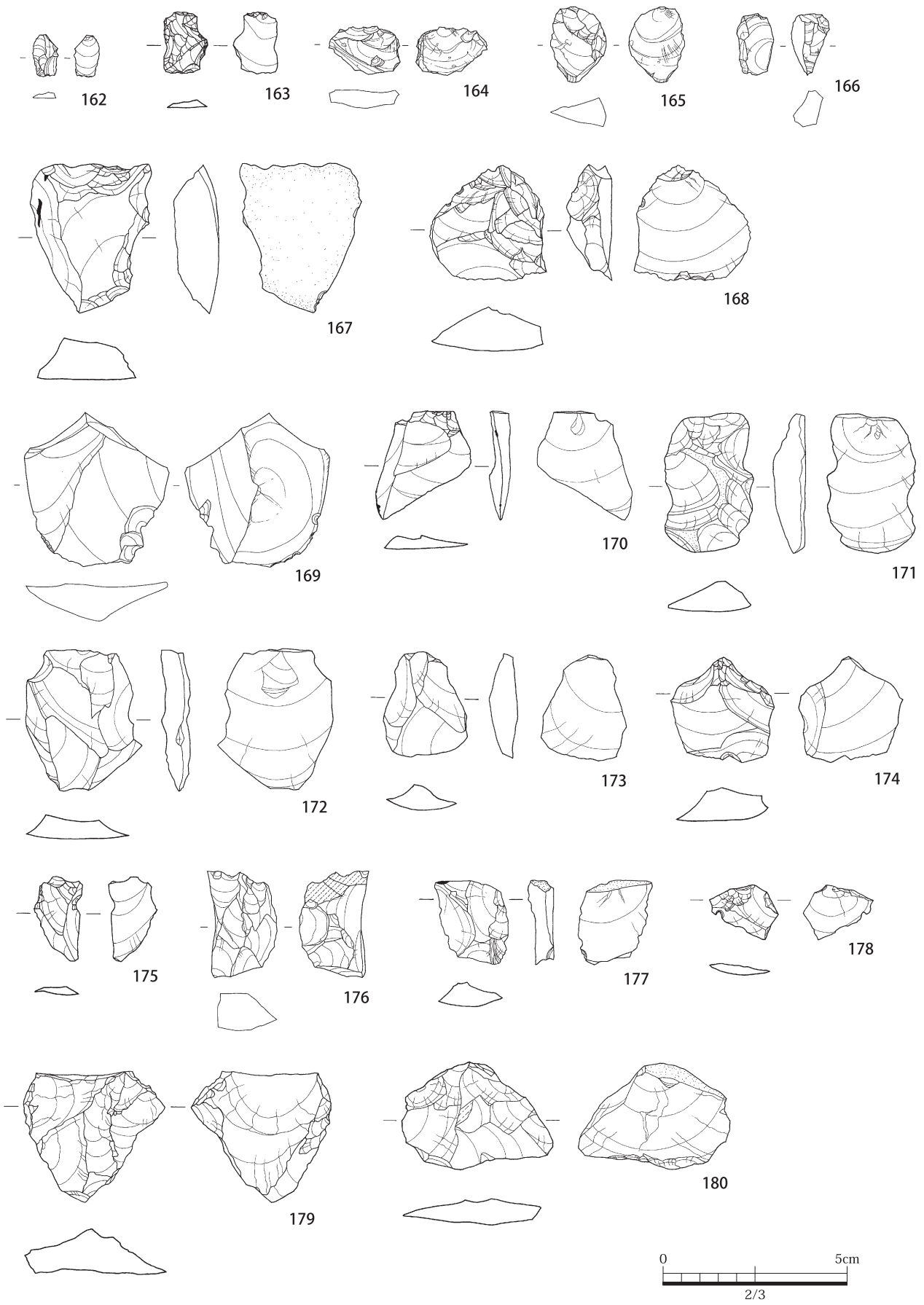
４点すべてが欠損している。185・186は尾鈴山溶結凝灰岩の円礫を素材としている。185は左右両側縁に平坦面を形成するほど明瞭な磨面が認められる。右側縁下部は磨痕の後、敲打がみられる。敲打痕は下面にも認められる。186は表裏両面および右側面下部に磨面が観察される。下面には顕著な敲打痕がみられる。187はＮ区の３号集石遺構（ＳＩ３）より出土している。楕円形を呈する尾鈴山溶結凝灰岩を素材としている。表裏両面、特に表面に磨痕が認められる。下部に敲打痕が残る。188は砂岩製の敲石である。下縁部と左右両側縁の３面に顕著な敲打痕が観察される。上部および右側縁に粗く大きな剥離が認められる。欠損した石核を再利用したものか。



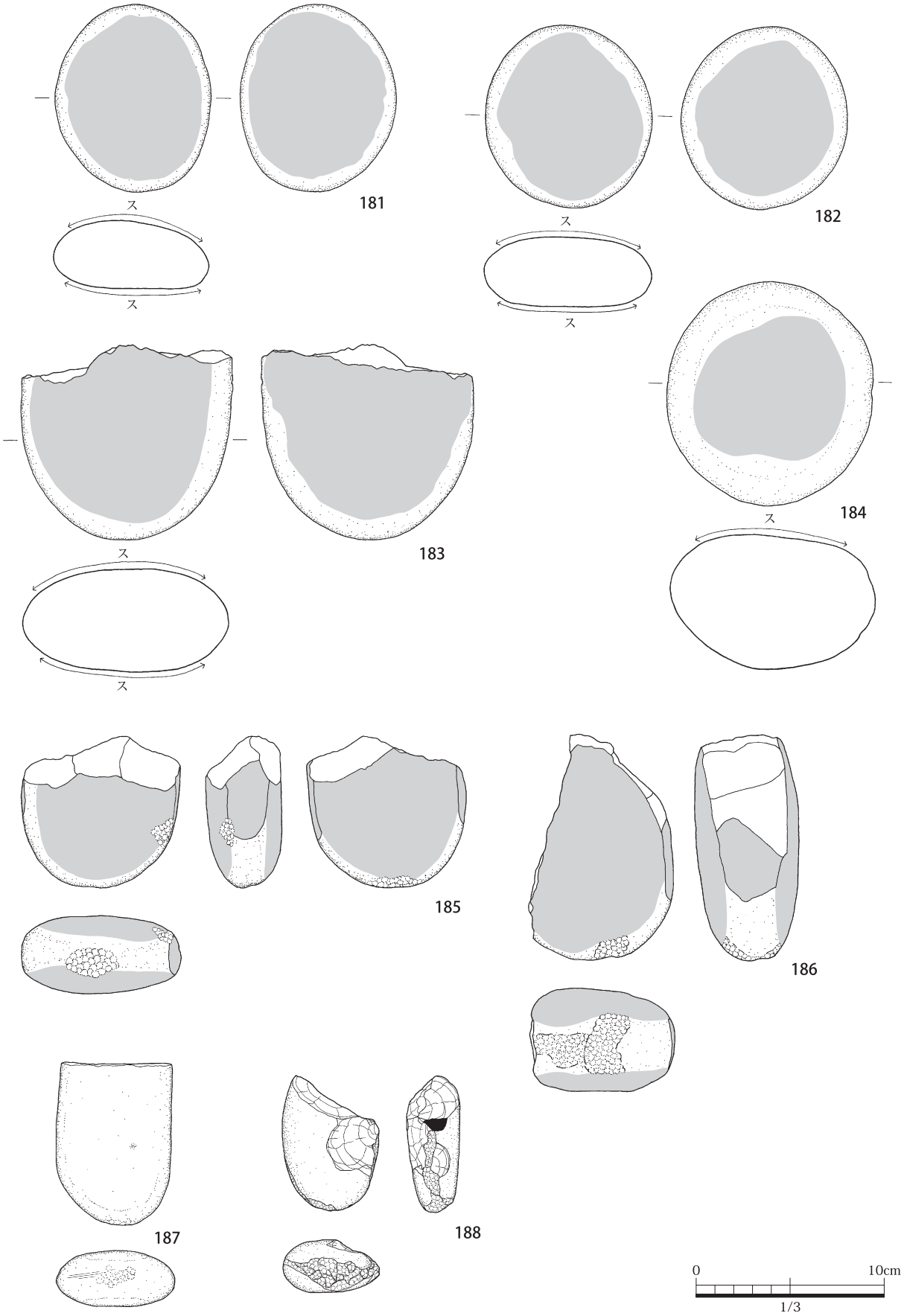
第 47 図　縄文時代早期出土遺物実測図(10)



第 48 図　縄文時代早期出土遺物実測図（11）



第 49 図　縄文時代早期出土遺物実測図（12）



第 50 図　縄文時代早期出土遺物実測図（13）

第 19 表　縄文時代早期石器計測表（1）

挿図番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm、g)				備　　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
76	5－2S	Ⅳ	石鏃	黒曜石	1.5	1.5	0.2	0.4	(黒・霧島産？)正面右脚側に節理
77	5－2S	Ⅲ	石鏃	チャート	2.2	1.7	0.6	1.7	(赤茶色チャート)正面に多く調整を施し、裏面はサイドに最小限の調整で終わるずんぐりした形状である
78	5－2S	Ⅲ	石鏃	チャート	2.3	1.6	0.4	1.1	(黒灰色チャート)正面右脚脇欠損、ほぼ中央を斜傾して節理が走るが良質。調整は、やや不規則
79	5－2N	Ⅲ	石鏃	チャート	1.8	1.2	0.3	0.5	(灰緑色チャート)正面右脚先欠損。調整は、サイドは規則的
80	5－2S	Ⅲ	石鏃	チャート	2.2	1.5	0.3	0.6	(透白色系チャート)正面右脚先欠損良質で不純物が少ないため、リングが明瞭　ＳＰ８より出土
81	5－2S	Ⅲ	石鏃	チャート	1.4	1.0	0.3	0.3	(透白色系チャート)正面左脚欠損、正面側の断面はふくれる
82	5－2N	Ⅲ	石鏃	チャート	2.1	1.6	0.5	1.3	(透白色系チャート)正面左脚欠損
83	5－2S	Ⅲ	石鏃	無光沢チャート	3.5	2.9	1.1	10.4	(黒色チャート)石材自体に多くの節理が入り、それに沿って剥離する部分もある。正面中央に調整が多い
84	5－2S	Ⅲ	石鏃	チャート	3.4	2.9	0.7	4.8	(灰緑色チャート)正面・裏面ともに、節理により剥離が不規則になる部分が多い
85	5－2S	Ⅲ	掻器	チャート	2.8	2.3	0.8	6.4	(灰白チャート)左側縁は交互に剥離。やや部厚めの剥片を使用
86	5－2S	Ⅲ	掻器	流紋岩	5.6	6.2	1.4	47.4	(珪質頁岩)円礫核の大きな剥片を、左右の側縁を加工
87	5－2S	Ⅲ	スクレイパー	ホルンフェルス	4.8	6.4	1.4	54.7	
88	5－2S	Ⅲ	スクレイパー	ホルンフェルス	6.8	6.0	1.2	50.8	
89	5－2S		スクレイパー	ホルンフェルス	6.5	5.9	1.5	70.4	ＳＩ８より出土
90	5－2S	Ⅳ	掻器	無光沢チャート	3.6	4.7	1.7	28.3	刃部は両面から調整され、交互剥離状剥離のリングが明瞭
91	5－2S	Ⅲ	掻器	ホルンフェルス	6.5	7.2	2.8	144.0	裏面にほとんど調整はみられない
92	5－2S	Ⅲ	石斧	砂岩	8.3	5.7	1.9	128.3	
93	5－2S	Ⅲ下	剥片	ホルンフェルス	4.0	7.8	1.4	42.9	
94	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	5.7	8.6	4.5	333.0	(頁岩)裏面中央は平滑に仕上げられる
95	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス？	9.0	10.5	5.8	707.5	(頁岩)下位に向い、階段状剥離が著しい
96	5－2S	Ⅱ	掻器	ホルンフェルス	6.4	7.4	3.2	169.0	大剥離の後、小剥離作業を片面に行う
97	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	6.4	6.4	4.1	229.0	(頁岩)スクレイパーの可能性あり
98	5－2S	Ⅲ	掻器	尾鈴山溶結凝灰岩	9.0	10.6	5.4	635.0	上面側には大きな剥離が残る。円礫の2／3程度の成品
99	5－2S	Ⅲ	掻器	ホルンフェルス	6.5	7.4	3.8	269.5	下位の刃部になるほど、剥離は小さい
100	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	7.4	7.1	4.2	261.7	
101	5－2S	Ⅳ	石核	ホルンフェルス	7.9	8.6	5.6	470.5	上部は大きな剥離であり、下位の縁には小剥離が認められる。
102	5－2S	Ⅱ層下部～Ⅲ層上部	石核	ホルンフェルス	5.0	5.5	3.1	110.5	(頁岩)上面の一部に刃部かと考えられる部分あり。小形の円礫を利用
103	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	7.0	8.0	4.1	237.5	大ぶりな剥離痕が残るが、側縁は階段状剥離も多い
104	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	6.7	7.5	4.0	233.0	裏面に大きな剥離がみられる。
105	5－2S	Ⅲ	石核	ホルンフェルス	7.2	6.7	6.5	352.0	拳小程度の円礫。大きな剥離は底面の一枚
106	5－2S	Ⅳ上	石核	頁岩	3.9	5.2	1.8	60.8	(正面には大ぶりな剥片採取がうかがえ、上面には転石時の剥離痕が残る
107	5－2S	Ⅲ	石斧	砂岩	15.6	8.7	1.7	340.0	
108	5－2S	Ⅲ	石斧	ホルンフェルス	11.7	5.2	2.2	175.5	中央には浅い抉りを施す。円礫を利用
109	5－2S	Ⅲ	石斧	ホルンフェルス	7.8	3.4	1.9	7.0	側縁の調整が著しい
110	5－2S	Ⅲ	石斧	ホルンフェルス	11.0	4.8	3.3	180.0	

第 20 表　縄文時代早期石器計測表（２）

挿図番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm、g)				備　　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
111	5－2S	Ⅲ	石斧	ホルンフェルス	7.2	4.3	2.7	117.5	風化が著しい。リダクションしている
112	5－2S	Ⅲ	石斧	ホルンフェルス	6.1	4.6	2.4	84.9	
113	5－2S	Ⅲ	石斧	砂岩	6.5	4.4	1.2	32.2	
114	5－2S	Ⅲ	剥片	砂岩	7.3	6.0	1.7	90.4	
115	5－2S	Ⅱ	剥片	ホルンフェルス	4.9	5.1	1.2	36.6	
116	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	5.9	10.9	2.2	179.0	
117	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	4.0	8.1	1.7	44.4	
118	5－2S	Ⅳ上	粗製剥片石器	砂岩	5.7	9.6	1.5	109.0	
119	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	6.2	8.8	1.8	103.3	
120	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	5.3	8.3	1.6	84.0	
121	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	7.1	11.4	1.6	153.8	ＳＩ８より出土
122	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	4.8	7.6	1.0	40.4	
123	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	3.5	6.7	0.6	19.0	
124	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.5	5.7	1.0	29.0	
125	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.0	6.3	1.0	33.4	
126	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.7	9.0	2.0	123.9	
127	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.8	6.3	1.6	46.7	
128	5－2S	Ⅲ	スクレイパー	砂岩	8.2	9.4	1.9	159.3	
129	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	7.0	10.5	1.8	155.2	
130	5－2N		粗製剥片石器	砂岩	4.4	7.5	1.1	40.6	
131	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	6.2	8.0	1.8	96.8	
132	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	6.3	7.1	1.5	20.0	
133	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	7.7	8.1	1.2	71.8	
134	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	6.3	6.0	1.0	34.6	
135	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	6.5	5.1	1.2	49.4	
136	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	3.7	5.1	0.7	14.9	
137	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	2.6	4.6	0.5	6.9	
138	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	4.5	6.9	1.0	37.2	
139	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.9	8.2	1.1	64.4	
140	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.6	7.2	1.7	64.3	
141	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.5	8.3	1.1	62.7	
142	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	砂岩	5.5	8.8	1.8	97.0	
143	5－2S	Ⅳ上	粗製剥片石器	砂岩	7.0	9.9	2.8	232.0	ＳＩ４より出土
144	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	ホルンフェルス	8.9	10.5	2.1	231.9	
145	5－2S	Ⅲ	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	10.9	13.9	3.2	622.5	
146	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	4.4	4.5	1.0	22.3	
147	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.7	4.6	0.9	14.9	やや幅広の剥片
148	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	5.0	5.8	1.8	62.2	石核の剥片
149	5－2S	Ⅲ	剥片	チャート	2.9	2.2	1.0	6.2	

第 21 表　縄文時代早期石器計測表（3）

挿図番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm、g)				備　　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
150	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	2.5	3.6	0.9	6.1	
151	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.4	6.7	1.4	28.2	
152	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	5.6	4.5	1.0	17.9	
153	5－2S	Ⅳ	剥片	ホルンフェルス	6.3	5.9	2.1	83.8	
154	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	4.3	8.4	1.2	45.7	
155	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	5.7	6.5	2.3	50.0	
156	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	6.6	3.1	1.6	32.9	幅広の剥片
157	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	5.9	5.3	3.4	92.4	石斧の欠損品か
158	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	9.0	3.5	1.8	54.1	
159	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	5.9	5.3	1.9	52.8	
160	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	5.2	4.8	1.3	34.0	
161	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	8.8	5.5	2.5	131.5	打製石斧折損後の転用？
162	5－2N	Ⅳ	剥片	チャート	1.1	0.7	0.2	0.2	
163	5－2S	Ⅲ	二次加工剥片	チャート	1.7	1.2	0.2	0.5	
164	5－2N	Ⅳ	剥片	黒曜石	1.3	1.9	0.5	1.2	桑ノ木津留産？（透度高く、気泡含む）
165	5－2N	Ⅲ	剥片	黒曜石	2.1	1.5	0.7	1.9	桑ノ木津留産？（透度高く、気泡含む）
166	5－2N	Ⅲ	剥片	黒曜石	1.7	1.0	1.0	1.4	（霧島産？）正面には古い段階の剥離が残る
167	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	4.1	3.3	1.2	16.6	
168	5－2S	Ⅲ	剥片	頁岩	3.2	3.2	1.2	10.4	
169	5－2S	Ⅲ	剥片	頁岩	4.2	3.9	0.9	12.8	使用剥片か
170	5－2S	Ⅲ	剥片	流紋岩	3.0	2.6	0.4	2.9	
171	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.3	2.4	0.8	7.9	
172	5－2S	Ⅲ	剥片	頁岩	3.9	3.2	0.7	8.3	
173	5－2S	Ⅳ	剥片	ホルンフェルス	2.9	2.3	6.8	3.9	
174	5－2S	Ⅲ	二次加工剥片	頁岩	2.9	2.8	1.0	0.7	
175	5－2S	Ⅲ	二次加工剥片	チャート	2.3	1.3	0.3	0.7	
176	5－2S	Ⅲ	剥片	無光沢チャート	2.9	1.7	1.2	7.4	裏面上部に節理面が残る
177	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	2.3	2.0	0.7	2.9	
178	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	1.5	1.9	0.3	0.7	
179	5－2S	Ⅲ	二次加工剥片	頁岩	3.6	3.8	1.2	14.5	
180	5－2S	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.0	4.1	0.8	9.1	
181	5－2S	Ⅲ	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	10.0	8.3	3.6	450.9	
182	5－2S	Ⅲ	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	9.7	8.9	3.7	481.4	
183	5－2S	Ⅲ	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	10.4	10.4	5.5	967.3	ＳＩ７より出土
184	5－2S	Ⅲ	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	12.0	11.1	7.2	1423.9	
185	5－2S	Ⅲ	磨・敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	8.1	8.4	4.2	388.6	
186	5－2S	Ⅲ	磨・敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	12.1	7.7	5.5	699.5	
187	5－2N	Ⅲ	磨・敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	8.8	6.2	3.0	263.6	ＳＩ３より出土
188	5－2S	Ⅲ	敲石	砂岩	7.3	5.2	2.9	121.6	

第４節　弥生～古墳時代の遺構と遺物

第２地点Ｓ区の東側の調査区境界付近で竪穴建物跡の一部を確認した。また、Ｓ区Ｃ11グリッド東壁土層断面（第27図）で竪穴建物跡とみられる掘り込みが確認された。調査区のⅡ層中から弥生土器および土師器が少量出土しているものの当該時期の遺構に伴う遺物は確認できなかった。建物跡は集石遺構の広がりを確認するため東側の境界付近まで拡張した際、検出された。造成のためⅡ層下部まで削平されていたため、床面付近での検出となった。

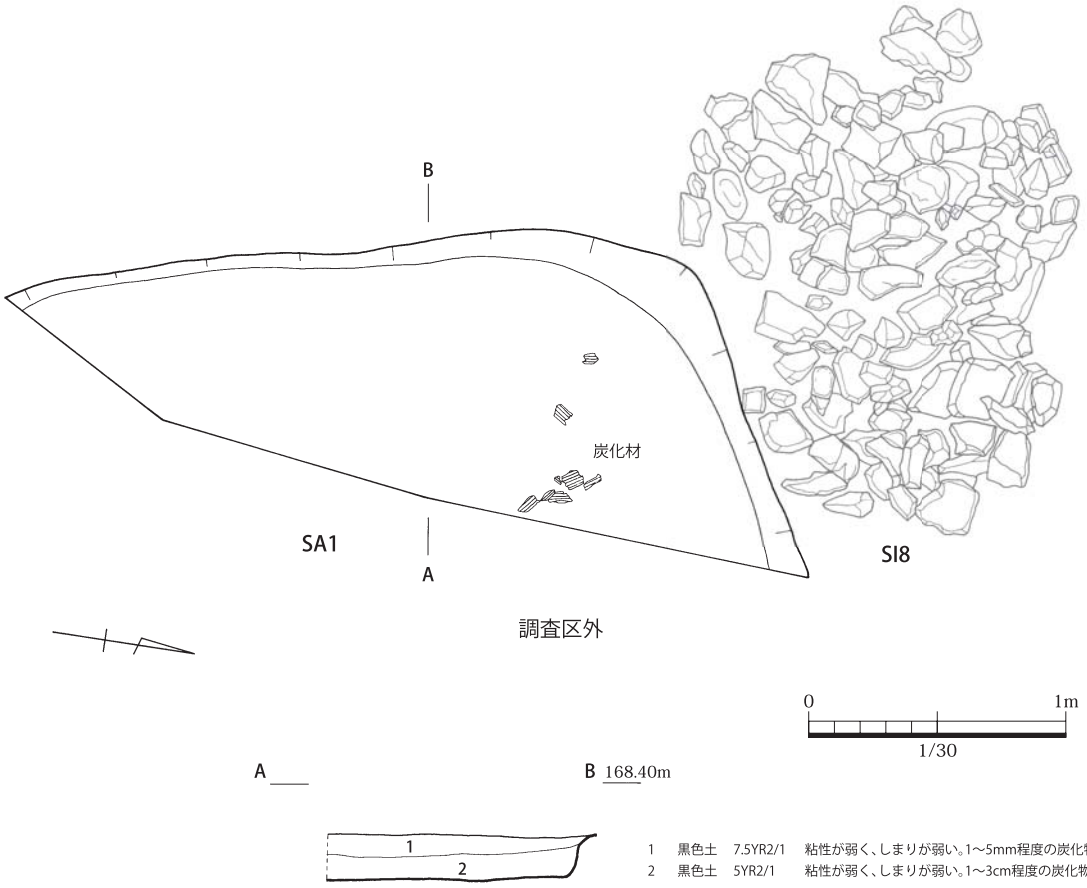
１　遺構

１号竪穴建物跡（SA1）（第31図）

第２地点Ｓ区、調査区東側で、焼失竪穴建物跡の一部とみられるコーナーが確認された。建物跡は縄文時代早期の集石遺構（ＳＩ８）を切って構築されている。床面北側には大きめの炭化物片がまとまって出土しており、放射性炭素年代測定および樹種同定を行っている。測定年代は1,820±20年BPを示す。炭化材の樹種はクリであることが確認された。分析の詳細は第５節に記載している。竪穴建物跡の大部分は調査区外へ広がっていると考えられる。現存規模は、長軸約1.2m、短軸約0.7m、検出面からの深さ約0.1mを測る。遺構は調査区境界の壁面の土層に段差が確認される箇所があったことから花弁状住居跡の可能性も考えられる。

２号竪穴建物跡（SA２）（第27図）

竪穴建物跡はトレンチと攪乱のため、消失しており詳細は不明である。現存長約3.3m、深さ約0.4mを測る。貼床と考えられる埋土堆積状況や焼土粒の残存が認められた。



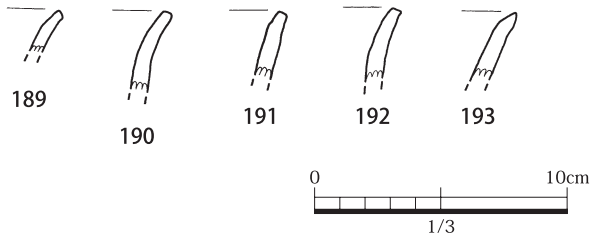
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性が弱く、しまりが弱い。1～5mm程度の炭化物粒をわずかに含む。
2　黒色土　5YR2/1　粘性が弱く、しまりが弱い。1～3cm程度の炭化物を含む。

第51図　Ｓ区ＳＡ１実測図

2　遺物

土器（第52図・第22表　189～193）

弥生時代～古墳時代と考えられる土器５点を図化した。すべて甕ないし壺の口縁部である。189・192の端部は面取りされる。189・191は外面にススの付着が認められる。190はやや外反気味である。191の口縁は丸くおさめられる。193はやや尖り気味である。



第 52 図　出土土器実測図

第 22 表　出土土器観察表

挿図番号	調査区	出土層位	器種	部位	文様・調整等		色　調		胎　土	備　考
					外　面	内　面	外　面	内　面		
189	5－2S	Ⅲ層	甕or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	にぶい橙（10YR7/4）	浅黄橙（10YR8/4）	1 mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む	外面スス付着
190	5－2S	Ⅲ層	甕or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	黒褐色（7.5YR3/1）	明赤褐色（5YR5/6）	2 mm以下の灰白色粒、1mm以下の半透明光沢粒を含む	
191	5－2S	Ⅲ層	甕or壺	口縁	横ナデ・スス付着	横ナデ	黒褐色（5YR2/1）	にぶい黄橙（10YR7/4）	3mm以下の灰白色粒をわずかに含む 1mm以下の赤橙色粒、微細な透明粒を含む	
192	5－2S	Ⅲ層	甕or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	橙（7.5YR6/8）	橙（7.5YR6/6）	2mm以下の灰白色粒をわずかに含む、1mm以下の黒色・半透明光沢粒を含む	
193	5－2S	Ⅲ層	甕or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	橙（5YR7/8）	橙（5YR7/8）	2mm以下の灰白色粒をわずかに含む、1mm以下の黒色・半透明光沢粒をわずかに含む	

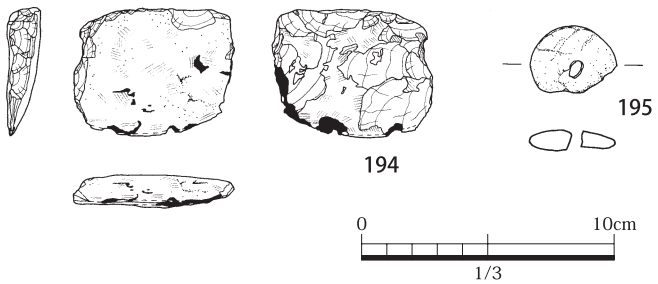
石器（第53図・第23表）

石庖丁（194）

石材は頁岩である。左側縁に抉りの可能性がある剥離が認められ、下縁に擦痕が観察される。裏面の大部分は欠損している。断定はできないが、石斧様の石器を再利用した石庖丁の可能性が考えられるためここに掲載した。

不明石器（第53図195）

先行するトレンチ調査の際、出土したものである。調査者は穿孔のある石器と報告していたものであるが、人為的な加工痕跡が認められないことなどからノジュールの核である可能性も考えられる。



第 53 図　出土土器実測図

第 23 表　出土石器計測表

挿図番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm、g)				備　　考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
194	5－2S	Ⅲ	石庖丁	頁岩	5.1	6.4	1.3	54.3	
195	5－2N	Ⅲ	不明石器	チャート	2.7	3.4	0.9	12.2	ノジュールの核か

第５節　自然科学分析の結果

向原中尾第５遺跡では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定を実施した。

放射性炭素年代測定は遺構の年代の確認を目的とし、炉穴、集石遺構、竪穴建物跡から出土した炭化材を対象とした。また、木材の利用を検討するための樹種同定および炉穴から出土した種実遺体を対象とし、植物利用や古植生を検討するため、種実同定を実施した。

１．炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定

（１）試料

試料は、炉穴（ＳＰ５,８,32)、集石遺構（ＳＩ６)、竪穴建物跡（ＳＡ１）から出土した炭化材5点（試料番号４～８）である。いずれの試料も炭化材の小片が複数認められる。１片での年代測定が難しいことから、先に樹種同定を実施し、複数種類の有無を確認した上で、同じ種類を集めて年代測定試料とする。

（２）分析方法

①放射性炭素年代測定

試料に土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理)。試料をバイコール管に入れ、１gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（２時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径１mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、１年単位で表している。暦年較正は、測定誤差σ、２σ（σは統計的に真の値が68%、２σは真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、２σの範囲をそれぞれ１とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

②樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

第 24 表　放射性炭素年代測定結果

番号 遺構等	材質 （種類）	処理 方法	測定年代 BP	δ13C （‰）	補正年代 （暦年較正用） BP	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
No.4 SP5 焼土集中区	炭化材 （クリ）	AAA	9,210±30	−27.04 ± 0.51	9,180±40 （9,180±35）	σ	cal BC 8,436 − cal BC 8,368	cal BP 10,385 − 10,317	0.557	IAAA− 130202
							cal BC 8,352 − cal BC 8,304	cal BP 10,301 − 10,253	0.443	
						2σ	cal BC 8,533 − cal BC 8,516	cal BP 10,482 − 10,465	0.032	
							cal BC 8,479 − cal BC 8,294	cal BP 10,428 − 10,243	0.968	
No.5 SP8 Ⅲ層	炭化材 （クリ）	AAA	9,180±40	−26.16 ± 0.58	9,160±40 （9,161±36）	σ	cal BC 8,426 − cal BC 8,402	cal BP 10,375 − 10,351	0.200	IAAA− 130203
							cal BC 8,394 − cal BC 8,371	cal BP 10,343 − 10,320	0.185	
							cal BC 8,351 − cal BC 8,296	cal BP 10,300 − 10,245	0.614	
						2σ	cal BC 8,526 − cal BC 8,521	cal BP 10,475 − 10,470	0.006	
							cal BC 8,468 − cal BC 8,286	cal BP 10,417 − 10,235	0.994	
No.6 SP32	炭化材 （コナラ節）	AAA	8,050±30	−27.11 ± 0.57	8,020±30 （8,018±34）	σ	cal BC 7,057 − cal BC 7,022	cal BP 9,006 − 8,971	0.292	IAAA− 130204
							cal BC 7,012 − cal BC 7,006	cal BP 8,961 − 8,955	0.031	
							cal BC 6,969 − cal BC 6,945	cal BP 8,918 − 8,894	0.155	
							cal BC 6,936 − cal BC 6,914	cal BP 8,885 − 8,863	0.165	
							cal BC 6,882 − cal BC 6,834	cal BP 8,831 − 8,783	0.357	
						2σ	cal BC 7,063 − cal BC 6,821	cal BP 9,012 − 8,770	1.000	
No.7 SI6	炭化材 （コナラ節）	AAA	9,480±40	−25.87 ± 0.52	9,460±40 （9,463±37）	σ	cal BC 8,801 − cal BC 8,707	cal BP 10,750 − 10,656	0.930	IAAA− 130205
							cal BC 8,668 − cal BC 8,657	cal BP 10,617 − 10,606	0.070	
						2σ	cal BC 9,112 − cal BC 9,085	cal BP 11,061 − 11,034	0.028	
							cal BC 9,049 − cal BC 9,025	cal BP 10,998 − 10,974	0.023	
							cal BC 8,839 − cal BC 8,632	cal BP 10,788 − 10,581	0.950	
No.8 SA1	炭化材 （クリ）	AAA	1,820±20	−26.83 ± 0.51	1,790±30 （1,792±25）	σ	cal AD 142 − cal AD 150	cal BP 1,808 − 1,800	0.048	IAAA− 130206
							cal AD 170 − cal AD 193	cal BP 1,780 − 1,757	0.181	
							cal AD 210 − cal AD 257	cal BP 1,740 − 1,693	0.631	
							cal AD 301 − cal AD 317	cal BP 1,649 − 1,633	0.139	
						2σ	cal AD 134 − cal AD 260	cal BP 1,816 − 1,690	0.822	
							cal AD 282 − cal AD 324	cal BP 1,668 − 1,626	0.178	

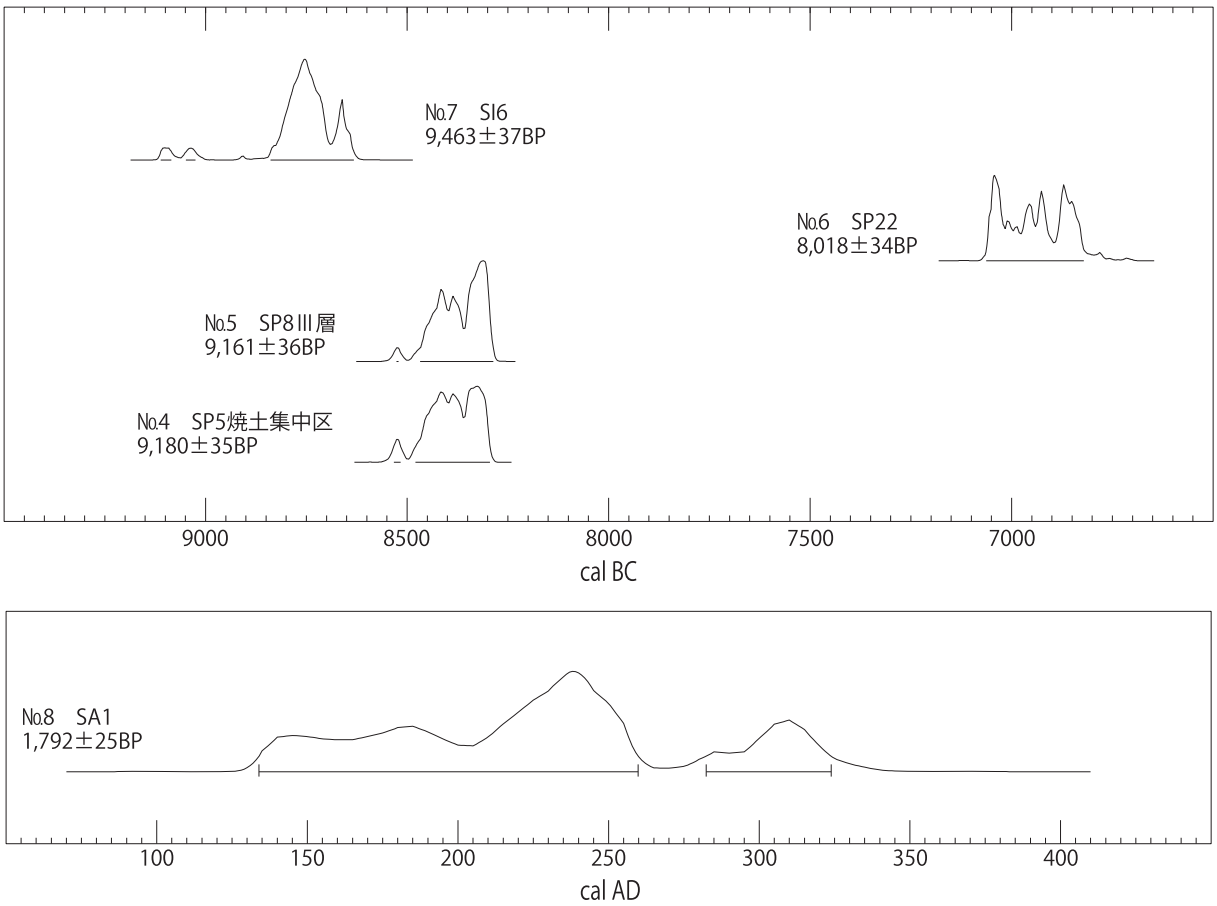
1）処理方法のAAAは、酸処理−アルカリ処理−酸処理を示す。
2）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
3）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
4）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。
5）暦年の計算には、RADIO CARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
6）暦年の計算には、補正年代に（　）で暦年較正用年代として示した、１桁目を丸める前の値を使用している。
7）年代値は、１桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は１桁目を丸めていない。
8）統計的に真の値が入る確率はσは68.3％、２σは95.4％である。
9）相対比は、σ、２σのそれぞれを１とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

（3）結果

①放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表24、第54図に示す。同位体効果の補正を行った補正年代は、試料番号４が9,180±40BP、試料番号５が9,160±40BP、試料番号６が8,020±30BP、試料番号7が9,460±40BP、試料番号81,790±30BPを示す。

また、測定誤差を２σで計算した暦年較正結果（確率１）は、試料番号４がcalBC8,479～8,294、試料番号５がcalBC8,468～8,286、試料番号６がcalBC7,063～6,821、試料番号７がcalBC8,839～8,632、試料番号８がcalAD134～260である。



第 54 図　暦年較正結果

②樹種同定

樹種同定結果を表25に示す。各試料は、いずれも数mm角の炭化材が複数片認められる状態であった。この中から、相対的に大きく、状態の良い炭化材から順に各５点を抽出して樹種同定を実施した。これらの炭化材は、広葉樹２分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ）に同定された。基本的に、各試料で単一の種類構成となるが、試料番号６では炭化材の他に樹皮が認められた。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*）ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*）ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

第 25 表　樹種同定結果

番号	遺　構	位置・層位	点数	状態	種　類	備　考
4	SP5(炉穴)	焼土集中区	5	小破片	クリ(5)	年代測定資料
5	SP8(炉穴)	Ⅲ層	5	小破片	クリ(5)	年代測定資料
6	SP32(炉穴)		5	小破片	コナラ属コナラ属コナラ節(2)	年代測定資料
					樹皮(3)	
7	SI6(集石遺構)		5	小破片	コナラ属コナラ属コナラ節(2)	年代測定資料
8	SA1(竪穴建物跡)		5	小破片	クリ(5)	年代測定資料

1）種類名の（　）内の数字は同定点数を示す。

（４）考察

①遺構の年代

炉穴３基、集石遺構１基、竪穴建物跡１軒から出土した炭化材を対象として放射性年代測定を実施した。縄文時代早期の遺構と考えられる炉穴と集石遺構は、補正年代が9,460±40BP～8,020±30BPを示しており、発掘調査所見とも矛盾しない。

遺構別にみると、炉穴３基のうち、SP５焼土集中区の炭化材の補正年代は9,180±40BP、BP８Ⅲ

層の炭化材の補正年代は9,160±40BPで近接している。暦年較正の結果も考慮すれば、SP５とSP８はほぼ同時期の炉穴と考えられる。一方、SP32の炭化材の補正年代は8,020±30BPであり、SP５およびSP８よりも約1100～1200年ほど新しい時期の炉穴の可能性がある。また、集石遺構SI６の炭化材は、補正年代が9,460±40BPであり、暦年較正結果をみても、SP５やSP８よりも若干古い時期の遺構と考えられる。

竪穴建物跡SA１は、アカホヤを含んだ貼り床を持ち、炭化材は床面から出土している。平面プランから弥生時代～古墳時代の住居と考えられる。炭化材の補正年代は1,730±30BPで、暦年較正結果は２～３世紀頃の年代を示しており、調査所見とも調和的である。九州地方の年代測定の事例（西本,2006）と比較すると、住居跡は弥生時代後期～古墳時代前期頃の可能性がある。

②木材利用

炭化材は、コナラ節とクリに同定された。いずれも二次林等を構成する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。

遺構別に見ると、炉穴ではSP５とＳＰ８がクリ、SP32がコナラ節と樹皮であり、いずれも周辺で入手可能な木材を利用したと考えられる。年代測定の結果を考慮すると、同時期と考えられるSP５とSP８がいずれもクリで、それよりも新しい時期と考えられるSP32がコナラ節となることから、時期によって木材利用が異なった可能性がある。

集石遺構SI６は、年代測定の結果からSP５やSP８よりも若干古い時期の可能性がある。コナラ節が利用されており、クリが利用されるSP５やSP８とは木材利用が異なる。この違いが炉穴と集石遺構での違いを示すのか、時期による違いを示すのかは、今後の資料蓄積が課題である。

竪穴建物跡SA１の炭化材は、床面から出土していることから、構築部材の可能性がある。全て小破片のため、本来の形状は不明であるが、全てクリに同定されており、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。

宮崎県内では、薄糸平遺跡、熊野原遺跡、前原北遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期頃の住居跡出土炭化材の樹種同定が実施されている（伊東・山田,2012）。その結果をみると、薄糸平遺跡ではカエデ属やヤマボウシを中心にケヤキ、シデ類、ヤブニッケイ、熊野原遺跡ではクヌギを中心にカシ属（アカガシ亜属）、コナラ、クリ、タブ、ハイノキ、モッコク、前原北遺跡ではカシ属、イスノキ、タブが確認されており、今回確認されたクリも報告されている。全体的に強度の高い木材が多く利用される傾向があり、その点は本遺跡の結果も調和的といえる。

２　種実同定

（１）試料

試料は、炉穴SP5の埋土中（試料番号1；3個）、焼土集中区（試料番号２；１個）と、炉穴SP８の埋土中（試料番号３；９個）より出土した種実遺体３試料13個である（表S）。種実遺体は、土壌の水洗選別（フローテーション）により回収されており、乾燥した状態で容器に入っている。

（２）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等を参考に実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、種実遺体を容器に入れて返却する。

（３）結果

木本２分類群（落葉広葉樹のカラスザンショウ、イヌザンショウ）２個、草本のキンバイザサ１個、計３個の種実が同定された（表３）。種実以外では、SP５の埋土中（番号１）、焼土集中区（番号２）から、芽と考えられる植物遺体が各１個と、SP８の埋土中（番号３）から、菌核が８個確認された。

第 26 表　種実同定結果

番号	対象遺構	分類群	部位	個数	長さ	幅	厚さ	備考
1	SP5埋土中	カラスザンショウ	種子	1	2.7	2.3	2.1	
		キンバイザサ	種子	1	2.8	2.1	1.6	
		種実ではない	芽？	1	7.1	3.7	2.5	
2	SP5焼土集中区	種実ではない	芽？	1	5.9	2.0	1.8	
3	SP8埋土中	イヌザンショウ	種子	1	2.9	2.1＋	2.3	臍欠損
		菌類	菌核	8				

種実遺体は、SP５の埋土中（番号１）から、高木のカラスザンショウの種子が１個、多年草のキンバイザサの種子が１個と、SP８の埋土中（番号

３）から、低木のイヌザンショウの種子が１個確認された。なお、SP５の焼土集中区（番号２）からは、同定が可能な種実は確認されなかった。

種実遺体の写真を図版1に示し、形態的特徴等を以下に述べる。

・カラスザンショウ（*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.）ミカン科サンショウ属

種子は黒色、長さ2.7mm、幅2.3mm、厚さ2.1mmのやや偏平な非対称広倒卵体。腹面正中線上に広線形の臍がある。種皮は厚く硬く、表面に深く大きな網目模様がある。

・イヌザンショウ（*Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc.）ミカン科サンショウ属

種子は黒色、長さ2.9mm、残存幅2.1mm、厚さ2.3mmのやや偏平な非対称広倒卵体。腹面正中線上にある広線形の臍を欠損する。種皮は厚く硬く、表面にはカラスザンショウよりも細かく、サンショウよりも粗い網目模様がある。

・キンバイザサ（*Curculigo orchioides Gaertn.*）キンバイザサ科キンバイザサ属

種子は黒色、長さ2.8mm、幅2.1mm、厚さ1.6mmの楕円体。基部の片側から、長さ0.9mmの鉤状の太い突起が出る。種皮は硬く、断面は柵状。突起以外の表面には、多数の細い縦隆条が配列し、まばらに縦長の網目模様が形成される。

（4）考察

種実遺体は、炉穴SP５の埋土中からカラスザンショウ、キンバイザサと、炉穴SP８の埋土中からイヌザンショウが各1個確認された。高木のカラスザンショウや低木のイヌザンショウは、伐採地や崩壊地、林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する陽樹で、キンバイザサは、暖地の山林内に生育する多年草である。

SP５とSP８は同時期の遺構と考えられ、これらの種実遺体は当時の遺跡周辺に生育していたことが推定される。種子が小型で各1個のみであることから、意図的に燃料などに利用したのではなく、周囲に生育していた樹木から炉穴内に落ちた種実が燃焼時に炭化・残存したものと考えられる。

引用文献

林　昭三,1991,日本産木材　顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学　出土木製品用材データベース.海青社,449p.

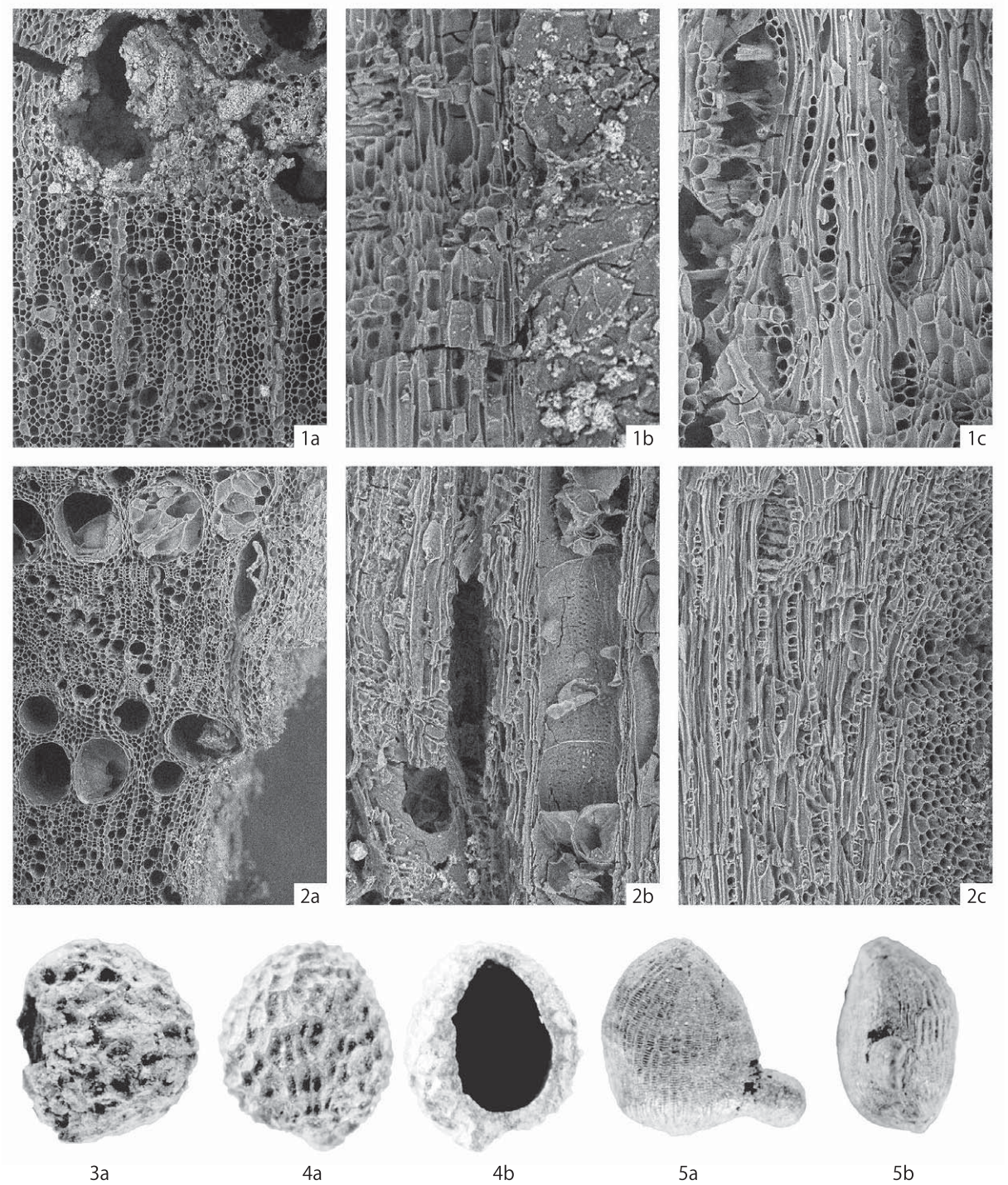
中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

西本豊弘(編),2006,弥生時代の新年代.新弥生時代のはじまり第1巻,雄山閣,143p.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修),海青社,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節（試料番号6；SP32）　a：木口, b：柾目, c：板目
2. クリ（試料番号5；SP8Ⅲ層）　a：木口, b：柾目, c：板目
3. カラスザンショウ 種子（試料番号1；SP5 埋土中）
4. イヌザンショウ 種子（試料番号3；SP8 埋土中）
5. キンバイザサ 種子（試料番号1；SP5 埋土中）

100μm：1-2a
100μm：1-2b,c
1mm：3-5

第 55 図　炭化材・炭化種実

第６節　小結

向原中尾第５遺跡第２地点（Ｎ・Ｓ区）では、後期旧石器時代から古墳時代までの遺構･遺物が確認された。本節では（１）後期旧石器時代、（２）縄文時代早期、（３）弥生時時代～古墳時代について若干の検討を加えていくことでまとめとしたい。

１　後期旧石器時代

遺物の分布　第５遺跡第２地点ではＳ区においてⅣ層の褐色土（第１地点Ⅲ層・向原中尾第６遺跡Ⅱ層相当）中から後期旧石器時代の可能性がある遺物が確認された。縄文時代早期の遺物包含層Ⅲ層下部との間に遺物が混在する状況にあり、型式・形態から後期旧石器時代の可能性が考えられるものを抽出した。

北向き緩斜面に位置するＮ区では、縄文時代早期の集石遺構の調査を終了後、調査区内の25％程度までトレンチ掘削作業を行い、また、北側（向原中尾第３遺跡側）（第30図）への拡張を行ったものの基盤層にあたるⅦ層までの間に旧石器時代の遺構･遺物は確認されなかった。向原中尾第４遺跡に隣接するＳ区は傾斜地のため、土層の堆積状況が良好とはいえず、ＡＴ（姶良Ｔｎ火山灰層）の堆積も確認されなかった。第２地点では後期旧石器時代の遺構は検出されていない。

石器について　第２地点で確認された器種は製品として、ナイフ形石器２、剥片尖頭器１、角錐状石器１、台形様石器１である。その他は、剥片・砕片である。整理作業の際、隣接する向原中尾第４遺跡出土の石器との接合を試みたが、接合関係は認められなかった。利用石材はホルンフェルスを主体とし、頁岩、流紋岩、チャートと続く。主として調査区南側の向原中尾第４遺跡隣接地での出土でありキャンプサイト的な性格がうかがえる。

２　縄文時代早期

遺構について　向原中尾第５遺跡の主体となる時期である。Ⅲ層中の上部から下部にかけて集石遺構13基（Ｎ区６基、Ｓ区７基）ならびに炉穴33基（すべてＳ区）が検出されている。調査区の東西両壁で遺構の一部が確認されていることから、集石遺構も炉穴も周辺に分布域が広がっていくものと考えられる。

Ｎ区で調査区北側の緩やかな北斜面に集石遺構５基（ＳＩ１～５）と南東のＢ２～Ｂ３グリッドにⅣ類のＳＩ６が構築されている。構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩であり、遺跡近隣で採取が容易な石材を利用したものと推定される。ＳＩ１～５は掘込みをもたないＩ類に分類され、構成礫の大部分は小円礫や破砕礫、１個のみ大型の焼礫である。集石遺構使用後廃棄されたもの、集石の準備礫の可能性が考えられる。

Ｓ区の集石遺構７基の分布はＳ区で検出された７基の集石遺構のうち５基（ＳＩ７～11）は炉穴の分布域と重なる。標高約169m付近の傾斜が緩やかな南斜面に立地している。ＳＩ12・13は炉穴の分布域からは、はずれるが、等高線が密になる手前の傾斜変化点に構築されている。Ｓ区の11号集石遺構（ＳＩ11）は27号炉穴（ＳＰ27）が埋没した後に構築されていることが切り合い関係から確認された。

Ｎ区・Ｓ区ともに集石遺構を構成する礫は尾鈴山溶結凝灰岩であり遺跡周辺の露頭でも採取できる手近なものである。

炉穴はＳ区のみで検出され、33基を数える。調査区の最高所（標高169m）付近を囲むように分布し、調査区北端の等高線のゆるやかな南斜面、Ｂ９・Ｃ９グリッドにその大半が広がっている。現地での調査所見から少なくとも２群以上（①ＳＰ１～４・６～20・22･23。②ＳＰ８・18・24～28・32）のまとまりがみられる。①は調査区内の標高所に位置し、ほぼ等高線に平行して分布する。東西とも調査区外へ広がりが確認され、現状で21基が検出されている。

平面形態は細長く検出面からの深さも浅い。埋土には焼土粒が混じる程度であり、明瞭な炭化物も認められなかった。②は①の南西に位置する。先行トレンチで消失した炉穴もあり、８基の切り合いが確認された。炉穴は等高線に直交して分布している。①の炉穴と比較し平面形の最大幅が大きく、検出面からの深さが深くなるものが多い。また、炭化物の残存が良好である。ＳＰ５・８・21･33はほぼ単独で構築された炉穴である。平面形は①②と比べ大きく楕円もしくは隅丸方形を呈する。検出面か

らの深さが約30～80cmと深く、焼土の堆積も厚く２～10cmを測る。焼土部分の埋土は堅くしまる。ＳＰ８の埋土中から貝殻条痕文系土器やチャート製の石鏃が出土している。

出土土器・石器について　縄文土器の大部分はＳ区の遺物包含層であるⅢ層からⅣ層上部にかけて出土している。大きくは貝殻文円筒形土器と回転施文の土器群が出土している。Ⅰ類とした前平式系土器、Ⅱ類の知覧式系土器、Ⅲ類の貝殻条痕文系土器、Ⅳ類中原式系土器、Ⅷ類の回転施文系の土器などおよそ縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器群とみられる。Ⅷ類の中には短枝回転文土器や楕円押型文と山形押型文土器、短沈線が施される辻タイプ、手向山式土器の出土もみられ、また田村式とみられる破片の出土も確認されたほか、Ⅵ類とした無文土器の出土も一定量みられる。

石器はホルンフェルスや砂岩といった遺跡近隣の丘陵地帯に数多く派生する小河川の転石にみられる石材を利用し主として粗製剥片石器や、剥片を作出したものと考えられる。なかでも、向原中尾第５遺跡の特徴な石器は、粗製剥片石器（蛤形石器）といえる。製品としての出土量が遺跡内で最も多くみられる石器である。Ⅰ～Ⅴ類に分類を行っているが、剥離の位置や形状および石器そのものの大きさによりスクレイパー的な使用や石斧的な使用などさまざまな用途に用いられた可能性がある。遺跡内で粗製剥片石器の製作活動があったものと考えられる。その一端を示すのは自然面を残し大型の剥片を削出した残核としての石核と素材剥片を獲得する過程で生じた剥片が多数出土している点である。このほかにも14点の石鏃の出土には狩猟活動の一断片、打製石斧や楔形石器の存在は樹木の伐採や加工、磨石･敲石からは食料加工といった生業活動が遺跡内で行われた可能性が考えられる。

自然科学分析からの位置づけ　第２地点ではＮ区６号集石遺構（ＳＩ６）、Ｓ区５号・８号・32号炉穴（ＳＰ５・８・32）の４基について埋土中より出土した炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を行った。

炉穴に関しての補正年代は５号炉穴（ＳＰ５）：9,180±40年ＢＰ、８号炉穴（ＳＰ８）：9,160±40年ＢＰと近接している。32号炉穴（ＳＰ32）は、8,020±30年ＢＰと２つの炉穴より新しい時期を示している。炭化材の樹種同定の結果からはＳＰ５・ＳＰ８がクリ、ＳＰ32がコナラ節と木材利用の違いが読みとれる。集石遺構に関して、Ｓ区の12号･13号集石遺構（ＳＩ12・13）から炭化物の出土が認められたものの、ごく少量のため分析にはいたらなかった。分布域が重なるＳ区での年代測定は行えなかった。そのため、Ｎ区の６号集石遺構（ＳＩ６）の配石上面に残存していた炭化物についての分析を行った。分析結果は放射性炭素年代測定値：9,460±40年ＢＰと暦年較正結果からはＳＰ５・ＳＰ８よりやや古い数値を示している。

３　弥生時代～古墳時代

弥生時代から古墳時代ではＳ区で竪穴建物跡（ＳＡ１）１軒とＳ区Ｃ１１グリッド東壁土層断面での確認（第27図）１軒が確認された。ＳＡ１は縄文時代早期の８号集石遺構（ＳＩ８）を切って構築されている。建物跡の大部分は調査区外へ延びており、規模や形状は不明である。調査区壁面の土層観察から床面に段差とみられる箇所が認められたため、花弁状住居跡の可能性もある。炭化材は床面から出土していることから建築部材の可能性がある。

【参考・引用文献】

宮崎県埋蔵文化財センター　2012「向原中尾第１・２遺跡　向原中尾第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集

宮崎県埋蔵文化財センター　2013「長野遺跡　舟川第２遺跡（第３次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第226集

中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会

山下大輔・桒畑光博　2007「南九州貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係－宮崎県における遺構内出土資料の検討から－」『縄文時代』第18号　縄文時代文化研究会

第Ⅴ章　向原中尾第６遺跡

第１節　発掘調査の概要と方法、経過

向原中尾第６遺跡は、向原中尾第５遺跡第１地点から続く尾根上の端部に位置する。心見川支流の征矢原川を挟む対岸には長野遺跡が立地する。

調査区は尾根端部の平坦部分をＡ区、谷に向かう斜面をＢ区とし、平成24年６月11日から９月10日までの期間で調査を実施した。今回の調査では、Ａ区、Ｂ区ともに人力掘削によるトレンチ調査を行い遺構・遺物の広がりを確認した。その結果、Ａ区の一部分でⅠ層より後期旧石器時代の遺構・遺物が確認されたことから、その範囲を中心にトレンチを拡張し調査を行った。Ｂ区については表土直下で礫層で礫層が広がりを見せたが、遺構・遺物は残存していなかった。

なお、遺構等の図化に際しては、ネクスコ西日本が設置した座標杭の値を踏襲した。

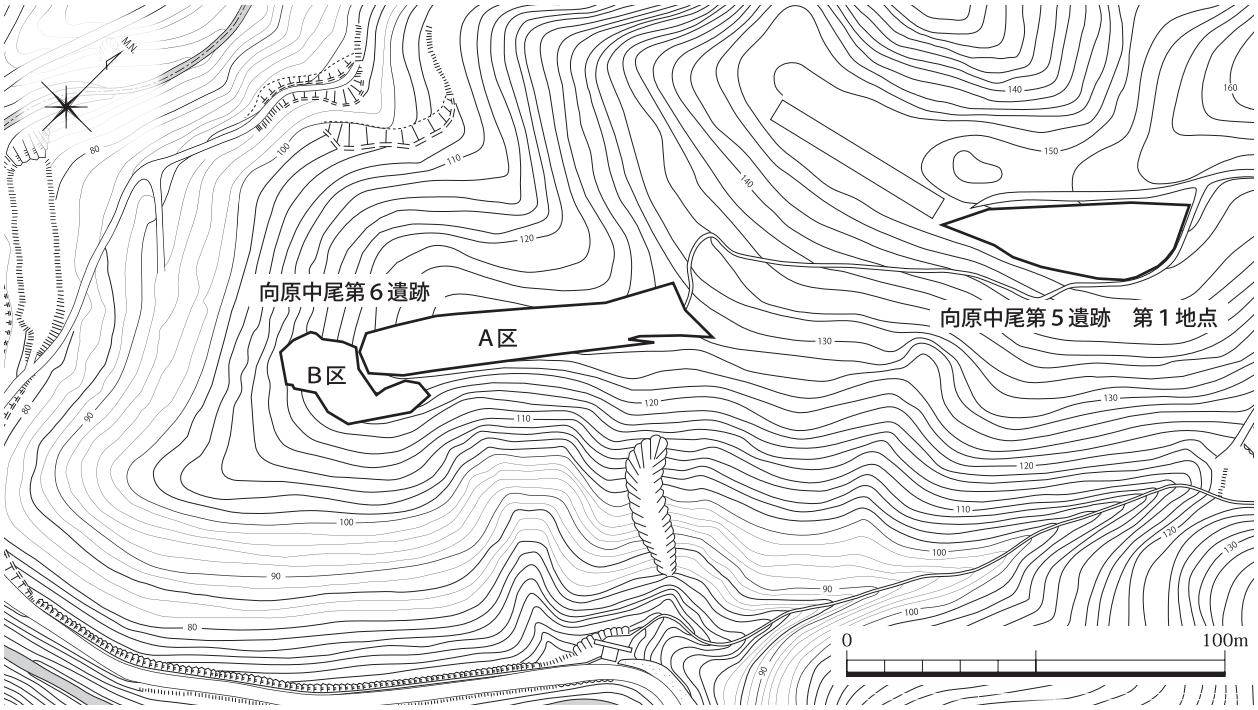
整理作業は平成24年11月から宮崎県埋蔵文化財センター本館内で開始し、平成25年３月に終了した。

石材分類は、向原中尾遺跡群内で統一をはかり、凡例の基準で分類を行った。

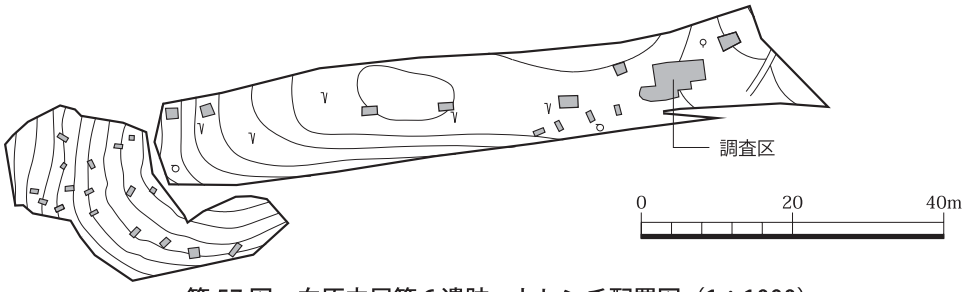
第２節　基本層序

基本層序を設定するにあたり、Ａ区北東壁面を利用し図化を行った（第58図）。

調査着手の段階では、本調査区及びその周辺は山林及びミカン畑であり、それらを造成する際に地形の改変を受けていた。そのため、Ａ区とＢ区の大半のトレンチでは表土直下から尾鈴山溶結凝灰岩を中心とする礫層の堆積が確認される状況であった。しかし、Ａ区では調査区内の北東側に当たる尾根の付け根部分周辺のトレンチで後期旧石器時代に相当する層（Ⅱ層）が一部残存していた。後期旧石器時代遺物包含層以下は、粘質土層（Ⅲ層）であったが、同層中では遺構・遺物は確認されなかった。



第 56 図　遺跡の周辺地形図（1：2000）



第 57 図　向原中尾第６遺跡　トレンチ配置図（1：1000）

第３節　後期旧石器時代の遺構と遺物

後期旧石器時代の遺構は、礫群が２基検出された。遺物はスクレイパー、剥片等が出土した。後期旧石器時代遺物包含層（Ⅰ層）以下は、粘質土層（Ⅱ層）であったが、遺構・遺物は確認されなかった。

１　遺構（第60・62図）

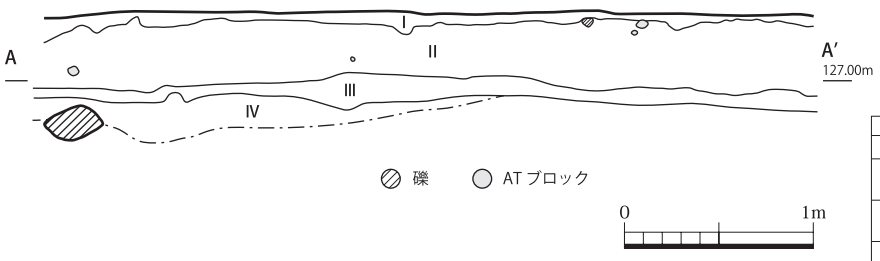
礫群は調査区南東側のトレンチ５で検出され、南側に拡張した部分でも確認された。遺構が検出された面は比較的平坦であったが、調査区北側から南東方向に向かって傾斜がみられる。SI１、SI２共に尾鈴山溶結凝灰岩で構成されており、ほとんどの礫が赤化していた。SI２の南側はⅢ層由来の礫が隆起しており、礫群構成礫と考えられる赤化している礫を中心に記録した。２基ともにタールのような付着物も確認できなかった。礫群周辺からは１のホルンフェルス製のスクレイパーと、５の磨石の２点が出土している。

２　遺物（第61・63図）

遺物は６点出土し、５点図化した。全て異なる石材であったため、接合関係は見られなかった。図化しなかった１点はトレンチ４から出土した。

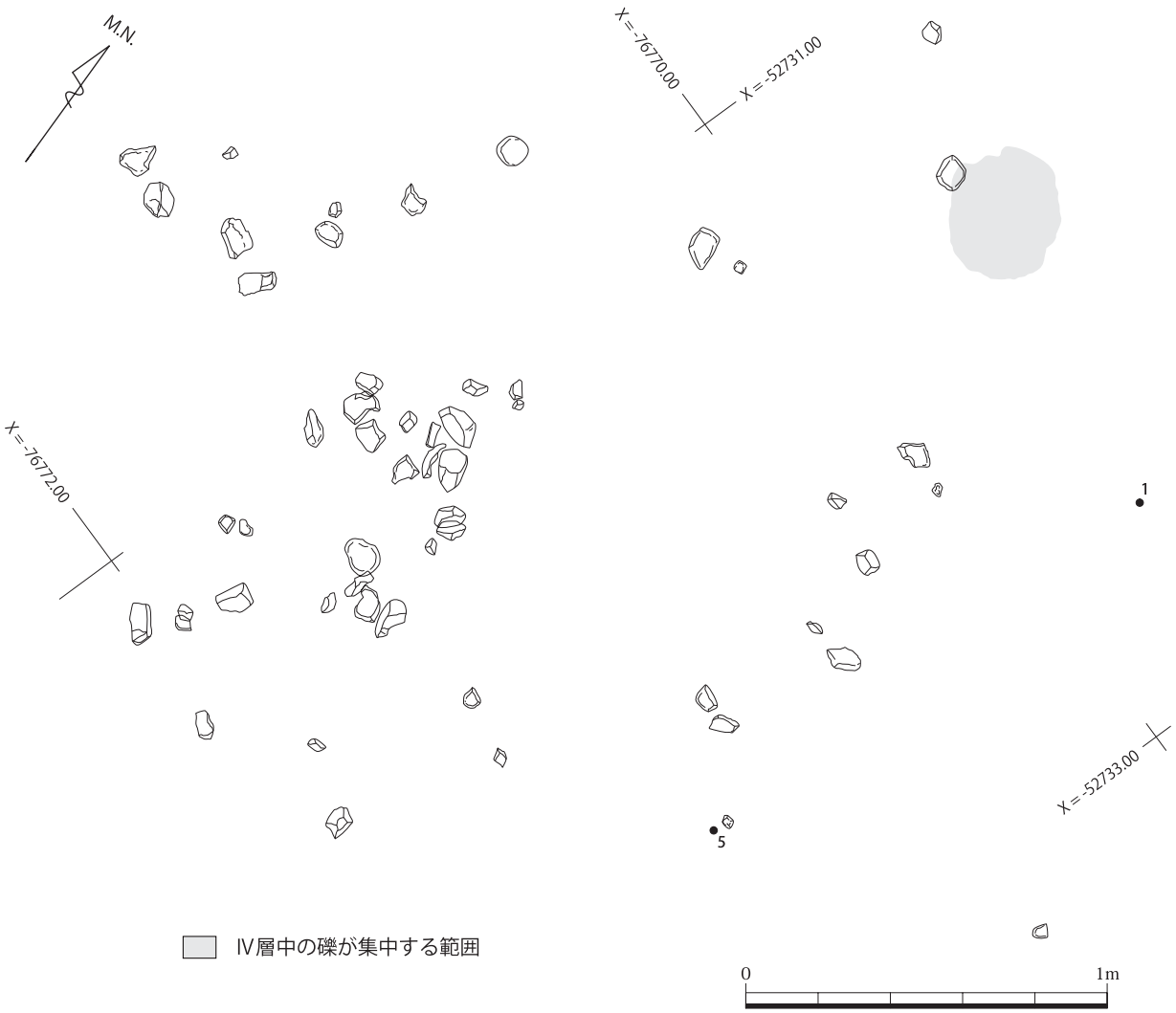
１・２はスクレイパー、**３**は使用痕剥片、**４**は剥片である。**４**は上部に打面調整を行っていることが確認できる。

第 58 図　向原中尾第６遺跡　旧石器時代の遺構・遺物分布図（1/100）

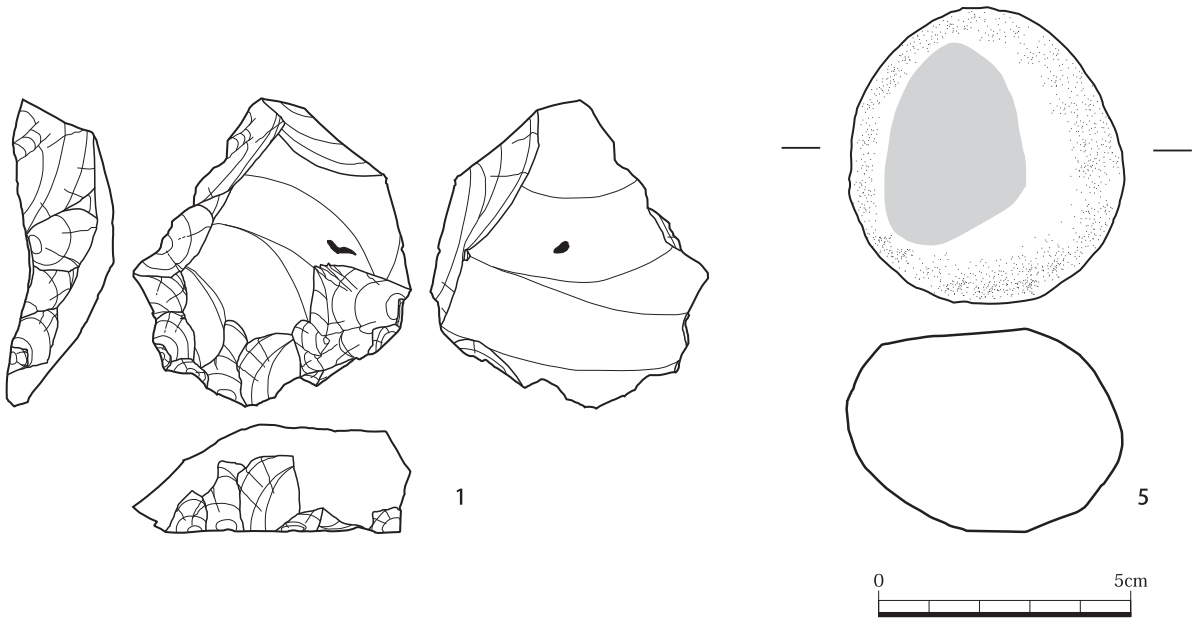


層序	色　調	
Ⅰ	表土	造成土
Ⅱ	オリーブ褐色 (Hue2.5Y4/6)	・AT 粒子をまばらに含む ・１～ 5mmの白色粒子を含む
Ⅲ	褐　色 (Hue10YR4/6)	・Ⅱ層より大きめの白色粒子を含む ・Ⅲ層由来の礫（1cm大）をまばらに含む
Ⅳ	褐　色 (Hue10YR4/6)	・１～ 50cm大の礫（尾鈴山溶結凝灰岩）を含む

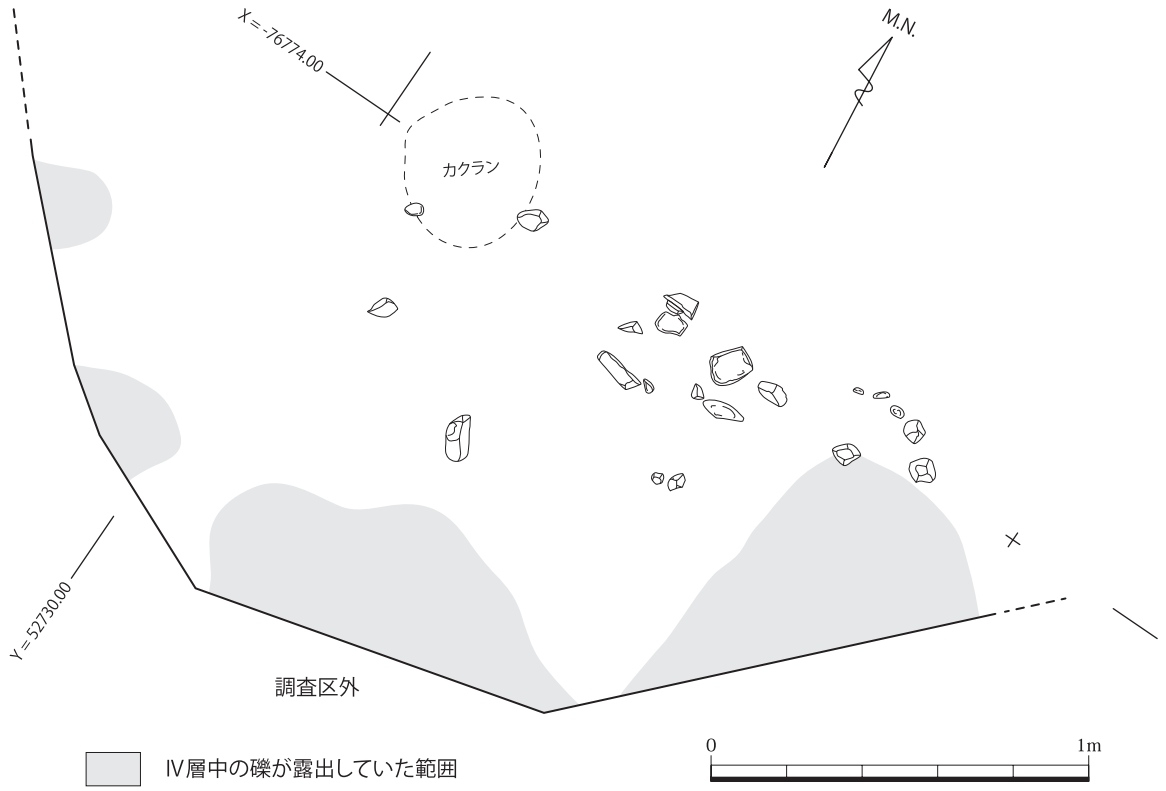
第 59 図　向原中尾第６遺跡　土層断面図（1/40　第 58 図　A−A' section）



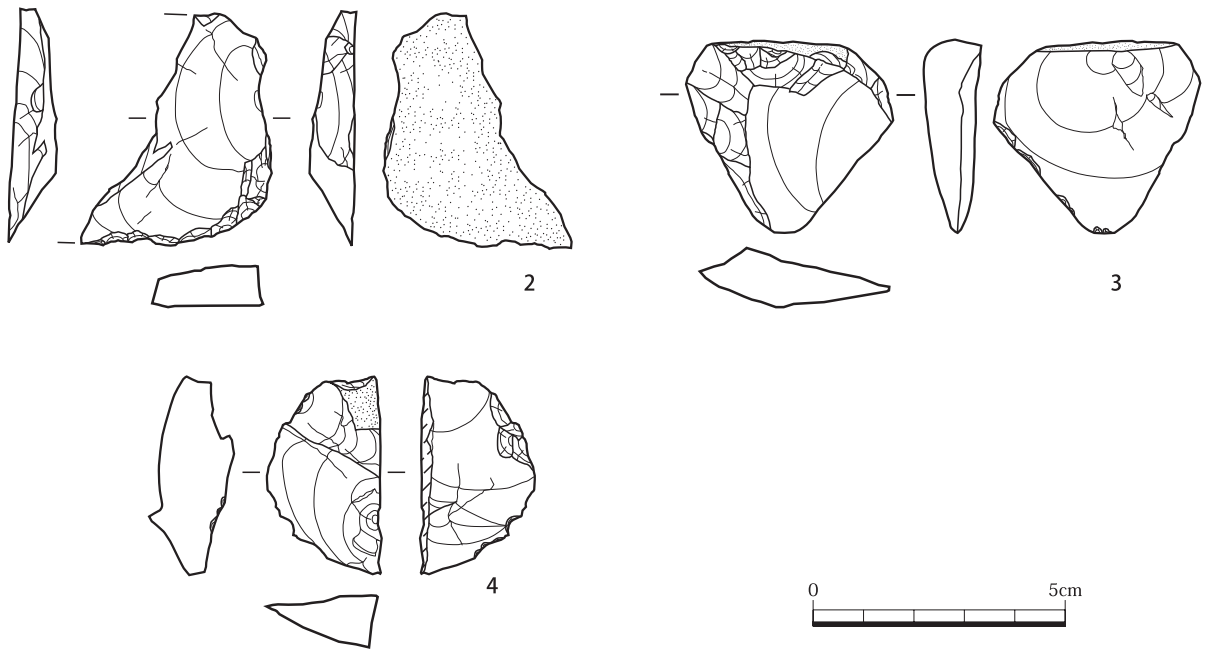
第 60 図　向原中尾第６遺跡　１号礫群実測図（S＝1/20）



第 61 図　向原中尾第６遺跡　出土遺物実測図（１）（S＝2/3）



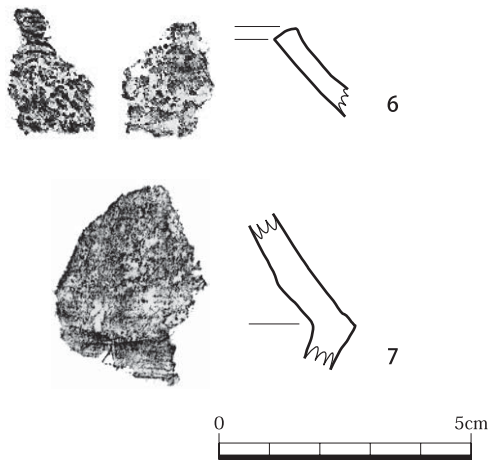
第 62 図　向原中尾第６遺跡　２号礫群実測図（S＝1/20）



第 63 図　向原中尾第６遺跡　遺物実測図（２）（S＝2/3）

第４節　その他の時代の遺物

その他の時代の遺物は、表土下層から弥生時代から古墳時代の土器片が出土している（第64図）。いずれも小片で詳しい時期については特定できないが、６、７は複合口縁壺の口縁部と考えられる。



第 64 図　向原中尾第６遺跡　遺物実測図（３）（S＝2/3）

第５節　小結

今回の調査では後期旧石器時代の遺構及び遺物が確認された。遺構は礫群２基が検出され、礫の赤化もみられた。遺物はスクレイパー等の石器が数点出土し、当時の人々の生活の断片を知ることができた。本遺跡は残念なことに、その多くが削平をうけており、遺跡の全容を明らかにすることができなかった。しかし、近隣の向原中尾第４・第５遺跡、征矢原川対岸の長野遺跡には、良好な後期旧石器時代の遺構・遺物が残っており、征矢原川周辺が狩場に向かうためのキャンプサイト的性格を有する遺跡が集中している。本遺跡も近隣の遺跡同様にその可能性が高い。

参考文献

宮崎県埋蔵文化財センター　2012「向原中尾第１・２遺跡　向原中尾第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集

第 27 表　向原中尾第６遺跡　後期旧石器時代遺構一覧表

礫群名	検出層	掘り込み	石　　材	礫個数	赤化礫数	重量(kg)	接合状況	付着物
SI 1	Ⅱ	なし	尾鈴山溶結凝灰岩	56	43	約18	８個体４箇所	なし
SI 2	Ⅱ	なし	尾鈴山溶結凝灰岩	21	14	約８	６個体４箇所	なし

第 28 表　向原中尾第６遺跡　後期旧石器時代石器計測表

遺物番号	出土層位	器　　種	石　　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
1	I	スクレイパー	ホルンフェルス	6.1	5.5	2.1	64.4
2	I	スクレイパー	チャート	4.6	4.7	0.9	12.7
3	I	剥片	ホルンフェルス	3.8	4.1	1.1	15.7
4	I	使用痕剥片	流紋岩	3.9	2.2	1.7	7.8
5	I	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	5.9	5.5	4.0	16.3

第 29 表　向原中尾第６遺跡　その他の時代の土器観察表

遺物番号	出土層位	器種	部位	文様・調整		焼成	色　調		胎　土	備考
				内面	外面		内面	外面		
6	I	壺	口縁部	ナデ	ナデ	良好	橙色(Hue7.5YR6/6)	橙色(Hue7.5YR6/6)	1mm大の白色粒子を好む	
7	I	壺	口縁部	ナデ	櫛描波状文	良好	橙色(Hue5YR6/6)	橙色(Hue5YR6/6)	1mm大の白色粒子を好む	複合口縁

第Ⅵ章　総括

本章では、向原中尾第２遺跡第３次調査、向原中尾第５遺跡、第６遺跡の発掘成果と、以前報告された向原中尾第２遺跡第２次調査および向原中尾第１遺跡・第４遺跡の成果（宮崎県埋蔵文化財センター2012）を含め報告していく。前述した調査は、いずれも近接しており、これらを総称して向原中尾遺跡群とし、現状の成果における各時代の様相について述べていきたい。なお、名称の重複を避けるため、以下、向原中尾第２遺跡第３次調査は「第２遺跡（３次）」のように略称をもって記載したい。

第１節　後期旧石器時代

ＡＴ下位の遺構と石器　向原中尾遺跡群では、ＡＴ下位で出土した石器は多くはない。第２遺跡（３次）でわずかに確認できるものの、その遺物の大半は第４遺跡より出土している。そのため、おのずと第４遺跡への理解が当遺跡群におけるＡＴ下位段階の評価となるが、あくまでも遺跡群内の一端であることをここで留意しておく。当該期の石器の分布は、報告者によると遺跡の所在する台地北西側の傾斜地に多く残存していたようである。その中でも、頂部付近と傾斜の低位平坦部に遺物の出土が顕著である。これらの関係は、縄文時代早期と後期旧石器時代の混在する遺物包含層の存在や、或いはそれ以降の遺物包含層の堆積の不安定さ、ＡＴ上位石器群における接合資料の分布等を鑑みるに、遺跡の所在する尾根の頂部付近より傾斜に伴い流出した遺物である可能性が高い。しかしながら、ＡＴが比較的良好に堆積していることと、ＡＴ上位石器群との接合関係が見出せないことから、これらをＡＴ下位石器として考えていきたい。遺構としては、低位にある１区で検出された礫群が挙げられるが、赤化や付着物があるものの、礫のサイズに斉一性はなく散漫な出土状況からも、その扱いには慎重を要する。

石器の評価　ＡＴ下位の石器は、第４遺跡で101点、第２遺跡（３次）で１点の計102点である。その内訳は、ナイフ形石器２点、スクレイパー２点、石核が４点、それ以外は素材剥片ないし、剥片、砕片で構成される。明確なトゥールの数は少ないものの、長軸5～15ｃｍ程度の素材剥片が多くみられる。石核はいずれも残核に近く、剥片剥離が進行し寸詰まっているものが多い。しかしながら、石核には礫面を有するものが多く存在しており、遺跡には拳大小の円礫若しくは亜円礫の状態で搬入してきていることが想定される。ただ、石器製作に関わる剥片類が希薄であり、比較的大型の剥片類が多いことなどを考慮すると、遺跡への搬入形態は、前述した円、亜円礫だけではなく、素材剥片としても搬入されていたと考えられる。また、希薄ながらも石器製作に関わる剥片、砕片類が少量存在していることから、搬入された円礫ないし素材を都度、整形或いは調整していたと考えられる。

石材について　石器石材に関しては、ホルンフェルス、頁岩を主体としながら、一部客体的に白色に風化する流紋岩、チャートを含む。主体となるホルンフェルス、頁岩は、転礫の場合、半径5km前後圏内の小丸川及び耳川流域において採取可能な石材である。これらは現在でも採取可能であり、量的に充実している石材であったといえよう。白色に風化する流紋岩は、祖母山傾山火山岩類の産出する県北端部において露頭或いは五ヶ瀬川沿いに転礫として採取できる石材である。元々は黒色ないし、紫がかる黒色をしているが、特徴的に白色に風化する。遺跡近隣では縞状の流離構造がみとめられる流紋岩も存在するが、今のところ石器石材に適したものは確認できていない。そのため、流紋岩に関しては、消去法的に県北域のものであることが想定される。チャートは県内では秩父帯の通る県北西部において良好な石材が採取できる。現在では県北西部に限定的であるものの、元々は当岩帯が県央、一部日南域にまで達していたことを考えると、台地上や河川に転礫として混入していてもおかしくない石材のため、現状では交流、直接・近隣採取であるかの判断はできない。これらを踏まえると、石材資源の獲得は、比較的容易に獲得できる近隣石材を基盤としていることが分かる。剥片石器類にはホルンフェルスや頁岩、重量・礫石器類には尾鈴山溶結凝灰岩や砂岩を選択している。限定的ながら流紋岩などの搬

入石材は、小円礫や素材剥片として遺跡内に持ち込まれている。これらは、大半を占める近隣石材とは別に、交流或いは移動を介した際に獲得したことが考えられる。

ＡＴ下位の向原中尾遺跡群　ＡＴ下位の向原中尾遺跡群では、１次的な石器製作がみとめられず、遺構の存在も希薄である。そのため、出土石器の時間幅は計りかねるものの、中長期的に生活していたとは考えにくく、短期的に形成された遺跡であると評価できる。搬入石材は量的に乏しく、在地色の強い顔つきは、集団の在地石材への適応を示唆しているといえる。

ＡＴ上位の遺構と石器　後期旧石器時代の向原中尾遺跡群ではＡＴ上位の石器群が主体となる。その分布は、第１遺跡、第２遺跡（2次・3次）、第４遺跡、第５遺跡、第６遺跡全てが該当する。当該期の遺構としては、第４遺跡で礫群4基と土坑が2基、第６遺跡で礫群２基が報告されている。第４遺跡の土坑は、石器の分布状況と位置を同じくするが、縄文時代早期の遺物とも平面的に分化できない。加えて縄文時代早期遺物とＡＴ上位石器群の混在もみられることや、遺構埋土が新相である陥し穴状遺構のそれと類似していることからも、ＡＴ上位に帰属させるには慎重を期す遺構であるといえる。これは礫群に関しても同様である。また、第６遺跡では、時期決定できる遺物が出土しておらず、層位の相似、対比でもって時期決定に至っている部分もあり、当遺跡群の中では、明確に後期旧石器時代の遺構と積極的にいえるものはないといえる。石器の分布は、第１遺跡を除く全ての遺跡で確認できており、第４遺跡、第２遺跡、第５遺跡、第６遺跡の順に多く分布している。これらの石器は、多くが縄文時代早期の遺物包含層とＡＴ上位の遺物包含層の中に両者の遺物が混在している状況で出土している。

石器の評価　上述した状況により、層位的に石器に時期が与えられない以上、石器型式により時期の評価を与えることにする。時期決定には宮崎県旧石器文化談話会が作成した「宮崎10段階編年」を用いることにする（宮崎県旧石器談話会2005）。これによると、向原中尾遺跡群のＡＴ上位石器群は、剥片尖頭器およびその周辺に代表される第5段階、次に基部加工および小型の縦長剥片に代表される第６・７段階、船野型細石刃核に代表される第９・10段階の、おおよそ三期に大区分することができる。これらは、明確なトゥールでもってのみの時期決定であり、編年に対応できる器種に当てはまらないものは含んでいない。また、第４遺跡において一部接合資料が確認されている。これらは石器製作に伴う調整剥片類であるが、その接合関係は、高位から低位への接合関係にあり、傾斜に伴う遺物の移動が大きいことが分かる。ＡＴ下位と比較しても接合資料を含め、同様な剥片類が増加しているように思われるが、遺物の混在やＡＴ上位に含まれる時間幅が広すぎるため、いずれもどの段階に帰属でき、量的に増減しているかは現状で判断できない。

石材について　石器石材については、ＡＴ下位とほぼ同様な在地色の強い顔つきとなっている。その中で、ＡＴ上位より変化する点としては、流紋岩の量的な増加や砂岩などの石材が剥片石器として用いられてくることが挙げられる。近隣に位置する舟川第２遺跡や、俵石第１・第２遺跡等では、ＡＴ上位より桑ノ木津留産黒曜石や日東産黒曜石がみられるが、向原中尾遺跡群では現在のところ当該期に帰属できる黒曜石製石器は確認できていない。

ＡＴ上位の向原中尾遺跡群　向原中尾遺跡群におけるＡＴ上位石器群は、大きく三期に大区分できる。それらは、ＡＴ下位の石器とは石材の選択にして若干の差異がある。ＡＴ下位では限定的であった石材の使用が若干幅広くなり、搬入石材も量的には増加してくる。この点では石材資源の獲得を目指す集団の在りようがＡＴ下位段階と変化しているといえる。遺跡の様相としては、ＡＴ下位段階と大きくは変わらないといえるが、接合資料の存在や、遺物の展開の粗密により第４遺跡周辺が向原中尾遺跡群の主体となる場であったことが想定できる。

（沖野）

【参考・引用文献】
宮崎県旧石器談話会　2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66旧石器文化談話会

第２節　縄文時代

向原中尾遺跡群を構成する遺跡（向原中尾第１～第６遺跡）の中で南西端に位置する第６遺跡を除く５遺跡で縄文時代の遺構・遺物が確認されている。

遺構について　向原中尾遺跡群内では縄文時代早期の遺構として、石斧埋納遺構１基（向原中尾第２遺跡２次調査）・集石遺構31基（向原中尾第２遺跡第２次調査：17基、３次調査：１基、向原中尾第５遺跡第２地点Ｎ・Ｓ区：13基）・炉穴33基（向原中尾第５遺跡第２地点Ｓ区）が確認されている。また、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層上面で底面に杭状の小穴を有するタイプの陥し穴状遺構７基が検出されている。遺跡群内での各遺跡の立地は第５図の横断図が示すとおり標高が高く平坦もしくは緩やかな斜面地である第２遺跡と第５遺跡Ｓ区で集石遺構や炉穴が検出されている。

第２遺跡が集石遺構のみが検出されているのに対し、第５遺跡Ｓ区では炉穴と集石遺構が切り合った状況が確認されている。向原中尾遺跡群内の集石遺構は第５遺跡での分類に照らすとⅠ類８基、Ⅱ類２基、Ⅲ類11基、Ⅳ類10基となる。掘り込みを有するタイプが、第２遺跡と第５遺跡の検出総数31基のうち21基を占め、構成礫は被熱のため赤化が認められた。なかには掘り込みの埋土が全体に黒色化するほど多量に炭化物が含まれている集石遺構も確認された。向原中尾遺跡群内で検出された集石遺構31基はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で構築されている。第５遺跡Ｓ区で確認された炉穴群の立地は集石遺構と同様、調査区内でもっとも標高の高い地点の平坦部分にあり単体で存在する炉穴や検出面からの深さが深くやや大型の炉穴と分布域が重なっている状況が看取できる。２遺跡ともに調査区外にも遺構が広がるものと報告されており、一定期間の居住域であった可能性が考えられる。

第２遺跡と第５遺跡の間の丘陵尾根筋と低地部分に位置する第４遺跡ではK-Ah上面で７基の陥し穴状遺構が検出されており、等高線が大きく湾曲する浅い谷地形に沿って、等高線に直交するように一定間隔をおいて分布している。丘陵頂部から水場方向にのびる「けもの道」上に配置されたと考えられる。第４遺跡で確認されたK-Ah降灰以降の陥し穴状遺構の検出例は宮崎県下で約20例を数える。周辺では日向市板平遺跡や都農町俵石第１遺跡で確認されている。平面形態や規模に類似点がみられる一方時期幅の相違も認められる。第４遺跡で確認された７基は、ほぼ同規模な土坑で平面形は楕円を呈している。すべての土坑の底面に小穴が認められる。船元式土器の出土から縄文時代中期前後・後期代と報告されている。

遺物について

縄文土器　向原中尾遺跡群内では縄文時代草創期・早期・中期・後期・晩期の土器が出土している。中でも主体となるのは縄文時代早期に属する土器群である。なかでも第５遺跡の出土量がもっとも多い。概観すると第２遺跡（２次）で遺構が検出されたⅣ層からⅤ層上面では楕円押型文と山形押型文の２種類の押型文のほか手向山式土器、前平式系土器、無文土器と早期前葉から中葉に位置づけられる土器群の出土が認められる。第２遺跡（３次）でも少量ながら田村式土器の大型の破片が出土している。第２遺跡の中でも第３次調査Ｂ区出土のミミズバレ状の微隆起突帯を有する土器（39･40）はその形態上は縄文時代草創期的な様相を呈している。第４遺跡の縄文時代早期に属する土器は、貝殻条痕文系土器と山形押型文系土器、別府原式、中原式、手向山式の出土が認められ、早期前葉から中葉頃の一群である。第２遺跡（２次・３次）と第４遺跡においては早期前葉から中葉の各型式の土器群の中で出土量全体からみると手向山式土器が主体である点が類似している。第５遺跡では縄文時代早期では出土量だけでなく遺跡群内ではバリエーションに富んでいる。縄文時代早期土器の大部分は第２地点Ｓ区の遺物包含層であるⅢ層からⅣ層上部にかけての出土である。第Ⅳ章第６節で述べたように大きくは貝殻文円筒形土器と回転施文の土器群が出土している。Ⅰ類とした前平式系土器、Ⅱ類の知覧式系土器、Ⅲ類の貝殻条痕文系土器、Ⅳ類中原式系土器、Ⅷ類の回転施文系の土器などおよそ縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器群とみられる。または短枝回転文土器や楕円押型文と山形押型文土器、短沈線が施される辻タイプ、手向山式土器の出土のほか無文土器の出土も一定量みられる。向原中尾遺跡群内では

縄文時代早期前葉から中葉を主体とする時期の土器群の出土が大半を占めるが、第２遺跡と第４遺跡において手向山式土器の出土が多いという共通点がある。一方、第２遺跡（２次）で草創期に位置づけられる土器が確認される点、第２遺跡（３次）の器壁が厚く大型の円筒形となると考えられる器形に、大粒の楕円押型文が施文される土器など遺跡群内でも古手の様相が見て取れる。第４遺跡では手向山式土器のほか、中期の船元式土器の出土が認められる。縄文早期の土器が出土した遺跡の中でもっとも南に位置する第５遺跡では第２遺跡や第４遺跡とやや様相が異なり一定量の手向山式土器の出土はみられるものの遺跡内での主体となるものではない。土器のバリエーションからみても、遺跡群内で本遺跡のみで検出された炉穴の存在から考えても、出土した土器の顔つきからみても早期の様相には相違が認められる。

第４遺跡ではK-Ah以降の出土土器として５点の出土が確認されている。なかでも244～246は頸部から口縁にかけてキャリパー状に内湾する船元式に比定される土器とみられる。胴部に赤色顔料が付着するものも認められる。縄文時代後期後半から晩期にかけての無刻目突帯文土器や刻目突帯文土器の深鉢が第１遺跡で出土している。

遺跡群内で最も北に位置し隣接する第２遺跡と比高差約30mと低い地点に立地する第１遺跡では縄文時代後期後半から晩期にかけての土器の出土が認められている。

石器について

向原中尾遺跡群内では縄文時代草創期の石器をはじめ早期に属する石器の出土が認められる。なかでも第４遺跡出土の有舌尖頭器と向原中尾遺跡群をとおして出土量の多い粗製剥片石器（蛤形石器）が遺跡群内を代表する石器と位置づけられる。遺跡群内の各遺跡を概観すると第２遺跡（２次）では石鏃、石槍、石斧、石錘、石核、剥片、敲石、磨石、凹石に加えて28点もの粗製剥片石器の出土が認められている。第４遺跡はK-Ah降灰以前のⅢ層より白色無光沢チャート製の柳又型有舌尖頭器の出土がみられ型式から草創期に位置づけられているが、Ⅲ層中からは縄文時代早期の土器・石器の出土のみがみられる。斜行剥離がみられる点や石材が流紋岩である点、型式分類上草創期的であるが、遺跡内の層位中から草創期の土器や遺構の出土が認められないことから位置づけには慎重さを要すると考えられる。早期の石器としては石鏃・石匙・石錘・石斧・礫器のほか石核や剥片などの素材が遺物の大多数を占めている。第５遺跡での出土層位は、Ⅲ層上面かⅣ層中上面で出土している。石鏃・楔形石器・スクレイパー・石核・石斧・粗製剥片石器・剥片・磨石・敲石・台石などの出土が認められる。

向原中尾遺跡群内では尾鈴山溶結凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩、頁岩が主体的に使用されている。大型の石器は尾鈴山溶結凝灰岩と砂岩製のものが大部分である。それに加えてチャートや黒曜石･安山岩・水晶などの出土は少量であるが狩猟具や剥片、チップ等に見受けられる。尾鈴山溶結凝灰岩や砂岩については円礫に近い母岩であったと想定できる素材を用い、調理や加工など多用途に使用したと推測される粗製剥片石器を作出したものと考えられる。

（橋本）

粗製剥片石器類の評価　向原中尾遺跡群では、縄文時代早期を主体として粗製剥片石器類が頻繁に見受けられる。これらは、藏座村遺跡の報告に際して「蛤形剥片石器」として呼称された石器の範疇に収まるものがある（宮崎県埋蔵文化財センター2002）。報告者は、藏座村遺跡に限定した呼称としているが、同様の石器が出土した場合、以後粗製剥片、蛤形石器等広く用いられる石器名称となっている。

蛤形剥片石器の定義としては、「幅4.3cm ～ 8.9cm（平均5.9cm）・長さ3.0 ～ 5.7cm（平均4.0cm）、平面楕円形・断面細柳葉形で、蛤のような形態を呈すること…」とある。向原中尾遺跡群周辺の粗製剥片類は、この定義に包括されないものも見受けられるが長幅比率において類似していることを鑑み、その形状を優先して、以後は蛤形剥片石器と呼称する。

藏座村遺跡では、礫群の構成材とは異にして堆積岩系の石材に人為的な選択が介在しているとあるが、向原中尾遺跡群では状況に違いが見出せる。当遺跡群の蛤形剥片石器の主要石材は、礫群や集石遺構を構成する尾鈴山溶結凝灰岩、砂岩の他に、珪質

頁岩、黒色の頁岩が含まれる。特に上述した尾鈴山溶結凝灰岩と砂岩に結びつくようで、これらは、礫器や石斧にも素材として利用されている。当遺跡群及びその周辺域では、蛤形剥片石器を剥離したと考えられる石核や、分割過程で作出された剥片、石器類も多く出土していることにより、その剥片剥離工程や石器群内の在りようがみえてきたといえる。当遺跡群内では、自然面を有する楕円および亜円形の転礫採取を基本としているが、これは遺跡近傍で採取できる石材であることの他に、その殆どに自然面を有することから、自然面或いはそれの保有する形状に嗜好したからであると考えられる。また、刃部調整の頻度は多くはなく、刃部調整を有するものはしばしば主要剥離面が滑らかなものにみられる。このことから、石器としての主な用途には主要石材に特徴的な剥離面の凹凸が関与していることが想定され、剥片石器でありつつも必ずしも刃器として包括解釈できるものではないといえる。しかしながら、珪質頁岩製のものなどは、剥離面は滑らかで刃部も鋭角であることから、刃器的な顔つきをみせるものもあるため、蛤形剥片石器と呼称するものの、石材や形状によってその利用目的が異なっている可能性が指摘できる。

採取した礫は、その一端を剥離面とし蛤形剥片石器の作出を行うが、石核の３分の１から半分程度剥離作業が進行した剥片剥離面に対して、粗雑な調整を施し礫器などの重量石器として転用している。また、当遺跡群内で出土している石斧は背面に自然面を有することが多く、馬込遺跡第２地点（宮崎県埋蔵文化財センター 2014）の様に礫の全周にわたって剥離作業をおこなった石核や、上述した一端部剥離によりリダクションした石核は、最終的には石斧や礫器として使用されているようである。

このことを鑑みると、当遺跡群の蛤形剥片石器は目的剥片として作出されるが、それを作出する過程で発生した石核や礫器、石斧類もその工程の延長線上に含まれており、当遺跡群おける一連の剥片剥離工程の産物としてとらえることができる。

時期的には縄文時代早期を主体としながらもその前後に広くまたがってみられることから、通時的に選択された技術であったといえ、地域的にも当遺跡群の南北に広く分布しており、かなり普遍的な技術であったことが推測される。これらのことを踏まえると、量的に充実し、広く選択された技術として該期の生活実態の一部を強く投影している可能性があるといえる。今後、使用痕分析等の研究に加え、時期、地域的な粗密が明らかになれば蛤形剥片石器を携えた人々の生活の在りようをより明確に知ることができるといえる。（沖野）

【参考・引用文献】

宮崎県埋蔵文化財センター 2002「別府原遺跡　西ヶ迫遺跡　別府原第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第61集

宮崎県埋蔵文化財センター 2002「蔵座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第53集

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「板平遺跡（第３・4次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「内野々遺跡　内野々第2・第3遺跡　内野々第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第202集

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「向原中尾第１・第２遺跡　向原中尾第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「舟川第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第214集

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「俵石第1遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第216集

宮崎県埋蔵文化財センター 2013「長野遺跡　舟川第２遺跡（第3次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第226集

宮崎県埋蔵文化財センター 2014「岡遺跡（第17次調査）・馬込遺跡第２地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第230集

第３節　弥生時代以降

弥生時代の遺構　向原中尾遺跡群では、第２遺跡（２次・３次）と第５遺跡において弥生時代の竪穴建物跡が検出されている。第２遺跡では８軒、第５遺跡では２軒の計10軒確認されている。第５遺跡の竪穴建物跡は、２軒とも出土遺物がなく、掘り込み層位、検出プラン、建物主軸、放射性炭素年代測定法によっての位置づけとなる。前回の第２遺跡（２次）の報告では、検出した竪穴建物跡の時期について、切り合い関係、分布状況、建物主軸の差により、遺跡内の比較的大型のものから小型のものへの変遷を提示している。以下ではそれに今回の成果を加味して再検討を行うことにする。

竪穴建物跡の比較と再検討　向原中尾遺跡群の竪穴建物跡は、規模を基準にすると、①群…3～4m前後のもの（第２遺跡２次ＳＡ1～3、5～7）と②群…5m前後（第２遺跡２次ＳＡ4、３次ＳＡ1、第５遺跡ＳＡ1）の大きく２つに分けられる。①群の特徴としては、楕円及び隅丸方形のプランを呈し、明確な主柱穴を持たない建物跡であることに対し、②群は方形プランを呈し、その中に明確な主柱穴をもった竪穴建物跡である。また、①群は焼失建物であるのに対し、②群は焼失建物ではない。次に建物主軸についてみてみると、第２遺跡の竪穴建物跡は、概ね北東を向いているが、第２遺跡（２次）の成果のみで判断すると前報告のような小差がみとめられる。しかし、第２遺跡（３次）の成果を加味した場合、両者を主軸によって区分することは難しい。また、分布状況としても、調査区を市道により大きく削平されており、現状では分布的に両者を切り離せない。

遺物に関しては、甕の形状や組成、第２次調査の報告や小結で述べられたように向原中尾遺跡群の竪穴建物跡はおおむね弥生時代終末期から古墳時代初頭段階に位置づけられるものである。遺物への見解として、近隣遺跡である都農町所在俵石第２遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2012）に詳しくふれられているので参考としたい。①、②群ともに、口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部最大径が口径より大きい甕（２次134・192、３次21他）が伴うが、②群の遺物としては、甕の頚部の屈曲がゆるやかなものがみられ、これらは平底で底部も接地面が小さくなりつつある（２次172、３次20・22）。これらは、上述した甕と型式的対比により後出するものとされており、また小鉢が伴うことでも共通している。加えて布留式の系譜上にあると考えられる胎土の質が異なる甕（29）もみられる。この甕を積極的に評価し、搬入品であるか在地模倣とするかで以後の判断が分かれるところであるが、少なくとも現状では板平編年（松田・今塩屋2011）でいうところのⅠ期ｂ段階～Ⅱ期ａ段階ないしⅡａ段階であると位置づけられる。

建物主軸では①群と②群を区分することは難しいが、竪穴建物の規模、プランの形状および構築方法、遺物の様相等から総合的に判断すると、①群から②群への移行が考えられる。これらの考察は自然科学分析の結果においても肯定的である。①群では概ね較正年代が1860±20年BP前後という年代が算出されているのに対し、②群である第２遺跡（３次）のSA1は、1770±20年BP、第5遺跡SA1では1790±30年BPという年代が算出されている。算出年代の差程、両者に大きな時期差は感じられないものの、この結果は、上記の所見に加味でき得るものである。

弥生時代の向原中尾遺跡群　弥生時代の向原中尾遺跡群は、概して弥生時代終末期から古墳時代初頭段階の範疇に位置づけられる。当段階における周辺の様相としては、台地上では川南町尾花A遺跡のような長期継続かつ拠点的大集落が成立し、その短距離圏内に衛星的或いは小規模集落の分布がみられる。これらは、生産活動の増大や向上による人口圧の上昇、他地域からの物的・人的交流などから集落遺跡は山あいにも集落の分布が拡大するという（徳留・今塩屋2012）。向原中尾遺跡群も後者として同様の脈絡でもって位置づけられよう。当遺跡群は、中央に第３遺跡が立地する谷を大きく挟んだ丘陵上であることから同一の集落と考えるのは難しい。地形の変化により、飛び地のように展開する狭小な丘陵地に点所在する小規模集落群を調査区により横断したようなかたちであるといえる。これらの小規模集落は、拠点的集落などとの結びつきを保持しながら、鉄を持ち、他地域の文化を取り入れていてい

く。向原中尾遺跡群の成果は、こうした山あいの集落の変容を把握できるものである。また、①群建物跡からは、石庖丁が確認されている。これらは同じく検出された炭化種実にもイネがみられるように、栽培作物として想定しうるものであるが、遺構の展開する丘陵には、住環境の他に、耕作できるスペースと水利が伴わないため、第３遺跡のような水利を保持する湿地性の谷部を利用して耕作をおこなっていたと想定できる。

近代以降の遺構・遺物　向原中尾遺跡群では近代の遺構・遺物が確認されている。詳細は補遺にて記載するが、遺跡群がとりまく谷は向原中尾第３遺跡（以下第３遺跡）として平成20年度に東九州自動車道建設に伴い発掘調査された経緯がある。その調査時に確認できた棚田石垣、および第１遺跡南に位置する寺迫溜池は、碑文の内容から、明治後半から昭和初頭の遺構であると調査担当者は述べている。それを裏付けるものが『東郷町誌』に詳しい（東郷町誌編さん委員会1979）。明治初頭には主要物産として米があげられていることから、近世より水稲を基盤とした生活スタイルが確立されていたようである。明治30年代に入り耕地整理、土地改良等が奨励され、向原中尾遺跡群の所在する東郷町でも大規模に土地の改良が進められたことから、前述した遺構の所見ともほぼ一致する。また、第２遺跡（３次）では表土より掘り込む土坑がいくつか存在した。近隣の作業員に聴き取りを行うと、遺構の形状・検出位置等により誘蛾灯を設置した際の掘り込みであるとのことであった。この誘蛾灯は、昭和49年～ 51年の第２次農業構造改善事業の際にみかん畑に設置したものである。第２遺跡は、調査前はカシやハゼ、スギ等生活に密接に関係する樹木が植林された山林であったが、それ以前は、極めて短期間柑橘類畑として利用されていたようである。遺物としては、瓦質の移動式カマドが採集されている（第65図2）。この遺物に関しては嶋田の論文に詳しい（嶋田2007）。採集された移動式カマドは、燃焼部である個体と米を入れ炊飯する釜部の個体とを組合せて使用する組合せ式のカマドである。嶋田の紹介遺物は、新富町所在の永牟田第２遺跡より出土した陶器製のカマドであるが、第３遺跡で採集されたカマドは瓦質ではあるが、形態的には極めて類似しており、この範疇でとらえられる遺物といえる。昭和30年代のガス普及以前までよく利用されたようである。

近代以降の向原中尾遺跡群　近代の向原中尾遺跡群は、初期には水稲耕作や木炭、椎茸等を栽培していたが、社会情勢の変化と共に、徐々に米の生産向上のため耕地整理に伴う土地の改変を試みていく。昭和に入り農業構造改善事業に伴い果実栽培を行うが、長期には根付かず、作物の生産農業は終わりを迎える。以後は生産と離れ、生活に根ざす山林への改変をおこなっていったようである。

以上が近代以降の向原中尾遺跡群における土地利用の経過である。明治にはいり大きく土地を改変したため、弥生時代終末期以降から近世までの土地利用は発掘成果としては明らかにされていない。しかしながら、当遺跡群が後期旧石器時代から近現代まで脈々と利用されてきたことは間違いのない事実である。時代により生活の在りようは異なりながらも、人々が根ざす環境であったといえようか。　（沖野）

【参考・引用参考文献】

東郷町誌編さん委員会1979『東郷町誌（昭和54年修訂増補印刷発行）』

嶋田史子2007「宮崎県永牟田第２遺跡出土のカマド」『民具マンスリー』第40巻1号

吉本正典1995「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察―須恵器出現以前の資料を中心として―」『宮崎考古』第14号

松田博幸・今塩屋毅行　2011「第Ⅶ章総括」〔板平遺跡（第３・４次調査）〕『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集

宮崎県埋蔵文化財センター 2011「俵石第１遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「向原中尾第１・２遺跡　向原中尾第４遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集

徳留洋志・今塩屋毅行2012「第Ⅵ章総括」『木戸平第２遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第215集

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「俵石第１遺跡　俵石第２遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第216集

補遺

向原中尾第３遺跡

調査に至る経緯

本発掘調査は、平成20年度に実施した東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い遺跡の一部が影響を受けるため、事業者の依頼に基づき工事着手前に記録保存の措置を講じたものである。後述するが、結果として遺構の存在が希薄であり遺物も少量であるため、自動車道建設費縮減と相まって広域を調査するにいたらなかった経緯がある。しかしながら、少量とはいえ当遺跡の状況を把握する上で貴重な資料も存在することから、ここではその説明責任を果たすうえでも補遺として報告したい。

なお本文は、平成20年度の調査担当者による終了報告をもとに加筆・修正したものである。

調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告の実施にあたり、以下の体制が組織された（平成20・25年度）。

調査主体　宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

所　長　福永　展幸（平成20年度）
向井　大蔵（平成25年度）
副所長　加藤　悟郎（平成20年度）
副所長兼調査第一課長
長津　宗重（平成25年度）
総務課長　長友　英詞（平成20年度）
坂上　恒俊（平成25年度）
同課主幹兼総務担当リーダー
高山　正信（平成20年度）
副主幹兼総務担当リーダー
高園　寿恵（平成25年度）
調査第一課長　長津　宗重（平成20年度）
同課主幹兼調査第二担当リーダー
菅付　和樹（平成20年度）
副主幹兼調査第二担当リーダー
福田　泰典（平成25年度）

調査担当

調査第一課調査第二担当
（主任）主　事　小船井　順（平成20年度）
主　査　島木　良浩（平成20年度）
主任主事　嶋田　史子（平成20年度）

整理・報告書担当

調査第一課調査第二担当
副主幹兼調査第二担当リーダー
福田　泰典（平成25年度）
主　事　沖野　誠（平成25年度）

調査協力・助言

日向市教育委員会
東九州自動車道用地事務所

調査区の概要

本年度の調査対象地は斜面に挟まれた谷筋に所在し、石垣によって区画された棚田が存在する（第66図）。調査区北側の斜面裾に水路が通っており、表土面の広い範囲で湧水が確認できる。調査の便宜上、調査区内に存在する未買収地から西側をＡ区、北東側をＢ区とした（第67図）。

Ａ区

Ａ区は７枚の棚田から構成され、各段の境に石垣が南北方向に積まれていた。人力による掘削調査の結果、棚田を造成する際に両側の斜面を大幅に削平し、谷筋を埋めていることが確認された。また、この造成土の下により古い畝の残存が確認できたことから、Ａ区の棚田は大きく2時期に分けられる。そして古い棚田の下層に低湿地にみられる黒色泥炭層（Ⅵ層）が残存していることから、この層に遺物が包含されている可能性があると判断した。そのため、遺構や遺物の検出とⅥ層の残存範囲を把握することを目的として、重機によりⅤ層まで掘削した後、人力での遺構検出・掘削を行った。なお、Ⅵ層以下は人頭大の礫を多量に含む層であり良好なアカホヤ火山灰層（Ⅷ層）の堆積がみられないことから、層が安定的に堆積するような地形ではなかったと考えられる。

Ｂ区

Ｂ区は調査範囲内に４枚の棚田が確認でき、石垣が東西方向に積まれている。造成土の堆積はみとめられず、Ⅴ層以下の黒色土の堆積状況が良好である

ことから、旧地形は現地形に比較的近い形状であり、造成土には地形を削って耕作面を造っていると考えられる。しかし、T29で黒色土の下層にⅧ層が僅かに確認できたものの直下に礫層が検出されることから、A区と同様にⅧ層の降灰以前は礫が露出しているような場所であったと考えられる。

遺構

今回の調査では明確な遺構は検出されなかった。なお、石垣に関しては明確な年代を特定するに至らなかったが、造成土の上面から積まれており、新しい棚田に伴うものである。遺跡南東側に存在する溜池の碑文から読み取れる開田事業の時期や、周辺住民からの聴き取り調査で70歳代の方が幼少の頃にはすでに存在していたとのことから、石垣はおそらく明治後半から昭和初頭までに築かれたものであろう。

遺物（第65図、第30・31表、図版４）

遺物は弥生から古墳時代と考えられる土器片1点、いずれも時期不明の剥片2点、磨石1点、石錘1点（第65図1）が出土した。現代の耕作土及び攪乱土の中から出土しているものが殆どで、図化に耐えうる遺物は少ない。剥片1点についてはⅥ層中で出土したが土の堆積状況から原位置を留めていない可能性が高い。また、周辺からは近世の移動式カマドが表採されている（第65図2）。

石錘（第65図１、図版４）

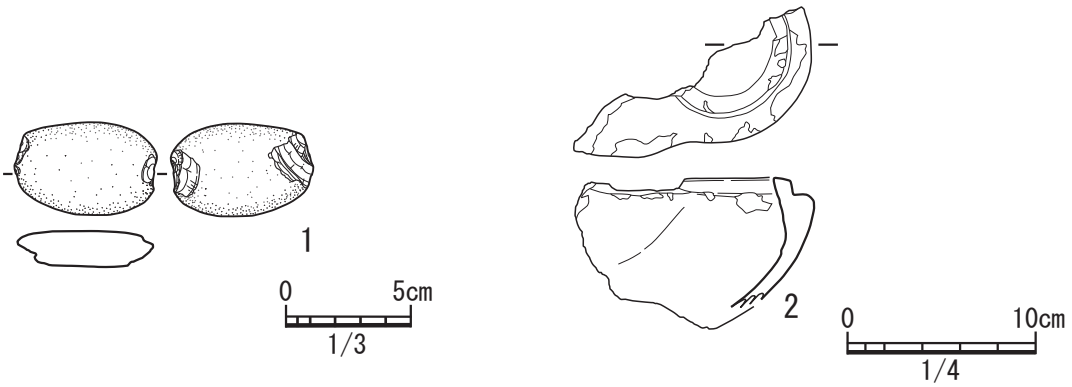
小楕円礫を素材とした石錘である。両端部に粗雑な剥離により抉りを施している。

移動式カマド（第65図２、図版４）

移動式カマドの煙突取り付け口である。元来は上部・下部を組み合わせて使用するタイプで、この取り付け口は上部構造にあたる。

まとめ

調査の結果、現地形は2回の造成により形成されたものであり、その過程で低湿地の泥炭層が削平を受けていることが判明した。そして、この泥炭層中では遺構・遺物は確認できず、アカホヤ火山灰の降灰以前は礫が露出している状況であった。これらを考慮すると、調査対象地内に明治時代以前の遺構・遺物が残存している可能性は低いと考えられる。また確認できた遺物は、単独であったり原位置を留めていなかったりするため、これらは谷地形の傾斜に伴い流入してきたものだと考えられる。



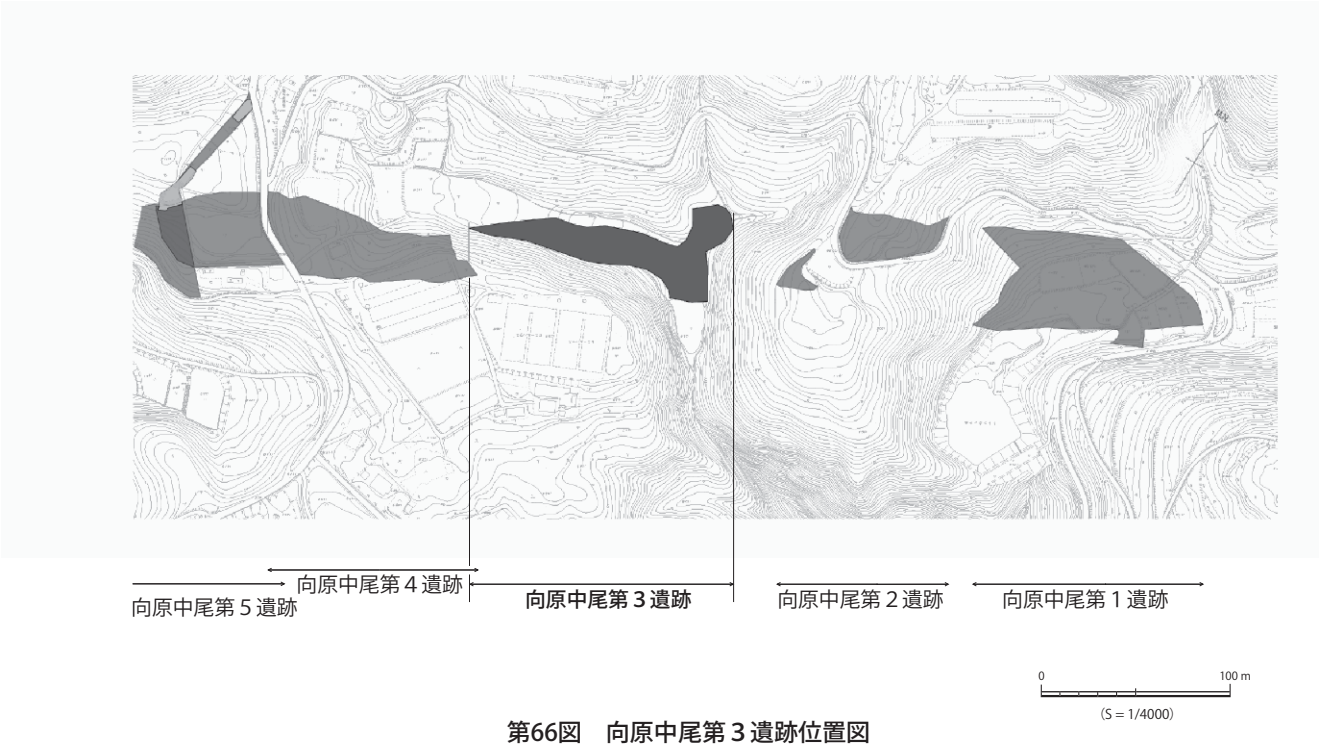
第65図　向原中尾第３遺跡出土遺物実測図

第30表　向原中尾第３遺跡石器計測表

挿図番号	図版番号	出土層位	器種	石材	法量（cm，g）				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
1	図版4	―	石錘	砂岩	3.8	5.3	3.8	86.2	

第31表　向原中尾第３遺跡土器観察表

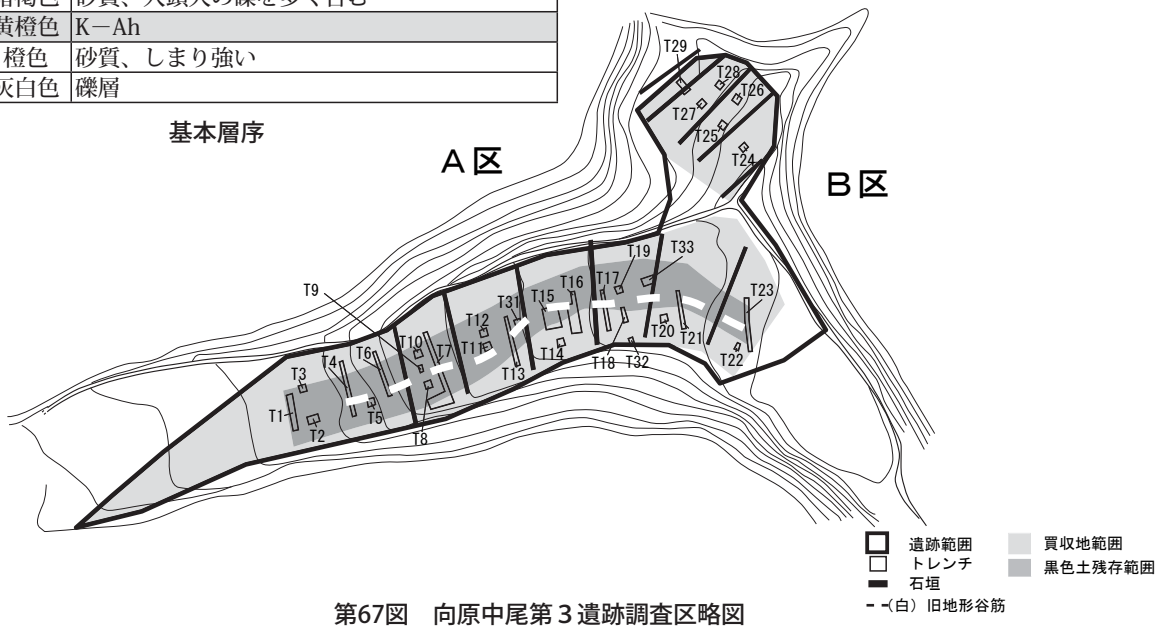
挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	器種	部位	残存高（cm）	文様・調整等		色調		胎土	備考
							外面	内面	外面	内面		
2	図版4	周辺	表採	移動式竈	煙突部	8.0	ナデ	ナデ	オリーブ黒（5Y3/1）	黒（N1.5/）	1㎜程度の灰色粒を多く含む	内:煤付着



第66図　向原中尾第３遺跡位置図

層位	色調	備考
Ⅰ	黒色	表土
Ⅱａ	暗褐色	耕作土
Ⅱｂ	暗褐色	耕作土床土、しまり強く黄褐色ブロック混じる
Ⅲ	黄褐色	造成土
Ⅳａ	暗褐色	粘質、旧耕作土
Ⅳｂ	黒色	砂質、しまりやや強い、旧耕作土床土
Ⅴ	黒色	砂質、しまりやや強い
Ⅵ	黒色	砂質、Ⅳ層に比べ粒子が細かい。泥炭層
Ⅶ	暗褐色	砂質、人頭大の礫を多く含む
Ⅷ	黄橙色	K－Ah
Ⅸ	橙色	砂質、しまり強い
Ⅹ	灰白色	礫層

基本層序



第67図　向原中尾第３遺跡調査区略図

補遺

向原中尾第２遺跡（第２次調査）

ここでは前回の調査である向原中尾第２遺跡第２次調査の報告書刊行の際、報告できなかった資料の追加報告をおこなう（第68図）。

二次加工剥片（第68図227、図版４）

やや大ぶりの剥片を素材とし、右側縁下部に粗雑な二次加工を施す。スクレイパーの未製品の可能性もある。

剥片（第68図228、図版４）

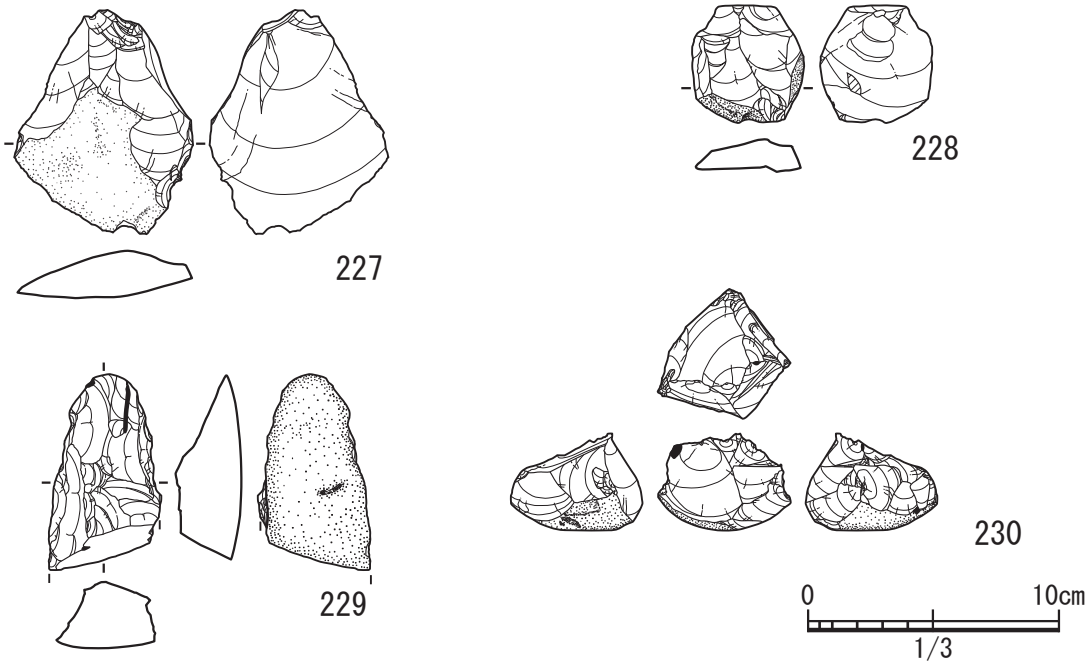
ホルンフェルス製の剥片である。背面には連続した剥離痕がみとめられる。

石斧（第68図229、図版４）

ホルンフェルス製の石斧である。刃部を含む下半を欠損する。

石核（第68図230、図版４）

珪質頁岩製の石核である。拳程度の円礫を素材とし、打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行っている。



第68図　向原中尾第２遺跡（第２次調査）追加報告石器実測図

第32表　向原中尾第２遺跡（第２次調査）追加報告石器計測表

挿図番号	図版番号	出土層位	器種	石材	法量（cm，g）				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
227	図版4	－	二次加工剥片	珪質頁岩	8.8	7.0	1.9	113.3	
228	図版4	－	剥片	ホルンフェルス	4.6	4.4	1.3	29.0	
229	図版4	－	石斧	ホルンフェルス	7.7	4.4	2.6	87.9	下半欠損
230	図版4	－	石核	珪質頁岩	3.8	5.3	3.8	86.2	

経費削減による未調査箇所の報告

向原中尾遺跡群は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い発掘調査が行われた。本項では、本来遺跡包蔵地として認識されているものの、発掘調査対象地外となった未調査箇所の提示およびそれに至る経緯を報告し、今後の発掘調査の必要性を明示するものである。

未調査箇所①（向原中尾第２遺跡）

用地取得面積としては780㎡であるが、土取り箇所を含むので、発掘調査面積としては500㎡となっている。調査区南側の本線側道部において発掘調査対象地が存在するが、側道部は収用されないこととなり発掘調査対象とならなかった。200㎡程度の残存部ではあるが、SA1の一部を残存し、尾根の頂部付近であるため、遺構の展開が想定される。

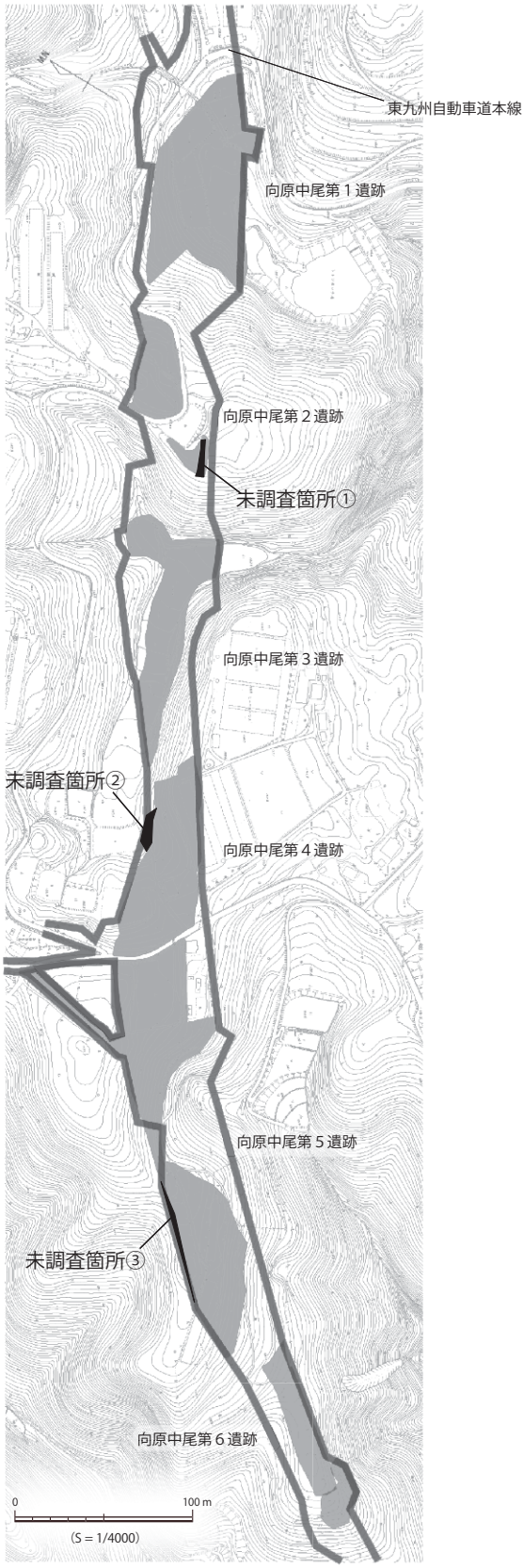
未調査箇所②（向原中尾第４遺跡）

平成20年度～ 22年度にかけて総面積5,680㎡の発掘調査をおこなっている。暫定２車線化に伴い一部調査面積が縮小することになり、200㎡程度の未調査箇所が残存する。未調査箇所は発掘調査において遺物が集中した高位部分にあたり、後期旧石器時代から縄文時代早期の遺構、遺物が良好に残存していることが想定される。

未調査箇所③（向原中尾第５遺跡）

第５遺跡第１地点は、東九州道本線工事施工に係る工事用迂回道路部分の発掘調査である。最も近接するのは第４遺跡だが、既に調査が終了しているために、第５遺跡の飛び地的な扱いとして第５遺跡の調査に含めるものとした。第５遺跡第２地点も第４遺跡と同様に、暫定２車線化に伴い、調査対象地の一部が200㎡程度縮小した。第５遺跡は、当遺跡群において縄文時代早期の集石遺構や炉穴、遺物が良好に残存する地区でもあるので、未調査箇所においても良好に遺構、遺物が展開していることが想定される。

（沖野）



第69図　向原中尾遺跡群未調査箇所位置図

補遺

図　　版

図版　1

向原中尾第２遺跡より日向灘を望む

第３次調査区から第２次調査区を望む

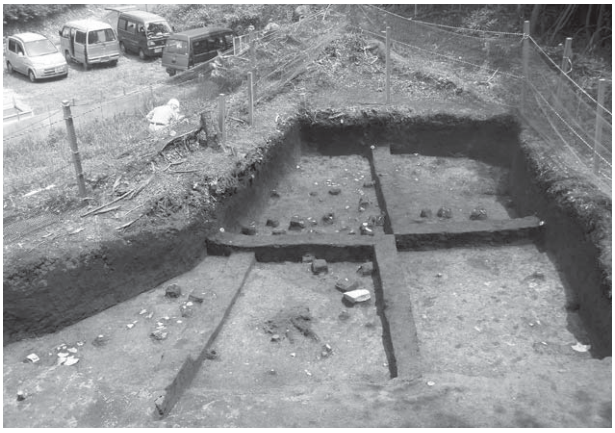
向原中尾第２遺跡調査前

向原中尾第２遺跡ＡＴおよび礫出土状況

向原中尾第２遺跡ＳＩ１検出状況（南より）

向原中尾第２遺跡ＳＩ1配石検出状況（南より）

向原中尾第２遺跡ＳＡ１遺物出土状況（西より）



向原中尾第２遺跡ＳＡ１貼床検出状況（西より）

向原中尾第２遺跡ＳＡ１焼土および炭化材出土状況

向原中尾第２遺跡ＳＡ１完掘状況（西より）

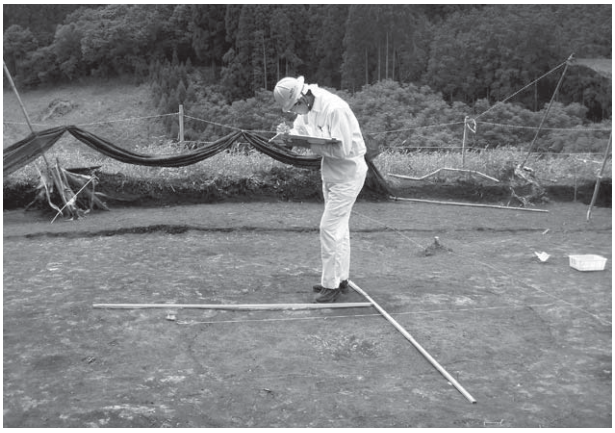
向原中尾第２遺跡Ａ－Ａ'土層堆積状況

向原中尾第２遺跡Ｂ－Ｂ'土層堆積状況

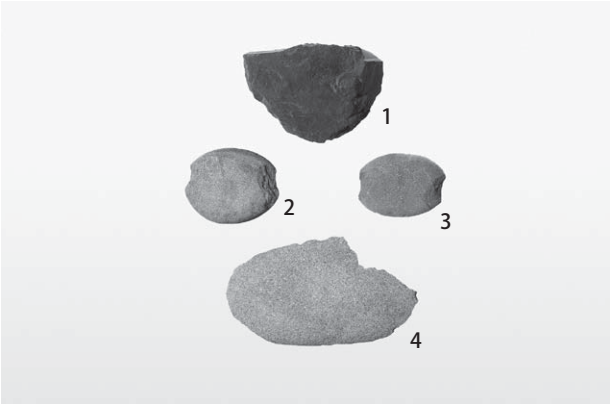
向原中尾第２遺跡Ｃ－Ｃ'土層堆積状況

向原中尾第２遺跡Ｄ－Ｄ'土層堆積状況

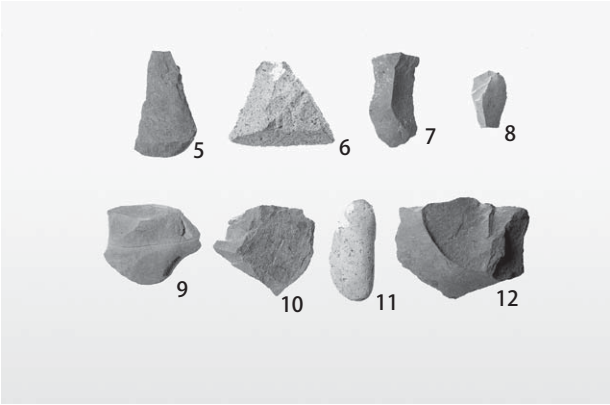
向原中尾第２遺跡調査風景（1）



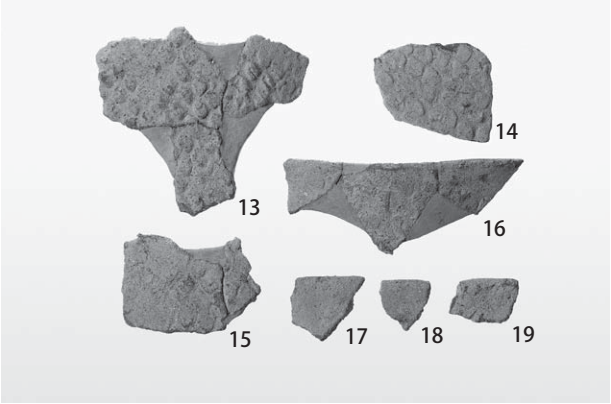
向原中尾第２遺跡記録風景（2）



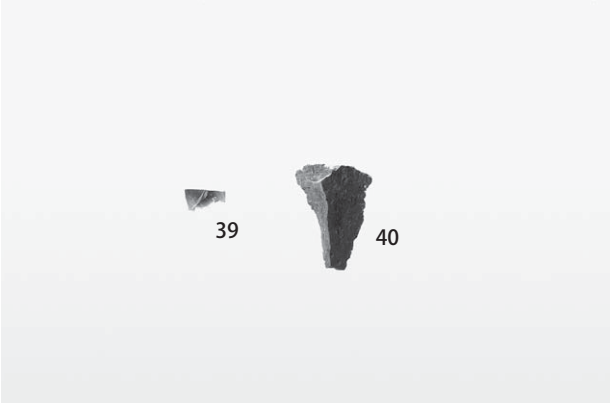
向原中尾第３遺跡群の石器



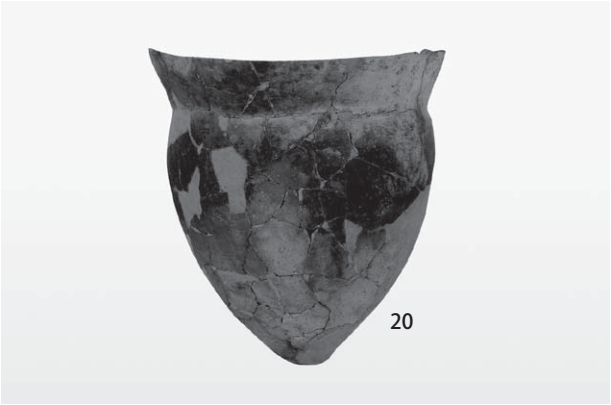
向原中尾第２遺跡　後期旧石器時代の石器

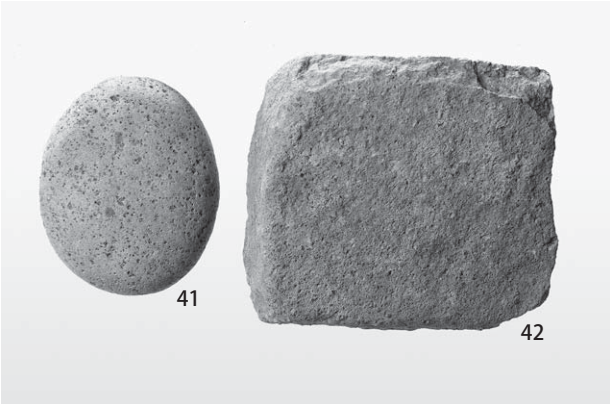


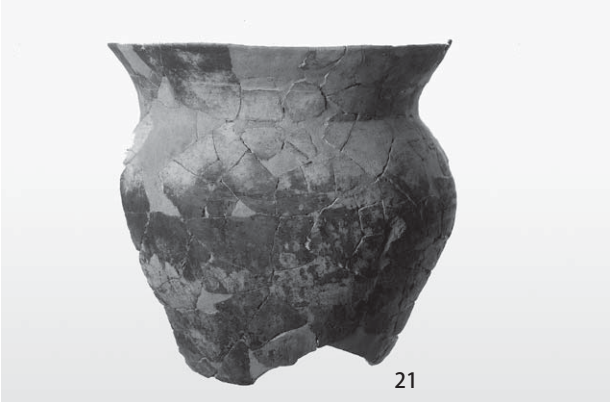
向原中尾第２遺跡　縄文時代早期の土器



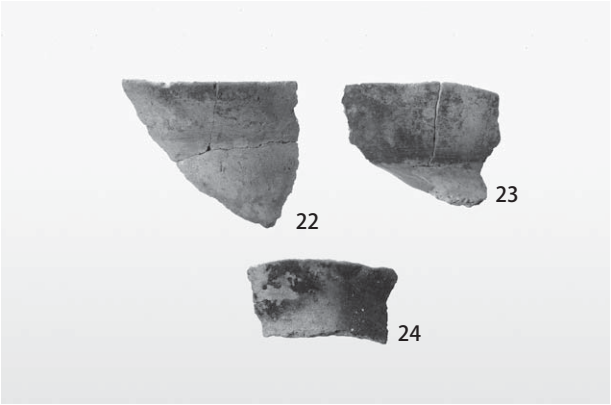
向原中尾第２遺跡　弥生時代以降の石器

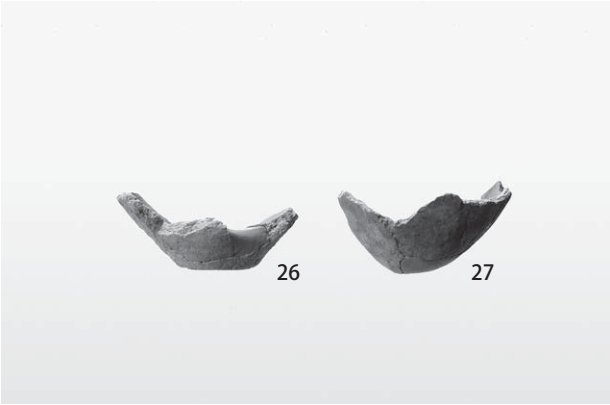


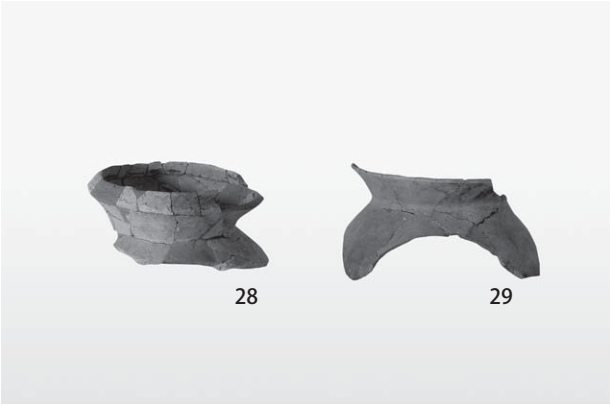


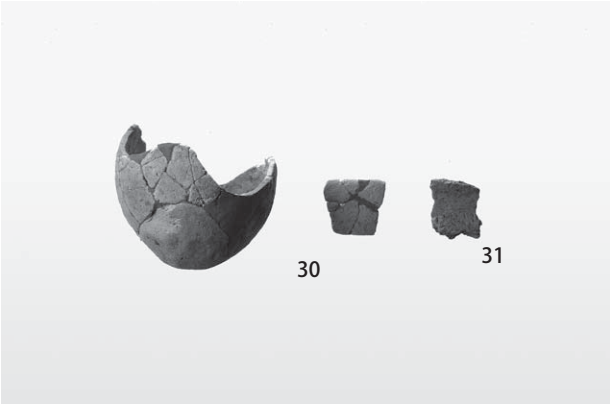


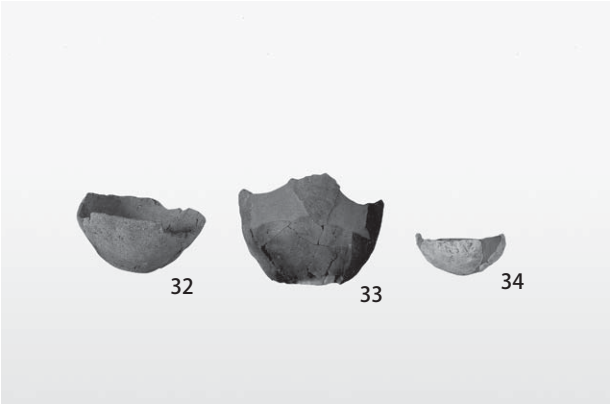
向原中尾第２遺跡ＳＡ１出土遺物（１）

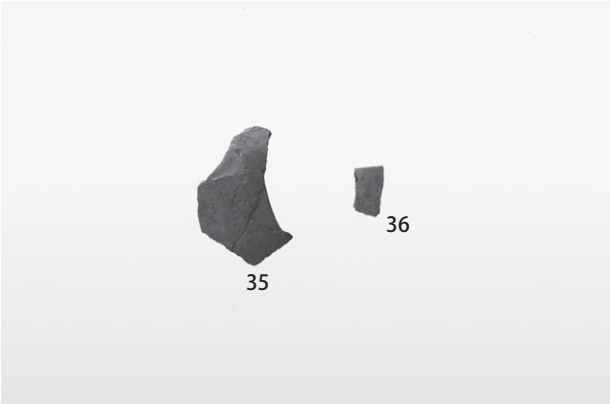












向原中尾第２遺跡　ＳＡ１出土遺物（２）

向原中尾第３遺跡の出土遺物

向原中尾第２遺跡（第２次調査）の追加報告遺物

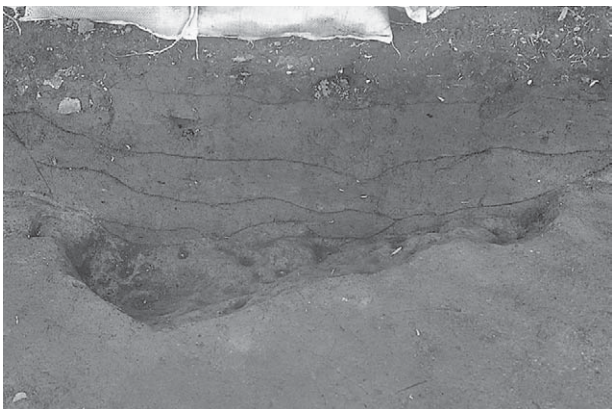
向原中尾第５遺跡Ｎ区集石遺構検出状況（南より）

Ｎ区２号集石遺構（ＳＩ２）（南東より）

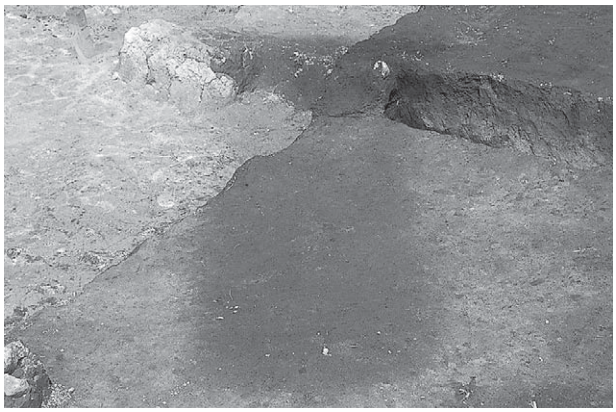
Ｓ区炉穴検出状況（南西より）

Ｓ区炉穴完掘状況（西より）

Ｓ区炉穴完掘状況（北西より）



32号炉穴（ＳＰ32）半截状況（東より）



８号炉穴（ＳＰ８）検出状況（南西より）

号炉穴（ＳＰ８）完掘状況（南西より）

５号炉穴（ＳＰ５）完掘状況（東より）

21号炉穴（ＳＰ21）完掘状況（東より）

Ｓ区集石遺構検出状況（東より）

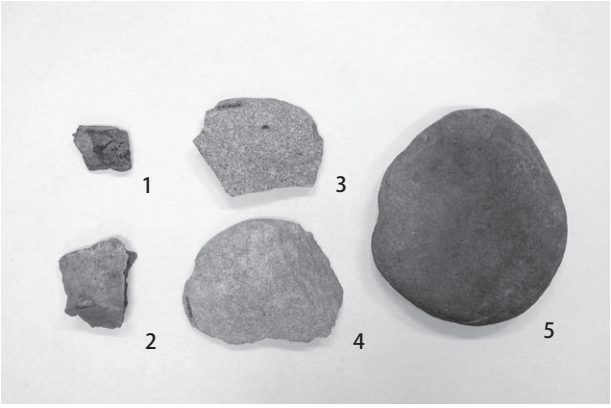
13号集石遺構（ＳＩ13）（東より）

12号集石遺構（ＳＩ12）（南より）

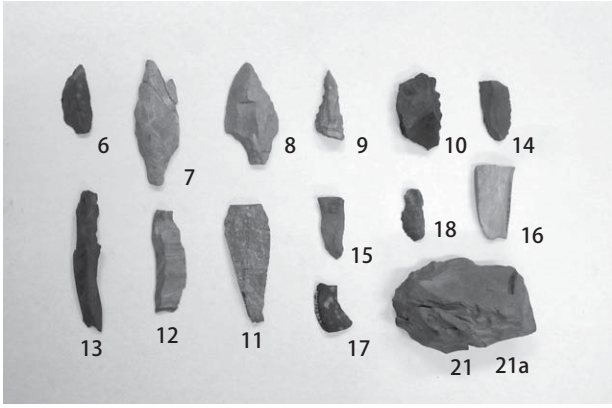
12号集石遺構配石（南より）

１号竪穴建物跡（ＳＡ１）検出状況（西より）

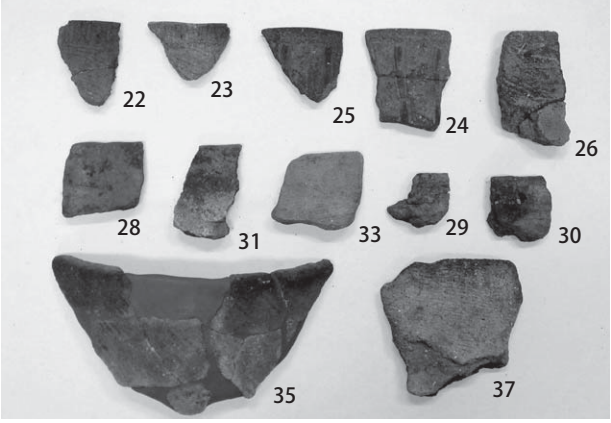
１号竪穴建物跡（ＳＡ１）完掘状況（北西より）



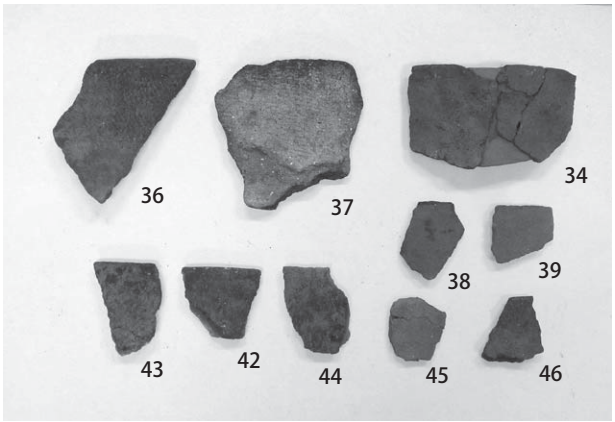
向原中尾第５遺跡第１地点出土遺物



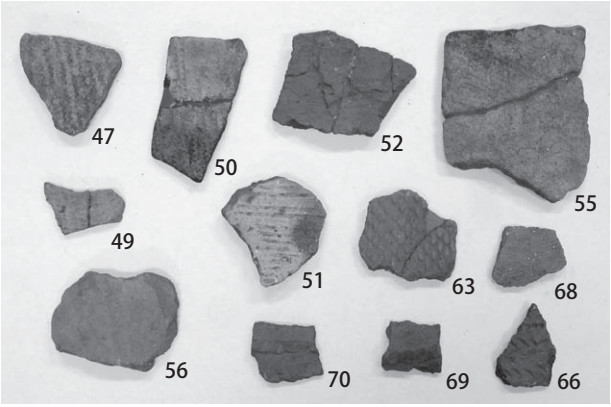
向原中尾第５遺跡第２地点出土後期旧石器



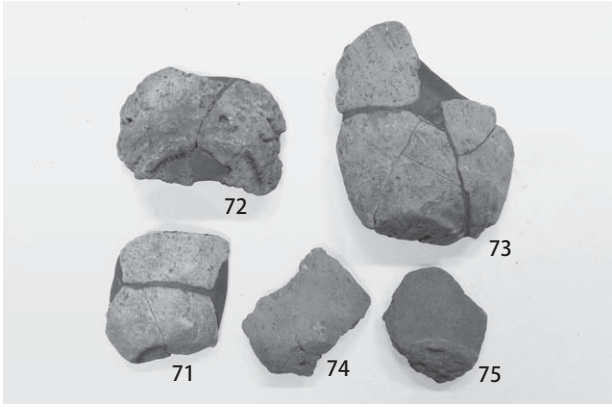
第２地点出土縄文時代早期土器（１）



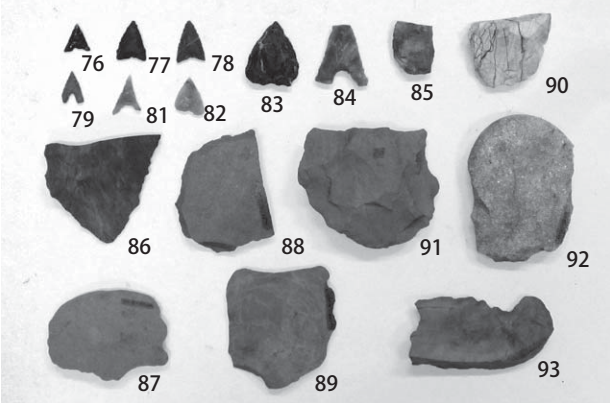
第２地点出土縄文時代早期土器（２）



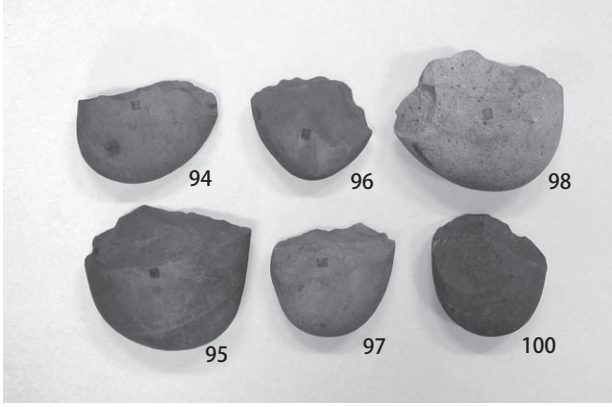
第２地点出土縄文時代早期土器（３）



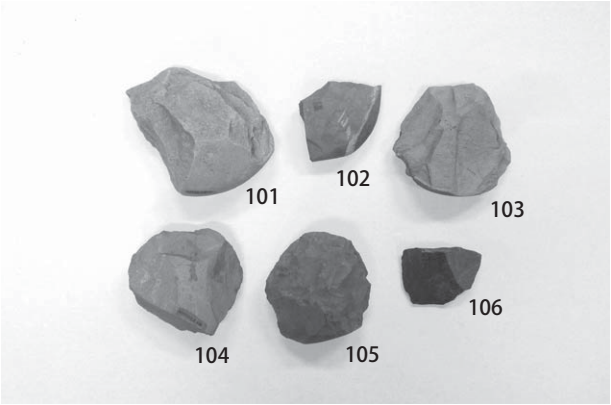
第２地点出土縄文時代早期土器（４）



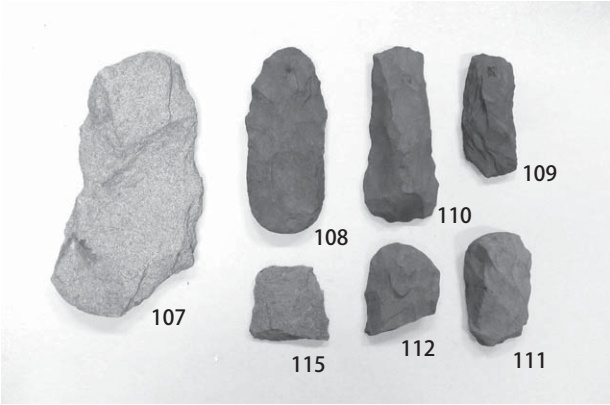
第２地点出土縄文時代早期石器（１）



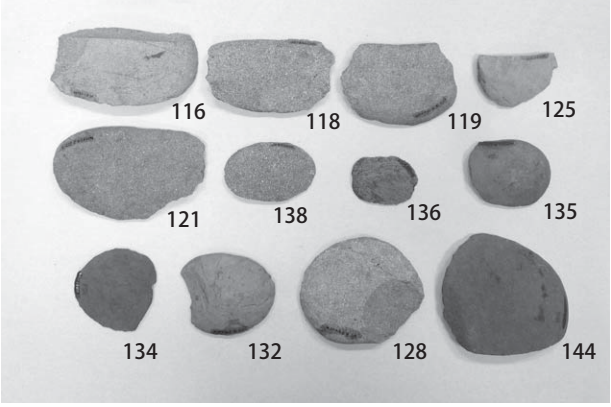
第２地点出土縄文時代早期石器（２）



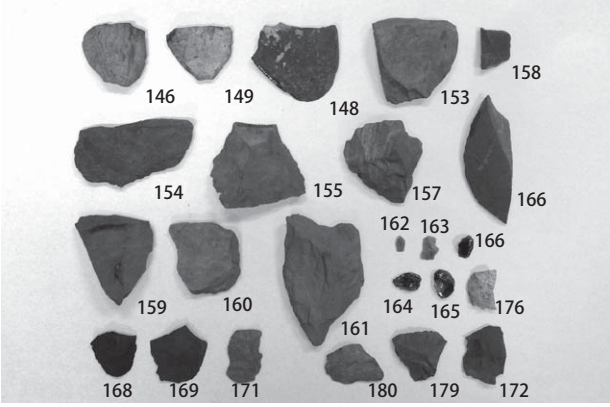
第２地点出土縄文時代早期石器（３）



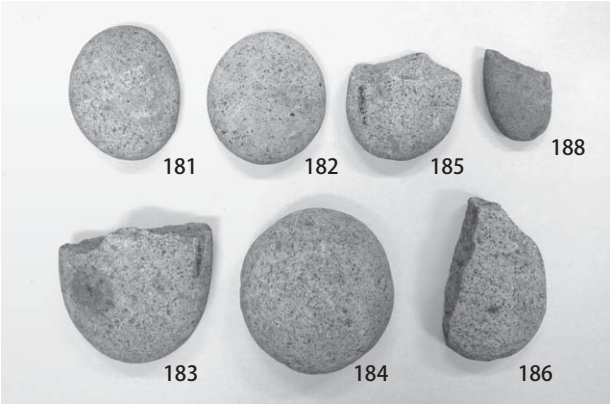
第２地点出土縄文時代早期石器（４）



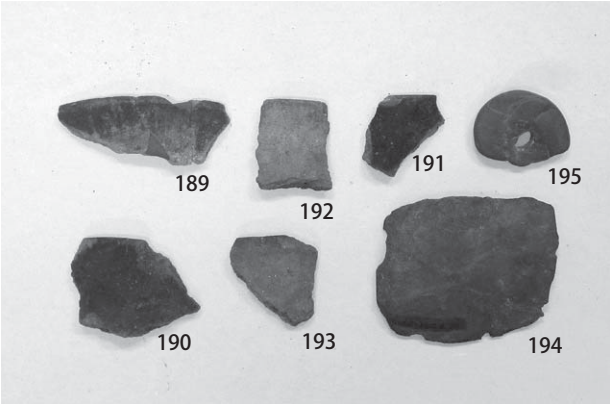
第２地点出土縄文時代早期石器（５）



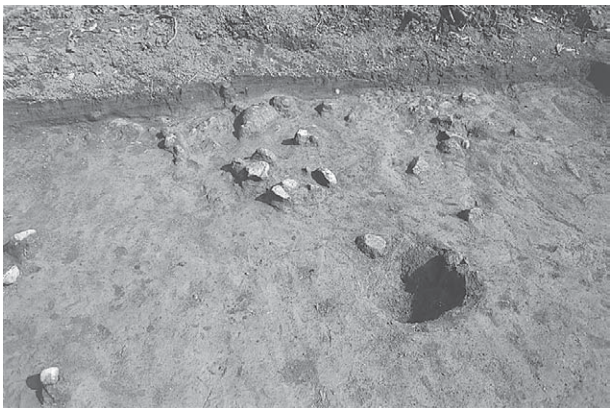
第２地点出土縄文時代早期石器（６）

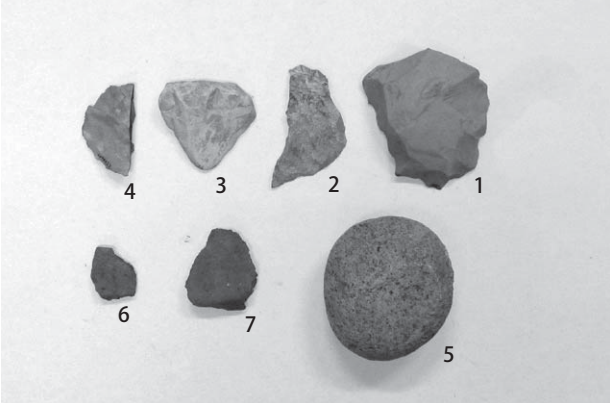


第２地点出土縄文時代早期石器（７）



第２地点出土弥生時代～古墳時代出土遺物


向原中尾第６遺跡礫群（SI2）検出状況（北西より）



向原中尾第６遺跡出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	むこうばるなかおだいにいせき（だいさんじちょうさ）、むこうばるなかおだいごいせき、むこうばるなかおだいろくいせき
書 名	向原中尾第２遺跡（第３次調査）、向原中尾第５遺跡、向原中尾第６遺跡
副 書 名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11
シ リ ー ズ 名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第229集
編 著 者 名	沖野　誠・山本 光俊・橋本　英俊・谷口　めぐみ・福田　泰典
発 行 機 関	宮崎県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒880-0212　　宮崎県宮崎市佐土原町下那珂4019番地　　TEL 0985-36-1171
発 行 年 月 日	西暦　2014年　3月　7日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
むこうばるなかおだいにいせき 向原中尾第２遺跡 （第３次調査）	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうやまげ 東郷町山陰 あざやまのくち 字山ノ口	45206	—	32度 18分 39秒 付近	131度 34分 0秒 付近	2012.6.11 ～ 2012.9.11	500㎡	記録保存調査
むこうばるなかおだいごいせき 向原中尾第５遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうやまげ 東郷町山陰 あざむこうばる 字向ヲ原		A05	32度 18分 34秒 付近	131度 33分 43秒 付近	2012.6.27 ～ 2012.10.5	430㎡	
むこうばるなかおだいろくいせき 向原中尾第６遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうごうちょうやまげ 東郷町山陰 あざむこうばる 字向ヲ原		A05	32度 18分 26秒 付近	131度 33分 36秒 付近	2012.6.11 ～ 2012.9.10	200㎡	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向原中尾第２遺跡 （第３次調査）	集落	旧石器時代		スクレイパー、剥片、石核	縄文時代早期の集石遺構、弥生時代終末期以降の竪穴建物跡を各１軒検出。
		縄文時代	集石遺構　1基	縄文土器	
		弥生～古墳時代	竪穴建物跡　1軒	弥生土器、土師器、磨石、台石	
向原中尾第５遺跡	集落	旧石器時代	礫群　1基	ナイフ形石器、剥片尖頭器、スクレイパー、剥片、石核	縄文時代早期の集石遺構13基・炉穴33基、弥生時代～古墳時代の建物跡を２軒検出。
		縄文時代	集石遺構　13基 炉穴　33基	縄文土器、石鏃、粗製剥片石器、打製石斧、磨石	
		弥生～古墳時代	竪穴建物跡　2軒	弥生土器、土師器	
向原中尾第６遺跡	散布地	旧石器時代	礫群　2基	スクレイパー、剥片	後期旧石器時代の礫群を２基検出
		弥生～古墳時代		土器	

要 約	・向原中尾第２遺跡は、後期旧石器時代から近代までの複合遺跡である。後期旧石器時代の遺物では、剥片石器が散漫ながら出土した。縄文時代早期の集石遺構が１基検出された。弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡が１軒検出された。 ・向原中尾第５遺跡では、縄文時代早期の炉穴33基や集石遺構13基が確認され、弥生時代～古墳時代の竪穴建物跡が２軒検出された。 ・向原中尾第６遺跡では、後期旧石器時代の礫群２基とスクレイパー等の石器が確認され、キャンプサイト的な性格が考えられる。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第229集

向原中尾第２遺跡（第３次調査）
向原中尾第５遺跡
向原中尾第６遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11
2014年3月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地
TEL 0985（36）1171　　FAX 0985（72）0660
印　刷　北一株式会社
〒880-0903　宮崎市太田3-1-31　TEL 0985（51）5100

Hyuga City

MUKOUBARU NO.2 Site

the 3th excavation

MUKOUBARU NO.5 Site

MUKOUBARU NO.6 Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.229

2014

Miyazaki Prefectural Archaeological Center